

赤い国からの魔術師

藤氏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北セルフォード大陸にて西はレザリア王国、東は東方諸国と国境を接する大国、東セルフォード帝国連合。

聖暦1848年、その大帝国はマクベスの革新主義者らの革命によって終焉を迎え、東セルフォード社会主義共和国連邦という世界初の革新主義の国が建国された。

それから5年後の聖暦1853年。

一人の少年が党の指令の下、東セルフォード連邦からアルザーノ帝国に派遣される。

アルザーノ帝国、帝国と対立する外道組織天の智慧研究会と巨大宗教国家レザリア王国とその影で動く東セルフォード社会主義共和国連邦。

様々な思惑が、アルザーノ帝国を舞台に複雑に絡み合い、動き始める。

目次

赤い国とアルザーノ帝国

Пролог (プロローグ) | 1

Один (第一話) | 17

Два (第二話) | 28

Три (第三話) | 41

Четыре (第四話) | 55

Пять (第五話) | 63

Шесть (第六話) | 73

Семь (第七話) | 82

アルザーノ帝国・サイネリア島・前編

Asto?i (第八話) | 99

Devi?i (第九話) | 114

Desmit (第十話) | 127

Vienpadsmit (第十一話)

143

Divpadsmit (第十二話)

158

Trispadsmit (第十三話)

169

☒ etrpadsmit (第十四話)

184

幕間 1 | 197

Piecpadsmit (第十五話)

202

Šepadsmit (第十六話)

Двадцять	два	(第二十二話)	298	kaksk・mmend	kaherk	365
Двадцять	один	(第二十話)	281	kaksk・mmend	seitss	357
Двадцять	(第二十話)		265	kaksk・mmend	kuus	348
Девятнадцать		(第十九話)	251	アルザーノ帝国・フェジテ	viis	
В?с?мнадцять		(第十八話)	238	二十四話)		334
アルザーノ帝国・サイネリア島・後編			218	Двадцять	чотирри	(第三十二話)
Septi?radsmitt		(第十七話)	310	Двадцять	три	(第二十三話)

(第三十四話)

439

k o l m k · m m e n d n e l i

(第三十三話)

425

k o l m k · m m e n d k o l m

(第三十二話)

416

k o l m k · m m e n d k a k s

三十一話)

405

k o l m k · m m e n d · k s (第

393

k o l m k · m m e n d (第三十話)

a (第二十九話)

383

k a k s k · m m e n d · h e k s

s a (第二十八話)

374

n e l i k · m m e n d · k s (第

505

n e l i k · m m e n d (第四十話)

a (第三十九話)

496

k o l m k · m m e n d · h e k s

s a (第三十八話)

485

k o l m k · m m e n d k a h e k

e (第三十七話)

474

k o l m k · m m e n d s e i t s

(第三十六話)

463

k o l m k · m m e n d k u u s

(第三十五話)

450

k o l m k · m m e n d v i i s

四十一話

nelik · mmend kaks

514

(第四十二話)

nelik · mmend kolm

524

(第四十三話)

アルザールノ帝国・タウムの天文神殿

536

Сорак Чатыры (第四十四話)

話)

545

Сорак Пяць (第四十五話)

555

Сорак Шэсць (第四十六話)

Сорак Сем (第四十七話)

567

575

Сорак Восем (第四十八話)

Сорак Дзевяць (第四十九話)

九話)

602

Пяцьдзясят (第五十話)

619

Пяцьдзясят Адз?н

(第五十一話)

631

Пяцьдзясят Два (第五十二話)

十二話)

645

Пяцьдзясят Тры (第五十三話)

十三話)

656

赤い国々アルザーノ帝国

Пролог (プロローグ)

北セルフオード大陸には、様々な国家が存在する。

その中でも、三つの国家がこの大陸で大きな影響力を持ち、覇権を競い合っていた。

北セルフオード大陸北西端に位置し、冬は湿潤し夏は乾燥する海洋性温帯気候下の地域に国土を持ち、優れた指導者と魔導技術、精強なる軍隊、世界を牽引する圧倒的な経済力を誇る帝政国家アルザーノ帝国。

大陸中央北部に広大な国土を持ち、第一次産業と膨大な人口を誇る王政国家でありながら実態は聖エリサレス教会教皇庁が実権を握っている事実上の中央集権的宗教国家レザリア王国。

そして、レザリア王国と国境を接する東部諸国の王族間の婚姻など血族的な結びつきを強め、同君連合化して誕生し、現在は西はレザリア王国から東は東方諸国まで国境を跨ぐ、世界最大の国土を誇る専制君主制国家東セルフオード帝国連合。

この三ヶ国は、時には（というよりも大抵は）三つ巴で争い、時には帝国と帝国連合

が手を組み、四十年前にレザリア王国軍が帝国に侵攻したことで始まった戦争——『奉神戦争』を起こすなど、北セルフオード大陸の覇権を競っていた。

そんな覇権争いの最中の聖暦1848年、帝国連合西部にて暴動が起こる。

当初、小規模な一般人のグループの“ちよつとした怪しげな集まり”に、警察が職務質問しようとして、それを巡つての“ちよつとした”トラブルから口論にまで発展したが、グループの一人が煽り始め、口論はやがて大規模な暴動にまで発展してしまう。

一地方都市から始まった暴動は、やがて帝国連合全体に瞬く間に広がり、やがては君主制打倒を目指す“革命”へと発展した。

帝国連合政府は、軍を展開して鎮圧を図るも、軍内部からも離反者が続出し、鎮圧に失敗。

こうして、君主制は打倒され、この革命を主導していたマクベスの革新主義者が新たな政府を率いることになる。

他の国家と比べると、根強い階級支配により生じる上流階級による労働者階級の搾取を止め、富を労働者階級に等しく分配し、宗教面ではありとあらゆる宗教を全面的に否定する思想を主張する彼らは、自分達を世界で最も進歩している思想の持主——社会主義者と名乗り始めた。

こうして、社会主義者による世界初の社会主義国家——東セルフオード社会主義共和

国連邦が誕生したこの革命は、世界に衝撃をもたらし、隣国レザリア王国はもちろんのこと、アルザーノ帝国などの王家を持つ国家はこの新たな国家の思想が自分達に飛び火しないよう警戒を強めた。

占拠した宮殿で、背後に赤く染めた無数の旗を背に演説する指導者——そんな写像が掲載された新聞を読んだある国の上流階級に属する人物が新国家のことに呟いたのをきっかけに、世界はその国家のことをこう呼んだ。

——『赤い国』と。

そんな世界を揺るがした革命から数年後のある日のこと。

「ふざけるなッ！」

青年の怒声が、辺りに残響した。

ここは、アルザーノ帝国のとある山間にひっそりと設けられた、魔導士小隊のベースキャンプ地。

死角が多い谷間の地形。周囲に鬱蒼と茂る森。

漂う濃霧。吐く息も白い寒気。それらを覆い隠す夜の帳。

そんな深い闇の中、息を潜めるように張られた天幕内にて。

今、一人の青年が、とある娘へと激しい剣幕で詰め寄っていた。

「お前、正気か!? マジで一体、何考えてんだ!?」

帝国宮廷魔導士団の魔導士礼服に身を包んだその青年の名は、グレンⅡリーダーダス。

「うるさいわね……」

対する娘は、そんなグレンを流し見ながら、鬱陶しげに髪をかき上げている。

燃え上がる炎のような赤髪。それが、天幕内を仄暗く照らすランプの光を、舞い散る火の粉のように跳ね散らしている。その精緻な美貌を切り裂くように、鋭い瞳が虹彩を冷たい紫炎色に燃やしてグレンを射貫いている。

身に纏う野暮な魔導士礼服ごしにも存在を主張する、その艶美な肢体のライン。

間違いなく絶世の美女と評される麗人だが、その美しさよりも纏う雰囲気の酷薄さが相対する者の魂を深く捕らえ、背筋を寒く震わせる。

娘の名は、イヴⅡイグナイト。

アルザーノ帝国古参の大貴族にて魔導武門の棟梁、イグナイト公爵家の次期当主。

そして、帝国軍最強と名高き帝国宮廷魔導士団特務分室の室長にして、執行官ナンバーⅠ《魔術師》を拝命する、凄腕の女魔導士である。

そんなエリート中のエリートであるはずのイヴが、部下であるグレンの噛み付きに、

苛立ちを隠そうともせず、不快感を吐き捨てるように言い捨てた。

「何度も言わせないで。人質は全て切り捨てる。これはもう決定事項よ」

そんなイヴの言葉に、グレンが激情も露わに、ぎり、と拳を握り固める。

だがイヴは構わず、突き放すように淡々と続けた。

「山間の町キルム。そこを武力占拠した外道魔術師のテロリスト組織、暁の革命団。町全体を人質に取った彼らの要求は、『帝国軍に拿捕された組織幹部全メンバーの釈放』……こんなふざけた要求、一ミルたりとも呑めないの。わかる?」

「んなことはわかっているツ! あんなクソ外道共を野放しに出来るか!」

「刻限までに釈放が確認出来なければ、連中は人質を皆殺しにすると主張しているわ。

そして、キルムは守りに固く攻め難い。……人質の救出はほぼ不可能よ」

「だから切り捨てるっていうのかよ!」

「そうよ? 頭の悪い貴方には理解できないでしょうけど」

グレンの糾弾に、イヴはさも当然とばかりに応じた。

「これはチャンスでもあるの。わかる? キルムは守りに堅い反面、撤退もできない陸の孤島よ。ここで暁の革命団を完全に撲滅すれば、帝国に巢食う病巣が一つ消える。これが帝国の治安向上にどれだけ貢献することか。どれだけ武勲になるか」

「……ツ!」

「いい？これは帝国の平和のためなの。理解して」

「だからといって、キルムの住民を見殺しにするのはおかしいだろ!」

いきり立ったグレンがイヴの胸ぐらを掴み、至近で激しく凄む。

「俺はそんな作戦、従えねえ!お前がそれを断行するってんなら、もうお前の下で動くのはお断りだツ!俺は俺で勝手にやらせてもらうぜ!」

「——なツ!」

「確かに、俺達は汚れ仕事ばつかのクソ外道だけだよ!キルムの連中みたいなのを守るためにいるんじゃないのか!?それが最後の一线じゃねえのか!」

「そ、それは……」

「守るべき連中を平然と切り捨てて、何が武勲だ!何が帝国軍だ!ふざけんなツ!俺はキルムの住民を絶対に見捨てたりはしねえぞ!俺はこんな世界だからこそ、正しい信じられる道に行く……お前ら上の都合なぞ知るか!」

と——その瞬間だった。

「うるさいわねツツツ!」

一体、何がイヴの逆鱗に触れたのか。

今までは苛立ち交じりでも一応の冷静さを保っていたイヴが、突然、激昂。

グレンの胸ぐらを掴み返し、烈火のgこくとく激しく睨み返す。

「この期に及んで、まだ」正義の魔法使い」気取り!? もういい加減にしてよ!」

「——ッ!」

「どうして貴方はそう命令を聞けないの!?! 命令を聞きなさいッ! 言っておくけど、現場で上官の命令に逆らう行為は重罪よ!?! 軍法会議にかけられたいわけ!?!」

「ああ、上等だ! 俺は、何も間違ったことは言っちゃいねえ!」

売り言葉に買い言葉。

イヴの激昂に、グレンも激昂でもって応じる。

「くっ……ッ!」

イヴがグレンの目を至近距離で覗きこむ。

すると、グレンの瞳は真摯な想いの光に燃えている。我を失うほどの激情に吞まれながらも、自信が正しいと信じられる道を歩こうとする強き意志の輝きに満ちている。

そんなグレンの瞳の光が——いつだってイヴの心をざわつかせ、苛立たせるのだ。

……恐らく、自分には決してない光だから。

「本当に嫌い。私、貴方のことが大っ嫌い……」

不意にイヴの声が冷え込む。目が——据わる。

イヴを中心に急上昇していく周囲の気温。なのに、辺りは氷点下のように寒い。

「痛い目、見ないとわからないみたいね」

「——ッ!？」

ぼっ! グレンの胸ぐらを掴むイヴの手が、不意に炎を上げた。

ベースキャンプの作戦本部であるこの場所は、すでにイヴの領域内なのだ。

すなわち、眷属秘呪【第七園】。

熱と炎の大家、イグナイト秘伝の奥義。指定領域内における炎熱系魔術の起動

『クワットアクション五 工程』を破却し、呪文なしで炎を自在に操るといふ規格外の術式。

イグナイトを近距離魔術戦最強の《ロード・スカーレット紅焰 公》たらしめる恐るべき魔術だ。

「て、てめえ……ッ!？」

「貴方の相手は、いい加減、もううんざり! 躡けてあげるわ……ッ!」

そんな恫喝と共に、イヴが炎を操作し、巻き起こす。

凍えるようなイヴの雰囲気とは裏腹に、急激に上がる周辺温度。

吹き荒れる熱気と熱波が、容赦なく肌を焦がす。

対するグレンも、咄嗟に腰の拳銃へと手を伸ばしかけ——

グレンとイヴの周囲に、嵐のような炎が渦を巻きかけた——まさにその時だ。

「ダメえええええッ!」

ごうっ!

少女の叫びと共に突風が巻き起こり、場にわだかまる炎と熱を吹き飛ばし——

「そこまでだ」

不意に音もなく現れた男が、イヴの手を掴む。

現れたの人物達は、セラ、アルベルト。

そして、二人の後ろには、最近、特務分室に入室したクリストフとクリストフよりも年下の少年が立っていた。

「喧嘩はダメだよ、二人とも！」

「俺達がこんな所で殺し合って何になる？」

「そうですよ……まずは落ち着きましょう」

ぶんぶん頬を膨らませるセラに、氷のような表情を崩さないアルベルト、そして、穏やかに語りかけてくるクリストフにまたかと無言で呆れる少年。

そんないつも通りの仲間達に、イヴはばつが悪そうにグレンから手を離す。

「……けっ！」

解放されたグレンは、イブから一步離れ、ふて腐れたようにそっぽを向くのであった。

「ふん。お前達の喧嘩の理由など容易に想像がつく。件の作戦だろう？」

「言っておくけど。悪いのは私じゃなくて、グレンだから」

アルベルトの淡々とした問いに、腕組みしたイヴが鼻を鳴らして、視線を逸らす。

「だろ。いつもの事だ」

「わかっているなら話が早いわ。アルベルト、貴方からもグレンへ言つてやつて。人質は切り捨てる……これは決定事項よ。効率を重視する貴方なら理解できるわよね？」

味方を得たとばかりに、イヴはアルベルトを促す。

だが、意外にも。

「その件だが、俺も反対だ」

「な!？」

アルベルトまでもが、作戦を拒否したのだ。

「どういうこと? 貴方まで上官の命令に逆らうというわけ?」

「俺達は軍人だ。どうしてもというなら任務を遂行するにやぶさかではない。だがそれは、本当により多くを救うための、やむを得ない犠牲なのか?」

「——ッ!？」

アルベルトの指摘に、イヴが固まる。

「一を切つて九を救う……時に非情な判断を求められることはある。だが、この戦況……俺はまだ一を切る決断をすべき判断だとは、とても思えない」

「そ、そうだよ、イヴ。まだ刻限まで時間はあるよ」

そして、セラまでそんなことを言い始める。

「考えよう? 皆を助ける方法を。イヴならきつとできるよ……もちろん、私達だつて全

力で協力する。グレン君も……ねっ?」

「……ふんっー! さあ、どうだかな!」

子供のようにふて腐れているグレンに、セラは苦笑いするしかない。

「……くっ……」

そんな一同を前に、イヴは悔しげに拳を握り固め、俯いた。

グレンはともかく、この遠征部隊の主戦力であるアルベルトとセラにまでそう言われてしまつては、指揮官のイヴの立つ瀬がない。

「それでも……それでも、私は……ッ!」

一度命令を下した上官としての面子もあり、イヴはすでに引くに引けない。

やむを得ず、イヴが上官権限を利用して、己の命令を頑なに押し通そうとした……まさにその時だった。

「……つたく、一体、何を焦っているんです? イヴさん」

「——ッ!」

クリストフの隣に立っている少年が、苛立ち交じりにそう言い、その指摘がイヴの胸にぐさりと突き刺さる。

「……わ、私は……私は……」

すると、イヴはみるみるうちに意気消沈していく。

普段の輝くような自信に満ちた表情が、今はまるで迷子のようだ。

そんなイヴを見かねて、アルベルトが少し嘆息して言った。

「暫く休息を入れる。お前は常日頃の激務で精神的に疲弊している」

「そうだね……疲れているといい考えが浮かばないしね……」

「そんなことないわ……ッ！私は——」

「お前の休息の間、部隊指揮は、俺が務める」

「僕は引き続きキルムの内偵調査を続けます。……後のことは頼みます」

「うん、わかったよ。クリストフ君。気をつけてね？ほら、グレン君も行こう？グレン君もちよつと休んで？ね？」

「……けっ……」

各々そのようなことを言い残して。

アルベルト達は有無を言わず、天幕を出て行ってしまふ。

「ちよ、ちよつと……ッ！何を勝手に——……」

そんな部下達の態度に、イヴは再び激昂しかける。

だが、そんなイヴの激昂は部下達に届くことはなかった。

天幕を出た後。

「……はあ、まったく。疲れる……」

アルベルト達と別れた後、少年はある場所へ向かう。

そこは本来、少年に割り当てられた持ち場から離れている所だった。

「効率を求めるあまりに、ロクすつぽ考えもせずいきなり人質を捨てるなんてね……とんでもない女が室長になったもんだよ。上に立つてはいけない人間の典型的なタイプだよ」

雪のように白い髪に、アメジスト色の瞳をした少年はさきのグレンとイヴのやり取りを思い出し、やれやれと肩を竦めながら苦笑いする。

その瞳は、どこか冷めたような目をしていた。

「グレン先輩もグレン先輩で、まあ、どんな状況でも人質を救うべく動く……もうとつくの昔に破れている夢を未だに追いかける……どこか滑稽で、それでいて尊い人」

そう呟きながら、少年はキルム——暁の革命団に占拠されている町を眼下に眺められる場所で立ち止まり、町を見下ろす。

「……まあ、俺もグレン先輩と似たような夢抱いてたことあるけど、ねえ……」

少年にも、夢があった。グレンと似たような夢があった。

だが、その夢は5年前のある事件で潰えてしまったが。

少年はしばらく町を見下ろした後、指笛を鳴らす。すると、どこから鷺が来て、少年の肩に乗る。

少年は町の眼下を見下ろすように、町の方向に指さすと、鷺はそこに飛び立っていく。飛び立った鷺は町の中心部上空に到達すると、そこをぐるぐると回り続ける。

少年は再び眼下にある町を見下ろす。今度は、一つの建物をじつと見ては目を離し、違う建物をじつと見ては、目を離す。これを、繰り返す。

少年の視界には複数の人影が映っていた。

直接見えているわけではない。これらの人影は暁の革命団の構成員の熱源だった。

キルムは守りが堅い町。

だから、帝国軍はこちらを武力で制圧することは困難。もし攻めてきたら、人質を皆殺しにして応戦するまで。だが、そんな事態に発展したら、世間は帝国政府を非難するだろう。

だから、政府はこちらの要求を呑む。呑まざるを得ない筈だ。これは、自分達がキルムを占拠した時点ですでに勝負はついているのだ。

そう思っているのか、敵からは気が緩んだような雰囲気少年にも伝わってくる。

そんな敵を、少年は冷めた目で嘲笑を浮かべ、そして――

「ダスワイダーニヤ
《さようなら》」

そう呟いた。

すると、少年の目に映っていた熱源は——消えてしまった。

暁の革命団の構成員は、一体、何があったのかわからずに生涯を終えてしまったことだろう。人質は目の前で暁の革命団の面々が突然凍ってしまったことに、驚愕していることだろう。

少年は効率よく、かつ、人質に犠牲を出さずにこの事件を解決してしまつたのである。イヴとグレンが求めていたものをいとも簡単にやり遂げてしまつたのである。

少年は敵の全滅を確認すると、通信魔導器を取り出し、すたすたとベースキャンプに引き返すのであつた。

「あ、アルベルトさん？ ええとですわね、もう終わりました。……はい、連中、隙を見せていたので好機かと思ひましてすぐに始末しちゃいました」

この少年には、二つの顔がある。

「いやあ、すみませんね。……人質は誰も死んでいませんよ。多分、突然のことに何があつたのかわからないでしょうけど（笑）だから、これからベースキャンプに戻りますね？」

少年の名は、帝国宮廷魔導士団特務分室所属、執行官ナンバー13《死神》サーシャ
セルゲエーヴナソルダトワ。これは表向き。

「……了解、了解。まあ、小言は帰ったら聞きますよ」

もう一つの顔——つまり、彼の正体は——

東セルフオード社会主義共和国連邦の諜報機関、東セルフオード連邦国家保安委員会所属、サーシャ||ミハイロヴィチ||ロマノフ。

つまり、彼は東セルフオード連邦のスパイであつた。

通信を切り、通信魔導器を懐に収めるサーシャ。

途中、立ち止まり、サーシャはキルムの方に振り向く。

そして、ニヤリと冷たい笑みを浮かべるのであつた。

オディン（第一話）

約一年後——

アルザーノ帝国南部、ヨクシヤ―地方の都市、フェジテ。

そのフェジテを学究都市と謂われる所以にして、魔導大国アルザーノ帝国の象徴ともいえる魔術学院、アルザーノ帝国魔術学院。

今、学院では、年に三度開催される『魔術競技祭』が開催されていた。

それぞれの学年次ごとに、各クラスの選手達が様々な魔術競技で技比べを行い、総合的に最も優秀なクラス——つまり、優勝したクラスを決めるこの競技は現在、魔術競技場で大いに盛り上がっていた。

特に今回は、あるクラスが全員出場というこれまでは成績上位者だけが出場していたこの大会の暗黙の常識を打ち破るかのようなことをし、しかも上位に食い込んでいるのもこの大会が盛り上がっている一つの要因なのかもしれない。

そんな学院生徒達で賑わう魔術競技場——その観客席を通う通路の一角にて。

黒を基調とした揃いのスーツと外套に身を包む、男二人と女一人の奇妙な一組がいた。

一人は二十歳ほどの青年だった。藍色がかった長い黒髪の奥から、鷹のように鋭い双眸が覗いている。すらりとした長身で痩せ肉だが骨太。その物腰は、落ち着いていると称するよりはむしろ冷淡さを色濃く感じさせ、ナイフのように触れてはならない致命的な鋭さをどこかに隠している——そんな雰囲気のある男である。

もう一人はまだ十代半ばの少女だった。ろくに櫛も通されていない伸び放題の青髪を後ろ髪だけうなじの辺りで雑に括り、印象的な瑠璃色の瞳は常に眠たげに細められている。華奢で小柄なその肢体や、精巧に整ったその細面はアンティーク・ドールを想起させる。笑えばさぞかし魅力的に映るのだろうが、その相貌には表情という表情が死滅しており、いかなる感情の欠片すらも読み取れない。

もう一人の男は、こちらも少女と同一年ぐらいの少年だった。雪みたい白い髪を襟にかかると程度まで伸ばし、アメジスト色の瞳を持つ目で、ある男を見ている。その澄みわたった瞳を見た人——特に女性は心奪われるだろうが、その一方でどこか冷めたような目をしていた。

三人が着用する外套は要所要所を金属板やリベット、護りの刻印ルーンなどで補強されており、明らかに魔術戦用のロープであることがわかる。

そんな三人の姿は、学院の生徒達で賑わう観客席において特に異彩を放っていた。衣装もそうだが、何より身に纏う雰囲気明らかに堅気のものではない。

さが奇妙なことに、その三人に対して奇異の視線が集まることはない。まるで三人が道端に落ちてゐる石であるかのように、その存在が気に留まらないようだった。

「——グレン、だな」

ぼそり、と。青年が冷淡に呟いた。

「先輩、ですね」

「……ん。どう見てもグレン」

それに応じるように、少年と少女は呟きをこぼす（少女は感情の色が見えない感じだ）。

三人の視線が注がれる先には、たった今、『精神防御』の終わった中央競技フィールド上で、金髪と銀髪の少女二人に挟まれて何か言い合いをしているグレンの姿があった。

「俺達に何も言わずに去って行つたと思つたら……こんな所に居たとはな」

「まあ、あの事件で先輩は心が折れちゃいましたからね。わからなくはないですけど、ね……」

青年が冷酷に獲物を見定める猛禽のような目でそう言うと、少年は肩を竦めながら複雑そうな顔でそう言う。

すると、青年の隣の少女は無言で音もなく、グレン達がいる中央フィールドに向かって歩き始めた。

「待て」

威嚇するような固い声と共に青年は手を伸ばし、少女の後ろ髪を無慈悲に掴む。がくん、と少女の頭が引つ張られ、後ろに傾いた。

「……何をするの？アルベルト」

無表情のまま、少しでも感情をにじませず、少女が青年に問う。

「それは俺の台詞だ。何をする気だ？リイエル」

青年は青年で、その険しい猛禽の表情のまま、端的に問い返す。

すると、リイエルと呼ばれた少女はさも当然とばかりにこう答えた。

「決まってる。……グレンと決着をつけに行く」

ぐい、と。青年——アルベルトは掴んだリイエルの後ろ髪をさらに引つ張った。

「痛い。どうして引つ張るの？」

言葉とは裏腹に、まったく痛くなさそうに、リイエルは淡々と応じた。

「余計な事はするな。任務を忘れたのか？」

「任務？」

リイエルが少し考え込むように間を置いて。

「……グレンと決着をつけること？」

「……………」

アルベルトが険しい表情を微塵も揺るがさず押し黙る。少年は溜め息を零す。三人の間に沈黙が流れる。

「……リイエル。今回の任務は二つあってだな……その内の一つは、今、女王陛下の護衛を務める王室親衛隊の監視だよ」

「なぜ、サーシャ？彼らはわたし達の仲間」

「俺達は一枚岩では無いんだよ。王室直系派、王室傍系派、反王室派、過激派極右、保守的封建主義者、マクベスの革新主義左派、帝国国教会右派……さらに、それぞれに青い血側と赤い血側……とにかく、帝国は様々な思想主義と派閥がうじゃうじゃいるの。わかる？」

「そう。わたしにはよくわからないけど」

「……だよね」

少年——サーシャは深い溜め息を吐く。また、三人の間に沈黙が流れる。

「右派の筆頭、王室親衛隊に最近不穏な動きがあるとの情報が入った。異能者差別に対する新しい法案が円卓会で閣議されるようになって特に顕著になったとの事だ」

「どうして？」

「世間一般的に、異能者は悪魔の生まれ変わりだと信じられている。そして、法は女王陛下の名の下に発令されるものだ。つまり、異能者を女王の名の下に法的に保護する事は

神聖なる王家の威光に傷がつく、と考えているからだ」

「そう。わたしにはよくわからないけど」

「だろうな」

さらに、三人の間に沈黙が流れる。

「よつて、俺達は王室親衛隊を監視している。その確率は限りなくゼロに近いが、今回の陛下の学院訪問を機に、連中は陛下に対し、何等かの行動を起こす可能性がある。もし、そんな事態になれば、政府上層部の派閥争いに重大な影響を及ぼす事になるだろう」

「なるほど、わかった」

リイエルは一つ頷いて、合点がいったように言った。

「話をまとめると、わたしはグレンと決着をつけなければいけない……そういうこと？」
「……………」

アルベルトが険しい表情を微塵も揺るがさず押し黙り、サーシャは溜め息を零す。再び三人の間に沈黙が流れる。

「……………ん。頑張ってくる」

「頑張るな」

再び歩き始めたリイエルの後ろ髪を、アルベルトが再び容赦なく引つ張った。

「アルベルトはグレンに会いたくないの？」

二度邪魔されたリイエルが、淡々と問う。

「……知れた事を。あの男には色々と言いたい事がある」

アルベルトは言葉尻に怒気を微かに滲ませて言った。

「そう。なら、わたしがグレンをボコる。アルベルトは色々言いたいことを言えばいい」
「だから、待てと言っている。俺達はいいつに会わない方がいい」

「なぜ？」

「久々、あいつの姿を見てわかった。あいつの居るべき世界は……やはり俺達が居るような血に濡れた世界ではなかったらしい」

三人は再び競技場に目を向ける。何があつたのか、グレンが銀髪の少女の足下で土下座している。金髪の少女が何かを言いながら銀髪の少女をなだめているようだ。

「そうですね。先輩の居るべき場所は、彼処でしょうね。眩い陽の光が当たる春のようなあの場所こそ、恐らくグレン先輩という男が本当に生きている場所なんでしょうね」

「女の子の足下が？それはなんとも面妖」

「……………」

「いや、そこじゃなくて……はあ」

アルベルトが険しい表情を微塵も揺るがさず押し黙り、サーシャは溜め息を零す。さらに三人の間に沈黙が流れる。

「…………？」

リエルはそんなアルベルトとサーシャの様子に、ほんの少し小首を傾げて……
結局、奇妙な沈黙が二人の間に流れていった。

それから、魔術競技祭は午前の部が終了し、小一時間の昼休みが入る。

その間、生徒達は学院内の学食に行く者、学院外の外食店に赴く者、あるいは弁当を用意してきた者と分かれて、ぞろぞろと移動し始め、昼食を取り始めていた。

わいのわいのと昼食を取り始める者達、どこかでは、教え子に「セルフ・イリュージョン」を実演してみせて教え、その後親友と勘違いしていた少女の弁当を頂こうとして——お空に吹き飛ばされていた教師がいる中、アルベルト、サーシャ、リエルは王室親衛隊の監視を続けていた。

そして——昼休みも終わり午後の部に入る直前、王室親衛隊に動きがあった。

「…………信じられない」

「…………ええ、まさか、本当にやらかすなんて」

言葉とは裏腹に、アルベルトは冷静沈着そのものの声色で、淡々と告げ、サーシャがそれに同意するように言った。

「どうしたの？遠見の魔術で何を見たの」

「王室親衛隊が——動いた」

「……？それは動くでしょう？彼らも生きた人間なのだから」

「……………」

「だから、そうじゃなくて……はあ」

アルベルトが険しい表情を微塵も揺るがさず押し黙り、サーシヤは溜め息を零す。三人の間に沈黙が流れる。

「……王室親衛隊は、武力をもって女王陛下を本格的に自分らの監視に置いた。これは事実上の軟禁状態と考えていい。しかし、総隊長ゼーロス……短慮を起こすような人物では無かったと記憶していたが、認識を改める必要があるようだ」

「あるいは、短慮を起こさざるを得ないような事情があるのか、どちらにしても連中の意図を探らなければわからないですね」

「そう」

それを聞いたリイエルが早速、迷わず歩き始める。

「何処へ行く気だ？」

そんなリイエルの後ろ髪を、アルベルトは手を伸ばして掴んだ。

「決まってる。敵は、わたしが全部斬る」

「待て。相手が多過ぎる。幾らお前でも無理だ」

「敵の戦力の方が上だというなら、こちらがそれをう回ればいいだけ」

「援軍を呼ぶ気？ けっこう時間がかかるよ？」

「ううん、気合い」

「……………」

アルベルトが険しい表情を微塵も揺るがさず押し黙り、サーシャがため息を零す。また三人の間に沈黙が流れる。

「……………帝国王室親衛隊は直系右派の筆頭、女王陛下に最も忠義厚き者達だ。陛下に直接的な危害を加えるとは考えられん。この行動には必ず何等かの思惑があるはず。俺達は連中のこの無謀な行動の裏に隠された意図を探り、事態を收拾すべく行動すべきだ」

「そう。わたしにはよくわからないけど」

「だろうな」

「でしようね」

沈黙。溜め息を吐く少年の隣で少女の後ろ髪を掴む男、という奇妙な構図で三人が静止している。

そして、先に口火を切ったのはリィエルだった。

「作戦を考えた。わたしが正面から敵に突っ込む。サーシャはわたしの後に正面から

突つ込む。アルベルトはわたしとサーシャの後に正面から突つ込んで」

「……………」

「それは作戦じゃないよ、リイエル……」

アルベルトが険しい表情を微塵も揺るがさず押し黙り、サーシャがため息を零す。いつものように、三人の間に沈黙が流れた。

D B a (第二話)

魔術競技祭、午後の部が始まった。

午後の部最初の競技は、念動系の物体操作術による『遠隔重量上げ』だった。白魔〔サイ・テレキネシス〕の呪文で、鉛の詰まった袋を触れずに空中へ持ち上げる競技である。より重い袋を浮かせることができた選手に多くの得点が入るルールだ。

サーシャは、午前同様に盛り上がるクラスの生徒達とは裏腹に、上の空で重量上げの競技を眺めていたグレンに視線を注いでいた。

(先輩、競技場に戻ってからずっとあんな感じなんだけど、なんかあったのかな?)

周囲の生徒達がやたらハイテンションなせいかな、深く溜息を吐くグレンはかなり目立っている。

(それにあの金髪の娘、一回戻ってきたけど様子がおかしかったし、すぐにいなくなっただけ……まさか、先輩と喧嘩かなんかしら?)

いかにも、あり得そうな事だなど思いながらグレンの周囲を見渡すと、銀髪の少女がグレンの前に立っているのが見えた。

グレンは、なにか考え事していたのか、気付くのに時間がかかり、そしてなぜか拳闘

の構えを見せる。

(なぜに、拳闘の構え?)

あんた一体、二人に何をした?

内心、呆れながら見ていると、二人はなにやら会話をしている。

そして、しばらくするとグレンが頭を掻きながら面倒臭そうに席を立ち上がる。

恐らくは、途中でいなくなった金髪の少女を探すためなのだろうであることは、午前の部の最後のあの土下座のシーンでの三人のやりとりを見てたから、容易に想像できた。

グレンが立ち上がったって、金髪の少女を探しに行こうとしていた瞬間、銀髪の少女が呼び止めて——しばらくしたら、くるりと背を向けて顔を赤くしていた。

(?あの娘、なんかよくわからない娘だな。……でも)

なんだろう、あの娘。

なんか、誰かに似ているような……そんな気がした。

グレンの元・同僚であり、理解者でもあり、お節的な女性に似ていた。……その女性是一年前のある事件で死亡してしまったのだが(そして、グレンが軍を去って行った要因にもなった)。

(人の縁って、不思議なもんだねえ)

と、そんな風に思っていた、その時だ。

「——王室親衛隊が、再び動いた」

「動いた、というと、今度は何をするつもりなんです？」

「これもまた信じられんが……連中は独断でルミア嬢を始末する心算らしい」

「は？なぜに？ていうか、ルミアって誰なんですか？」

信じられないという言葉とは裏腹に、淡々と告げるアルベルトの言葉に、サーシャは目を見開いて問う。

女王陛下を軟禁しての、ルミアという女性を始末するという王室親衛隊の行動に、サーシャは理解できないとばかりに首を傾げた。

「グレンの傍にいた、金髪の娘だ。連中がなぜ、彼女を殺害しようとしているのかは、不明だ」

「そう」

すると、それを聞いたリイエルが早速、迷わず歩き始める。

「君はどこに行く気なのかな？」

そんなリイエルを今度はサーシャが後ろ髪を掴んだ。

「決まっている。敵は、わたしが全部斬る」

「……………」

サーシャは無表情でリエルの後ろ髪を引つ張った。

「痛い。なにをするの、サーシャ?」

「……それは無茶だから止めよう、ね?」

呆れながら、後ろ髪を掴み続けるサーシャは、アルベルトに振り向く。

「先輩、もしルミアアっていう娘が、連中によって殺害されるというのであれば、先輩の様子を見ます? さつき、その娘を探しに行っていましたから」

すると、リエルが――

「そう。つまり、グレンと決着をつけるのね?」

「……………」

こいつは、なんでそこまでグレンと決着をつけたがるのだろうか?

アルベルトが険しい表情のまま微塵も揺るがさず押し黙り、サーシャは溜め息を零すのであった。

グレンはあれから、ルミアを探し回っていた。

昼休み中、銀髪の少女――システイーナに吹き飛ばされ、ルミアが誰かが作ってきた弁当を差し入れとして持ってきてそれを食べていた時、女王アリシア七世と会い、会話

していたのだが、それ以降、ルミアの様子がおかしくなり、どこかにいなくなっていたので探しに行っていたのだ。

最初は中庭に行ってみたが、そこにはいない。

仕方なく、グレンは直感に任せて学院内を歩き回る。

「まずいな……マジでどこ行ったんだ」

まずは学院校舎本館、西館、東館の周囲を一回りし、学院付属図書館と図書館前広場を足早に通り過ぎ、迷いの森入り口周辺、薬草農園、魔術実験塔周辺に運んでみた。

だが、ルミアの姿は見当たらない。めげずに、競技場に人が集まることで閑散としてしまった学院内を延々とあてもなく回り続ける。延々と探し続ける。

流星にグレンが焦りを覚え始めた頃、学院敷地に南西端、学院を取り囲む鉄柵のかたわら、等間隔に植えられた木々の木陰にちらりと、見覚えある金髪が見えた。

「……見つけた」

グレンがその木陰に歩み寄る。

そこには木に背を預け、神妙な面持ちで手元を見つめているルミアがいた。

「……ルミア？何、見てんだ？……ロケットか？」

特に覗くつもりはなかったのだが、ルミアに歩み寄る角度と身長差の関係から、偶然、ルミアの手元が見えてしまったのだ。

ルミアの小さな手の中には簡素な作りのロケット・ペンダントがあった。ルミアはその蓋を開いて、その中をじっと見つめているようだった。

「このロケットにはですね、何も入っていないんです……」

グレンの接近を察したルミアは、ぱちんとロケットの蓋を閉じ、それを握りしめた。

「昔は、誰か大切な人達の肖像が入っていたような気がするんですが……いつの間になくなっちゃいました」

「……………」

沈黙するグレンの前で、ルミアは寂しげに笑い、ロケットの鎖を首の後ろで繋ぎ、ロケット本体を胸元から衣服の中に落とし込んだ。

「これ自体、特に価値があるものでもないのに……変ですよ。こんなものを今でも大事に肌身離さず持ち歩いているなんて」

「…………別に变じゃねーよ」

グレンはそっぽを向いて頭を掻きながら、ぶつきらぼうに応じた。

「その中身を紛失した経緯つてのはわかんねーけどな。でも、今でも何か大事なもんか詰まってるんじゃないのか？ それ」

「……………先生は」

意を決したかのように、言葉を切って、ルミアが問いかける。

「知っているんですよ？……私と、女王陛下下の関係を」

「ああ。こないだの事件の後、政府のお偉いさんから聞かされたよ」

そして、グレンはくるりと踵を返し、ルミアに背を向ける。

こないだの事件とは、あるテロリスト集団が学院を占拠し、ある少女を拉致しようとし、自爆して人質となった他の生徒達を殺害しようと企んだ自爆テロ未遂事件である。

その少女とは、ルミアⅡティンジェル——今、木に背を預けている少女だった。

「だが、どうでもいい。おい、行くぞ、ルミア。皆がお前のことを待っている。楽しい魔術競技祭、後半戦開始だぜ？」

そのまま歩き去ろうとして……

「ふふつ、先生はいつだって先生ですね」

くすり、と。ルミアはほんの少しだけ微笑んだ。

「ここは落ち込んだ女の子に、何か優しい言葉をかけてあげる場面ですよ？」

「ぶつちやけ、何を言ってもやればいいのかさっぱりわからん」

堂々と甲斐性なしなことを言つてのけるグレン。

そんなグレンを見て、ルミアはくすくすと含むように笑う。

「あの……じゃあ、もう少しだけ私のお話に付き合ってくださいませんか？」

「……ああ」

そしてルミアは再び木に背を預け、グレンはルミアに背を向けたまま空を見上げた。とつとうとルミアが語り始める。

ルミアが話すことは実に取り留めのないことだ。

まだ、自分が王女だった頃の話。日々の政務で忙しい中、それでも時間を作って遊んでくれた優しい母親。いつも自分の面倒を見てくれた優しい姉。王室直系の娘として何一つ不自由なく、王室直系の娘としてはやはり不自由だった日々。それでも、確かに幸せと呼べた在りし日の記憶——

それは恐らく、王女としての地位を剥奪され、王宮を放逐されたルミアがフィーベル家——システイーナ達の家の一員になろうとして、全て忘れ去ろうとして——結局、忘れきれずにまだ心の奥底に燻ぶっている思い出達なのだろう。

「……私、どうすればよかったですか?」

一通りの思い出語りが終わると、ルミアはグレンに静かに問う。

「陛下が私を捨てた理由……わかるんです。王室のために、国の未来のためにどうしてもやらなければならぬ必要なことだったって。それでも……私は心のどこかで陛下を許せなかった……怒っているんだと、思います……」

「ま、理屈じゃねーからな、そういうの」

「だけど、あの人を再び母と呼びたい、抱きしめてもらいたい……そんな思いも、どこか

にあるんです……ずるいですよね……私……」

「ま、理屈じゃねーしな、そういうの」

「でも、あの人を母と呼んだら、私を引き取って、本当の両親のように私を愛してくれたシステイのお母様やお父様を裏切ってしまうようで……それが申し訳なくて……」

「ああ、理屈じゃねえんだよな、そういうの」

「だから、私、わからないんです。どうしたよいのか、どうすればよかったのか……」
目を伏せるルミア。

グレンは面倒臭そうに、ため息を一つ吐いて、言った。

「持論だがな。人は、どうも人生においてあらゆる選択と決断をする際に、後悔し、傷つかずにはいられない生き物らしい。一般的には悔いが残らないような選択をしろってよく言われているだろ？ 断言してやる。ありや嘘だ……ていうか、無理だ」

「そう、なんですか……？」

グレンは頷いて続ける。

「神様って、ホント意地悪な奴だと思わないか？ 目の前に道が二つあれば、どんなに悩んで考えて一方の道を進んでも、もう片方の道にしておけばよかった……って、後で何かしら後悔するように人間をお作りになったんだからな。ご丁寧にまあ、道の選択そのものから逃げたとしても、選ばなかったこと自体を後で悩み苦しむ、クソ仕様だ」

グレンはふと、自分を振り返る。

かつて、グレンは絵本に出てくるような正義の魔法使いに憧れ、魔術師を志した。今では安易にそんな道を選んだことを激しく後悔している。自分が選んだこの道は間違っていた。別の道にしておけばよかった。何度そう思ったかわからない。

だが——夢を捨て、別の道を歩めば、あんなに悩むことも苦しむこともなかったのだろうか？否、やっぱり夢を諦めずに頑張ればよかった……その道を選ばなかったことを、後になってから延々と悩み苦しむのだろう。

「だからこそ、本音が必要だと思ってる」

「……本音、ですか？」

「ああ、その道の本音で選んだなら、どっちにしろ後悔することになるなら、ちったあマシだと、そう思わないか？散々、後悔した後で前に進める気がしないか？」

「で、でも……私……自分の心がわからなくて……」

すると、グレンは頭を掻きながら言った。

「俺は昔、帝国軍に所属する魔導士だった。……意外に思うだろうか」

意図の読めないグレンの台詞と告白に、ルミアは戸惑った。

「で、仕事柄、宮廷に赴く機会も結構あってな、さっきお前が大切そうに見つめていた物とまったく同じ物を、宮廷内だとある偉い人が身に着けていたのを見たことがある。

……意味、わかるな？」

「……っ！」

ルミアがはっとして、思わず胸を押さえた。

「今の今まで後生大事に肌身離さず持っていた、お揃いのそれ。捨てるタイミングなんていくらでもあったはずだ。……もう、答えはとっくに出ているんじゃないのか？」

「答え……」

「恨み辛みでも文句でも、なんでもいい。まずは言葉をぶつけることが始めてみたらどうだ？ さっきのお前みたいに向き合うことから逃げ続けるだけじゃ、なんにもならんだろ。まあ、散々向き合うことから逃げ続けてきた俺が言うのも……なんだがな」

ルミアはしばらくの間、無言でうつむいていた。

グレンはそんなルミアに相変わらず背を向けながら、返答を静かに待つ。

そして。

「私……怖いんです」

ぽつりと、ルミアは消え入りそうな声で、そんなことを呟いた。

「私を追放した前日まで、あの人はとても優しくかったんです。でも、私が追放されたあの日、あの人に呼び出されたら、国の偉い人達が険しい顔で沢山集まっついて……あの人は凄く冷たい目で私を見つめていて……まるで別人のように豹変して……」

「……………」

「さっきのあの人はとても優しかったけど……また、いつ私に対して、突然、あの冷たい目を向けてくるかと思うと……怖くて……だから……その……」

意を決したように、ルミアは真つ直ぐとグレンの背中を見つめた。

「先生、一緒についてきてくれませんか？」

「……やれやれ、なんつーか、お前にもそういうガキっぽいトコあったんだな」

グレンは肩をすくめて苦笑いしながら、ルミアに振り返った。

「いいぜ？付き合つてやるさ」

「本当ですか？」

「……ここで嘘だつて言つたら、単なる極悪人だろ」

「もう、先生つたら」

面倒臭そうに息をつくグレン、おかしそうに笑うルミア。

グレンはルミアを伴つて歩き始める。

二人の間に流れる、穏やかで気安い空気。

さて、とは言つたものの、どうセツティングすればいいのやら。いつの間にか、また厄介事が一つ増えてしまつて、ことに気付き、グレンは再び頭を悩ませていた。

——だが、その後に襲いかかつてくる厄介事に比べたら、この厄介事はかなり些細な

事だということを、この時のグレンは知る由もなかった。

Т Р И (第三話)

グレンとルミアという少女の前に現れた奇妙な集団を、サーシャは自身の子飼いの鷲——ビエルの視界を通して視ていた。

その集団は全員が全員、身体の要所を守る軽甲冑に身を包み、緋色に染め上げられた陣羽織を羽織り、腰には細剣^{レイピア}を佩剣している。

その数、総勢五騎。

弧を描くような陣形を組み、通りの向こうから、足早にグレン達へと向かっていく。

「……にわかには信じがたいけど……これ、本当かもね」

帝国軍の精鋭中の精鋭。最も女王陛下に忠義厚い者達で構成された、王室一族を何よりも優先して護衛する守護神——それが王室親衛隊だ。

ゆえに王室親衛隊は今回の女王陛下下の学院訪問の際、当然のように女王の近辺警邏と護衛を務めているはずなのだが——その集団が本来の務めを怠ってまで、グレン達に向かっているのは……そういうことなのだろう。

王室親衛隊の面々が、グレン達の前で足を止め、グレンとルミアの二人を囲むように、音もない足捌きで素早く展開していた。

そして――

衛士達は弾けたバネのように一斉に抜剣し、ルミアにその剣先を突きつけていた。同時に、ルミアを自分の背後に庇うグレン。

そこで、なんやかんや口論しているが、多勢に無勢。

やがて、目にも留まらぬ早業で五振りの剣が、四方からグレンの首筋や喉元に突きつけられていた。

「これはグレン先輩が不利だな。一対一ならともかく、五人も一刀一足の間合いにいたら動けない……マズいね」

あの状況では何もできない。相打ち覚悟の三属攻性呪文や精神汚染呪文で一人か二人は倒せても、残る衛士達に串刺しされるのが目に見えている。

しかも、あの衛士達は三属攻性呪文や精神汚染呪文はそう簡単に通らないはず。さて、どうしたものか、と。サーシャが思案していた、その時。

衛士が不意にグレンの後頭部に剣の柄を打ち、昏倒させた。

「……………ッ！」

グレンが気絶させられ、衛士達がルミアを街路樹の下まで引つ張っていき、後ろ手に縄をかけていた。

「ビィエル……………《アトゥレチン・ファイマニィエ奴らの注意を逸らせ》」

そんな様子を視たサーシャは、ビィエルに命じるのであった。

——ルミア・インジェルは、いつかこんな日が来ることを覚悟していた。

元々、自分は三年前に死ぬはずだった。自分という存在は公になれば国内外に要らぬ混乱をもたらす猛毒だ。それゆえに国を守るために人知れず殺されるはずだった。

別に珍しい話ではない。王位継承者同士の争い、王族を巻き込んだ派閥闘争、強国へ帰順するための生け贄——王族の人間とて殺される例など、歴史を繙けば世界中にごまんとある。少くない例の一つに、自分が含まれることになっただけの話だったのだ。だが、生かされた。

自分を哀れんだアリシアが、無理をして自分を生かしてくれたのだ。死なねばならなかったはずの自分が、今日まで生きることができた——それはとても幸運なことだ。

そして、ルミアはそれがやはり単なる幸運に過ぎないことも痛いほどに理解していた。

こんな日が、いつかやって来るかもしれない……常日頃そう思っていた。

市井の赤き血の一人に落ちたとはいえ、ルミアという存在はアルザーノ帝国が抱えた爆弾のようなものだ。国を支える女王たる母が、いつかなんらかの事情で、やむを得ず自分を処することを決意する日が来る……いつも心のどこかでそんな覚悟をしていた。

このあまりにも突然な処刑宣告は、つまり——そういうことなのだろう。

だからルミアは、自分でも意外なほど落ち着いてこの時を迎えることができた。

これは仕方のないこと。三年前に死ぬはずだった自分が今、死ぬ。それだけのこと。

だが、それでも——

(……怖い、な)

覚悟はしていたけど、やはり死ぬのは怖かった。震えが止まらなかつた。心臓が激しく動悸し、呼吸は荒く息苦しくなり、思考が次第にぐるぐると混濁していく。

そして何よりも、こんな自分に本当の姉妹のように接してくれたシステイーナ、本当の両親のように愛してくれたシステイーナの父母、仲の良かった学院の学友達、そして——グレン。皆とこんな形で別れなければならないことがどうしようもなく悲しかった。

誰か助けて、まだ死にたくない、と。

頭を抱えて泣き叫びたかった。

(やっぱり……死ぬのは嫌だな……)

先生にも色々なことを教わりたかった。三年前、先生が私の命を救ってくれたこと……思い出して欲しかった。システイーナと一緒に、もつと色々なことをしたかった、見たかった、語り合いたかった。

そして、最後にせめて一度だけ、本当の母親に――

(……ああ、そうだったんだ……)

ようやく、気付いた。

(最後だから……あの人は、私に会いに来たんだ……)

じわ、と。目尻に涙がにじむのを感じる。

グレンの言うとおりであった。自分の本音なんて、最初からわかりきっていたのに。(もつと素直になればよかった……どうして、あんな意地を張ったんだろう……?)

だが、もう、後の祭り。何もかもが……遅い。

(……さようなら)

つ、と。ルミアの目尻からこぼれた涙が頬を伝い落ちた――その時だった。

――テイ・ホジエ・チツツ 生きたいか?

――ホチエシユ・ヴイデトウ・サボユ・マトウ 母親に会いたいか?

――トグ・ダーヤ・ボ・マ・グ・チ・ベ だったら手助けしてやる。

――どこかから、そんな声が……聞いたことのない人の声が聞こえた気がして……

しゅぱつ、と。

頭上で何かが爆ぜるような音が鳴り響いた。

「うぎやああああああああ——ッ!」

死に至る灼熱の苦痛の代わりに、ルミアを襲ったのは耳を刺すような悲鳴だった。

「……ッ!」

ルミアが驚いて、思わず目を見開く。

「うあ、あああ……ッ!目が、目があゝッ!」

「うう……み、見えない……何も見えない……ッ!」

ルミアが見たのは、剣を取り落として目を押さえ、悶え苦しむ衛士達の姿だった。

何事?ルミアが目を瞬かせていると……

「な?目を瞑ってて、よかつたろ?」

したり顔で、いつの間にか起き上がっていたグレンが、ルミアへ近づいてくる。

「つたく、痛てて……思いつきり殴りやがって。まあ、俺が普通の魔術師だと思ったのが失敗だ。拳闘の方が得意でね、あの程度の打撃ならいくらでも外せるのさ」

そして、目を押さええて狼狽える衛士達を一瞥する。

そんな中、ルミアはぼーっとしていた。

先ほどの知らぬ誰かの声。

目を瞑ってたあの時、自分の目の前に少年がいた。

雪のような白い髪、システイーナの銀髪とはつきりと見分けがつくほどの白い髪。

顔は……自分が知っている人の顔の面影があったような……母の妹——今は無き東の帝国に嫁いでいった叔母の面影があったような、そんな気がする。

その少年はこう言っていた。“母親と会うのを手助けしてやる”、と。

言葉が共通語ではなく、違う言語だったが、なぜかそう言っていたと確信が持っていた。

あれは一体、なんだったのだろうか？

「さて、ルミア。今、解いてやる」

そんなことをルミアがぼんやりと考えていると、グレンが折りたたみ式の小型ナイフを取り出し、ルミアの後ろ手に縛める縄を切っていた。

因みに、衛士達は視力が回復する前に、悉くグレンに意識を刈り取られていた。

「せ、先生……なんて、ことを……王室親衛隊に手を上げる……なんて……」

自由になった後、しばらく呆然としていたルミアだが、徐々にことの重大さを把握し、グレンに堅く震える声で問い詰める。

「いやー、その、なんだ？ つい、口が滑って、手が滑っちゃった、どうしよう？」

「どうしようって……何を考えているんですか!?!これじゃ、先生まで国家反逆罪に問わ

れてしまいます！」

「あー、うん、その……ヤバいな」

グレンが頬を引きつらせてい脂汗を垂らしていた。

その表情を見る限り、後先はあまり考えていなかったらしい。

「早くここから離れてください！こんなところ、誰かに見つかったら——」

「大丈夫だ。王室親衛隊にも話の通じる奴は必ずいる。まずはそいつと話し合つて

……」

「いたぞ——ツ!?あそこだ——ツ!？」

見れば向こうから、新手の衛士達がこちらに向かって駆け寄つて来ていた。

「み、見ろ！同士達が殺られているぞ!？」

「おのれ、大罪人に与する不屈き者め！我らが剣の錆にしてくれるツ!？」

「志半ばで倒れた同胞の無念、必ず晴らしてみせる!？」

しかも良い感じに勘違いをされてしまったらしく、衛士達は妙に殺気立ち、もはや交渉の余地是一片たりともなさそうだった。

「キミ達、人の話は最後まで聞きましょうって、お母さんに習わなかった!？」

「ど、どうするんですか!?!このままじゃ先生が——」

「どうするもこうするも——」

「きゃっ!?!」

グレンはルミアを横抱きに抱えると、学院を囲む鉄柵に向かって駆けだした。

「《三界の理・天秤の法則・律の皿は左舷に傾くべし》ッ!」

そして、三節のルーンで呪文を唱えながら跳躍。

すると、人の脚力ではあり得ない高さまで、二人の体が空へと舞い上がった。

黒魔「グラビティ・コントロール」。グレンは重力操作の呪文で自身らにかかる重力を弱め、体重を羽のように軽くしたのだ。

ルミアを抱えたグレンは学院を囲む鉄柵を大きく飛び越え、学院の外へ。

そして呪文を解除しつつ、着地と同時に、そのまま市街の方へ猛然と走り始めた。

「に、逃げたぞッ!?!」

「追え!・逆賊をぎやああああ——ッ!?!」

「な、なんだ、この鳥うぎやああああ——ッ!?!」

背後から悲鳴がするが、いちいち振り返っている暇はない。

「ああ、もう、ちつくしやう! どうして次から次へと厄介ごとばかり!?! だから俺は働くなんて嫌だったんだああああ——ッ!?! ええい、引きこもり万歳——ッ!」

激流のように後方へ流れていく光景の中、グレンの悲痛な叫びが木霊した。

王室親衛隊の面々に追い立てられるグレン達の後を、サーシャは後を追うように屋根伝いに追っていた。

複雑な路地裏を通り抜け、グレン達は魔術学院のあるフェジテ北地区から、一般住宅街がある西地区へと至っていた。

道中、王室親衛隊の衛士達が、グレン達を見つけては追い立てていくが。

「ぎゃあああああああ——ッ!?!」

目の前にビィエルが突然現れては、ビィエルが巻き起こした突風で押し戻され——
「そこだ！そこを曲がれッ!」

と、衛士達が曲がると……

「どわあああああああ——ッ!?!」

今度は道が凍り始め、衛士達が足を滑らせて壁に激突する。

当然、突然止まることができず、後続の衛士達も悉く足を滑らせていき、身動きがとれなくなっていた。

こういう感じでサーシャが王室親衛隊を足止めしていたのと、地の利でグレンが勝っていたこともあって、グレン達はどうか追っ手を撒くことができた。

まあ、これで当分の時間を稼ぐことができるだろう。

後はグレン達に接触すればいいだけだ。

……まあ、久々の再会の喜びのあまりに、大剣を振るう少女はいるだろうが。それでも、グレンと接触すべく、グレン達の元へと向かうのであった。

「わけわかんねえ……それに来いつつたつて……俺一人でどうやって女王陛下の所まで行けばいいんだよ……くそっ！」

一方、グレンは苛立ちながら半割れの宝石をしまいこんだ。

追っ手を撒いた後、グレンは女王陛下に会う方法を模索し、女王陛下に直接会うのではなくセリカに話をつけて、王室親衛隊の暴走を止めるようにと画策し、セリカを呼び出したのだが――

『私は何もできない』

通信に応じるなり、いきなり感情の読めない突き放すような言葉をセリカは言ってきたのである。

「はあ？なんでだよ？ふざけんな、この馬鹿！俺は真面目――」

流石に苛立ったグレンが、矢継ぎ早に文句をまくし立てようとするが。

『もう一度言うぞ、グレン。いいか？私は何もできないし、何も言えないんだ』

ここでグレンはようやくセリカの様子がおかしいことに気付く。

「どうやらこの一連の事態は、グレンの予想以上に一筋縄じゃいかないものだったらしい。」

「その後も、グレン達が置かれている状況を知っているのかと問うと、セリカは把握していた。」

「しかし、肝心の王室親衛隊が暴走している理由については、答えなかった。いや、答えられなかった。」

「くっそ、わけわかんねえ……どうなってやがんだ……う？」

「セリカほどの大陸屈指の第七階梯の魔術師を、どうやって黙らせたのか。一体、どんな状況で何が起きているのか。グレンが渋い顔で頭を押さえて悩んでいてると。」

「一つだけ、言っておく。グレン、お前だけだ。」

「なんだと？」

「お前だけがこの状況を打破できる……そう、お前だけかな。」

「それは一体、どういう……？」

「グレン、この意味、よく考えろ。そして、なんとかして女王陛下の前に来い。来たなら取り巻きの親衛隊くらいはどうかしてやる……これ以上は危険だな。切るぞ。」

「あ、おい!!」

意味不明なことばかり押しつけて、セリカは一方的に通信を切ってしまった。

確かに王室親衛隊は個々の武力・技量は非常に優れているが、主な任務は護衛のため、実戦経験は然程でもない。習得している魔術も軍用の攻性呪文や治癒呪文などが主だ。かつて帝国宮廷魔導士団の一員として数多くの実践を経験し、一応の魔術師として幅広い魔術を知るグレンならば、逃げに徹する限り、あの手この手でなんとかあしらえるだろう。

だが、自ら攻め入ることになるなら、また話は別だ。

その人数差、戦力差が絶望的な壁となつて立ちほだかる。

おまけに、最も女王陛下の近くで護衛を務めているだろう王室親衛隊の総隊長ゼーロスは四十年前の奉神戦争で、聖エリサレス教会聖堂騎士団総長『剣聖』ヨハネスと互角に渡り合ったとされる歴戦の古強者だ。他の衛士連中とは根本的に格が違う。

(どう考えても俺の手に余る。仲間が……せめて、あと一人が二人、仲間がいれば——)
焦燥も露わにグレンが壁を殴りつけた、その時だ。

グレンとルミアの目の前に、一羽の鷲が降り立ってグレン達を見つめていた。

「——ッ!?!」

なんだと振り返るなり、目を見開くグレン。鷲はグレンを知っているのか、トコトコと近づいてくる。

「せ、先生……?」

「お前は……ッ!?ということは、まさか——ッ!?」

グレンはこの驚を知っている。

なぜなら——

と、その時。

ぞくり、と。背中を駆け上る、氷の刃で切り付けられたような悪寒。

「——殺気!」

かつて慣れ親しんだその感覚に、グレンは脊椎反射で殺気を感じた方向へ目を向けた。

すると、通りの向こうの建物の屋根の上に、三人の男女が立っていた。その三人組は紛うことなく、グレンのことを真っ直ぐに見下ろしている。

その身にまとう特徴的な衣装と、背格好には見覚えがあった。

記憶の底から、ぶくりと泡のように浮かび上がってきた、その三人の正体は——

「リエル!? サーシャ!? それにアルベルトまで!?! どうしてここに——まさか、王室親衛隊だけじゃなく、宮廷魔導士団も動いていたのか!」

グレンが三人の存在を認識した瞬間。リエルが弾かれたように屋根を蹴り、建物の壁を駆け下りた。

четыре (第四話)

——そして。

「このお馬鹿！お前、一体、何考えてるんだ!?!」

フェジテ西地区にある路地裏の、さらに奥まった場所で、グレンの叫びが響き渡った。どうしてこうなったかって？

・グレンの前にアルベルトとサーシャとリエルが現れた。

・リエルが高速武器錬成で大剣を生成してグレンに向けて突進した。

・グレンに突進するリエルに、前方からリエルが頭突きし、後頭部にアルベルトが放った黒魔「ライトニング・ピアス」が直撃して動きを止める。

・リエル、グレンにグリグリされる↑今ココ

先ほどまでの緊張感は、今やどこかに吹き飛んでしまっていた。

「俺が現役時代のときにお預けになった勝負の決着をつけたかっただどお!?!時と場合と

状況を考えろ、このアホ！脳筋！おかげで死ぬトコだったわ！」

「……むう」

受けたビィエルの頭突きと「ライトニング・ピアス」の威力が相当、手加減されてあつたことや、生来の頑丈さも手伝ったのだろう。もうすっかり回復したリィエルが感情の起伏に乏しい表情を、ほんの少しだけ、しょんぼりさせていた。

「せ、先生……その方達は……？」

ルミアは少し離れた場所で、不安と戸惑いの表情をリィエルとアルベルトとサーシャに向けている。

「あー、こいつら俺の帝国軍時代の同僚だ。信頼できる連中だから安心……できるはずねーよな、さっきの光景を見た後じゃな……」

「そうね、町中でいきなり攻性呪文を撃つなんて。うかつよ、アルベルト。どうやらあなた、その子に怖がられ——」

「オ マ エ だ よ！ お前ツ！」

グレンはリィエルの頭を両手で驚掴みし、がくがくと激しくシエイクする。

「……つたく、お前はちつとも変わらん……はあ……」

その眠たげな無表情を微塵も崩さず、ゼンマイ仕掛けのメトロノームのように左右にふらふら揺れるリィエルを尻目に、グレンが深いため息を吐いた。

「……話の続き、いいか？状況はとても深刻なんだがな」

「す、すまん。頼む」

アルベルトの態度は久方ぶりに再会した仲間へ向けられるものとしては、どこか冷ややかだ。グレンは気まずさを覚えながらそれに応じた。

「状況としては、アルベルト先輩が遠見の魔術や使い魔によって得られた情報によると、王室親衛隊は女王陛下を自分達の監視下に置き、彼女——ルミアさんを始末するために独断で動いているということですよ」

「んなのわかっているよ。連中、絶対にありえない命令でつち上げてるからな。で？女王陛下の身の回りは今、どんな感じだ」

「監視しているだけで、殺すつもりはないのでしょうか。陛下自身は普通に競技場の貴賓席に居ますよ。ただ、その周囲一帯を王室親衛隊の上位幹部陣を中心に、隙無く完全に取り囲んでいます。そのせいで動けない。おまけに今はその周囲はいかなる者も近づかせない厳戒態勢……騒ぎを起こさずに突破するのは無理ですね」

「セリカはどうしたんだ？ほら、元・特務分室のナンバー2」

アルベルトから引き継ぐように状況を説明したサーシャに、グレンはセリカの動向を問うが、サーシャは肩を竦めて首を傾げるそぶりを見せる。その様子だと、セリカは女王陛下の傍にはいるが、何も行動を起こしていないらしい。そして、そのつもりもない

らしい。

「わっかんねーなあ。セリカなら、いくらでも女王陛下を守って切り抜けられるはずなんだけどなあ……アルベルト、王室親衛隊がルミアを特に狙う理由、わかるか？」

「詳細は不明だ。只、お前の話の通りそのルミア嬢が、あの噂の『廃棄王女』だとするなら……何処かでそれを聞きつけた王室親衛隊が、王室の名誉を守るために、忠誠心を暴走させ、その娘を始末しようとしている……と、考えられなくもない、がな」

「だが、それは無理があり過ぎだ。人の口には戸が立てられんと言うから、漏れたその機密情報をどつかで得たというのはアリだとしても、女王陛下がいる、今、このタイミングで、不敬罪を犯してまでコトを起こす意味がまったくわからん」

「確かにな。やるなら、密かにやればいいだけの話だ」

事の真相を考察し、難しい顔で考え込むグレンと、冷淡な表情を貫くアルベルト。

「それに、連中のあの慌てよう、まるで今日中にルミアさんを殺害しないと大変なことになる。そういう感じの慌てっぷりでしたからね。あまりにも不自然な動きなんですよ
ね」

王室親衛隊の不自然な動きがあることを指摘するサーシャ。

「もういい。考えても仕方ないこともある」

そんな思索の膠着状態にしびれを切らしたのか、突然リエルが三人の間に割って入

る。

「……いや、お前はもう少し、考えような？」

「だから、わたしは状況を打破する作戦を考えた。グレンがいるなら、もう少し高度な作戦が可能」

「ほう？言ってみろ」

「まず、わたしが敵に正面から突っ込む。次にグレンが正面から突っ込む。次にサーシャが敵に正面から突っ込む。最後にアルベルトが敵に正面から突っ込めばいい。……どう？」

「お前はいい加減、その脳筋思考をどうかしろっての!？」

「痛い」

呆れたグレンはリエルの脳天を鷲掴みし、ギリギリと万力のように力を込めた。

「お前が居なくなつた後の俺の苦勞、少しは理解したか？」

淡々と放たれるアルベルトの言葉の端々には、どこか確実に棘があった。

「……うん、ごめん。マジでごめん」

「お前が何も言わずに俺達のもとから去つた理由、今は聞かん。帰つて来い、とも言わん。だが……いつか話せ。それがお前の通すべき筋だ」

「……ああ」

グレンを一瞥することもなく一方的に投げ放たれるアルベルトの言葉に、グレンは珍しく神妙に頷いた。

「そして、いつかわたしと決着をつけること。それがあなたの通すべき筋」
「嫌だよ!」

諦めないリイエルに、グレンはうんざりしながら突っ込みを入れた。

「そう。いつか決着をつけるのは嫌、と。なら、今——」

「なんでそうなるんだ、勘弁してくれ!?!ひいひいっ!?よ、寄るな!」

リイエルが錬金術で錬成した大剣を構えて、無表情でじりじりにじり寄ってくる。

グレンは冷や汗を滝のように流しながら、戦々恐々と後ずさりしていた。

「ええい!大体、お前、なんでそんなに俺との決着に拘るんだ!」

「魔術師同士の決闘は勝者が敗者に要求を一つ通せる……そう聞いた」

「ああ、そんなカビ臭い伝統があったな!それがどうした!」

「……それは」

やけくそ気味に投げられたグレンの問いに、リイエルは一瞬、言葉に詰まって。

「……グレンに、……どうしても、帰ってきて欲しかった、……から」

常に一切の感情の色を見せなかつたリイエルの表情が、消え入るような声でそう呟いたその時だけ、微かに憂いに彩られた……ような気がした。

「……ちつ、このバカ。それで俺が死んだら本末転倒だろうが……」

「グレンがああの程度の攻撃で死ぬわけない」

「お前なあ……」

「サーシャがそう言ってた」

「おい、サーシャ。お前、リエルに何吹き込んでんだ？」

「え？だって、本当じゃないですか」

「本当じゃねえよ!?!」

「手、生えますし」

「生えねえよ!?!」

「頭も、定期的に新しい頭に替わりますし」

「替わらねえよ!?!お前、俺を化け物かなんかだと思ってるの!?!」

「うるさいですよ、先輩」

「なに、この理不尽!?!」

そんなグレン達の様子を見守っていたルミアがくすりと笑った。

「アルベルトさんに、サーシャさんに、リエルさん……でしたっけ？ふふ、良い方達な
んですね?」

「はあ? 良い奴? こいつらが? 冗談……」

もはや、グレンはため息しか出ない。

「まあ、いい。とにかく、女王陛下に直接面会すれば、それがこの状況の突破口になるはずだ。俺はなんとか上手く、陛下の前に立たなければならぬ」

「その根拠はなんだ？グレン」

「さあな？ただ、セリカがそうしろって言った。アイツはケチで意地悪だが、意味のないことは絶対言わない。俺が女王陛下の前に立つことには必ずなんらかの意味があるはずだ。どの道、このままじゃ物量差でジリ貧、それに賭ける」

「信じて良いのか？」

「少なくとも、俺は信じられるね」

「……わかった。お前がそう言うのなら、俺も信じよう」

アルベルトが静かに目を閉じて頷いた。

「それで、先輩達二人を女王陛下の前に立たせるとして……俺達は何をすればいいんです？」

「そうだな——」

グレンが少し、考え込んで……アルベルトとサーシャとリエルにとある提案をした。

ПЯТЬ (第五話)

魔術競技祭はいまだ衰えぬ熱気に包まれている。中央の競技フィールドでは一喜一憂のドラマが次から次へと生まれていき、そのたびに観客達は熱狂に包まれていく。

「……遅いなあ」

そんな活気に満ちた周囲の観客達とは裏腹に、銀髪の女子生徒——システイーナ——
フィーベルは不安げに呟いていた。

「ルミア、まだ見つからないのかな……？」

午後の部が始まってかなりの時間が経っていた。グレン不在の中でも二組の生徒達は奮闘し、総合順位は上がったり下がったりで現在四位。優勝を狙うならば少し厳しい状況になってきている。やはり地力の差がここで現れ始めたのであろう。

「やっぱり、先生がいないと……」

皆の士気が落ちかけている。やっぱり、だめかも。いや、俺達にしては上出来じゃないか？……そんな弛緩した空気が流れ始めている。システイーナ自身も、もう充分楽し

んだ、よく頑張った……そんな思いに囚われ始めている。

「本当にどこに行つたのかしら、あの二人……まさか、あいつ、ルミアに何か邪なことしてるんじゃないでしょうね？」

システイーナが理由もわからない焦りと怒りに駆られた、その時だった。

背後にふと、覚えのある気配を感じ、システイーナは振り返つた。

「やつと帰つてきたの!? 遅いわよ、先せ——あ、あれ？」

つい、グレンとルミアかと思つたが、そこにいたのは見知らぬ男女だった。

長髪、鷹のように鋭い目つきの青年。

帝国では珍しい青髪、感情と表情の死滅した人形のような少女。

二人とも黒を基調とした上下のスーツにクラバット、白い手袋、と帝国式の正装に身を包んでいる。この場においては少々堅い服装ではあるものの、別段珍しくもない出で立ちではあるが、なぜかどうにも違和感が拭えなかつた。

「お前達が二組の連中だな？」

「そ、そうですけど……あ、貴方達は一体……？」

「俺はグレン＝レーダスの昔の友人、アルベルト。同じくこの女はリエルだ」

「……………」

システイーナの問いにアルベルトと名乗る青年が答え、リエルと呼ばれた少女が無

言で微かに頭の角度を下げた。挨拶のつもりらしい。

「今日は、魔術競技祭の後、旧交を温めようとグレンの奴にこの学院へ招待されてな。この通り、正式な入稿許可証もある」

アルベルトは懐から、学院の校章たる梟の紋が銀で箔押しされたカードを取り出して見せた。それは学院の正式な来客へ厳正なる審査の下に発行され、結界で守られた学院への出入りを可能にする鍵となる魔術符だ。

「だが、奴は今、突然の用事に少々取り込んでいるそうだ」

突然の来訪者に、ざわざわと顔を見合わせる二組の生徒達。

「……で、だ。唐突なことで戸惑うと思うが、あの男は今しばらく手が離せないらしい。ゆえに俺はこのクラスのことをグレンに頼まれた。今から俺が奴の代わりにこのクラスを指揮を執る。そして——」

魔術学院とは大きく離れた町の一角にて。

金髪の少女を横抱きに抱えた青年が、一心不乱に駆けている。

その脳裏に思い起こされるのは先ほど、昔の同僚と交わした言葉だ。

『ルミアは感応増幅者だが、この状況を打破するために、ルミアの能力を使うことは絶対

にできない』

『知つての通りだが、異能というのはバレたらただじゃ済まない。迫害され、忌み嫌われ、下手すりゃ殺される。異能と聞けば、神の名の下に粛清したがる非公式の狂信的武装修道会があるの知つてるだろ？万が一、連中に目をつけられたら終わりだ』

『ルミアの素性を隠し通さなければならぬ大前提がある以上、状況打破のための能力行使は厳禁だし、事情を誰にも説明できない。こんな詰んだ状況で、誰にも邪魔されず女王陛下に近づくには、まず俺のクラスが魔術競技祭で優勝する必要がある』

『優勝すれば、今回だけは女王陛下が表彰台に立ち、クラスを代表して担当講師が勲章を賜ることになっている。これが、現在、警戒態勢で女王陛下の周辺を固めている王室親衛隊を出し抜いて、陛下に接触する唯一のチャンスだ』

『なぜなら、競技祭の終わりに陛下がこの表彰台に立つ瞬間だけは、王室親衛隊は陛下に対する徹底マークを一時的に外さざるをえないからだ。女王の名において下々の者に勲章を下賜するこの瞬間に、女王陛下を自身らの監視下において拘束し、それを妨げるならば、それは女王陛下の威光と面子を潰すことになるからだ。右派筆頭たる王室親衛隊の誇りにかけて、そんなことできるはずがない』

『そして、その時、怪しまれずに俺が陛下の前に立つ方法を考えた。それは——』

——正直、分の悪い賭けだと思う。

だが現状、この状況を打破しうる手はそれくらいしかないのも事実だった。

「いたぞ——ッ!？」

と、その時、背後で怒声が上がった。

駆ける速度を緩めず、ちらりと背後を振り返れば——

「あそこだ——ッ! 追え——ッ!？」

遙か後方の十字路の辺りで、自分達の姿を発見した王室親衛隊の群れが見えた。

こんな所で捕まるわけにはいかない。

「……ふん、やれやれだ」

鼻を一つ鳴らして、駆ける速度をさらに速める——

と、魔術競技祭が盛り上がっている裏で王室親衛隊とのカーチェイスが繰り広げられている中。

(ルミア＝ティンジェル、ねえ……)

観客席の一角——二組と貴賓席が同時に見渡せれそうな場所にサーシャが壁に背を預けていた。

元々、今回の任務は機密性が高いから、帝国宮廷魔導士団がいけないという前提で動いている。そのため、サーシヤはグレンとアルベルト達と別れ、単独で行動していた。

可能性が限りなく低い、王室親衛隊が突飛な行動を取らないかを監視するのが、今、サーシヤに課せられた任務。

……実際、そうなのだが、サーシヤはルミアのことでしばらく一人になる必要があった。

決して、惚れたというわけではない。確かに美少女で惚れる男は多いだろうが、サーシヤにはそんな感情はない。

サーシヤは、今、グレンとフェジテを舞台に王室親衛隊とカーチェイスしているルミアの顔を思い出しながら、貴賓席にいるアリシアを上空でぐるぐると跳び回っているビィエルの視覚を通じて見る。

「……なるほど」

しばらくアリシアを見ていたサーシヤは、懐から通信魔導器を取り出し起動する。

「……」
アシーン トゥヴァーチイトゥワイートゥヴァー トゥヴァー ヴォースエミトゥワイートゥヴァー
アシーン デエーヴィチ
 1 1 2 4 2 2 8 3 2 3 2 1 9

通信魔導器に向かって、数字を東部圏でよく使われている言語で呟く。

なぜか誰もサーシヤに気付いていないが、傍から見たら数字をランダムに通信魔導器

に呟く今のサーシヤには誰も近付きたくないし、関わりたくないだろう。

だが、サーシヤはそんなのお構いなしに数字を呟く。一体、何の意味があるのかわからない数字を呟く。

しばらく数字の羅列を呟いた後、サーシヤは通信魔導器を懐にしまった。

ふと、中央の競技フィールドに視線を向けると、敷設された変身魔術実演用の円形舞台では誰かが竜に変身していた。

黒光りする鱗、雄々しく広がる翼、凶悪に光る爪牙に、見る者を圧殺せんばかりの巨躯——本物と見紛うほどの迫力に満ちた竜が出現していた。

「ふーん……」

サーシヤは竜をまじまじと見つめ。

「……30点」

審査員である学院の講師・教授陣が9、9、10、9点、合計37点と高得点を出している中、サーシヤは30点と評価していた。

「見た目はいいんだよね、センスはある。ただ、所々雑なところがあるんだよねー。例えば——」

雑な点を指摘しようとした、その時。

通信魔導器から呼び出し音が鳴る。サーシヤは仕事が早いと呟き、通信魔導器を取り

出し起動する。

「——どう？ルミアの素性、なにかわかりました？」

開口一番、サーシャは貴賓席を見ながら言った。

「……そう。やつぱり……へえ、元・王女様だったんだ。ふうん」

通信魔導器から聞こえる男からの報告に、サーシャはどこか嬉しそうに顔を綻ばせる。

「……それで……ああ、そう言えば、学院で爆破未遂テロがあったもんね。その時、連中は彼女を連れ去ろうとしたんだ……」

ルミアについて、興味を抱いてきたサーシャ。ルミアが異能者だというのは、さつきグレンから聞いたが、ある組織がルミアを狙っているということに興味を持ち始めたのだ。

「……たかが異能者の為に、連中は凄腕の外道魔術師三人を投入したわけか。セキュリティが厚いこの学院にわざわざ、と」

どするのかと、男が問うと、サーシャは口の端をつり上げる。

「……決まってるでしょ。彼女を観察する。そして、利用価値があるなら……遠慮なく利用させてもらう。……それは、党のためであり、何より、俺達のためにもなるだろうし、ね」

まあ、あの組織が凄腕を投入してまで欲しがるんだから、利用価値はあるに決まっているんだけど、と。サーシヤは冷酷な笑みを浮かべる。

「……彼女には優しくした方がいいんじゃないかって？ 確かに彼女とは完全に赤の他人というわけじゃないけど、赤の他人みたいなもんだし？ 今さら、情が湧くこともないだろうし、ね」

サーシヤが誰かと通信している一方、中央の競技フィールドでは――

『て、天使様だあああ――ツ!? 魔術学院に聖画から抜け出てきたような天使様が降臨したああああ――ツ!? これは美しい! 二組のリンちゃん、なんとも見事な変身を見せましたあ――ツ! さあ、注目の評価点は――ツ!』

時計の文字盤を模した光輪を背に、純白の三対六翼、揺れ流れる純銀の髪、ふわりとしなびく薄絹の衣。その華奢な身体にはゆるりと無数の金色の鎖が巻き付き、その細腕には時の天使を象徴する巨大な黄金の鍵が携えられ、自身の鎖と繋がっている。

その全造形がまるで彫像のように精緻かつ美麗。

時の天使ラーティリカ。

宗教神話上の存在に過ぎない天使の実在を証明するような、その神々しい御姿。

滝のように轟く拍手と大歓声の渦巻く中心に、敬虔なる者ならば思わず跪いて聖印を切つてしまわんばかりに荘嚴なる天使が降臨していた。

そんな中央の競技フィールドから放たれる神々しい輝きが届いていないのか。

サーシャの周囲はまるで輝きも何もない、まるで殺伐とした冬——東セルフオードでの奥地で猛威を振るう、他者を寄せ付けない斬りつけるような冬のようない雰囲気
が支配していた。

Ш е с т ь (第六話)

『さあ、「変身」の競技で最高得点を叩き出し、勢いを盛り返した二組！続く「使い魔操作」、「探査&mp;解錠」でも結果を出し、現在三位！再び優勝が射程に入りました！いやあ！今回の魔術競技祭は本当に面白い！』

大番狂わせはやはり勝負事の華なのだろう。観客席の人々も勢いを取り戻し始めた二組の姿に、再び熱狂に火が点き、沸き立ち始めていた。

そんな盛り上がりの中、サーシャは女王陛下のいる貴賓席周辺を監視していた。

貴賓席周辺では王室親衛隊の衛士達が忙しく行き交い、怒声が飛び交っている。

本来なら、とうの昔に標的を抹殺して後始末もできて万事解決、となっているはずなのだが、未だに標的は生きている。

おまけに、逃亡を手助けしている魔術講師に散々振り回されているため、標的を捕らえることができない。

件の魔術講師。それも、実戦経験もない、たかだか、魔術師一人に、誇り高き王室親

衛隊が後れを取っているという惨憺たる事実にも、ゼーロスが苛立つているのが目に見えて伝わってくる。

(……あの慌てよう……やはり普通じゃない。かなり無理を押しに押し通しまくっているな、あのおっさん)

不自然なまでに慌てふためいている衛士達から、今度は女王陛下に視線を移す。

特段目立つ動きをしておらず競技を観戦しているが、彼女の顔を見る限り、とても落ち着いてみていられる状態ではないことがここからでもわかった。

そして、隣にいる金髪の長髪の女性——第七階梯の魔術師、セリカⅡアルフォネアに目を向けるが、彼女も動く気はないらしい。だが、その深刻そうな表情を見る限り、どんな状況なのか理解しているらしかった。

(ふむ……ルミアを狙う連中は、前もつてセリカⅡアルフォネアの首を押さえてしまつたらしい。まあ、彼女を押さえた方がいろいろと事が進むからな。俺だつてそうする)と、なると、敵はどうやって彼女の口を封じることが出来たのか？

(彼女のことだ。ただ脅しただけじゃ、なんにもならない。下手したら消し炭になる。しかし、敵は彼女の口を封じること成功した。こんな芸当ができるのは……)

世界広しといえど、魔術師以外に他ならない。それも超一流の魔術師。これが今回の仕掛け人。

（そうになると、王室親衛隊の連中がアルフォネアを口封じしたとは考えにくい。連中は魔術戦よりも近接格闘戦に優れているだろうし……ま、赤衛隊に比べたら実戦経験がゼーロス以外乏しいけど）

王室親衛隊の仕業とは考えにくい。無論、あの学院長らしいおじさんも。

では、誰がセリカを口で押さえたのだろうか？セリカが貴賓席からそんなに動いていない限り、敵は彼女の近く——貴賓席にいたはずなのだが。

それだけじゃない、敵は女王陛下に何を仕掛けたのだろうか？

（王室親衛隊が動いているということは、少なからず女王陛下も関係あるはずなんだけど……でないかと、こんなに無理を通しまくることなんて有り得ないし……）

この、一見単純そうで単純じゃない事案に、サーシャが頭をフル回転させていると。

『そして、今、魔術師の伝統遊戯「グランツィア」の試合の真つ最中！今、ハーレイ先生の一組チームとグレン先生の二組チームの、血を血で洗うような陣取り合戦が行われております！』

ふと、競技フィールドに目を向ける。

そこでは、楕円形に敷設されたグランツィア・フィールド上を、制服の上からつけたピブスによってチーム分けされた選手たちが必死に呪文を唱えて霊点を設置し、陣地結界を構築していた。青い光の点とそれを結ぶ青い光の線と、それに沿って立つ光の壁

が、競技場を色鮮やかに切り分けていく。

ふーん、と。サーシャはぼんやりと眺めているが、二組の行動が妙に気になっていた。というのも――

『が、二組、どうしたことでしょう!?先ほどから全く結界を構築する気配がありません!一組チームの構築した陣地結界を壊してばかりだ!』

実況の通り、二組のチームは一向に結界を構築して自分達の陣地を作ろうとはせず、全員がひたすら一組のチームの作った結界を壊す妨害工作ばかりをやっている。

「ふむ……引き分けを狙っているのかな?でも、あの実力差じゃ、最後まで保たない気がするけど……」

場は膠着状態と化しているが、二組チームと一組チームの実力差はかなりあることは一目で見てわかる。ただ結界を壊す手際だけは良いのだが、それはもしかしてもしなくてもグレンが壊す練習だけしてると言われたからなのだろう。

「まあ、先輩の指示なら、あの先輩のことだからなんの意味もない指示を出すはずがないから……はてさて、何をするように言ったのやら」

状況はお互いゼロのまま。

一時的に一組に得点が入ってもすぐゼロに戻されてしまう。

得失点差がクラスの得点になるこの競技。このまま終われば二組はともかく、一組は

他クラスに大きく差を詰められてしまうことになる。

そんな状況になってしまったら、流石に分が悪いと思つたのか、眼鏡をかけた権威主義的で常に頭髪にダメージを与えてそうな一組の講師が苛立つて指示を飛ばし始めた。

指示を受けた一組チームの選手達は赤い光で結界を構築し始める。

『ああーつと、一組、アブソリユート・フィールドの構築に入ったあ！これが成れば引き分け狙いはずできない！二組選手陣、慌ててノーマル・フィールドの構築に取りかかったが——流石、一組、対応が早い！一組のデイフェンダー、ノール君、二組のフィールドをあつという間に潰した——ツ！』

二組の三人が必死に結界を張つて、アドバンテージを保とうとするが、一組のデイフェンダーにことごとく潰されていく。こうしている間にも、一組の構築するアブソリユート・フィールドは着々と完成に近づいていく。

アブソリユート・フィールドか完成し、一組の勝ち決定。普通ならばそうなるのだが——なぜか一組は敗北した。

なぜなら——

『こ、これはああああああああああああ——ツ!』

一組の赤いフィールドが成立すると同時に、それを切欠として突如、それを大きく取り囲むように黄色のフィールドが出現したのだ。

『サイレント・フィールド・カウンターだ——ツ!?なんと一組のアブソリュート・フィールド成立を条件にしたサイレント・フィールドを二組が仕込んでいた——ツ!?』

グランツィアのルール上、完全に囲まれてしまったフィールドには得点価値がなく、最も外側のフィールドを構築したチームの得点に加算されてしまう。つまり——

「……えげつな」

格下をいいことに相手を苛つかせ、大規模なアブソリュート・フィールドを構築させるように仕向け、相手が勝利を確信した瞬間、敗北という現実を突きつけて一気に落とす。

まあ、何はともあれ、これで二組が再び優勝する可能性は高まった。

後は、次の種目——最終種目である『決闘戦』で優勝すれば、二組の優勝が決まる。そして、女王陛下からの勲章の授与に参加できる。

その時が、まさに勝負といったところだろう。

まあ、その前に、つと。サーシャは再び貴賓席に視線を戻す。まだグレンとルミアは捕まっていないのだろう。貴賓席の周りではゼーロスが報告に來た衛士に対し、苛立ち紛れに怒鳴りつけているのが見えていた。

「……………」

サーシャは人差し指を口にあてしばらく考える。

そして、しばらくして――

「……ふーん、なるほど……元《世界》の言う通り、これはグレン先輩しか解決できない問題だわ、こりゃ」

下手人も大体わかった。下手人は女王陛下の側にいることができる女性。そして普段は側にいるはずのその女性が、今はどこにも見当たらない。

「やれやれ、どこをほつつき歩いてるんだか……」

肩を竦め、苦笑いするサーシャ。

下手人のことだ、恐らくはルミアの死を確認するまでフェジテの外に出ていくことはないだろう。

学院の外でグレン達と鬼ごっこをしている王室親衛隊の連中は、彼等を捕まえることができないだろう。

問題は……肝心要のグレンがこのことに気がついているのかということ。女王陛下に会っただけでゼーロスを止められることはできないということに気がついているのかということ。

「ゼーロスを止められなかったらルミアは死ぬ。もし、ルミアが夕方まで生き残れば……陛下が死ぬ。……先輩、貴方の行動次第でどちらかが死ぬし、どちらも救うことが出来るんですよ。さてさて、どうなることやら」

まあ、いざという時は少々手荒な真似をすることになるが。とにかく、ルミアとアリシアの二人がどちらとも死ぬのは、今となつては少々が都合が悪い。これは東セルフォードを支配している政党——全連邦労働者連盟の都合ではなく、国家保安委員会の都合でもない。

これは、サーシャセルゲエフナソルダトワにとつての都合である。

とにかく、今はこれから行われる『決闘戦』の結果を待とうと、サーシャは背を壁に預けるのであった。

そして、遂に始まつた最終種目『決闘戦』。

順調に試合が進んでいく中、二組は本来自分達よりも格上である他クラスを相手に勝ち抜いていく。

そんな二組を、アルベルトとリエルが見守る。

貴賓席では、アリシアが憔悴した表情でルミアの無事を神に祈る。

グレンとルミアが中々捕まらず、刻々と進む時間と共に頂点に達しようとしている苛立ちと焦燥感にまみれるゼーロス。

学院外では、グレンとルミアが王室親衛隊の衛士達と鬼ごっこを繰り広げる。

そして、『決闘戦』の勝負の行方を注視するサーシャ。

魔術競技祭の最中、三者三様の思惑が飛び交っている中。

『決闘戦』優勝の結果は——システイーナが一組の生徒ハインケルを下し、遂に二組が優勝するとうまったくの予想外の結果になり、魔術競技祭の全競技が終了し、閉会式と表彰——グレン達にとって本当の勝負が始まるのであった。

СЕМЬ (第七話)

——魔術競技祭閉会式は肅々と進んだ。

競技場に学院の生徒達が整列し、閉会の言葉から始まり、国歌斉唱、来賓の祝辞、結果発表……つつがなく、なんの滞りもなく、その行程を消化していく。

実にいつも通りで毎年恒例の焼き直しだ。ただ唯一違うのは盛大な番狂わせのため、いまだに生徒達が興奮気味なものと、今日は女王陛下がこの式に立ち会っていることだ。

いよいよアリシアが表彰台に立った。その背後にゼーロスとセリカが控える。この瞬間、アリシアを害せる者などこの世界で誰一人いやしないだろう。

『それでは、今大会で顕著な成績を収めたクラスに、これから女王陛下が勲章を下賜されます。二組の代表者は前へお願いします。生徒一同、盛大な拍手を』

拍手が上がる。

各クラスの担当講師達から羨望のため息が漏れた。女王陛下から直々に勲章を賜る栄誉など、一生の内に一度有るか無いかの名誉だ。それもよりによって、あの二組のグ

レンⅡレーダスが。ルールに則り、正々堂々と戦つて破れたとはいへ、流石に嫉妬ややつかみの気持ちは隠せないようだった。

「ぐぬうううう……ッ!?なんてことだッ!この私が……第五階梯^{クインデ}の魔術師たるこの私があ……ッ!第三階梯^{レデ}のグレンⅡレーダスごときに……ッ!魔術師としての誇りも分別の欠片もない、あのような男の後塵を拝することになるとは……ッ!」

ハーレイも悔しそうに歯噛みしながら、頭をガリガリと掻き筆っていた。

「ハーレイ先生……そんなに頭を掻き筆られては毛根にダメージがいきますよ?ただでさえ先生は、歳のわりにはもう生え際が——」

「やかましいッ!余計なお世話だッ!」

(おいおい……それ以上やると、頭が光り輝いてしまうよ、あの先生。てか、まだ二十代でしょ?)

心配そうに結構酷いことを言ってくる生徒を一喝し、何やら今後のことをぶつぶつと呟いてはその後のたまたまハーレイに、サーシャが若干引き気味になっていると。

拍手が疎らになっていき、次第にざわざわと会場が沸き立ち始めた。

「……あら?貴方達は……?」

表彰台に立ったアリシアは、生徒達の間を縫って自分の前に現れたその人物達を、目を瞬かせながら見つめていた。

現れたのはグレンではない。しかし、アリシアが見知っている男女である。

「アルベルト……？それに、リエル……？」

「……来たか」

戸惑うアリシアをよそに、セリカはぼつりとそんなことを漏らしていた。

かたわらに立つゼーロスが不審に思い、アリシアに耳打ちする。

「……陛下。そやつが二組の担当講師グレン＝レーダスとやらなのですか？」

「いえ、違います……けど」

と、その時だった。

「なあ、そこのおっさん」

敵めしい面構えのアルベルトが突然、似合わないだけ口調で言い放った。

「いい加減、馬鹿騒ぎも終いにしようぜ」

「なん、だと……ッ!？」

そして、アルベルトらしき男が、ぼそりと呪文を唱える。

すると、男女の周囲が一瞬ぐにやりと歪んで――

再び焦点が結像し、そこに現れたのは――

「き、貴様らは——ッ!？」

(はい、これが女王陛下下に接近する方法です)

魔術競技場の中央、表彰台前に設けられた広場にて。

突然、現れたルミアとグレンの姿に、ゼーロスはただただ狼狽するしかなかった。

そんな狼狽しているゼーロスを尻目に、競技場のどこかで見ているサーシャはフェジテ市内でデッドレースを繰り広げているアルベルト達に、グレン達が上手くアリスアに接触出来たことを通信魔導器で報告する。

そう。グレンとルミアは最初から競技場におり、王室親衛隊がフェジテ市内で鬼ごっこしている“グレンとルミア”は、実はアルベルトとリエルだった。

路地裏でアルベルト達と打ち合わせたグレン達は、競技場に戻る途中、「セルフ・イリユージョン」でグレンとルミアはアルベルトとリエルに、アルベルトとリエルはグレンとリエルにすり替わっていたのだ。

そして、グレンとルミアにすり替わったアルベルトとリエルは、学院外に出てきた王室親衛隊の面前に現れ、本物のグレンとルミアから自分達に注意を逸らしていた。その間に、グレンとルミアは学院に戻り、二組と合流していたのである。アルベルトと

リエルの姿で。

（で、俺は、あのおっさんが変なことをしないように監視をしていたわけです。フェジテでアルベルト先輩とリエルと一緒に鬼ごっこしてたら、宮廷魔導士がいると王室親衛隊にバレちゃうし。グレン先輩達と一緒にいても貴賓席から二組を監視していたら、それは怪しまれるし。なんせ、俺と先輩とリエルはお忍びの任務でここに来たんだから。バレたら色々と面倒なのよね〜）

特に、現室長である嫁ぎ遅れの冷血ヒス女からガミガミ言われるだろうし、と。サーシャが思っている中。

表彰台付近では、アリシアを背中で庇っているゼーロスが、会場を警邏していた衛士達に指示を飛ばし、我に返った衛士達が一齐に抜剣しながらグレンとルミアの二人を取り押さえようと殺到した、その時。無数の光の線が猛速度で地面を走った。

そして、表彰台を中心に、グレン、ルミア、アリシア、ゼーロス、セリカの五人を取り囲むように、結果が瞬時に構築され、そびえ立つ光の障壁が結界内界と外界を切り離す。もちろん、こんな早業をやつてのけるのは、セリカⅡアルフォネア——大陸屈指、いや最高峰の魔術師である。

（うわ、マジか……あんなに素早く結界を構築するなんて、セリカⅡアルフォネア……敵に絶対に回したくない魔術師だわ……）

まあ、あんな魔術師を敵に回すなんて、よつぼどの狂人じゃないとしないし、できないだろうが。

締め出されて障壁面をバンバン叩きまくりながら何事かを叫んでいる衛士達を尻目に、サーシャは競技場から去ろうとしていた。

あそこまでいったら、後はなんとかなるだろう。

例え、トラブルがあつても、あのグレン||レーダスがいるのだから。彼なら土壇場でも解決してしまうだろうし、現に彼が現役時代、土壇場で解決してきた事例など数多くあるのをサーシャは知っているし、実際に見ている。

「ま、後は先輩達に任せるとして……俺はこの妙に凝ったやり方をした黒幕に会いに行きましようかね」

そう言つて、サーシャは競技場から去り、フェジテ南地区に向かっていくのであった。

そんなこんなで。

混乱の渦と化した魔術学院から離れた、南地区にて。

夕闇の帳が辺りを包み始める閑散とした裏通りを、サーシャが歩を進めていた。

「……見いゝつけた♪」

サーシャが歩を進めると、前方に一人の女が足を止めていた。

二十代半ばほどの女で、ヘッドドレスにエプロン、ガーターベルトなどといった使用人服に身を包む、黒髪黒瞳の女が。

「……俺達に与えられた任務は二つ。一つは最近、王室親衛隊の過激な行動が目立っているから、その監視。もう一つは女王陛下側近の内偵調査。つまり、貴女のような人の身体調査」

辺りが闇で濃くなっていくのとは裏腹に、サーシャの声は実に楽しそうだ。そして、女もくすくすと楽しげに笑っている。

「で、その最中に起きた、王室親衛隊の暴走……あれ、なーんで、あんなバカなことしちゃったんだろうね〜っと思いつつながら見ていたらね……わかっちゃたの♪今回のこの奇妙な案件の正体を♪」

実に楽しそうに喋るサーシャ。

「あれつてさ〜、女王陛下に呪いがかけられていたんでしょ？多分、陛下のネックレスに条件起動型の呪いを仕掛けて、ね。で、詳しい内容はわからないけど、貴女がゼーロスのおっさんに“陛下に呪いのネックレスを付けたから、今日中になんとかしないと陛下が死んじゃいますよ〜、解呪しなかったら、ある女の子を殺してね〜”って。で、王室親衛隊は暴走。ルミアIIティンジェルを殺すために、あんなバカなことをしたってわ

け

「……………」

「ああ、でも、ルミアを殺すにしても、計画の中で最も障害になる魔術師がいたじゃん。それが、セリカⅡアルフォネア。第七階梯の魔術師。あんな化け物を野放しにしてしまったら、計画はおじやんになってしまう。でも、正面から排除しようにしても消し飛ばされて灰になってしまうのがオチ」

「……………」

「では、どうやって、彼女を黙らせたのか？そう、彼女にも言ったんだ、ゼロロスと似たようなことを。そして、こうも言った。『この事を他の連中にバラしたら、陛下が死ぬぞ』ってね。他にも色々条件はあったんだろうね。例えば『勝手に外したら装着者を殺す』とか、ね。要は、『勝手に外したら陛下が死ぬ』、『一定時間までに解呪しないと、陛下が死ぬ』、『誰かに言いふらしたら陛下が死ぬ』……大方この三点。そして解呪条件が……『ルミアⅡティンジェル』の殺害」

そこまで言つて、サーシヤはやれやれと肩を竦める。

「いやあ、さすがだねえ。もしルミアの殺害が成功すれば、その遺体は貴女達の元に回収される。もし失敗したとしても、陛下が死ぬだけ。この国は女王陛下で纏まっている国……陛下が死んだら死んだで帝国は一瞬でカオスになる。どちらに転んでも、貴女達に

はプラスに転じることはあってもマイナスには転じない。素晴らしいね、その発想はなかった。いや、あったとしても、ここまで綿密にするには相当、頭を使わないとできないし……まあ、失敗しちやたららしいけどね」

そして、その女の名を言う。

「まあ、最近、どうにも俺達の動きも読まれちやつてるし？可能性は一番低いなあつて思ってたけど、女王陛下にネットワークスをつけられる人なんて貴女ぐらいしかいないと思うし？ねえ、女王陛下付き侍女長兼秘書官……ああ、違ったわ、天の智慧研究会所属のエレノアⅡシャーレットさん？」

すると。

「なるほど……どうやら帝国もぼんくらばかりではないようですな。……いえ、帝国がぼんくらではないのではなく、東の赤い連中に目を付けられた……とでも言いましょうか」

その瞬間、辺りを包み始めた闇がより一層濃くなったような気がした。

「はつきりとした出自、あまりにも優れた経歴、卓越した能力……傷一つないからこそ疑うべきだったと思うんだよね。ね、思わない？」

サーシャのおどけた言葉に女——エレノアⅡシャーレットは薄ら寒い笑みを浮かべていた。

「考えてみれば、今回の王室親衛隊が暴走し始めたのは、女王陛下がエルミアナ王女に会うために席を離れた後、貴女がゼーロスとセリカに接触してからなんだよね。アルベルト先輩も俺も最初は王室親衛隊が暴走したと先入観があつたから気付かなかつたんだけど」

「あらあら、遠見の魔術で覗き見ですか？ 趣味が悪いですわ」

「別に貴女の裸を見たわけじゃないし、いいでしょ？ で、一つ聞きたいんだけど、お宅らの目的って何？ もし、ルミアが本当に王女なら……以前は誘拐しようとしたのに、なんで今回は殺すことにしたの？ 行動に一貫性がないんだよね。一体、何がしたいわけ？」

「……『アカシックレコード禁忌教典』」

意味不明のエレノアの返しに、サーシャは小首を傾げる。

「そう、我々が目指すは大いなる天空の知恵『禁忌教典』……そのための王女……とでも言っておきましょうかしら？ ……くすくすくすくす」

大手を広げて空を仰ぎ、陶醉したように語るエレノア。

そんなエレノアの前に、へえ〜っと思いつつながら、サーシャが問う。

「ふーん、その『禁忌教典』という代物を手に入れるために、王女の生死は問わない、と？」

「もちろん生きていらつしやる方が良いのですが、急進派とでもいいでしょうか……組

織の中にはせつかちな方もいますので……ふふつ、今回、せつかく綿密な遺体回収ルー
トを苦勞して用意したのですが、全部無駄になってしまいましたわ」

「なるほどね、自分で手を下さずにわざわざ王室親衛隊に殺らせようとしたのは、そうい
うこと？」

「ご想像にお任せしますわ、帝国宮廷魔導士団特務分室所属、執行官ナンバー13《死神
》……いえ、東セルフォード連邦国家保安委員会所属、サーシャ・ミハイロヴィチ・ロ
マノフ様」

艶然に微笑むエレノアに、サーシャの周辺の闇がさらに濃くなった、ような気がした。
「へえ、バレちゃってたんだ？ 貴女に。さすが♪アレ、結構、上手く捏造してたのにな」
「くすくす」

「まあ、いいや。知られてしまったら……それなりの対処をすればいいだけだし。ねえ、
エレノアさん。王女のことなんだけど、貴女の話聞いた限りだと、ウチらに莫大な益
をもたらしそうなんだよね。だからさ、手、引いてくれない？ 別に王女をそこまで狙う
必要もないじゃん？ あんなに凄腕の外道魔術師を死なせなくてもさ。だから、手を引い
て♪」

「あらあら……それはお断りいたしますわ。全ては大導師様のためなんですから」

サーシャが微笑みながら言う取引を、同じく微笑みながら一蹴するエレノア。

すると、たちまち場に、戦場特有の張り詰めたような殺気が満ちていく。

「あつそ。なら、死んで♪」

たちまち、周囲の気温が低くなる。氷点下に達する。

「あらあら、怖いですわね」

だが、エレノアは動じず、余裕の表情で笑った。

「流石に貴方と相手したら、後の二人、特務分室のエース三人を同時に相手取るのは分が悪いですわね……ここは一つ、逃げの一手を打たせてもらいますわ」

「まあまあ、そう言わずに……少し付き合つて下さいなッ！」

サーシャが呪文を唱え始めると、大気中に氷刀が生成される。

同時にエレノアも舞うような身振り手振りと共に呪文を唱え始め――

フエジテの人知れぬ路地裏で、魔力と魔力が激突し、衝撃音が響き渡った。

結論から言えば、騒ぎは大事なく収まった。

あの後、なんやかんやあったものの、グレンからの盛大な上段回し蹴りを喰らったゼーロスの投降宣言に伴い、暴走する王室親衛隊は沈静化。

そして、アリシアが身に降りかかった事件を学院生徒達の前で演説した。

帝国政府に敵対するテロ組織の卑怯な罠に陥ったこと。そして、勇敢な魔術講師と学院生徒の活躍で事なきを得たこと。

セリカの結界のおかげでグレンや女王達の会話が漏れなかったのも幸いしたのだろう。国難に関わる危険な部分はさりげなくぼかし、華々しい部分はあえて美化して強調する——世界を相手取る一国の女王の巧みな話術が、場にいた全ての者達を見事に欺いた。

一時、居合わせた者達を不安と動揺が支配するが、それもすぐに落ち着いた。最後に一騒動あったものの、魔術競技祭はここに無事終了する運びとなった。

そして——

「……以上が、今回の案件の報告となります」

すっかり夜の帳に包まれた某所にて。サーシャは通信魔導器で誰かに報告していた。『ご苦労であった、同志サーシャ。君が収集した情報は明日の中央委員会で議題に取り上げるとしよう』

「ありがとうございます」

四十代くらい、陰湿そうな声の男が聞こえる。

サーシャが敬語を使う辺り、中央委員会というあたり、政府では上級幹部であることは間違いないかった。

『それと、女王付近ではどんな動きがあった？同志』

「動きとしては、今回、暴走した王室親衛隊には大きな咎めはないらしいです。総隊長のゼーロスには建前上、厳しい懲戒処分がありますですが、酌量の余地はありますから、そこまで影響はないでしょう。ただ、今回は女王陛下付きの侍女長という側近中の側近が件の組織に内通していたという事実は、帝国政府に大きな波紋を呼びそうです」

『……………』

「恐らく今後は、内部で取り締まりが始まるでしょう。その時に、我々の同志も何人かは引つかかるでしょう」

『……………そうか。それで、このルミアⅡティンジェルという少女なのだが』

「ええ……………利用価値はあります」

ルミアⅡティンジェル。

感応増幅者。ルミアの異能。

触れた相手の魔力と魔術を超強化する生きた魔導回路。

確かに珍しい。破格の力ではある。

だが――

『確かに珍しい能力だが……理解出来んな』

「件の組織のやることは理解できません。ですが……」

天の智慧研究会は、ルミアの身柄を確保したいらしい。それも生死を問わずに、だ。

だが、この能力は希有だが、ルミアだけに備わっているわけではない。他にもこの能力を備わっている異能者はごまんといる。

単純に魔術を強化する儀式法や術式などはとくに確立されているから、希有ではあるが、そこまで絶対的な魔術的価値がある能力ではないのだ。そんなの、あの組織ならわかっているはずなのだが。

だが、それでもルミアに拘るといふことは――

「……決して意味のないことはしないでしょう。あの組織がどんなに犠牲を払ってでも掌握したい何か彼女に備わっている、ということかと」

それがなんなのか、今はわからないが、なんらかの形で自分達の役には立つことは確かだ。

(それにエレノアが言っていた『禁忌教典』……)

結局、逃がしてしまったが、彼女が陶醉しながら零していた『禁忌教典』。

一体、それはなんなのか、さっぱりわからない。本なのか、それとも別の何かなのか。だが、一つだけわかることがある。

それは、その『禁忌教典』が手に入れば、絶大な力を得ることができるといふこと。
(それを手に入れたら、目的を果たすための大いなる力になる……ふふふ)

少なくとも、手に入れて損するようなものでもあるまい。

そして、『禁忌教典』を手に入れるための鍵が、ルミアという少女にあること。

ならば――

「そこで、なのですが……彼女に接近するために、帝都を離れてフェジテで活動しようか
と思ひまして……」

『……方法はあるのか？ あんまり、勝手に動くと、嗅ぎ付けられるぞ？ 同志サーシャ』

「ええ、大丈夫です。なにせ――」

ニヤリと冷笑するサーシャ。

「近く、彼女の扱いについて円卓会で協議するでしょうから。その時に、統合参謀本部長
がこちらが接近しやすいような状況を作るでしょうから」

『利用するだけ、利用する、か』

くくくつと、含み笑う男。

『良からう。同志サーシャ、ルミアアインジェルに接近し、必要な情報を収集せよ。そ
して、可能であるならば……彼女をこちらに連れてきて欲しい。期限、手段は問わない。
今後、そちらの任務に専念したまえ』

「了解しました。その件で、何人か、支援でこちらの任務に割り当てて欲しいのですが」
『いいだろう。第一総局と第八総局から何人か君の支援に回るように手配しておこう』
「ありがとうございます」

『健闘を祈る。全ては労働者のために、我々は力を得なければならぬ。他の誰よりもな』
「……了解しました」

そういうやり取りをして、サーシヤは通信を切った。

「……面白くなってきた」

そして、口の端をつり上げて冷笑するのであった。

こうして。

その夜は静かに、緩やかに更けていく――

その裏では、帝国政府と天の智慧研究会の間に赤い国が暗躍しようということ、これが東セルフオードに少なからぬ影響をもたらすとは、この時はまだ誰も知る由もなかった。

アルザーノ帝国・サイネリア島・前編

Asto?i (第八話)

アルザーノ帝国魔術学院を擁する学究都市フェジテから、馬車で四日ほどの距離にある帝都オルランド——アルザーノ帝国首都。

その郊外には、天を衝くような、五つの巨大な塔からなる建造物が築かれているだろう。

人呼んで『業魔の塔』——帝国宮廷魔導士団の総本部である。

“汝、力に溺れるなかれ。心せよ、過ぎたる力は何時の日か、必ず汝が身を滅ぼすだろう”——そんな言葉を残した帝国宮廷魔導士団創設者兼初代団長の意を汲み、戒めの意味を込めて命名されたその塔。

そこで特務分室が所有する会議室にて開かれた室内緊急会議にて。

「これは一体、どういうこと!?!」

ばんっ!

いつものように(ていうか風物詩と化している)、キンキン声が響き渡っていた。

声の主は、紅蓮の炎で染め上げたような髪が美しい、二十歳前後の娘だ。

情熱的な炎髪とは裏腹に、その相貌はどこまでも硬質で冷たく——相反する二つの属性が、その戦乙女然とした美貌も相まって、どこか常人離れた雰囲気醸し出している。

イヴⅡイグナイト。帝国宮廷魔導士団、特務分室室長、執行官ナンバー1《魔術師》を務める娘である。

そんなイヴからのキンキン声と机を叩く音が、いつものように響き渡る。

会議室中央に据えられた円卓には、イヴの他に、特務分室のお馴染みの面々、三名が席に着いている。

アルベルト、サーシヤ、そして、たまたま報告で帰還していたリエル。

そんな彼らを、イヴは苛立ちの目で睥睨し、金切り声で捲くし立てる。

「忙し過ぎるのよッ！仕事量、多過ぎッ！バカじゃないの!？」

「まあ、そんなもんでしょ、とくにウチらは宮廷魔導士団の切り札みたいなもんですし、そんなもんじゃありませんか?」

雪のように白い髪が特徴の少年サーシヤが他人事のようにぼやく。

「そもそも、なんで今日の会議はこれだけしか集まらないのよ!?!前々から招集かけてたじゃない!?!」

「他の特務分室の連中なら、其々密命を帯びて、帝国各地で独自に動いている」

鷹のように鋭い雰囲気青年アルベルトが、素っ気なく応じる。

「おつちゃんもクリストフ先輩も出払ってますからねー。そもそも、特務分室、一年前のあのイカれ野郎にやられて、大分減らされましたし」

天井を仰ぎ見ながら続けてぼやくサーシャ。

「……グレンもやめたし」

無気力、無感情、無表情——三拍子揃った人形のような少女リエルも、思い出したようにぼそりと呟く。

「ああああもうっ！仕事量に対して、私達が人手不足過ぎるのよ！一体、いつになったら補充要員が来るの!?上は何やってるの!?この人手不足の上に、この無茶ぶりの仕事量。その上、室長の責任は重いし……いくらなんでも捌ききれないわよッ！」

すると。

「それを解消するために先日、室長権限で特務分室に人員を入れることにしたんですけどねー。あそこまでやっておきながら、最後はイブさん自身で盛大に爆発しましたしねー」

頭を抱えてヒステリックに喚き散らすイヴを見て、サーシャが遠い目で先日のことを思い出す。

「うるさいッ！聞こえてるわよッ！思い出させるな！」

「解せんな、イヴ。一体、何が不満なのだ？俺達は齒車だ。上からの命令には忠実に、かつ、状況に応じて自己判断も交え柔軟に、己が為しうる最大限の成果を出す……それが組織に貢献するという事だ。其処に私個人の事情や負担など……」

「ワーカホリックは黙ってなさい！」

常に無数の案件を同時に掛け持つアルベルトの、完璧かつ淡々とした仕事ぶりは有名で、団内では「いつ寝てんの」と噂されるほどであった。

「ああ、もうっ！この二人はあゝッ！」

「それで？本題はなんなんですか？まさか、イヴさんのキンキン声を聴かせるために呼んだんじゃないんでしょう？」

まったく、この人は……つと、サーシャが呆れながら本題を促す。

「ま、まあいいわ。丁度貴方達に任務が来ているし。アルベルト、サーシャ、リエルにはこの度、フェジテに向かってもらうわ。これは、上からの任務よ」

切り替えて任務の内容を話すイヴに、アルベルトとサーシャはその内容を頭に叩きこむのであった。

因みに、リエルはお船を漕いでいた。

「ごめんなさい！許してください！リック学院院长！セリカ様ッ！」

アルザーノ帝国魔術学院院長室にて。

呼び出されて学院院长室にやってきたグレンは、部屋に入るなり、いきなり見事なムーンサルト・ジャンピング土下座を決めていた。

それを目の当たりにしたセリカとリック学院院长は、目を点にして硬直するしかない。

「おい、グレン。なんなんだ？いきなり」

「ちよつとした手違い……ほんのちよつとした手違いだたんですうううツ!?お二方がお怒りになるのはごもつとも！平に、平にいくツ！」

きよとん、と顔を見合わせるセリカとリックを前に、グレンが肅々と告解していく。

「薬草菜園で栽培されてきたキハレトの花、与える魔術肥料の種類を間違えて全部枯らしちゃって、ホントに申し訳ありませんでした——ツ！」

やたら恐縮するグレンに、リック学院院长は穏やかに話しかける。

「ははは、グレン君。顔を上げたまえ。勘違いをされては困るよ。今日、我々が君を呼び

出したのは、そのことについてではない。もっと別の要件なのだよ」

「あ、なーんだ、そうだったんですか。あつはつは、脅かさんでくださいよ！」

グレンは安堵したように息をついて、立ち上がった。

「ですよー？だって、あの事件、証拠は完全に隠滅したはずだったんですもの。なーんでバレたのかなあーって不思議だったんですよ、あつはつは！」

そして、朗らかに笑う。

「ふおっふおっふおっふおっ、グレン君はうっかりさんだのう」

学院長も朗らかに笑う。

「あつはつは」

「ふおっふおっふおっ」

そして、互いにひとしきり笑い合って……

「それはそうとグレン君、きみ、減給な」

「ぎゃああああああああああ——ツ!?ですよええええ——ツ!?」

学院長は朗らかに裁定を下し、グレンは頭をかかえて悲鳴を上げた。

「うう、ちくしょう……これ以上、減給されたら、そのうち俺が学院に給料支払う羽目になるんですけど……」

あまりにも妥当かつ無慈悲な現実、グレンはさめざめと涙を流すしかない。

「ああ……せめて先月にあつた魔術競技祭のハー……なんとか先輩との賭けの勝ち分があつたらなあ……てか、見栄張つて生徒達に奢るんじゃないやなかつた……ッ！ええい！俺の馬鹿馬鹿！」

「みつともなさ過ぎる……お前、自分自身が悲しくならないか？」

窓際で、ずうーんと暗く項垂れるグレンへ、セリカは呆れたような視線を向ける。

「そもそもだ。いちいち減給されたことを嘆くくらいなら、ちよつとは勤務態度を改めたらどうなんだ？授業自体はそれなりに真面目にやつてるからいいとしても、お前はそれ以外がザル過ぎる。ちよつとは魔術師としての自覚をもつてだな……」

「ちつ……うつせーなあ。はいはいはいはい、聞こえない」

「もしくはやらかすなら、決して表沙汰にならないようにもつと完璧にやれ……この私のようにな。お前は昔からどうにも詰めが甘い」

「わかりました！我が生涯をかけて敬意を払うべき偉大なる師匠！」

がしつと、グレンはセリカの手を両手で取り、感服と尊敬の目でセリカを見つめ——
「わしつて、どうしてこんな連中を雇つてるんじゃないやろうな……」

美しい師弟愛の光景を前に、リック学院長は遠い目で外を眺めた。

そこには、いつものように自然溢れる学院敷地内の庭園光景と、鉄柵を挟んでの外側に広がるフェジテの古風な町並み——そして、その遥かな上空に浮かぶ雄大な蜃気楼の

城——メルガリウスの天空城があった。

「ところで話を戻すが、グレン君。君に話というのは、編入生についてなのだよ」

「……編入生、ですか？」

「うむ。明日からこの学院に編入される二人の新しい生徒を、グレン君のクラスで受け入れられないかね？」

「明日から？またそれは随分と急な話つすね……それにこんな中途半端な時期に編入されるってのも妙だ」

「……もつとも、君に拒否権はないのじゃが」

学院長は執務机を滑らせて、手にしていたものをグレンの方へと送る。

それは一本の筒型封筒だ。すでに蓋の封蝋は解かれている。見ればその筒型封筒に住所などが記載されていない。筒の装丁に使用されている革の高級さも考慮すれば、きつとこれは郵政機関を通さず、信頼できる筋の人間を使って直接学院に運ばせたものだろう。

(それにこの封蝋痕……帝国軍で使われている封蝋か?)

グレンはその筒を手にとって蓋を開け、筒の中から綺麗に丸められた一枚の羊皮紙を取り出し、それを広げた。その羊皮紙には細かい文字で要項がびつしりと書かれ、最後に鷹の紋章が金で箔押しされている。

「鷹の紋?つまり、女王陛下公認の帝国政府公文書……しかも設定されている秘匿等級がやけに高い……って、ちょ!?!これ、軍の人事異動に関する最重要機密文書じゃないっすか!?!」

グレンが驚愕に目を見開いて、その羊皮紙を凝視する。

「うむ。平たく言えば、今回の編入生をグレン君の担当するクラスへ、名指しで編入するよう指示する旨が書かれておる。女王陛下勅許、帝国政府直々の指令をもつてな」

「……っ、まさか」

不自然な時期の、唐突な編入生。わざわざ自分のクラスへの編入指定。

「学院長。その編入生ってのは……」

「恐らく君が察したとおりじゃ、その編入生はルミア君の身辺警護として派遣されることになった帝国宮廷魔導士団の魔導士じゃよ。彼女と同じクラスの学友になれば、護衛も容易いだろう——政府と軍はそう判断したのじゃ」

「……………ッ!」

ルミアIIティンジェル。

グレンの担当するクラスの女子生徒だ。座学は優秀だが、白魔術以外の魔術の実践はやや苦手とするため、総合的な成績は平均的。その卓越した容姿を除けば、特筆することなどない平凡な生徒のように思える少女である。

だが、実は彼女には様々な秘密がある。

まず一つ、彼女はアルザーノ帝国王室直系の血を引く、れっきとした王女であること。そして二つ、彼女は王女であると同時に、この世界では未だ悪魔の生まれ変わりや落とし子と固く信じられている『異能者』であり、それゆえに彼女は様々な政治的理由から帝国王位継承権第二位という地位を剥奪され、王家を追放されてしまっていること。さらに三つ、彼女は不可解なことに『天の智慧研究会』という魔術結社——常に歴史の裏側で暗躍し、政府と血みどろの抗争を繰り返してきた最悪のテロリスト集団——に狙われている、ということだ。

ルミアの『異能』は『感応増幅者』と呼ばれる能力である。触れた相手の行使する魔術と魔力を増幅強化する力だ。

確かに珍しい。破格の力である。だが、『天の智慧研究会』ほどの魔術結社が今さら欲しがるほどの力でもないはずなのだ。単に魔術と魔力を強化するだけなら、現在の魔導技術を駆使すれば、他にいくらでも方法があるのだから。

ありえそうなのは、ルミアの元・王女という立場をなんらかの形で政治的に利用することくらいなのだが、件の組織の二度目の仕掛けはルミアの生死を問わないものだった。政治利用の線は非常に薄い。

一体、ルミアに何があるのか？ 『天の智慧研究会』は一体、何を目的にルミアを狙っ

ているのか？謎は深まるばかりである。

だが、その目的は不明だとしても、帝国政府としては、みすみすルミアを『天の智慧研究会』に渡すわけにはいかないという結論に達したらしい。もし、ルミアが件の組織の手に落ちれば、ろくなことが起きないだろうことは容易に予想がつく。

かと言つて、元・王女であるルミアをあまりにも特別に扱えば、否応なく彼女に注目が集まり、国内外に余計な混乱をもたらす危険がある。神聖なる王家出身の『異能者』とは、この国の根底を破壊しかねない爆弾のような存在なのだ。

そこで下された苦肉の策が、帝国宮廷魔導士団から派遣した精鋭の魔導士を学院に紛れ込ませ、密かにルミアの身边警護を行う……というものなのだろう。

「それは……心強いな」

グレンは素直にそう思った。

グレンもかつてその一員だったからよくわかる。帝国宮廷魔導士団は、帝国最強クラスの魔導士達が集まる精鋭部隊である。所属する魔導士達は、まさに一騎当千という言葉が相応しい。どうして自分のような三流魔術師がそんな連中の中に混ぜられていたのかが不思議なくらい、次元の違う化け物集団だ。

ルミアが明確に『天の智慧研究会』に狙われていると知つて以来、グレンはルミアの身边に気を遣う毎日だった。だが、宮廷魔導士団から派遣されると知つて、肩の荷が物

凄く軽くなったような気分である。しかも、二名なのだからなおさらである。

「グレン君のクラスは、二年次生の必修講座の一つ、『遠征学修』が目前に控えていることもある。グレン君にとって今回の編入生は心強い助けになるのではないかね？」

確かにリックの言うとおりであった。それはもう否定しようもない。

「わかりました。今度の編入生、喜んでうちのクラスに受け入れさせてもらいます」

「おお、そうか。それは良かった」

グレンの返答に、リックは満足そうに頷いた。

「そうそう、編入生の詳細はその書類に書いてあるから、参考にしてくれ」

「了解つす。えーと……？」

グレンは手元の公文書に、ざっと目を通していく。

（帝国宮廷魔導士団からの派遣……とはいっても特殊な任務だからな。恐らく、派遣されるのは特務分室の連中だろう）

帝国軍における魔導戦力の主格かつ象徴たる帝国宮廷魔導士団。その中でも魔術絡みの案件・事件を専門に処理する秘匿性の高い特殊部隊——それが、かつてのグレンも所属していた『特務分室』と呼ばれる部署である。

（すると、護衛という任務に適した魔術が得意、もしくは高度な状況判断力を有して、編入生として違和感のない世代のやつは……《法皇》のクリストフと《死神》のサー

シヤか？あの二人が来てくれるなら、俺も少し、いや、大分は……)

編入生として派遣される人物候補をかなり確信しながら書類を流し読みしていると。

サーシヤセルゲーヴナソルダトワ。

リイエルレイフオード。

編入生名の項目欄に、そんな名前が記載されているのが目に入った……気がした。

「……やれやれ」

グレンは大仰な動作で文章から視線を外し、ごしごしと目を擦った。

「ははっ……どうやら、俺、結構疲れてるみたいだ……一人は予想通りだが、もう一人……なんか、もつともあり得ない名前が見えたような気がしちまった……」

もう一度見る。

サーシヤセルゲーヴナソルダトワ……

……の下の名前を。

リイエルレイフオード。

やつぱり、そんな名前が記載されている気がした。

「やべえ……なんか本格的に幻覚が見える。もしくは深刻な目の障害か……あるいは俺が狂ったか」

もう一度見る。

リエルⅡレイフオード。

「……おいおい、グレン、落ち着け、冷静になれよ。リエル？あの《戦車》のリエルだつて？……そんな馬鹿な。あの暴走脳筋イノシシ娘、ナチュラルボーン破壊神、がっかり斬殺天使、一緒に任務に就きたくない同僚ランキング万年ぶつちぎりナンバーワンのリエル？連携作戦を台無しにすることに定評があり、作戦なんて立てる意味ないだろう、だつてリエルがいるから、と各軍閥から太鼓判のあのリエル？」

グレンは脂汗をだらだら垂らしながら肩を竦めた。

「ははっ、ナイス・ジョーク。護衛つて結構、デリケートな任務だよな？こんな高度な状況判断力を要求される特殊任務にリエルを超越すと申されるか？んなわきゃねーだろ、あつはつは！特務分室もそこまで馬鹿じゃないし、深刻な人材不足じゃ……」

ちらり、グレンは薄目で恐る恐る、慎重に、一字一句確かめるように見る。

リエルⅡレイフオード。

どう見ても、何度見ても、リエルⅡレイフオードと読める文字の羅列。

これが何かのアナグラムであることも疑つて、スペリングの分解再構築を行つても、どうもうまくいかない。ならば炙り出しかと思つて、オイルライターの火で炙つても、紙面に変化は何も起こらない。

「……………」

D e v i ? i (第九話)

……これは何時の話なのだろうか？

ここは、どこかの国のどこかの宮殿の一室。

その国の王・もしくはは皇帝らしく豪華な宮殿は天井には装飾が植物の葉のような自由な曲線を複雑・優雅に配しており、大規模・重厚な造りの他の宮殿に比べれば、この宮殿は繊細さが際立っている。だが、その繊細さがある装飾は、重過ぎず、かといって軽過ぎでもないという宮殿に仕立て上げている。

そんな繊細な、かつ荘厳な雰囲気に含まれている宮殿の一室には、十代に入ったばかりの子供とその子の父らしき男性がいた。

その男性は子供の両肩を掴み、すまぬと涙と悔恨が滲んだ表情で謝っていた。

別にこの男性がその子供になにかしたわけでもない。現に、聞こえてくる言葉は己の不甲斐なさでこのような事態を招いてしまったこと。そして、そのせいでこの子供に自分の——歴代の先祖が受け継いだものを受け継がせることが出来なかったという事に対しての申し訳なさが混じっていた。

部屋の外からは、四方八方から喧騒が聞こえてくる。

これが、なんかの祭ならば、父がこんな悲痛な顔をする必要はなかったし、涙を見せながら子供に謝ることもなかっただろう。

だが、外から聞こえてくるのは、何かが炸裂する鳴動と、血で血で洗う闘争に明け暮れる兵士達の怒号や悲鳴が、遠く聞こえてくる。……かつて同胞であつた者達が殺し合っている。

そして……状況はもう詰んでしまつていた。

味方側の兵士が次々と命を散らす中、賊軍が宮殿になだれ込んでくるのは自明の理。

そう確信した父は、唯一生き残つた子供を呼び出したのだ。

そして、父がある箱を取り出し、それを渡した際の言葉を子供は忘れることのないように耳を傾けていた。

「——□□□□□□よ、生きるのだ。生きて、生きて、生きて、生き抜いて……再びこの母なる祖国に、双頭の鷲の旗を立てよッ！それが、残されたお前の使命と心得よッ！」

その瞬間、遂に賊軍が正門を突破したという報告が飛び込んでくる。

これ以上の長居は危険と判断したのだろう。父は子供に脱出するように言い、複数の部下を付けさせた。

数日前に母と兄妹を失つたのに、残された父もまた失うことになつた子供は泣いて動

こうとはしなかつたが、父の命を受けた部下に引つ張られるように宮殿から脱出させられるのであった。

ルヴァフォース聖暦1848年トーマの月17日。

北セルフォード大陸にてアルザーノ帝国、レザリア王国と共に強大な影響力を持つていた国家、東セルフォード帝国連合が革命が発生してからわずか一週間半後に地獄上から消滅した。

この革命により、東セルフォード帝国連合第四代皇帝パーヴェル一世と彼の妻であり、現アルザーノ帝国女王アリシア七世の妹マリアベルを始めとする皇族は、軒並み戦死、もしくは賊軍に捕らえられ殺害、もしくは処刑された。

賊軍は、政権を掌握したとして東セルフォード社会主義共和国連邦の建国を宣言。

それと共に、自らを労働者の救世主と自認し、将来、労働者による世界支配を目指すことを宣言。世界各国に衝撃と畏怖に震わせることになる。

だが、政権を掌握したと宣言したとはいえ、国内ではその強引な政権交代に反発する者も少なくなく、帝政支持者の武装蜂起や、旧帝国軍将校らによる独立宣言により旧東セルフォード帝国連合領内で内戦が勃発したことにより、近隣諸国に侵攻することはな

かった。

そして、もう一つ革命政権には不確定要素があった。実は軒並み戦死・処刑された東セルフォード帝国連合皇族であったが、パーヴェル一世とマリアベルの長女で次期皇位継承者が行方不明であることが発覚。

当初は、これはデマだと革命政権は判断したが、後の調査で皇族として在籍していた人数と、殺害・処刑した人数がどうやっても一人合わないことから発覚したことにより、革命政権は反革命分子に担ぎ上げられる危険性があることから少女の捜索を開始。見つけ次第、殺害するように捜索隊に命じる。

しかし、革命政権はこの少女の行方を捜索しても手掛かりはおろか、その少女すらも見つけることができなかった。

そして、聖暦1852年。革命政権は彼女の死亡宣言を出し、公式に捜索を打ち切った。

その少女は今どこにいるのか？再起するために、連邦内のどこかに潜伏しているのか？または国外に逃亡しているのか（因みに、後に革命政権は逃亡先としてアルザーノ帝国に身柄の引き渡しを要求し、応じなければ無慈悲な攻撃で帝国を破壊すると脅迫したが、アリシア七世の毅然とした態度によりこれは阻止された）？

彼女が今、どこにいるのか？それは、彼女と彼女に付き従った部下以外、知る者はい

ない。

アルザーノ帝国魔術学院正門へと続く上り坂の麓に二人の男女がいた。

雪のように白い髪少年と、鮮やかな淡青色の髪の少女が佇んでいる。両者の髪色は遠目から見てもわかるし、二人とも帝国では珍しい髪色をしているから、けっこう目立っていた。

サーシャとリィエルだった。

「さてと……今日からここに表向きは世話になるわけなんだけど……任務の内容をもう一回、確認しておこうかにやん♪リィエル」

麓に佇んでいたサーシャが隣でちよこんと突っ立っているリィエルに振り向くと、リィエルは表情を変えずに短く答えるだけだった。

「といつても、内容はルミアⅡティンジェルを護衛せよ、ということでは彼女から目を

離すなっていう意味にやんだけどね」

「……………」

「…………で、護衛についてなんだけど、リエル、お前が彼女の側についてくれなんだにやん♪俺は、付かず離れずの距離で彼女を見守るにやん♪OKかにやん？」

サーシャがそう言い、リエルがいる方に振り向くと……そこにリエルはいなかった。

「……………」

サーシャがリエルがついさつきまで立っていた地面に視線を下ろすと、地面には無骨な大剣の形をした痕があった。

「……………リエル」

やれやれと肩を竦めたサーシャは、二の腕にちよこんと降りてきたリエルにちようどこちらに來ている男性講師と金髪と銀髪の美少女の三人組に大剣を錬成して突進していったリエルを止めるように指を差す。

すると、リエルはサーシャの肩二の腕から上空に飛び立ち、一際強く地面を蹴って、空高く跳躍したリエルに向けて急降下していった。

そして――

「どおわああああああああああ――ッ!？」

サーシャは、リエルに勢いよく突進したビィエルに巻き込まれて素っ頓狂な悲鳴を上げる青年の方に向かっていくのであった。

自分の上空を何かが高速で過ぎつた瞬間、素っ頓狂な悲鳴が聞こえ、ようやく我に返つたシスティーナが背後を振り返ると。

そこには、大剣を構えこちらに突進してきた少女が高速の物体に吹き飛ばされ、それに巻き込まれるようにグレンが吹き飛ばされていた。

「な、な、何しやがんだテメエえええええ——ツ!? 殺す気か!？」

高速の物体に吹き飛ばされた少女に巻き添えをくらうように吹っ飛ばされたグレンは顔色を真っ青にし、涙目でガクブル震えながら、腹にダイビングヘッドしてきた少女に吠えかかる。

一瞬、天の智慧研究会が放つた刺客だと思い、システィーナは身体を動かすことができなかつたのだが、それにしてはどうにも様子がおかしい。

「……会いたかつた。グレン」

ぼそり、と。

むくりと起き上がった少女は、眠たげに細められた目で、無表情にそんなことを告げ

る。

「やかましい！質問に答えやがれ、リエル！こりや一体、何のつもりだ！」

吠えながら、グレンは身を起こし、その場から素早く飛び下がる。

「挨拶」

「挨拶だとお!?てめえ、挨拶という言葉を辞書で百万回調べてきやがれ!」

すると、少女がほんの少しだけ、不思議そうに表情を揺らす。

「……違うの?」

「違うに決まってる!」

「でも、アルベルトとサーシャがそうって言った。久々に会う戦友に対する挨拶はこうだって」

「んなわけあるかツ!?てか、アイツらの仕業かツ!?ていうより、今の絶対、リエルが突進してきたらろツ!?くっそおあの二人め、そんなに俺が嫌いか!?覚えてやがれ!ちくしようツ!」

「……痛い。やめて」

グレンは喚きながら少女の頭にヘッドロックをめりめりと極めている。

なんだかとても、刺客とか戦いとか、そういう雰囲気ではなさそうだった。

「あの……先生?その子は……?」

ルミアが曖昧な笑みを浮かべながら、グレンに問いかける。

「あれ？そう言えば、その子、この間の魔術競技祭の……」

「はい、そうです♪お久しぶりです、ルミアさん♪」

ルミアはふと、今グレンに捕まっている少女に見覚えがあることに気付くと、背後から軽そうな声がした。

「あら、貴方は、確か……」

ルミアが背後を振り返ると、そこには雪のような白い髪の少年がニコニコと微笑みながら手を振っていた。

「ああ、そうだ、覚えていてくれたか。ところで、お前ら。俺が昔、帝国軍の宮廷魔導士団に所属していた時期があったってのは話したっけな？」

「いえ、私は……でも、なんとなくそうなんだろうな……とは思ってましたけど……」

システイーナはどう反応したらいいのかわからず、ぼそぼそと応じる。

「そうか。まあ、いい。それで、リイエルとサーシャ……こいつはその俺の魔導士時代の同僚だ。ルミアは二人とは直接会ったし、白猫もサーシャとは今日が初めて会うが、リイエルの顔くらいは知っているよな？まあ、お前が会ったのは、ルミアが変身していたやつだが」

システイーナは落ち着いて、じつくりと青い髪の少女……リイエルを見る。

言われてみれば、確かに見覚えがある。

「な……なんだあ……刺客じゃなかったのね……よ、よかった……」

気が抜けたのか、システイーナはがっくりとその場に膝をついて、安堵の息を吐いた。

「で、だ。……もう薄々感づいていると思うが、こいつらが噂の編入生だ。表向きはな」

「……表向き、ですか？」

ルミアが首をかしげる。

「ああ。なんでも帝国政府がルミアを正式に警護することを決定したらしくてな。で、

一応、帝国宮廷魔導士団に所属する魔導士のこいつらが派遣されたらしい」

「そ、そうだったんですか……それにしてもこの子達が魔導士……凄いなあ……」

システイーナは目を丸くしてリエルとサーシャを交互に見つめていた。帝国宮廷魔導士団といえば帝国最高クラスの魔導士達が集まる精鋭集団だ。見た目は自分達と同年くらいなのに、リエルとサーシャはすでにそんな集団の一員なのである。

そう思うと、この素っ気ない小柄な少女と、少し軽そうな長身痩躯の少年が、とても頼もしく見えてくる。

「リエルとサーシャ君……だよな？ 久しぶり……になるのかな？」

早速、ルミアが挨拶しようと、二人に向き合った。

「ん」

「改めて自己紹介しますね？私がルミア、ルミアⅡティンジェルです。で、この子が私の友達のスステイ……しスステイーナ。帝国宮廷魔導士団の方が来てくれるなんてとても心強いです。これからよろしくお願ひしますね？」

「はい。俺はサーシャⅡセルゲエヴナⅡソルダトワ。で、こつちがリリエルⅡレイフォード。今日から貴女の護衛を務めてさせていただきますんで、よろしくお願ひします」

すると、サーシャが今までの軽さとは打って変わって、ペこりとお辞儀をして自己紹介する。

「……ん。任せて」

そして、リリエルはほんの少しだけ胸を張って、やっぱり無表情にこう言った。

「大丈夫。グレンは私が守るから」

「え？」

「……は？」

「……リリエル」

あまりにも意味不明なことを、さも当然のように言うリリエルを前に、ルミアもスステイーナも目を点にして硬直せざるを得ず、サーシャは溜め息を吐き……

「俺じゃねええええええええ——ッ!?俺を守ってどうすんだ、このアホ!？」

ぐりぐりぐりつと、グレンはリエルのこめかみを両手の拳で挟んで抉った。

「痛い。やめて」

「あのなあ——ッ!? リエル、お前、任務を理解してるか!? お前が守るのはこいつだ、こいつ! この金髪の可愛い可愛いルミアちゃんな!? オーケイ!」

「……? なんて?」

「なんで? じゃねえよッ!? お前、作戦説明、受けなかったのか!」

「……よくわからないけど。わたしはルミアより、グレンを守りたい」

「黙れ、やつかましい! そんなわけわからん要望通るか、アホ!」

グレンが頭をがりがり掻きながら嘆き叫ぶ。

「……いや、ただだけルミアという名前をグレンに変換したいの、この子は?」

そんなリエルを見て、深いため息を吐くサーシャ。

すると、ふと、サーシャはこちらをじっと見つめてくるルミアの視線に気付く。

「どうしました?」

「あ……いや、ちよつと……あはは……」

けつこう見つめていたのだろう。少し照れくさそうに視線を逸らすルミア。

「サーシャ君って……どこか知っている人に似ていたから……」

「……ああ、そういうこと? と、言っても俺、五年前に東セルフオードからここに移った

からなあ……」

「え？それって……？」

一瞬、サーシヤは押し黙り、遠い目でそう言う。

その中で東セルフォードという言葉聞いたシステイナが、深く聞こうとするが……

「つーか、本当に、サーシヤはともかくなんでよりにもよってリエルなんだよ!? はいはい、どこをどう考えても人選ミスですッ！本当にありがとうございましたッ！特務分室の連中、マジで何考えてやがんだ、狂ってんのか!?!」

サーシヤ、ルミア、システイナの目の前で、眠たげな無表情のリエルに対し、グレンが一方的にぎやんぎやん騒ぎ立てる光景が延々と展開していく。

「……えーと……大丈夫……なのかなあ……？」

「まあ……俺がいるから、なんとかなるっちゃんとかなるけど……うーん」

呆れるサーシヤの隣で、流石のルミアもその光景を前に、一抹の不安を覚えざるをえなかった。

Desmit (第十話)

「と、言うわけで……だ」

所変わって。

アルザーノ帝国魔術学院、二年次生二組の教室にて。

「本日から、新しくお前らの学友となるサーシャセルゲーヴナソルダトワとリエル・レイフォードだ。まあ、仲良くやってくれ」

グレンがサーシャとリエルを連れて教室に姿を現わすと、おお、と生徒達の声が上がった。クラスの生徒達——男子生徒はリエルに、女子生徒はサーシャに——は教壇の横に立った新しい仲間の姿に色めき立つ。

「おお……」

「……か、可憐だ」

「うわあ、二人とも綺麗な髪……」

「あの女の子は、なんだかお人形さんみたいな子ね……そして、隣の彼……はあ、イケメ

ンだわあ」

「まるでモデルさんみたい」

お人形と、モデル。確かにそれはリエルとサーシャの容姿を的確に表わしているかもしれない。

リエルは肉体年齢的にはこのクラスの生徒達とほぼ同い年なのだが、どうしても年齢以上に童顔で、しかも小柄なので年齢よりも幼く見える。髪の色は非常に珍しい淡青色、その瑠璃色の瞳は常に眠たげに細められており、感情の色はまったく見せない。だが、その相貌は実に端麗であり、無駄な身じろき一つない、まるで彫像のように静謐なその佇まいは確かに人形という評価が妥当だ。

ただ、当の本人は自分の卓越した容姿になど、まったく興味がないのだろう。伸び放題の髪には櫛すら通されておらず、うなじのあたりで一部を適当な紐で括って背中に垂らしているだけ。誰もが羨むような、その蒼く美しい髪のは扱いは酷く雑だった。

サーシャは、クラスの生徒達と同い年だが、東セルフオード——東部人だからなのか、長身でグレンとほぼ同じ身長だ。体型も程よく引き締まっており、マツチヨでもなければ、ヒヨロヒヨロもやしみたいに弱々しくない。そこに、白い肌とアメジスト色の瞳に端正に整った相貌はたしかにモデルっぽいといえればモデルっぽいかもしれない。

このクラスには、緩急メリハリのついたモデル並みの体形の女子生徒、テレサ||レイ

デイがいるが、この二人が並べば傍から見たら学院でも一、二を争う美男美女カップルに見えることだろう。

まあ、そういうわけなんです。

「め、滅茶苦茶可愛い子だよなあ、リエルちゃんって……」

「はあく、サーシャ君って、超イケメン……誘惑したいわあ♥」

「つーか、このクラス的女子、全体的にレベル高過ぎだろ……」

「あんなイケメン、この学院にも街中でも、そうそういないわよ。目も綺麗だし」

「決めた。俺、無派閥だったけどリエルちゃん派になるぜ……カイ、お前もどうだ？」

「ああ、そうだなロッド……俺もリエルちゃん派になるわ……」

「ふん……俺はウエンデイ様以外眼中にないぜ！依然、変わりなくッ！」

「ねえねえ、キャシー、ヴェラ。今日のお昼、サーシャ君を誘わない？」

「あ、いいね、いいね！そうしましょうよ、ねえ！」

「……ああ、ダメ……私、誘惑して押し倒しちゃいそう……」

案の定と言えば案の定だが（中にはヤバくなっている生徒が男女問わず、何人かいるが）、新しい編入生——しかもどちらもとも容姿が人並外れて優れている少女と少年——

を前に、教室内は男女問わず、ざわざわと騒がしくなりつつあった。

（やれやれ、このままじゃ收拾がつかなくなりそうだな……）

グレンは内心ため息を吐いた。

まあ、騒ぐ連中の気持ちはわからなくもない。サーシャは男であるグレンから見ても、文句なしの美少年だし、リエルは口を開かずに黙って佇んでいる限り、こちらも文句なしの美少女だからだ……あくまでも黙って佇んでいる限り。年頃の男女なら浮かれずにはいられないだろう。

「あー、まあ、とにかくだ」

グレンはざわめくクラスの生徒達の注意を強引に集めた。

「お前らも新しい仲間のことは気になるだろうし、まずはリエルに自己紹介でもしてらおうか。で、次にサーシャだな。つーわけで、リエル」

すると、クラス中が静まり返り、注目がリエルに一斉に集まった。

そして、リエルの言葉に傾聴しようとする。

……のだが。

「……………」
……沈黙。

クラス中の視線が集まっているのに、リエルは眠たげな無表情を一片たりとも揺らすことなく、じっと押し黙っている。

次第に気ままずい沈黙がクラスを支配していく。

「……あの、リイエルさん？」

「……って、おい」

その気まずさに耐えれなくなったサーシャがちらりとリイエルを見、グレンはリイエルの頭を横から指で小突く。

「聞こえなかったのか？それともわざとか？」

「……？」

ほんの少しだけ、不思議そうにリイエルがちらりとグレンを流し見た。

「あの……頼むから自己紹介してくれませんか？間が持たないんですけど？」

「……なんで？わたしのことを紹介してどうするの？」

（おおっと、初めて自己紹介に疑問を呈する人が出てきましたわ……）

「いいからやれ！頼むから！お決まりっつーか、定番っつーか、そういうもんなんだよ！
こういう場合ー！」

「……そう、わかった」

微かに頷き、リイエルが一步前が出る。

そして。

「……リイエル＝レイフオード」

ぽつりと呟いて、ほんの少しだけ頭を下げた。

「……………沈黙。」

「……………おい、続きは?」

「……………もう終わった」

「……………はい?」

さらに数秒間の沈黙。

そして。

「名前しか紹介してねえだろおがッ!?てか、名前の紹介は最初に俺がやったっつーの!? ふざけてんのか!?どんな思春期真っ最中で『斜に構えまくったクールなオレかっけ!』的なガキでも、もうちよつとマシな自己紹介するわ——ッ!」

がくがくがくつ!と、グレンはリエルの頭を両手で鷲掴んで前後にシェイクする。

クラスの生徒達は呆気にと取られてその意味不明漫才を見守っている。

「でも、グレン。何を言えればいいかわからない」

「なんでもいんだよ、趣味でも特技でも!ええい、サーシャ。お前が先に自己紹介しろ!

こいつに手本を見せてやれ!」

「……………アッハイ」

予想の斜め上を行くりィエルに、目を点にしているサーシャが我に返り、クラスの生

「やかましい！最初から共通語で喋ってくれませんかね!? てか、何だよ、最後の地味に苦痛な罰ゲームは!? 何!? そこまで俺のことが嫌いなもの!」

「がりがりと頭を掻きながら喚くグレンとニコニコ微笑みながらのたまうサーシャに、目を点にする生徒達。」

「……もう、しようがないなあ。じゃあ……改めまして。今日からこの学院に編入することになりました、サーシャセルゲエフナソルダトワです。名前からわかると思うけど、東部諸国のルシタニアという所の出身です。五年前から帝国に移りました。ちよくちよく、東部語が出ます。けっこう出ます。てか、出す(謎の使命感)。まあ、そういうわけで、よろしくお願いしますね♪」

流暢な共通語で微笑みながら話すサーシャの自己紹介が終わると、グレンは再び自己紹介を促す。

「とまあ、自己紹介とはこんな感じだ、リエル。趣味でも特技でも、とにかく皆がお前のことを知れるように、お前自身のことを適当に話しときゃいいんだよ。わかった? オークエイ?」

「……そう。わかった」

微かに頷き、リエルは改めて一歩前に出る。

「……リエル、レイフオード。帝国軍が一翼、帝国宮廷魔導士団、特務分室所属。軍務

は従騎士長。コードネームは『戦車』、今回の任務は……」

「ちよおおおおおおおおおおおおおおお——ッ!？」

「だああああああああああ——ッ!ああああああああああああああ——ッ!」

突如、サーシャとグレンが奇声を上げてリエルをかつさらい、猛速度で教室の外へ飛び出していった。

「えーと、リエルちゃん。今、なんて……?」

「うーん、よく聞こえなかったけど……帝国軍がどう、とか……?」

サーシャとグレンの変な叫び声のせいで、生徒達は小声のリエルが何を言っていたか、さっぱり聞き取れなかったようだ。

そんな生徒達を他所に、教室の外からは「このアホ!」だの、「お前何考えてやがんだ!？」だの、グレンの怒声が聞こえてくる。

そして、たつぷり数分後。

教室の外で何やら言い合いっこしていた三人がようやく戻ってきて……

「……将来、帝国軍への入隊を目指し、魔術を学ぶためにこの学院にやって来た、ということになった。出身地は……ええと、イテリア地方……?年齢は多分、十五。趣味は……確か……読書。特技は……ええと、なんて言えばいいんだっけ?グレン」

「俺に聞くな」

ぴきぴき、とグレンがこめかみを震わせながら呻き、サーシャは頭を抱えて溜め息を吐いていた。

この半端ないやつつけ取り繕い感に、クラスの生徒達は啞然としている。

そんな中、グレンは困惑渦巻くクラスの空気を強引に無視し、話を進めようとする。

「とまあ、サーシャセルゲエヴナソルダトワ君とリエルレイフォードさんでした！あはは、いやあ、実にどこにでもいるごくごく普通の生徒だよなあ！お前ら、この平凡でごくごく普通極まりない、むしろ普通過ぎてつまらないサーシャとリエルとこれから仲良くしろよ？では、早速今日の授業を……」

「一つだけ、よろしいでしょうか？」

生徒達の一人が手を挙げる。ツインテールのお嬢様、ウエンディナーブレスだ。

「私、サーシャさんとリエルさんについて一つ疑問が御座いますわ。質問よろしくつて？」

「あー、ここに来るまでの長旅で二人とも疲れているはずだ。疲れているよな？疲れているに決まっている。うん。だから、そういうことはまた今度にしてやって……」

露骨に嫌そうな顔して、グレンが流そうとするが……

「……ん。なんでも聞いて」

「お前はね！ちよつとは空気読んでくれませんかねえ!?それとも何か!?俺に恨みでもあ

んの!？」

即座に肯定したリエルに、グレンは頭を掻き毟って天井を仰いだ。

(……なんだろう、自己紹介からの質問なんだけど、ここまで不安になることなんてあつたっけ?あれ……?)

サーシャも脂汗を垂らしながら、リエルがとんでもないことをバラしそうで怖くて怖くてしようがなかった。

「差し障りなければ教えていただきたいのですが、貴女、イテリア地方から来たって仰りましたが、貴女のご家族の方はどうされているんですの?」

「!」

「……家族?」

その問いに、グレンが微かに目を見開き、リエルがほんの少し眉を動かす。

(……?)

そんな二人の反応——特にグレンの反応に、サーシャがほんの少し首を傾げる。

「……兄が……いた……けど」

「そう、お兄様がいらつしやるの。ふふつ、なんていう御方ですか?今、どこにいらつしやるんですの?何をされている方なのでしょう?」

ウエンデイの質問は別段不自然なものではない。

家族に関する質問は、自己紹介すれば普通に出てくる定番の質問だ。

だが、なぜカリエルは、その問いに虚を突かれたように硬直し……

「兄の……名前……」

少し眉根を寄せ、こめかみに手を当ててリエルが答えようとして……

微かに震える唇を動かし、迷ったように言葉を紡ごうとして……

「名前、は……名前……な、まえ……」

それでもなぜか、リエルが名前を言い淀んでいた。

眉間にしわを寄せて俯くリエルのその相貌は、どこか苦しげで……

「すまん。家族に関する質問だけは避けてやってくれ」

珍しく深刻な表情をしたグレンが、割って入った。

「実は、こいつには今、身寄りはいない。……それで察してやってくれないか？あと、

サーシャもだ。こいつにも身寄りがいない。お前らが今の東部のごちやごちやとした

状況を知っているなら、これで察してくれ」

「えっ!? そんな……でも、確かに『いる』じゃなくて『いた』と……それに、サーシャさ

んの出身地は東部と……も、申し訳御座いませんわ、お二方。私ったら何も知らなくて

……決してそんなつもりでは……」

たちまち恐縮したように目を伏せ、ウエンデイがサーシャとリエルに謝罪する。

「あ、いや、俺のはそんなに気にしなくてもいいから」

「……大丈夫。問題ない」

ぼつりと呟くように応じるリエル。どこか納得いかないような、戸惑っているような表情が、珍しくその能面に見え隠れしていた。

「じゃ、じゃあさー！」

そんな、どこかぎこちなくなつたクラスの空気を吹き飛ばさんと、勇者が手を挙げる。クラスの兄貴分役、カツシユだ。

「リエルちゃんとサーシャとグレン先生つて、どういう関係なんですか？なんかその、知り合いつぽいし、すげえ親しそうだし、ここは一つ、特にリエルちゃんとの関係は是非とも教えて欲しいなあー？」

カツシユの質問は、今、このクラス全員の胸中（リエルとグレンの関係については特に男子）を代弁したものだつた。

「あ、そうそう、それぞれ。それは私も気になっていましたわ！」

「やつぱさうだよなあ？ここはキツチリ聞かせていただかねーとなあ？特にリエルちゃんとの関係は」

「さつきから、どう見てもただの知り合いじゃなさそうだし……特にリエルちゃんとの関係は」

そんなカツシユの振りにクラスも努めて乗ったのだろう。再び、クラスが喧騒に包まれる。

「……わたしと、グレンの関係？」

「あー、それは、ね……」

「……う。……そ、それはだな……」

なんて言ったらいいものか。

「……先輩。もしかして、先輩が元・軍人ってのは……」

「いや、それは白猫とルミア以外、こいつらは知らん。だから、なんといったものかと……何のひねりもないが、『遠い親戚』と押し通してもな、今度はお前との間に無理がありそうだしな……」

サーシャとひそひそと話し、なんて言ったらいいのか言葉を詰まらせると……

「グレンはわたしのすべて。わたしはグレンのために生きると決めた」

その一瞬、グレンはバツサリと致命傷を負わされた。

「ぶっ——ッ!?!」

リエルの大胆な台詞に、サーシャは吹きだし。

「ちよ——ッ!?!リエル、おま——」

ぎよつとしたグレンが否定する暇もなく——

「きゃあああああ——ッ！大胆くッ！情熱的くッ！」

「ぐわああああッ！出会って一目で恋に落ちて、もう失恋だああああ——ッ！」

上がる女子生徒の黄色い声と、男子生徒の悲鳴で教室は大混乱に陥った。

「禁断の関係！先生と生徒の禁断の関係よくッ！きゃーっ！きゃーっ！」

「……先生と生徒がデキているのは、倫理的な問題としていかなものかと」

「へえ、やるなあー、先生！」

「な、何を仰つてるの、カツシユさんッ!?これは問題！問題ですわ——ッ！」

「ちくしょう、先生よお……アンタのことはなんだかんだで尊敬してたが……キレちまったよ……久々になあ……表出ろやああああ——ッ!? (号泣)」

「夜道、背中に気をつけろやああああ——ッ!? (号泣)」

「禁断の恋愛に盛り上がる女子生徒達。禁断の恋愛を問題視する優等生陣。リエルとお近づきになりたかった大半の男子の怨嗟の渦。生徒達は、それぞれが想像力の翼が羽ばたくままにグレンとリエルの爛れた関係を邪推し、言いたい放題の大騒ぎだ。

そして——

「やかましいぞ、グレン＝レーダスッ！貴様、何、バカ騒ぎさせておるかッ!?私の授業の妨害のつもりか!?おのれえ、貴様、どこまで私をおおおお——ッ!？」

（あ、この人、魔術競技祭で髪を掻き巻いていた人だ……）

隣のクラス、一組の担当講師ハーレイまでが血相を変えて駆け込んできて——
——もう、とても收拾がつきそうになかった。

「……何コレ？」

サーシャは呆気にとられ。

「だあああああッ!?!もう!?!どうしてこうなるんだああああ——ッ!?!」

グレンの魂の叫びが学院内に響き渡る。

そして、その阿鼻叫喚の地獄絵図の中、ただ一人。

「……?」

リエルだけが不思議そうに、その様子をぼんやり眺めていた。

Vienpadsmit (第十一話)

「ああ、くそ……つたく、なーんで俺がこんな目に……」

決闘を申し込もうと息巻くハードゲイという隣のクラスの講師をグレンがなんとか口八丁で丸め込み、リエルとの関係についての誤解を舌先三寸なんとか解けた（と思いたい）グレン。

因みにサーシャの関係は、グレンの知り合いの紹介で知り合ったということで押し通した。

一連の騒動で思わぬ時間を浪費し、本日の授業予定が大幅に狂ってしまった。仕方なく、グレンは予定を変更し、魔術の実践授業を急遽行うことにした。

外に出て、皆と一緒に身体を動かすことでサーシャとリエルが早くクラスの皆に受け入れてもらえるようにと、グレンなりに配慮した結果でもある。特にリエルがクラスに上手く馴染めれば、ルミアの護衛もやりやすくなるだろう。

というわけで、グレンのクラスの生徒達は学院の魔術競技場にやってきていた。幸い、今の時間帯はこのクラスも使用していない。

ここなら思う存分、魔術が撃てるというものである。

「《雷精の紫電よ》——ッ！」

広々と広がる競技場に、システイーナの凜と通る呪文が響いた。

勢いよく身体を開いて前方に伸ばされた左手の指先から、一条の紫電が迸る。

システイーナの放った雷閃は約二百メートルの距離を飛翔し、その先に据えられた人型のブロンズ製ゴーレムへと真つ直ぐに迫った。

そのゴーレムには、頭、胸、両足、両腕の六ヶ所に円形の物が設置されている。

そして、システイーナの雷閃は正確無比にゴーレムの頭の的を射貫き——その的に小さなコインのような穴を綺麗に空けた。

「やったわー！」

思わず小さくガッツポーズをするシステイーナ。

おおお、とシステイーナの実技を見守っていた生徒達から感嘆の声が上がる。

「スゲエ……さすがシステイーナ……」

「やっぱ、名門のお嬢様は違うわ……」

賞賛の視線と言葉を背中中で受け流しながら、システイーナはルミアのもとへと戻った。

「凄い、システイー！六発撃って、全部的に当たったね！」

システイーナを迎えたルミアは、まるで自分のことのように、嬉しそうに言った。

因みにルミアの成績は六分の三。取った的は、右手と胸の的、そして狙いが外れて偶然当たった左足の的の三つである。

「ほう、やるな、白猫。この距離で六発全弾命中は普通にすげえぞ」

グレンが感心したように手元のボードに結果を書き込んでいく。

システイーナはグレンの褒め言葉に一瞬、嬉しそうに表情を輝かせ、その後すぐに不機嫌そうにそっぽを向いた。

「……ねえ」

そんなシステイーナを見たサーシャは、ルミアにこそそと話しかける。

「彼女、もしかしてグレン先輩のこと……」

「うーん、サーシャ君が思っている通りなんだけど……本人は気付いていないというか……素直じゃないというか」

心なしか、頬に赤みが差しているシステイーナを見て、苦笑いするルミア。

「あ、なるほどね……」

これはアレだ。惚れてしまった相手が自分が思っていたタイプとは全然違って、それを認めたくないという感じだ。

(金銭的にはだらしがない先輩だけど、それ以外は良い人だからなあ……)

むしろ丁度いいんじゃないかと、グレンとシステイーナを交互に見ながらサーシャは思うのであった。

そして、その隣では。

「くうううう……こ、これで勝ったと思わないことですよ！システイーナ！」

ウエンデイが悔しそうにハンカチを噛みながらシステイーナを睨みつけていた。

因みにウエンデイの成績は六分の五。調子よく次々と的に当てていったのだが、最後の一発、撃つ瞬間にくしやみをしてしまったのだ。

「あの子……やたらとシステイーナに対抗心を燃やしているけど……」

「ウエンデイは入学当初からシステイーナをライバル視してから……でも、どこか抜けているというかなんというか……」

「要所所でドジ踏んじやう子、って感じ？」

「まあ、そんな感じかな……普段は成績は上位なんだけどね」

いるよね、一人そんな子、とサーシャがそう思っている傍らで。

「納得いきませんッ！あんなの納得いきませんわ！先生、やり直しを要求します！私が本来の実力を出し切ればシステイーナに負けるはずがありませんわッ！」

「はいはい、わかったわかった……順番が詰まってるから後でな、ドジっ娘」

「きいいいいい——っ！」

ヒステリーを起こしたウエンデイを適当に宥めながら、グレンは次々と実技を進めていた。

なんていうか、システイーナと同じくらい気が強くて抜けている子だということがわかった。

(んー、さて、どうしたものかな……?)

指を顎にあて、サーシャはちらりと周囲を見渡す。

最早、生徒達の意識に、グレンとリイエルの浮いた話のことなどないようである。

自由に魔術の腕を競える場においては、そんなものは二の次、皆、夢中で魔術狙撃の腕前を振るっていた。

(ある程度はこの人達の腕を見たけど……一部を除けば平均的、って感じかな?)

システイーナはもちろん、さつき実技を競技を終えていたギイブルは全弾命中している辺り、流石と言つていいだろう。

一発外したがウエンデイも優秀なのは間違いない。ドジさえしなければ、この二人とは並んだはずである……ドジさえしなければ。

他には小柄で女顔の少年セシルが六分の五で後はほとんどぐりの背比べと言つていいだろう。六分の三で平均的——無難なレベルと言えいいのかもしい(因みにルミアもこの領域)。

(六分の三が平均的だとすると……そうだねえ)

そんなことを考えていると。

「よし、サーシャ。お前の番だ。やれ」

グレンがサーシャに言葉をかけてきたから考えるのを止める。

どうやらサーシャとリエル以外の生徒達の競技は終わったらしい。クラス中の生徒達がサーシャに視線を向けていた。

遠くでは、的の交換役の生徒がゴーレムに取り付けられた的の交換を終えたらしく、手を振り上げて合図をしていた。

「……あれを射貫け、ということまで？」

「そうだ。お前ならわかっているとと思うが、同じ的を狙ったらダメだぞ？一つの的につき、狙っていいのは一回だけ、そういうルールだ」

「ほいほい、了解」

「あと……軍用魔術は使うなよ？」

定位置に立とうとするサーシャに、グレンは誰にも聞こえないように耳打ちした。

「……それは、むしろリエルに言った方がいいんじゃないですか？」

苦笑いしてそう返し、サーシャは定位置に立った。

「さて……お手並み拝見としますかね」

サーシャの立ち振る舞いを、クラス中が見守っている。

当然と言えば、当然だ。やって来た新しい仲間が、いかなる実力を持っているのか……気にならないはずがない。

さて、何発当てようか。

クラス中の注目を一心に集めながら、サーシャは遙か二百メートル先に設置されたゴールムを、考えながら見据えて——

「《雷精タスイル・ベルコナ・スベーチシユの紫電よ》」

東部諸語——西部にある旧ラトガレ大公国（現在は東セルフオード社会主義共和国連邦を構成する共和国）で話される言葉で呪文を唱え、特に緊張はせず、ややだるそうな動きで前方を指差し——

紫電が二百メートルの空間を走る。

その紫電は、吸い込まれるように胸の的に飛び、射貫いた。

おおお、と生徒達が感嘆が漏れるが、サーシャはそんなことを気にすることなく——
「《撃ツイエンスて》、《撃デイヴィて》、《撃トゥリスて》、《撃チエツトリて》、《撃ピエツイて》」

矢継ぎ早に呪文を唱える。左手から放たれた五発の紫電は、右腕、左腕、右足、左足に命中し……最後の一発は頭を掠めた。

「ありや？最後の狙いが甘かったかな？」

最後の一発を外し、サーシャは競技を終える。

(まあ、サーシャは問題無いよな。あいつ、狙撃はけっこう得意だったしな)

まあ、サーシャより狙撃では人外の実力を持っている人間も一人、いるのだが。

最後の一発も、生徒達のことを配慮して、わざと外したのだろう。

グレンにとって予想内のこの結果。

だが、生徒達から見れば、サーシャの魔術狙撃の技量は、このクラスの中ではシステイナ、ギイブル、ウエンデイと並び突出しているということがわかり(実際はこの三人の実力よりも遥かに上なのだが)、今までの値踏みするような見方から、大きく変わっていた。

「まあ、サーシャは問題無し……と。より、リイエル。お前の番だ。やれ」

「……ん」

「いいか？サーシャにも言ったが、もう一度言うぞ？同じ的を狙ったらダメだぞ？一つの的につき、狙っているのは一回だけ、とりあえず今回はそういうルールだ、わかってるな？」

「ん、わかった。攻性呪文であの的を壊せばいい。そうでしょ？」

「おう、そうだ」

「任せて」

グレンの促しを受けて、リエルが定位置に立った。

「さて……リエルちゃんほどのくらい当たるかな……?」

「いや、案外、もの凄いい使い手かもよ?あの子、常にクールで集中力高そうだし……」

「そう言えば、帝国軍への入隊を目指しているとか言ってたな……」

と、今度は大トリのリエルを見守るクラスの生徒達。

「……そういえば」

「……?そういえばって、どうしたの?」

なにか思い出したサーシャに、隣にいたシステイーナが振り向く。

「いや、魔術狙撃で思ったんだけど、リエルって、ちゃんと撃てるのかなつと、思いまして……」

「え、撃てるって……彼女、宮廷魔導士団のエースなんでしょ?だったら——」

「エースって言えば、エースなんだけど……今まで大剣を振り回す姿は見ても、身体強化以外に黒魔術使っていたところ、見たことないんだよね」

「……はい?」

遠い目でそう言うサーシャに、システイーナがどうということ?と目を瞬かせた、その時。

「《雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ》」

ぼそぼそと呪文を唱え、棒立ちのまま、どうにも杓子定規な動きで前方を指差し――紫電が二百メートルの空間を走る。

だが、その紫電は的どころか、ゴーレムそのものを大きく右に外して飛んでいった。

「……………」

微妙な沈黙が、クラス中を包みこんでいった。

「……………」

あまりの外しつぷりに、流石のサーシャも何と言ったらいいのかわからず、呆然としている。

(いや……………確かにリエルがまともに黒魔術系の攻性呪文を使ったところ、軍時代にも見たことなかったが……………まさか、ここまで下手くそだとは……………)

この予想外の結果に、グレンも額に脂汗を浮かべて呆然とするしかない。

もう、この一射を見ただけでもわかる。リエルの魔術狙撃の技量は、このクラスの中ではぶつちぎりでワースト1位だ。

「《雷精よ・紫電の衝撃を以て・撃ち倒せ》」

クラスに漂うそんな微妙な空気にもめげず、リエルは淡々と呪文を唱える。

今度はゴーレムの左側を大きく外れて、雷閃がとんでいく。

掠る気配どころか、的に寄る気配すらない。

途端に、クラス中の視線が値踏みするような視線から、小さな子供を見守るような優しい視線になった。

「……………」

一方、サーシャはというと、そのあまりの惨状に目を当てられず、深い溜め息を吐いた。

「え、えーと…………サーシャ、リエルって…………」

「うん…………多分、あの子は大剣と気合いがあればなんとかなるんだと思う…………実際、それで外道魔術師倒しまくっているし…………」

「でも、これって学院では色々…………」

「…………終わったら、彼女を鍛えさせないと、いろいろとマズいかも…………」

「あ、あはは…………」

と、システイーナ、サーシャ、ルミアがそれぞれの反応をしている中、リエルのチャレンジは続く。

だが、結果はどうにも振るわない。

空に飛んでいたり（空に的があったのだろう）、地面に刺さったり（地面に的があったのだろう）…………クラスの生徒達のアドバイスを受けても、リエルの「シヨック・ボルト」の呪文はゴーレムに掠る気配すら見せない。

「……もしかして、魔術の基本のきから教えないといけない感じっばい？」

「もしかしてもしなくても、そうなるわね……」

「あはは、信じられるか？あれで、特務分室のエースなんだぜ？多分、今、この場でバラしても誰も信じないだろうけど、エースなんだぜ？……もう泣きたい……」

「お、落ち着こう、ね？私も手伝うから」

なんか、魔術の基本をあの脳筋少女に教えてわからせるという壮大な事業と、今の惨憺たる状況を生み出しまくっているこの現状を見ていられないとばかりに、顔を手で覆い、肩を震わせるサーシャなのであった。

そして、とうとう残すは六回目——最後の一射になってしまった。

(にしても、これ、なんとかしないと……)

よく今まで生き残れたな、という呆れと同時に、サーシャは少々危機感を胸に抱いていた。

サーシャとリエルはルミアを護衛するためにこの学院に来ている。だが、あくまでも表向きは魔術を勉強するためにこの学院に編入された編入生なのだ。

編入された以上、当然、在籍している生徒達と扱いは公平になるわけで、成績次第では退学処分となる可能性があるのである。

つまり、この背景には帝国政府——しかも女王陛下のお墨つきもあるからとはいえ、

リイエルがあのままだと、後々面倒なことになりそうだからである。……主に政治的な面で。

だから、リイエルには今後は大剣を振り回すだけではなく、せめて基本的な魔術を使えるようにしないと、いつまでもこの学院にいられるとは限らない。本人はまったくわかっていないが。

(まあ、先輩はこの人選は狂っているって発狂していたけど、あえてリイエルを入れたのも理由があるし、流石にリイエルだけじゃアレだから、そのお目付け役みたいな感じで俺も割り当てられたわけだけど……あとで先輩にも相談——)

この予想外な問題に早く対処しなければならぬとサーシャが物思っていた、その時。

「「「な、なんだああああああ——ッ!?」」」

突然、生徒達が驚愕の声を上げる。何事かとサーシャがリイエルの方を見ると。

「……………は?」

なんと、リイエルの両手に長大な十字架型の大剣が出現し——その足元には十字架型の窪みが出来上がっていた。

錬金術による高速錬成で、競技場の地面の土から鋼の大剣を瞬時に作り出したのである。

「お、おい……リイエル、お前、一体、何を……？」

頬を引きつらせるグレンの言葉も虚しく――

リイエルは大剣を頭上に大きく振りかぶって――

「いいいいいいあああああ――ッ！」

乾坤一擲の気合と共に、たんつ、と地面を蹴って――

リイエルは身の丈を越える大剣を、全身のバネを存分に振るって――投擲する。

ひゅごお、と空気を引き裂いて投じられた大剣は、嵐のように縦回転しながら二百メ

トラもの距離を一瞬で消し飛ばし――

ドカンッ！と凄まじい破砕音を立てて、大剣がゴーレムの胸を貫き――

次の瞬間、ゴーレムはバラバラに砕け散って四散した。

無論、ゴーレムに設置されていた六つの的は、全て跡形もなく粉々である。

「「「……………」」」

クラス中の生徒達が目を剥き、口をあんぐりと開けて硬直する中……

「……………ん。六分の六」

リイエルは眠たげな表情を崩さぬも、どこか得意げに、ぼそりと呟いていた。

「……………あ、あのなあ、リイエル……攻性呪文を使えつつたろ……」

「ん、攻性呪文。……だって、あれ、錬金術で錬成した剣だし」

「間違ってる……その解釈は絶対、間違ってる……」

最早、グレンは呆れ果てたように天を仰ぐしかなく。

「……………」

サーシャは考えるのを止めるのであった。

案の定、クラス中の生徒達がリエルを見て怯えている。

せっかく、クラスと交流できるように取り計らったのに色々と台無しである。

そんなこんなで。

リエル、サーシャと、グレンが担当する二組のクラスの生徒達との顔見せは終わったのだった。

Divpadsmit (第十二話)

そして、昼休み。

「いやあ……やりやがりましたね……」

「ああ……マジでやりがった……あの馬鹿」

教室の扉の外からリエルを見るサーシャとグレン。

二人は先のリエルがやらかした快拳を振り返り、揃ってため息を吐く。

二人が視線を向けるリエルの周辺は……二組の生徒達が遠巻きに彼女を眺めているしかなかった。話しかけることなく、ただ遠巻きに眺めている。そのおかげでリエルがめつちや浮きまくっている。

先の授業で派手なデビューをってしまったリエル。

結局、二組の生徒達のリエルに対する初印象は、完全に『変なやつ』『怖いやつ』『危ないやつ』という、新顔の編入生としては致命的過ぎる致命的な印象で落ち着いてしまった。これじゃ、あと二年は地獄に等しい学院生活になることは間違いない（ましてやルミアの護衛で編入しているのだから、尚更である）。

しかも、リエルは極端に感情表現が乏しく、心の機微が読み取りにくい。常に眠た

げに細められているその目は、怒っているようにも不機嫌そうにも見え、どうにも話しかけ辛い。当然、リエルが自分から話しかけるようなことも皆無である。

そして、先の授業での、あの身の毛もよだつ破壊である。サーシャやグレン、アルベルトのように付き合いがある面々ならまだしも、今日で初顔合わせをした二組の生徒達からしてみれば、怖いっただけならありやしないことだろう。正直、声をかけ辛い。

……と、いうわけだから、今、リエルは自分の席についたまま、一人でぽつんとぼくつとしており――

「おい……お前、リエルちゃんに何か話しかけるよ……」

「で、でもよお……あの子、なんか怖くね？」

「そもそも……なんかおかしいだろ、あの力……本当に人間なのか……？」

生徒達は最初の一言のきっかけがまったく掴めず、リエルを遠巻きに眺めるしかなかった。

「……あの馬鹿」

「まあ、仕方ないと言えば仕方がないんですけどね」

サーシャの言う通り、リエルのあの行動は彼女のことを知っている者からすれば、仕方のないことではあるのである。リエルもサーシャも、二組の生徒達とほぼ同じ年で特務分室に所属しているのだ。正直、二人の環境は一般から見たらまともじゃない。

サーシャは普通に生徒達と接することはできるが、リエルは普通じゃない環境で生きてきたせいとか、対人スキルが壊滅的なのだ。だから、あんな派手なことをやらかしたらどうなるのか……その程度の想像すらできないし、浮いてしまうということが理解できないのである。

(とはいえ、リエルの場合、あまりにも度が過ぎているんだよね。あれじゃまるで、見た目は十代半ばの女の子だけど、中身は五歳以下の子供みたいじゃないか)

サーシャはリエルの出自についてはあんまり知らない。

まだグレンが現役だった時に、グレンがある研究所から少女を救出して保護した。その少女がリエルだったのだ。

その後、リエルが特務分室に来るわけなのだが、リエルよりも少し先に入ったサーシャはそれしか知らない。ただまともな環境で育ってないのは確かだと、そう思っていたし、今でもそう思っている。

だが、それを考えてでも……やはりリエルは、精神的に幼き過ぎる気がするのだ。(先輩は何か隠しているかもしれないけど……まあ、今それを問い詰めても、ね)

それよりも……今は浮きに浮きまくっているリエルだ。こんな賑やかなクラスの中で、誰とも関わりなく、一人ぼっちなリエルの姿は実に哀愁を誘う。普通に可哀想だ。

リエル自身はなんとも思っていないだろうが、放っておくのはどうにも後味が悪

い。それにルミアの護衛もある。

「仕方ないですね。俺はルミアを昼飯に誘って護衛します」

「俺は……仕方ねーか」

ここは曲がりなりにも戦友だった自分がフォローしてやるべきだろうと、グレンはリエルの下へ歩き始めようとする。

サーシャも、本来はルミアの側にリエルがいて、自分は適度な距離で彼女を護衛するという感じにしたかったのだが……仕方なくルミアを昼食にでも誘おうとする。

(……まあ、久々にお話ししたいし、ね)

そう思つてルミアの下へ歩き始めた……その時だった。

「お?」

「ありや?」

グレンより先に、リエルのそばに立った少女がいた。

「ご機嫌よう、リエル」

ルミアだった。その後ろにはシステイーナが控えている。

「……………」

ルミアの気配を感じたリエルが、ルミアをちらりと流し見る。

身じろき一つなく、眼球だけを動かして見上げてくるその視線は、まるで睨まれてい

るようで、人によつては怖く感じる者もいるだろう。

実際、サーシャもリエルに話しかけた時、あんな風に流し見られるが、その度にそれだと怖いから顔をこつちに向けてと言つていたものである。

だが、ルミアはそんなリエルの視線を軽く受け流し、朗らかに微笑みながら言つた。「今、ちようど昼休みになつただけ……リエルはお昼ごはん、どうするの?」

「……お昼ごはん?」

問われて、リエルはふと視線をルミアから外し、少しだけ沈黙。

再び眼球だけを動かしてルミアを流し見て、言つた。

「必要ない。わたしは三日間、食べなくても平気」

「えつ? だ、駄目だよ、それじゃ……身体に良くないよ?」

そんなリエルの物言いに、ルミアは苦笑いしながら応じた。

……いや、必要じゃないとかじゃなくてね、と遠目に様子を窺つていたサーシャが呆れる。

「ちゃんと食べなきゃ。ほら、リエルのお仕事にも差し障つちやうよ?」

「……一理ある」

すると、リエルは目だけでルミアの姿を追うのを不意に止め、ほんの微かに首を動かして、前よりはまともにルミアの姿を見た。

「でも、何を食べたらいいかわからない。今回の任務、食料が支給されなかったから。今までの支給分はここに来るときに全部食べたし」

「……あいつ、重症だな」

と、サーシャと同様に遠目で様子を窺っていたグレンは呆れていた。

支給される食料というのは、この場合、間違いなく軍用の携帯野戦糧食——豆や麦、芋などの穀物を練り固め焼いたブロック状の食べ物——のことだ。

「ていうか、お前らはルミアの護衛に来たんだろ？ それなのに、軍用の野戦糧食を支給してかじらせる馬鹿組織があんだよ？ ていうか、食事なしにどうするつもりだったんだ？ あいつは」

「うーん……というよりも、リエルってあの不味い野戦糧食以外の食べもん、食ったことないんじゃない？……？」

「そういうえば現役時代、あいつの食事風景、あれをかじっている光景しか見たことねえ……」

あいつの舌、大分貧相なことになっているだろうな、と。グレンとサーシャが物思っている一方で。

「あ、そういうことだったら……私達、今から学食に行くんだけど、リエルも一緒に行かない？」

「……学食？……何それ？」

「うーん、ご飯を食べるところ……かな。ね、どう？」

「……………」

押し黙ってしまふ、リエル。

よく注意して見ると、心なしかまばたきの回数が増えている。どうやら戸惑っているらしい。自分と同じ年くらいの女の子と一緒に食事をしたことなどなかったのだろう。

「あのさ、リエル。別に無理に……とは言わないわよ？」

その沈黙の間に耐えられず、ついにシステイーナが横から口を挟んだ。

「ただ、サーシャと貴女とは結構、長い付き合いになるかもしれないし、親睦を深めておくくらいいいんじゃない？それに食事は大勢で取ったほうが楽しいし」

「……楽しい？……わたしにはよくわからない、けど……」

システイーナの言の一部を反芻し、リエルはちらりとグレンとサーシャを流し見した。

二人とも行け、と顎をしゃくって見せる。

それを見たリエルはこくりと頷き、席を立った。

「ん。わかった。行く」

「ふふ、よかった。じゃあ、早速行く？」

そして、ルミアとシステイーナはリエルを連れて歩き始める。
ざわざわ、と。

教室に残っていた生徒達が、そんなルミア達を遠目に観察しながら、ざわめく。

「ゆ、勇氣あるなあ、ルミア……」

「大丈夫なのか……？あの子を誘って……」

そんなクラスメイト達の囁きなど意に介さず、ルミアとシステイーナはリエルを伴って、教室の外に続く扉へと向かっていく。

そして、ルミア達はグレン達の前を通り過ぎた。

「……リエルをよろしくな」

グレンはルミアとのすれ違いざまに、ぼそりと呟いた。

「はい」

ルミアはにっこりと笑って、それに応じた。

サーシャはそんなルミアを見て、物思う。

(ルミアって、あんな感じだったっけ？)

ルミアは見かけによらずやんちゃな一面がある。

(やんちゃなところはああるけど、あそこまで肝が据わっている所は昔はなかったのに……)

やはり、廃嫡された影響なのか、天の智慧研究会に本格的に狙われ始めているにしては彼女、肝がかなり据わっているのである。

と、サーシヤはさらりとそんなことを思っているのだが、サーシヤとルミアは魔術競技祭が初めて会ったはず。

魔術競技祭で初めて会ったのに。ましてやサーシヤは絶賛内戦中の旧東セルフオード帝国連合出身の東部人なのに、民族も出生地も完全に異なるルミアの幼少期をサーシヤは何故か知っていた。

そんなことを考えていると。

「あ、そうだ。サーシヤ君も一緒にどう?」

「……………」

ルミアがサーシヤに振り返り、昼食を誘うのだが、物思いに耽っていたサーシヤは反応が遅れる。

「ほら、サーシヤ君もこれから長い付き合いになるし、それにリエルとサーシヤ君のこと、もつと知りたいから、ね?」

「……………」

いや、本当はそうしたほうがいいし、こちらから適当な理由を作って接触したほうが最善である。

だが、サーシャがそうしなかったのは、ルミアの周囲の——特に男子生徒からの人氣が高いからである。

性格は天使、スタイルもこの年齢にしては良いルミアは、とにかく男子にモテるらしい。けっこう男子生徒から告白されてはそれを振るといふ展開が、過去に何回もあつたことをグレン達と合流した時にスティーナから聞いていた。

因みに、グレンも魔術競技祭以降、ルミアの登下校時に極力、護衛するようにしていたのだが、事情を知っているスティーナやルミアや、グレンに助けられ、よく知っている二組の生徒達を除く講師や生徒達（特に男子生徒）からは、ルミアに対してやたら必要以上に干渉しているように見られている。

やれストーカーだの、やれ生徒に色目を使うクズ講師だのと、様々な中傷が飛び交うようになってきている。しかも、当のルミアはグレンの過干渉に対して満更でな様子も、グレンに対するやつかみに拍車をかけていた。

別にサーシャも気にするわけでもないのだが、やつかみの矛先がサーシャに向けられたらいささか面倒である。しかも、事情を知っているのはこの学院内ではグレンを始め、学院長や元・特務分室所属で、現在は教授として在籍しているセリカ、アルフォネアなどほんの一握りである。事情を知らない輩がルミアの護衛を妨害する可能性も排除できない。

だから、ルミアの直近はリイエルに任せ、サーシャは付かず離れずの距離でルミアを護衛するということにしたのだ。派手なデビューをうちやらかしたリイエルだが、同性ならやつかみもなさそうだし、正面からリイエルに喧嘩を売って勝てる奴なんざ、少なくとも生徒の中にはまずいない。返り討ちに遭うのが関の山だ。

ただ、こうやって護衛対象からの直々の誘いを無碍に断るわけにもいかないの。

「せっかくの美人さんからの誘いなので、一緒に緒させてもらいましょうかね」

「あはは、もう、サーシャ君ったら、お上手なんだから」

はにかむルミア。

（あ、けっこうこれに弱いんだ、彼女）

まあ、年頃の女の子だしわからないわけでもないけど、とサーシャは思いつつ。

「じゃ、行きましようかね。というわけで、案内よろしくお願いしますね」

「ふふつ、はい、わかりました」

サーシャはリイエルと共にルミアとシステイーナの後を追うように食堂に向かうのであった。

そんな二人——特にリイエルを見て。

「……やれやれ、だ」

グレンは、頭を掻きながら、ため息をついたのであった。

Trīspadsmī (第十三話)

結果はというと——
その後、サーシャとリエルはルミア達に食堂に案内されたが、特に大きなトラブルはなかった。

先の授業で容赦なく高速錬成した大剣をぶん投げていたリエルも莓タルトを気に入っていたし、そのおかげで突然大剣を振り回す少女から変わっているけど決して怖い人ではないという認識を、内心怖がっていたシステーナはもちろん、席がなくて空いている席を探していたウエンディとリン、そして途中でやって来たカツシユとセシルから持たれたのは、今後リエルがルミアを護衛しながら学院生活を送る上で大きな助けになるかもしれない（因みにサーシャの方はというと、ルミアにデートの誘いを断られたカツシユをからかうなど、すんなりと馴染むことができていた）。

まあ、なんやかんやで（昼休み終了の予鈴が鳴った途端、誰かの切ない悲鳴がアンサ

ンブルしたが）、先の授業で植え付けられたイメージを少しは払拭することができ、サーシャとリエルの初日はこうして終わるのであった。

——それは今から五年前、帝国連合が革命で消滅する数ヶ月前のこと。

アルザーノ帝国首都、帝都オルランドでは今までにない活気に満ち溢れていた。

特に、女王陛下の居城であり、帝国における政務の中心地である、フェルドラド宮殿へと伸びている大通りの両脇には老若男女問わず人手ごった返しており、それを帝国の警邏庁の面々が人が道に溢れないように整理し、王室親衛隊の面々が周囲に目を光らせ、あふれかえる人達を仕切っていた。

かつてない人垣が通りにできているのは、今日、東の帝国——東セルフオード帝国連合皇帝パーヴェル一世率いる首脳陣と、アルザーノ帝国女王アリシア七世からなる首脳陣との首脳会談がフェルドラド宮殿で行われることになっていた。

大勢の見物人に見守られる中、皇室の紋章である双頭の鷲——つまり皇族のみが乗ることが出来る馬車が宮殿に向かっていった。

皇帝が乗る馬車の後ろの馬車にはパーヴェル一世の妻であり、アリシア七世の妹であるマリアベルとその長女であり皇位継承者第一位の嫡女が乗っていた。

雪のように白い髪を背中まで伸ばした皇女は、馬車の窓から映る異国の帝都の街並みと皇帝一行を一目見ようと老若男女問わずごった返している観衆をまじまじと見つめていた。

少女が見るアルザーノ帝国帝都オルランドは、東セルフオード帝国連合首都、冬都シリエーブリヤヌイグランドと遜色ない、活気に溢れている都という印象を持つていた。目を輝かせていて景色を眺めていると、一行はフェルドラド宮殿に辿り着いた。

女王が直々に出迎えるなど、手厚い歓迎を受けた皇帝は両国の国歌演奏などを経て、両国の首脳会談に臨んでいった。

一方、マリアベルと皇女は、別室で待機していた。会談を終えた後、晩餐会が開かれるので、それまでがとにかく退屈であった。

「ねえ、お母さん。まだここにいなきや駄目なの？」

元々、やんちゃな性格であった皇女は、じっとしていられずに母に問う。

「そうね……この時間までよ。ほら」

母は、懐から懐中時計を取り出し、晩餐会の時間を指差して皇女に見せる。

「ええ〜!? こんな時間までに待たなきやいけないの!？」

幼くてやんちゃな性格である皇女にとってはあまりにも長い時間を見て、ぶーぶーと不満を漏らす。

「ええ、待たなきやいけないの。貴女は、次期当主……つまり、次なる皇帝の座を受け継がなきやいけないのですから。これくらい、待たなきや駄目よ？」

「はい、母さん……」

澁々と皇女はそう言うが、やっぱり退屈である。

そういえば、叔母であるアリシア七世には二人の娘——つまり、皇女にとつては従姉妹にあたる女の子がいたはずである。

どうせなら、その子達と遊びたい、この宮殿を冒険したいと皇女が思っていると。

「あらっ？」

ふと、マリABELが開いている扉の隙間から金髪の女の子がこちらを見ていることに気がついた。

「貴女は……エルミアナ？」

皇女と同じ年くらいの女の子……エルミアナといった女の子がこくりと頷き、部屋に入ってきた。

「あらまあ、可愛くなつて。ふふつ、姉様にこそつくりになつてきたじゃないかしら？ さ、いらつしやい」

マリABELが手招きすると、エルミアナはこつちに來てそして、皇女を見る。皇女も初めて対面する従姉妹をまじまじと興味深そうに見る。

「お母さん。この子は？」

「この子は、エルミアナⅡイエルⅡケルⅡアルザーノ。アルザーノ帝国第二王女で貴女の従姉妹よ。ほら、挨拶なさいな」

母からそう言われたから、皇女はエルミアナに振り向く。

この子が、初めて会った従姉妹。

「私はエルミアナ。貴女のお名前は？」

初めて会った従姉妹に、皇女はぱあつと顔を明るくし――

「私はアナスタシア。アナスタシアⅡパーヴェルナⅡロマノヴァ。ナーシャと呼んで、エルミアナ！」

ナーシャ――東セルフオード帝国連合第一皇女アナスタシアは、エルミアナの手を取って明るくそう言うのであった。

これが、アナスタシアとエルミアナ――ルミアとの最初の出会い。

そして、その数か月後、東セルフオード帝国連合は革命で崩壊するのであった。

「…………ルミア？ルミーアー？」

「…………え？あ、システイ…………」

ふと、過去を彷徨っていた意識が、現在に帰還する。

「どうしたの？サーシャをじーつと見ていて……う？」

どうやらルミアは、サーシャをじつと見つめながら、過去の記憶を彷徨っていたらしい。

ルミアの視線の先には、授業中に居眠りしていたリエルを、グレンとサーシャが呆れながら見下ろしていた。

「あの、ルミア？……サーシャの顔に何かついているの？」

「……やっぱり似ているなあ」

「へ？」

……まだ現在に帰還したばかりのせいだろうか。

サーシャを見て、廃嫡される前に出会った従姉妹に似ているような気がした。

「……やれやれ」

「……疲れますね、先輩」

眠たげにおめめを擦るリエルの姿の前に、グレンとサーシャはため息をついた。

リエルとサーシャが魔術学院にやって来て、早一週間が過ぎた。

今やクラスに馴染め、ルミアの護衛をそつなくこなすサーシャとは対照的に、初日の顔合わせで盛大にやらかしたせいで、クラスの生徒達からどうにも敬遠されてしまう空気を見事に作ってしまったリイエル。これからの学院生活で、リイエルは一体、何をしでかしてくれるのか……当初、グレンとサーシャは気が気でなかった。

何しろ、リイエルの捨て身な猪突猛進ぶり、それに追隨する武勇伝は帝国宮廷魔導士団の中では良くも悪くも有名で、枚挙に暇がない。例えば……

一、敵が自分より多ければ、気合で全員叩き斬ればいい。

二、敵が斬れないほど硬い守りを持つなら、気合でその守りごと叩き斬ればいい。

三、敵が自分より速ければ、気合で自分が敵より速く動いて叩き斬ればいい。

四、敵が罠を張っているなら、気合で罠ごと敵を叩き斬ればいい。

……等々。以上、信頼と伝統のリイエル戦法、その一例である。

しかも、性質の悪いことに、リイエルはその意味不明な力押しを實際に成し遂げてしまっただけの圧倒的な能力と才気があり、れっきとした戦果が記録に残っているのだ。

リイエルに敗れた外道魔術師達は、なぜ自分が負けたのか、今でも地獄で頭を悩ませ続けていることだろう。敗因はリイエルを相手にしたから、と言うしかない。

とにかく、色んな意味で普通じゃないリイエルである。おまけに、堅気の世界の常識に極端に疎いリイエルである。どんなトラブルを起こしても不思議ではない。

だが——結果的に、それは概ね杞憂に終わることになる。

「リエル。お昼の時間になったよ。今日も私達と一緒に、学食行こう？」

「……ルミア？ システイナー？ ……ん。わかった、行く」

「サーシャ君も、どうかな？」

「んー、せつかくのお誘い嬉しいけど、今日はパスするわ」

「でも、リエル。貴女、まさか今日も莓タルトを食べるわけ？ 飽きないの？ 私が言うのもただけど、栄養偏るわよ？ 初日以来、毎日それじゃない」

「大丈夫、システイナー。問題ない。……莓タルトは……美味しいから」

「はあ……理由になってないわ。何よ、この偏食」

「あはは、初めての日に薦めて以来、すっかりタルトの虜になっちゃたね？」

「……………」

今日も今日とて、揃って学食に向かう三人の姿をグレンとサーシャは見送った。

リエルが特に問題を起さなかったのは……もしかしてではなく、ルミアとシステイナーのおかげだろう。

その二人が学院の内外でリエルに付きつきりになることで（護衛としては失格そのものだが）、世間知らずなリエルをうまくフォローしてくれている。そのおかげで、リエルはルミア直近を、サーシャは一步下がった距離で護衛するというコンセプトが

一応、上手く機能している。

「ねえ、リエル。今日は別のものにチャレンジしてみない？ほら、苺タルト以外にも美味しいものが、きつとたくさんあるよ？」

「でも……わたしは苺のタルトが食べたい……」

ルミアとしては、サーシャもだがリエルは自分を（一応）護衛してくれている恩人だし、それ以上にルミアの性格的に、慣れない学院生活に戸惑うリエルを放っておけなかつたのだろう。

「まったく本当にしようがない子なんだから……いい？リエル。こんな若いうちからそんな偏食していちや駄目よ？もつと健康的で、栄養のバランスが取れた食事を心がけないと、身体を壊しちゃうんだから」

「うーん……それに関してはシステイも人のこと言えないんじゃない？」

「わ、私はいいの！」

システイーナは別に、リエルに対しては当初、何の好意も抱いてはいないようだったが、ルミアに付き合っけてリエルに接するうちに、なんだかんだで、リエルのことが手間のかかる妹のように思えてきたらしい。

いつの間にか、三人でいることが当たり前のようになっている。

「お。お前ら、また一緒かあ。ははっ、仲いいな！」

「やれやれですわ。とことでシステイーナ、次の授業は薬草菜園での野良作業ですわ。この間のように三人で話しこんで遅れないようにしてくださいませ？」

それに、カツシユやウエンディといった、クラスの中では中心的な生徒達が早々にリエルを徐々に受け入れたのも大きかった。それを受けて、クラスメイト達も今まではサーシャだけ受け入れていたのが、一風変わったリエルを徐々に受け入れ始めている。

元々、グレンという異端児すら受け入れてしまう、おおらかさがこのクラスにはあったのだろう。たまにリエルがグレン絡みで突拍子もない言動をしては周囲を驚かせるものの、サーシャとリエルはクラスへと馴染みつつあった。

「あ、あのリエルが……」

「問題行動が軍でも断トツに多い、あのリエルが……」

「……なんかマトモっぽい学院生活を送ってるなんて……」

リエルがかなり馴染んでいることに、グレンとサーシャが驚きと同時に、なんとも感慨深そうに口を揃えて言った。

だが、無論、万事順調というわけでもない。

サーシャとリエルという本来ありえない異分子が日常の世界に紛れ込んだ弊害は確実にある。

「あー、そりや、リイエルの錬金術はかなりその分野に究めていないと理解はしにくいし、実際、この術式を学会に出しても机上の空論で不可能と言われるのがオチだからね……あの錬成法は学院の中ではもちろん、軍の中でもリイエルにしか使えないものだと思った方がいいよ」

学院からの帰り道。

リイエルと共に、ルミア、システイーナをフェーベル邸まで護衛している途中、リイエルの錬金術——高速武器錬成の魔術式についてシステイーナから聞かれたサーシャがそう答える。

本日の最後の授業だった錬金術の授業の後、教室に残った生徒達が雑談していると、リイエルが初日に見せたこの術のことが話題に上がり、なし崩しのリイエルに解説してもらったことになったのである。

まあ、結果はほとんどの生徒達はほとんど理解できなかったらしく、座学だけは優秀なセシルや、学年でもトップクラスの成績優秀者であるシステイーナでも、魔術公式と魔術関数そのものを一からルーンで組み立てるグレンのマニアックな授業を受けていなければ理解できなかった代物だった。

「まあ、そんな帝国軍ですら採用していない、普通の魔術師だと簡単に廃人にしてしまいかねない錬成法をいとも平気にやってのけるからね。そりゃ、錬金術が得意なギイブルは苛つくのは当然と言えば当然かもね」

「やっぱり帝国軍には採用されていない術式だったのね……」

「まあ、アンタ達のおかげで、比較的すんなりとクラスには溶け込んでいるけど……何しろ、レイエル能力は規格外だから完全には隠しきれないのよ。どうしても、その片鱗は出てしまうからねー」

帝国宮廷魔導士団でも、屈指の外道魔術師撃破数を誇る、特務分室のエース。その隠しきれない力に得体のしれない恐怖を本能的に感じている生徒達も多い。

「まだ明確に魔術戦をやったことはないけど……多分、ていうか、十中八九レイエルに勝てる連中なんざいないと思う。俺だって、真正面から戦いたくないもん」

「そうなの？ サーシャも帝国宮廷魔導士団のエースなんじゃ……？」

「俺はどちらかというところ、暗殺がメインみたいなもんだから。レイエルみたいになんでも気合でぶつた斬ってくる連中とは、相性が悪いというか、ね」

「そうなんだ……でも、確かに相手したら絶対勝てないかも……」

しかも、その規格外の力を持つ相手が、初等魔術もロクにこなせない劣等生なのである。その格付けは最初の授業で、レイエルが大剣でゴーレムを木っ端微塵に粉碎したと

きにすでについてしまった。システイナーもルミアも、誰もが内心、本気でやり合えばリエルには敵わないと思いきわらされてしまっているはずだ。これは魔術師としていたくプライドが傷つけられたであろうし、年若ければ、なおいつそのこと、そうだろう。

(まあ、俺だって今日の放課後、上の学年から決闘持ちかけられたし……俺とリエルみたいな異物を疎ましく思ってる連中なんざ、かなりいる。むしろ、この子達のような人間は少数派だろう)

サーシャも、リエルがシステイナー達に高速武器錬成を解説している間、上の学年の生徒達に喧嘩を吹っかけられていた。

曰く、東部人のくせに生意気だという、しようもないことで決闘を持ちかけられていたのだ。結果は、もちろん、サーシャの圧倒的勝利で終わったのであるが。

アルザーノ帝国の魔術師の中には、旧東セルフォード帝国連合出身の魔術師を下に見る者が少なくない。あの学院にもそういう者がいるなんて別に不思議なことでもない。現に魔導技術の面では、帝国と帝国連合の間に差があつたのは事実なのだから。それは、帝国連合から革命政権になった今でも変わらない。

むしろ、革命政権と帝党派と旧東部諸国の独立派との三つ巴の内戦を繰り広げている現状、この差はますます拡大することになるであろう。

「……まあ、こればかりは時間が解決するのを待つしかないかな……う？」

そうこうしていると、サーシャ達の目の前に風格と威厳を兼ね備えた、立派な貴族屋敷が現れた。

「どうやら、フィーベル邸に辿り着いたらしい。」

「さて、今日も何事もなく無事に着きました、と」

「ん。今日も敵、来なかった」

「はあ……今日もつていうか、毎日、何事もなければいいのに……」

「あはは……二人とも、今日も一日、護衛ありがとうございます」

口々に言う言う四人。本来、護衛がない日常が当たり前なのだが、ルミアが天の智慧研究会に狙われている今、そうも言っていられない。

「二応、屋敷にはビィエルが見張っているから……もし何かあったら、あいつが知らせてくれるし、俺達も駆けつけるから」

そう言いながら、肩に乗っているビィエル（学院内では屋上で休んだり、周囲を飛んだりして警戒している）にフィーベル邸の屋上に指を差すと、ビィエルは屋上に向かって飛んでいった。

護衛とはいえ、一日中フィーベル邸に張り付くわけにはいかないので、夜中から朝まではビィエルを常駐させることにしている。もし、夜中に敵が襲ってくる場合、事前に

ビィエルがルミア、システイナーナに知らせ、サーシャにはサーヴァント契約で、リィエルには略式で仮サーヴァント契約して繋いでいるパズ靈絡を通して知らせる。

ルミアの出自の関係上、大っぴらに護衛できない以上、この方法が最善な護衛方法であつた。

「なにからなにまで、ありがとう」

「いえいえ、これも仕事だからねえ。んじや、また明日。ほら、行くよ、リィエル」
護衛をビィエルに実質引き継いだサーシャ達はここでルミア達と別れるのであつた。

☒ e t r p a d s m i t (第十四話)

このような問題はクラスに潜在的に存在する不協和音のみに留まらない。やはり、リエル自身にも問題があるわけで。

ある時には、両手で書類の束を抱えているリエルを尾行しているグレンに、ハーレイが自身をコケにしたとか言って決闘を吹っかけたハーレイに対して、斬りかかったり（大剣の剣圧で窓ガラス一斉に外へ吹き飛び、石造りの壁に亀裂が走り、次々に倒壊したり）、あわや大惨事になりかけた。

その常識のなさ、感覚のズレっぷりから、リエルはたまにとんでもないトラブルも起こしてしまい、ぐれんにとっては気の抜けない日々が続く。

けど、それでも、そんな慌ただしい日々がリエルに与えるものはプラスかマイナスかと問われれば、やっぱり決まっています……

リエルにとっては見るもの聞くもの、すべて真新しい新鮮な日々。

時折、ちらりとリイエルが見せる、グレンが今まで見たこともないその顔色は……満更でもなさそうなものであった。

「ご苦労。もう下がってよい」

その日。帝国保安局情報調査室の室長、ボリスⅡアガプキンは部下から調査報告書を受け取るなり、部下を下がらせた。

ボリスの歳の頃は四十半ば、五十くらいだろうか。歳相応の皺の刻まれた肌。髪のところどころに白髪が混じっている。眼鏡をかけているその相貌は、青色の瞳も相まってどこか神経質そうで冷酷な印象を与えそうであった。

調査報告書を読むために、調度のよい、高級感ある椅子に腰かける。

だが、調査報告書を読むことなく、腰かけてじっとしている。

しばらくすると、ボリスは溜め息を吐き、向かって右側にあるクローゼットの元へ向かう。

そして。

「貴様あ！そこで何やつとるかあ!?!」

「うおっ!?!」

ばあん！つと、勢いよく開けると、そこには三十くらいの口元の髭を整えた筋骨隆々した男が隠れていた。

「いやいや、お宅よりも一足先に来たんだが、誰もいなかったからな……ピッキングして先に入っていた。で、その報告書は？」

男——同じく帝国保安局情報調査室に所属するヤチエク||レイエフスキがクローゼットからのそのそ出るなり、執務机にある報告書をひよいつと取り上げる。

「……まったく、それは白金魔導研究所所長の使途不明の資金の流れに関する報告だ。上手く帳尻を合わせているようだがな」

不機嫌そうに溜め息を吐くボリス。だが、どうやらヤチエクを追い出す気はないらしい。

「はーん。で、その使途不明な資金の流れは？この後、特務分室の室長さんに渡して任せらるんだろうが……もう掴んでいるんだろ？」

「……あの件の組織と繋がっている可能性があった。限りなくクロに近い可能性でな」
まったく目敏い男だと、椅子に腰かけたボリスが溜め息交じりに答える。

「それで、貴様は何の用だ？わざわざ侵入してまで来る用とは？」

今度はボリスがヤチエクに問う。ここからが本題だとばかりに。なにせ、誰もいない部屋に来て、クローゼットに隠れて部下が帰るまで気配を隠していたのだから。

「プレスコフが政府の手に陥ちた」

すると、ヤチエクは淡々と告げた。

「……サムソノフ將軍は？」

「戦死したよ。連中の軍門に下るよりかは、亡き皇帝に忠誠を誓ったまま地獄に落ちていった方がいいってことだろうよ」

「……内戦になってから、政府と独立派との間で孤立していたからな……彼をもつてしても遅かれ早かれ陥ちていただろうよ」

ヤチエクとボリスが離しているのは、東部での内戦の状況。

ボリスは東セルフォード帝国連合の構成国で西部に位置していた旧ユークレイン大公国出身、ヤチエクは同じく帝国連合の構成国でレザリア王国と国境を接していた旧ルプリンンピアエスト王国出身の東部人だ。

そして、二人ともサーシヤと同じく国家保安委員会でボリスは第八総局、ヤチエクは第一総局にそれぞれ所属している人間だった。

この二人の故郷も、今や独立派、帝政派、革命政権の内戦の渦中にある。

東セルフォード帝国連合は、元々、旧教を国教とするレザリア王国に対抗するため、正教を国教とする東部諸国の王家、大公家達が連合を形成し、そこから王家間での婚姻を通してルシタニア大公が東部諸国を同君連合化して纏めた国である。

ユークレイン大公国、白ルシタニア公国、モラヴィア王国、ユレスコ王国、ルブリン
IIピャエスト王国、ボスナIIスルビナ王国、スルビナ王国、ツルナゴラ公国、フルヴァ
ツカ王国、カラントニア公国、北アルゲアス府主教領、ベルガリア王国、ラトガレ大公
国、エースティ公国、リシアニア大公国、フィンランディア大公国の16ヶ国がルシタ
ニア大公国に事実上、併合されてできた帝国連合は、革命前は専制的な体制だったため、
起きなかった民族的問題が革命によって帝政が崩壊してしまった現在、噴出している。

帝政を廃止し、第一皇女以外の皇族を明確に殺害したことで権力を掌握した革命政権
だが、全ての国民がこれに従ったわけではない。革命の手から逃れた古参の貴族らは地
方に逃れ、帝政派として武装蜂起。名実共に帝国連合が崩壊してから一夜で革命政権と
帝政派との間で内戦に突入する。

この状況を好機と見た旧東部諸国の独立派も武装蜂起。革命政権と帝政派と独立派
の三つ巴の状況を呈し、泥沼化していった。

しかも、帝政派の中にも直系であり行方不明になっている皇女、アナスタシアを女帝
に据えようとする勢力と、残存している貴族の中から新皇帝を擁立しようとする勢力に
分裂しているし、独立派も併合前の君主制にするか共和制にするかで分裂している。

革命政権は分裂はしていないし大都市などを掌握しているが、旧帝国連合軍の多くの
将兵が帝政派、独立派に付いてしまったため、決め手に欠けている有様である。

さらに、革命の火が自分達に飛びかかるのを恐れているレザリア王国があわよくば自身の傀儡政権にしようと新皇帝派を、レザリア王国と冷戦関係にあるアルザーノ帝国が王国の傀儡化を阻止するために正統派を軍事支援していたし、他の諸国も様々な思惑からそれぞれの派閥を支援するなど、帝国連合が支配していた領域はカオスの極みと化していた。

「他の帝政派——正統派の連中は『姫』を探すのに必死だ。『姫』さえ確保できれば正統派は大いに勢いがつく。新皇帝派が誰を皇帝に擁立するかで揉めに揉めている今となつては尚更、な」

「サーシャは？」

「サーシャは今、件の廃嫡王女様にご執心だ。まあ、無理もないが」

ボリスが白金魔導研究所の調査報告書を取り上げる。

「そういえば、近々、アルザーノ帝国魔術学院の生徒達が『遠征学修』が行われるそうだな？」

「ああ。サーシャは軍事魔導研究所か白金魔導研究所のどちらかになるだろうと言つていたな」

ボリスは改めて調査報告書を見つめる。

サーシャが所属するクラスにはあの廃嫡王女がいたはず。もし、白金魔導研究所な

ら、天の智慧研究会が動く可能性はある。

ならば――

「サーシャには先に伝えとくか?」

「そうした方が得策だろうな」

「んじや、俺がサーシャに伝えときましようかね」

話は終わりだと言わんばかりに、席を立ち退室しようとするヤチエク。

だが、扉の前に立つと、ボリスに振り返る。

「なあ、室長」

「なんだ?」

「もし、『姫』が動いたら、どうする?」

何やら要領の得ない質問をするヤチエク。

「……何が言いたい?」

それに怪訝そうな顔で問い返すボリス。

「いや、『姫』が動いたら政府は大打撃を受ける。下手したら内戦が終わるだろうよ。だから政府は『姫』を血眼に探す。この国を脅してでも『姫』を探す。死亡宣告を宣言した今でも、な」

「……………」

押し黙るボリス。

「だから、その時が来たらどうするのか、と思つてね」

ヤチエクはそう言ふと、答えを待つ。

すると。

「どうもこうも……母なる大地のためになるように動く。それだけだ」

ボリスがそう答えた。

「……そうか。まあ、そうだよな」

ボリスの答えを吟味し、ニヤリと口の端をつり上げるヤチエク。

「じゃ、俺は先に失礼するわ」

そう言つて、ヤチエクは頭を掻きながら退室するのであつた。

「ふん……そうしろ」

ヤチエクを見届けることなく、ボリスは調査報告書に目を通すのであつた。

「……どの道、賽は投げられたからな」

ボリスの意味深な眩きを聞く者はいなかつた。

……所変わつて。

アルザーノ帝国魔術学院、二年次生二組の教室にて。

「とまあ、そういうわけで……」

放課後のホームルーム。

グレンはさも面倒臭そうに、教壇に立っていた。

「これから、今度、お前らが受講する『遠征学修』についてのガイドランスをするわけだが………つたく、なーにが『遠征学修』だよ？………どう考えてもこれ、クラスの皆で一緒に遊びに行く『お出かけ旅行』だろ………」

「もう、先生ったらー！真面目にやってください！」

グレンのやる気なさげな態度に、即反応したシステイーナが席を立ててわめき立てる。

「だいたい、『遠征学修』は遊びでも旅行でもありません！アルザーノ帝国が運営する各地の魔導研究所に赴き、研究所見学と最新の魔術研究に関する講義を受講することを目的とした、れつきとした必修講座の一つなわけで——」

「はいはい、そうでしたそうでした。……丁寧な解説ありがとうございます」

さっそく説教モードに入ったシステイーナに、グレンはうんざりしたように頭を掻いて項垂れた。

システイーナの言うとおり『遠征学修』とはそういう目的で学院が開設している講座

であり、システイーナ達二年次生の必修単位の一つとなつてゐる。だが、グレンの言うとおり、抗議と研究所見学以外には自由時間も多く、旅行という性質が見え隠れしているのも否定できない。とはいえ、普段、学院とフェジテに引きこもりがちな生徒達を、フェジテの外へ強制的に出して、見聞を深めさせる意味合いもある。

ちなみに『遠征学修』講座は、各クラスごとに開設され、その時期も行き先も各クラスごとにバラバラである。これは各クラスごとの授業進行状況や、受け入れ先となる魔導研究所の業務予定、受け入れ先の受け入れ可能人数などの調整も考えれば当然のことだ。二年次生全員が、一斉に一つの研究所に押しかけるわけにはいかなのである。

「先方も忙しいところを私達のために予定を開けてくれるんですから、先生も私達の引率者としての自覚をきちんと持ってですね——」

「はいはいはいはい、わかりました、わかりました！もう勘弁してくれ!」

グレンがシステイーナの説教を受けている間にも、クラスのあちこちで今回の『遠征学修』について、生徒達は雑談に花を咲かせていた。

「ねえ、ルミア。今回、行くところってどこだっけ?」

「えーと、確か白金魔導研究所だよ。カンターレの軍事魔導研究所かどっちかになって、白金魔導研究所に決まったんだよ」

「あ、そこになつたんだね。どちらも興味あつたし、イテリアの魔導工学研究所とかも。」

東部とはどういう所が違うか見てみたいし」

学院側もクラスごとに大雑把に遠征先の希望調査をするものの、個々の要望に応える余裕はない。自分がどこの研究所へ『遠征学修』に行くことになるか……それはもう完全に運としか言いようがなかった。

必然的にサーシャとルミアの周りでも、やっぱりあつちが良かった、こつちが良かった……クラスのあちこちでそんな話が入り始めた、その時である。

「ふっ……甘いな、その男子生徒諸君」

行く先に関する不満を耳ざとく聞きつけたグレンが、不敵な笑みを浮かべて言った。

「お前らは運が悪い、とか……別の所の方が良かった、とか……そんなこと思っている……だが、俺に言わせれば、お前らは幸運だ。間違いなく、絶対的に幸運の女神の寵愛を受けている……ッ！」

「えー……？」

「冷静になってよく考えてみる、白金魔導研究所が一体、どこにあるのかを……」

白金魔導研究所はその名の通り、白金術を研究する施設である。

白金術とは、白魔術と錬金術を利用して生命神秘に関する研究を行う複合術のこと
で、その研究実績の展開には、大量の綺麗で上質な水が欠かせない。

よって、地脈の関係で上質の水が容易に手に入る、サイネリア島にその白金魔導研究

所は構えられているのだが……

「……はっ！サイネリア島はリゾートビーチとしても有名な……ッ!?」

「ま、まさか……ッ!?」

セシルは呆れて苦笑いし、サーシャはなんか嫌そうな顔をしていたが、カツシユやその他の男子生徒達は目を輝かせて立ち上がった。

「ふっ……ようやく気付いたか、お前達。そして、この『遠征学修』は自由時間が結構、多めに取られており、まだ少々シーズンには早いですが、サイネリア島周辺は霊脈の関係で年中通して気温が高く、海水浴は充分に可能……さらに、うちのクラスにはやたらレベルの高い美少女が多い……あとはわかるな？」

「……せ、先生……ッ!」

「みなまで言うな。黙って俺についてこい」

「……はい!」

今、クラスの担任講師たるグレンと生徒達（ごく一部の男子限定）との間に、奇妙な共感と友情が誕生していた。

「馬鹿の巣か、このクラスは……」

「あはは……」

「……?」

システイーナは呆れてため息をつき、ルミアは苦笑い。

二人の後ろに腰かけるリィエルは不思議そうに、微かに首をかしげていた。
そして、サーシヤは……。

「……氷で張りまくったかまくらに引きこもりたい……」

暑い所が大の苦手であるサーシヤは、そう呟くのであった。

幕間 1

それは草木も眠る深夜の出来事。

今宵は月もなく、街路灯の火もとうに落とされ、塗り潰されたような暗闇がフェジテを支配している。

そんなフェジテの何処か、人知れぬ路地裏にて。

「……………まけたか……………？クソ……………」

黒いローブ——天の智慧研究会の礼服——に身を包んだ外道魔術師の男が、肩で息を
して後ろを振り返った。

「クソクソ……………ッ！なんなんだ、あの女は……………ッ！」

男はある少女を拉致するためにフィーベル邸に侵入しようとしていた。

だが、あと一步のところまで侵入に成功しようとしていたところで——

「ねえ、何してるのおー？」

突然、背後から少女の声があったのだ。

振り返ると、そこには腰まで伸ばした雪のように白い髪と、綺麗なアメジスト色の瞳

が特徴的な十代半ばの少女が薄ら寒い笑みを浮かべながら男の背後に立っていた。

十代の半ばの少女——それも如何にも温室育ちのような子供相手なら、男は顔が真っ青になることはなかったであろう。

だが少女を見た途端、男はルミアを拉致するという、当初の目的を忘れ、慌ててその場から逃走した。

「あの女の目……一体どんな絶望を見たら……クソ……幸い、特務分室の連中とルミア
|| テインジェルにはバレてねえし、ここは出直し——」

男がそこまで言いかけた、その時。

どすっ!

背後から細い針状のものが、男の首筋を刺し——

そのまま、男の意識は暗転した。

永遠の眠りへと叩き落とされた男の背後にて。

「……駄目じゃない、知らない人を勝手に連れて行っちゃうなんて」

白髪の少女は、もうすでに死んでいる男を見下ろし、くすくすと笑っていた。

「ましてえ、私の従姉妹を攫うなんて、そんなの私が許すはずがないでしょ?」

東部の——ルシタニアに訪れる極寒のような瞳で男の死体を見下ろしていると。

「ねえ、そう思うでしょ？ ヤチエク？」

すると。

「……『姫』、深夜とはいえ、その姿で街を出られるのはお控えください」

『姫』と呼ばれた少女の背後には、ヤチエクがいつの間にか立っていた。

「いいじゃない。あの姿のままだと疲れるのよ。魔力使うし……」

「それでも、貴女は革命政権と新皇帝派に狙われている身です。彼らの手にかかる者がこのフェジテのみならず、帝国全土に潜り込んでいるのです。貴女を見つげ出すために今も動いているのです。そのことを自覚してもらわないと……」

「……わかってるわよ」

ヤチエクの説教じみた言葉に、『姫』はぶいっと不機嫌そうに返す。

「狙われているなんて、そんなのわかってるわよ。でも、あんな連中にビクビクしていてもしょうがないじゃない。それに私達の目的も果たさないといけないし。だから、危険を冒してまで国家保安委員会にボリスを先に私と貴方は潜り込んだ……違う？」

「……仰る通りです。あの組織には誰にも知られてはいけない情報が眠っているはずですから。ただ、気をつけて頂きたいという事です。たとえエルミアナ王女に久々に会われたとしても、です」

「はいはい……それで、どんな用なの？まさか、わざわざ説教するために、帝都からフェジテまで来たんじゃないでしょう？」

説教はもう終わりだと言わんばかりに、『姫』はヤチエクに問う。

すると、ヤチエクは一通の書状を懐から取り出し、『姫』に手渡した。

『姫』はそれを受け取ると、封蝋を解いて広げ、文面に目を通す。

「……件の組織、動くと思う？」

文面に目を通した『姫』は、予唱呪文を時間差起動し、書面を焼却処分する。

「丁度、学院から離れるので、守りは必然的に薄くなります。私が件の組織の人間ならば、動かないという選択肢はないでしょう」

「……わかった。《戦車》が護衛についているから、護衛はそちらに任せて私は情報を収集するわ」

「情報？」

「彼らがルミアを拉致・もしくは殺害する目的。それをして一体、何をするのか……まあ、期待はあんまりしてないけど、なんらかの情報はあるはずよ。それを探る」

「……全ては帝国を再建するため？アナスタシア殿下」

ヤチエクの問いに、『姫』——東セルフオード帝国連合第一皇女にて次期帝位継承者であったアナスタシアは一瞬押し黙る。

「……手段は問わない。相手が相手だから……内戦の状況も芳しくない今、手段を選んでいる暇なんて、ない」

一瞬、葛藤が芽生えたが、決意を表した顔でアナスタシアはそう返し、この場を去っていく。

「……確かにな。俺達にそのような時間は残されていないからな」

確かに、内戦の状況は芳しくない。帝政派で正統派と新皇帝派に分裂した今、独立派と革命政権の二つの敵とも戦わなければいけないのだから。

アナスタシアの言葉を受け、ヤチエクはそう思いながらその場を去るのであった。

Piecpadsmitt (第十五話)

遠征学修。

アルザーノ帝国が運営する各地の魔導研究所に赴き、研究所見学と最新の魔術研究に関する講義を受講することを目的に開設された講座である。

二年次生二組が向かう先は、サイネリア島に構えられている白金魔導研究所。研究分野の關係上、サイネリア島は上質の水が容易に手に入る島であると同時にビーチリゾートとしても有名な島である。

少し早い、この時期でも水着でビーチで楽しむことができるため男子生徒達もはもちろん、先日あんなに呆れていた女子生徒達もなんやかんやで水着を用意していた。

……サーシャを除いては。

サーシャにとってサイネリア島——特にビーチは一番行きたくない場所だからである。

サイネリア島は、ビーチリゾートとしても有名な島である。

つまり、それはどういふことかというところ……

「……暑いのは、あの島は……」

フェジテから発つて、次の日の正午に、フェジテの南西にある港町シーホークからサイネリア島へと向かっているグレンと二組の生徒達一行。

香る磯の香り、抜けるような青空。

遙か遠く燦然と水平線が輝く、見渡す限りの広大な大海原。

大海原の中で揺れながら進む船の中、サーシャはぼんやりと水平線を眺めながらぼやいていた。

旧帝国連合の盟主的存在であったルシタニア出身のサーシャにとって、今見る風景は新鮮であった。

大陸の北部に位置しているルシタニアでは、ビーチなんてないし、そもそも冬になると凍つてしまふ海の上を歩いてしまうほどに年中寒冷的な気候に覆われている国である。

ルシタニアだけでなく、帝国連合領海が似たような状態だったため、年中港が使えるような温暖な海を求めて南に勢力を伸ばそうと軍を南に向け、勢力拡大を阻止したいアルザーノ帝国と敵対していた時期があったほどだ。

そういうわけで、冬は凍るような寒々しい海しか知らないサーシャにとって、眼下に

広がる大海原は新鮮な気分させると共に、やはり出身が出身なのか、暑いところは好きたくないという、なんとも複雑な気分させてしまうのであった。

そして、サーシャの隣では――

「おげえええええええ……」

船べりの手すりに洗濯物がもたれかかっていた。しかもその洗濯物は、美しい海原を吐瀉物で穢しまくっていた。

「……………」

そんな洗濯物――グレンの姿を、サーシャはジト目で流し見。

「ちよつと、先生！私達の感慨を穢さないでくださいっ！」

今まで感慨にふけていたシステイーナが、こめかみをぴくぴく震わせながらグレンへと、非難の声を上げる。

「うっさいわ！こればかりは仕方ないだろおがつ！うぶっ……」

顔を青ざめさせ、げっそりとしたグレンが恨めしそうな顔で、システイーナに抗議を飛ばす。だが、すぐに口元を押さえ、また身を乗り出して海面を覗き込んだ。

「だ、大丈夫ですか？先生……」

そんなグレンに身を寄せ、ルミアが心配そうにグレンの背中をさすった。

「…………正直、大丈夫じゃねーです…………泣きたい…………うう、ちつくしよう…………だから船は嫌

いなんだ……誰だよ、こんなもん發明しやがったアホは……」

胃の中のをあらかた出し尽くして、ようやく少し落ち着いたグレンが船べりの手にぐったりと背中を預けて、もたれかかりながらぼやいた。

「先生、これ、さつき船員の方にもらってきました」

「……リンゴか」

「はい、船酔いに良いそうですよ？よかつたらどうですか？」

「……正直、食欲ないなあ……」

グロッキーなグレンを甲斐甲斐しく世話するルミア。

「そういえば先輩って、軍時代にも船に乗っていた記憶ありませんもんね。大抵、空から現場に行っていましたし」

そんなグレンを見て、軍時代のグレンの行動を思い出すサーシャ。

すると、リエルがシステイーナに話しかけている姿が目に入った。

見れば、心なしか焦りの表情でシステイーナに問いかけている。

もしかしてももしかしなくても、今のグレンの状態を彼女なりに心配しているのだから。

しばらく、やりとりしていると――

「ちよつと、この船、沈めてくる」

「……………は？」

なにやら、不吉なことを口走り、リエルがスタスタと、甲板の一角に設置された船底へと続く階段を下りて行つて……

「ちよ——ま、待ちなさあいッ!?皆ッ!?リエルを止めてえええ——ッ!」

やっぱり、船の上でも大騒ぎだった。

その後、サーシャがリエルに指さすと、船の周辺を楽しそうに飛び回っていたビィエルがリエルに向かって砲弾の如く突つ込むことで事なきを得るのであった。

シーホークを出航して数時間。

やがて、船はサイネリア島に到着する。

「ふうん?意外と暑くないんだね。……って言つても、もう黄昏時なんだけど」

クラススの生徒達と共に、船のタラップから切石を隙間なく並べて形作られた船着場の上へ降り立つたサーシャは、周囲を見渡した。

潮風が強い。雄大な潮騒の音。空にはウミネコの声。すでに時分は黄昏時、水平線に差し掛かった太陽が燃え上がり、世界を深い黄金色に染め上げている。

「……………」

「どうしたの？ぼーっとして」

そんな景色を初めて見たかのように立ち尽くしているサーシャに、システイーナが声をかける。

「……こんな綺麗な景色、初めて見た」

「サーシャ？」

「向こうだと、こういう景色は見られない。今なら、なおさら……」

自身の生まれ故郷であり、内戦で荒廃していく故郷を思ったのか、この時のサーシャの顔はどこか懐かしんでそうな、しかし、ほんの少しだけ悲しそうな顔をしていた。

と、その時である。

「先生、しっかり……」

「あぁー……ううー……」

ルミアとリィエルに両脇を支えられたグレンが、ふらふらしながらタラップから船着場の上へと降り立った。そのグロッキーな姿に――

「もう……本当に浸らせてくれないっていうか、デリカシーないんだから……」

「う、うるせー……白猫め……お前にこの苦しみがわかるか……うう……」

グレンのそのあまりにも情けない姿に、先に下りていた周囲の生徒達もくすくすと苦笑いを零すしかない。

「大体な！生来、人は大地と共に生きる生物なんだ！人間は大地の子なんだ！大いなる大地から離れては人は生きていけないんだッ！土に根を下ろし、土と共に生き、そして、やがて土に還るのが人の定め……それこそが土が生み出す摂理の輪、生命の円環なんだッ！船などという薄っぺらい板切れに乗っかって大地を離れ、海に乗り出すなんて、人として、生命として根本的に間違っているんだあ——ッ！」

「……船酔い一つで、なんかやけに壮大で大袈裟な話になるわね」

よくもまあ、こんな屁理屈がべらべら出てくるなど感心する。

「ていうか、そんなに船が大嫌いなら、別の場所にすればよかったですんじやないですか？ほら、例えば、イテリアの軍事魔導研究所なら、移動は馬車ですし、俺としてもそつちの方がここよりも涼しいから大歓迎だったんですけど？」

それに、色々と研究内容を物色出来たし、と、口には出さないが思うサーシャ。

それはそうと、確かにサーシャの言うとおり、一ヶ月前、遠征学修の行き先に関する事前希望調査としてクラスで行き先候補の採決を取り、軍事魔導研究所と白金魔導研究所が同数の支持票で割れた時、最後の一押し票を入れたのは、他でもないグレン自身だ。

呆れるサーシャに、グレンはかつてないほど真剣な顔でこう答えた。

「美少女達の水着姿はあらゆるものに優先する。決まっているだろう？」

おおお……と周囲の男子生徒達から感嘆の声が上がった。

「……はい？」

人間、馬鹿も突き抜けて極めると蔑みを超えて尊敬を集めるものだ。

苦笑いのルミア、呆れ顔のシステイーナとサーシャ、眠そうなりイエルをよそに、グレンは両袖に腕を通さず羽織ったローブをばさりと翻し、夕日に燃える水平線を愁いを含んだ遠い目で見つめた。

「たとえ、^{ここ}が三国間紛争の最前線だったとしても……俺はここを選んだよ」

潮風がローブをはためかすその背中、無駄に格好良かった。

……本当に、心底、無駄だが。

「せ、先生……アンタ、漢だよ……」

「俺、先生に一生ついてきます……ッ！」

だが、そんなグレンの背中、ごく一部の生徒達（主に男子）の涙腺を直撃したらしい。

まるで信仰に殉ずる愚直な求道者のようなグレンの姿に、感極まった一部の生徒達が熱い涙をはらはらと流していた。

「もう！本っ当に馬鹿ばっかりなんだから！ていうか、うちのクラスの男子、先生が来てから、なんか段々ノリがおかしくなってきたくない!？」

システイーナはそんなクラスメイト達に一抹の不安を覚えざるを得ない。

「ほら、先生！馬鹿なこと言つてないで、さっさと宿泊予定の旅籠へ行きますよ！」
すたすた、とシステイーナや生徒達はその場を移動し始める。

ここから宿泊予定の旅籠までは海岸沿いを道なりに一直線だ。迷う心配はない。

「水着姿を拝みたかった……まあ、そういうことにしときますかね」

旅籠に向かいながら、そう呟くサーシャ。

グレンはあんなふざけたこと言っているが、本当の理由は軍の魔術に関わらせたくない、ということだろう（本人は否定するだろうが）。

「……いかに、先輩らしい言い分だわ」

「え？何か言つた？」

「……いや、暑いからさっさと旅籠に行きましょうや」

そう言つて振り返つたシステイーナの先を越して、サーシャは一足先に旅籠に向かうのであつた。

……サーシャ本人からしてみれば、暑いからさっさと旅籠に入つて涼みかけたからなのであつた。

サイネリア島波止場周辺にある観光客向けの観光街の一角に、今回の遠征学修中に魔術学院の生徒達が寝泊まりするその旅籠はある。

帝国暦の中でも『ワルトリア朝』と呼ばれる古き良き時代に流行した古式建築様式で建造されたその旅籠は、本館と別館の二つの邸宅からなっており、領地持ちの地方貴族が所領に建てるカントリー・ハウスのような壮麗さと、旧時代の懐かしさを同時に兼ね備えていた。

その趣は、鋭角の屋根が特徴的な『サーサン朝』式——フェジテの建造物に主に用いられる新式の建築様式——とは異なり、アーチ型の各種意匠と尖塔、石柱などが特徴的となっている。ちなみに魔術学院校舎もこの『ワルトリア朝』式だ。

エントランス・ホールの高い天井から釣り下がる豪華なシャンデリア、オーク材の螺旋階段の手すりに施された彫刻、廊下の壁に飾られた絵画に、金の燭台、敷かれた絨毯……

魔術学院校舎とはまた違った華麗なる内装は、もちろん、浴場もそれなりに華麗な内装なわけで——

「……はあ、疲れたわ」

生徒達が食事を終え、交代で浴場を使用した後。

浴場には、一人の少女が湯に浸かっていた。

白く透き通った肌に、纏めている雪のように白い髪。アメジスト色の瞳に、目鼻立ちが端整に整っているなど、文句なしの美少女。

スタイルも、平均的な女性よりも身長が高い。胸もルミアよりも多少は小さいぐらいで、全体的に出るところは出て、引つ込むべきところは引つ込んでいるなど、モデル顔負けの体型。

そんな肢体を、少女は誰一人いない浴場で曝け出し、疲れを取っていた。

「~~~~♪」

彼女は魔術学院の生徒ではなく、入った後であれ、もし誰かが来たなら面倒なことになるのは間違いないのだが、少女はそんなのまるで気にしていない。なぜなら、ここには誰も来ないのだから。

鼻歌を歌いながら、少女は目の前に置いてある通信魔導器を持ち、起動する。

「お疲れ様〜♪ヤチエク」

相手が出るなり、機嫌の第一声を発する少女。

『「姫」……だから——』

「今はお風呂よ？誰も来ないように人払いの結界を張っているから、大丈夫よ」

先日のフェジテの件もあり、またかと思いつながら説教を始めるヤチエクを遮る少女――

――アナスタシア。

「今日、サイネリア島に着いたから、その報告♪」

『無事に着いたようだなによりです。で、そちらの予定はどうなっているの？』『姫』
 「今日は何もないし、明日も何もないわ。天候などで旅程が遅れても大丈夫なように余裕を持たせていたらしいから。名目上は、島内散策による島の生態系と霊脈の調査になっているけど、事実上の自由時間ね」

『では、明後日からだと……？』

「そうなるわ。明後日は白金魔導研究所内の見学で、五日目が終日講義で終わり。六日目が自由時間で、七日目に帰るという予定になっているわ」

一体、どこから聞いたのか。魔術学院の生徒でもない彼女はグレンのクラスの生徒達が受講する『遠征学修』講座の主な日程を詳細にヤチエクに話していた。

「だから、動けるのは明後日だけだと思うから、それまでに自由に動けるようにしたいのだけれど……首尾はどう？」

『そこはご心配なく、『姫』。すでに所内を自由に動けるようにいたしましたので』

「さっすが♪仕事が早いわね♪やっぱり、優秀な部下は持つておくに限るわ♪」

すでに仕事を済ませているヤチエクを褒め称えるアナスタシア。

「だったら、明日は実行するだけね。わかったわ、じゃ、帝国軍に傍受されて怪しまれる前に切るわ。また明日」

そう言つて、アナスタシアは通信を切ろうとするが――

『「姫」』

それを、ヤチエクが止める。

『……わかつているとは思いますが、件の王女――』

『……エルミアナのことでしょう？……わかつてるわ』

ヤチエクが何を言いたいのかを察したアナスタシアが、言葉続ける。

「さすがに会いに行こうとは思わないし、会いに行けないわ。リエルが護衛についているし、それに……」本命が目を光らせているから」

『アルベルト＝フレイザーのことですね？』

ん。と頷くアナスタシア。

「リエルというどこをどう見ても、護衛に不適格な人間を彼女の側につけ、ザルだと思わせる。そこを突くようにして現れた敵を」本命が狙撃する。まあ、流石にリエルだけだとあからさま過ぎるだろうから、サーシャをお目付け役として護衛任務に組み込んだというわけなんだけどね」

そう。リエルのことを知っている人間からすれば理解不能な今回の護衛任務は、彼女とサーシャは囿でアルベルトが本命であった。

表向きとはいえ、ルミアは今や一般の民間人だ。

そんな民間人に軍が堂々と護衛をつけたら目立つし、なにより彼女も動きが不自由になる。

それに、これは敵を密かに対処するとともに、天の智慧研究会の尻尾を掴むということも期待しての作戦でもある——もつとも、こんな小細工が件の組織に通じるとは思えないが、やらないよりはマシであるし、何より、それしか手の打ちようがないのが現状である。

だが、それでも戦力配分的には、特務分室のエース級が三人（一人は圧倒的に護衛任務に適していないが）。表向き市井の民草一人を護衛する戦力としては破格の処置だし、天の智慧研究会の人間ではないアナスタシアでさえも迂闊に従姉妹であるルミアには近寄ることなど不可能である。

「いくら私でも、近付いたら、頭を撃ち抜かれるわ。なにせ私は行方知らずの皇女様……私がアナスタシアだと言う事はできないし、言っても信じてもらえるかはわからない」
『……………』

アナスタシアも、相手は違えどルミアと似たような状況で、革命政権と新皇帝派、それに独立派の過激グループに狙われている身である。迂闊に自身を表に明かすことは自身を危険にさらすことになりかねない。

だから、ルミアに会うとしたら、本当に誰もいないし見てもいない、ルミアとアナス

タシア二人きりの時が絶対条件になるのだ。

「だから、そこまでして会いに行くことはないわ。そこは安心して。それじゃ、切るわ」
 そう言つて、アナスタシアは通信を切つた。

「……別に今日が最後つて訳じゃないわ。生きている限り、またチャンスは巡ってくるわ。二人だけになる時間が、きつと……ね」

通信を切つた後、肩まで湯に浸かりながら、アナスタシアはそう呟くのであつた。

一方、旅籠の外では――

「……男つてバカね」

旅籠本館の屋上のテラスから、風呂上りから熱気を冷まそうと、涼を取りに来たシステイーナが頬杖をつきながらジト目で眺めていて――

「た、頼む……カツシユ……『楽園』^{エデン}を……俺達が追い求めた『楽園』^{エデン}を……ツ！俺の屍を越えて……俺の分まで……『楽園』^{エデン}を……、見て、……、来……、……」

「アルフうううううわああああああああああああああああああ——ツ！俺は一体——なんのために戦っているんだああああああああああ——ッ!？」

「はっはっは！……どうした!?!お前らの力はそんなもんか——つて、おい!?!ちよつと待て!?!」

お前ら、そんな風に隊伍を組んでの面攻撃は反則——ふんぎやああああああああああ
ああ——ツ!? あたたたた、痛い!? 痛い!? 痛い!? ビィエル!? ビィエル、助け——ぎやあああ
ああ——ツ!? 痛い!? バカヤロ——ツ! こっちじゃなくて——ひぎやああああああああ
——ツ!?”

林の中では、カツシユ達が女子生徒達が泊っている本館に侵入しようとして——そこから、なにかの茶番が始まり、なにか楽しいことをしていると勘違いしたビィエルが乱入するなど、カオスと化していたのであった。

S e ŝ p a d s m i t (第十六話)

ある者達は、夜遅くまで心ゆくまで遊びながら談笑に耽り、またある者達は夜を徹して激しい闘争を繰り広げ、またある者達は明日に備えて早々に休み、ある者は誰も来ないように結界を張って話しており……それぞれの遠征学修の夜が過ぎていく。

そして――

どこまでも蒼い空。燦々と輝く太陽。焼けた白い砂浜。

清らかな潮騒と共に、寄せては引き、引いては寄せ――千変万化する波の色。そんなサイネリア島のビーチに複数の少年少女達の姿があつた。

グレンのクラスの生徒達である。

「やつほー、システィ〜」

ばしやりと、水着姿のルミアが海の中から姿を現す。

青と白のストライプが可愛らしい、ビキニの水着姿。

その優美な曲線を描く艶めかしいボディラインを伝い滴る水。

潮風に乗って舞い上がる水飛沫が太陽の光を受けてきらきらと輝き、手を振って無邪気に笑うルミアを美しく彩った。

「水が気持ちいいよ！システイもリエルもおいでよ！」

「うん！わかつたわ！今、行く！」

砂浜の一角に寄せ集めていた皆の荷物を整理していたシステイナは、自分の身体をすっぽり包んでいた丈長のタオルをばさりと取り払った。

不意に露わになる、控えめなカーブのラインが清楚な、そのスレンダーな肢体。

腰に巻かれた花柄のパレオがお洒落な、セバレートの水着姿。

明るい太陽の下に、透き通るように白く、張りのある健康的な肌が惜しげもなく晒される。その白磁の肌はただ、眩くて――

たたたたつと、水着姿のシステイナは元氣よく、ルミアが泳いでいる場所へ向かって砂浜を駆けていく。

そして、波打ち際で膝を抱えるように座り込んで、波の押し引きをじつと見つめているリエルのそばで立ち止まり、リエルに手を伸ばす。

リエルも水着姿だが、ルミア達のような華やかな水着とは異なり、リエルはなんの飾り気もない、地味で野暮つたい濃紺のワンピース水着（学院の水泳教練用水着）だ。だが、システイナ以上に平坦な身体のリエルが着用すると、その平坦な線がより

いつそう強調され、逆にルミア達とはまた違った、幼さゆえの清廉な魅力を發揮し始める。

「ほらー！一緒に泳ごう？リィエル」

「……………ん」

しばらく、リィエルは差し出された手をじつと見つめて……やがて、おずおずとシスティーナの手を取り、立ち上がった。

そして、システィーナに手を引かれるままに、海の中へと入っていく。

ざぶざぶと、白い宝石のように波がしぶいた。

そんな中――

「……………あつう〜い……………」

制服姿のサーシャは、近くに立っているヤシの木の木陰に寝転がっていた。

太陽に当たらないように日陰に寝転がり、大気を冷気に変換し、涼を取っている。

……傍から見たら、寒く感じるぐらいに冷房をきかせていた。

「……………サーシャ……………寒い……………冷気がこっちまで来てるんですけど？」

いつものシャツにクラブット、ローブをだらしなく肩に引つ掛けた格好のグレンが、近くの砂浜で立てられた日除けの傘の下にシートを敷き、その上にぐったりと寝転がっていた。

冷気がグレンの所まで来ているから、夏に近付いている季節なのに、冬並の寒さがグレンを襲っていた。

一方で――

「……………え、『樂園』^{エデン}はここにあったのか……………ッ!？」

カツシュにロッド、そしてカイといった、クラスの男子生徒達は、水着姿の女子生徒達を前に、感涙の涙を禁じえなかつた。

「焦らずとも、『樂園』^{エデン}はいずれ俺達の前におのずと現れるから今日は退け……………全て、先生の言うとおりでした……………」

「ごめんなさい、先生……………俺達が……………俺達が間違っていました……………ッ!？」

「なのに俺達ときたら、先生に散々呪文をぶつけて痛めつけて……………ッ! 目先のことばかりしか考えられなくて……………ッ!」

「ありがとうございます、先生……………どうか、あの世で安らかに眠っていてください……………俺達のことを、ずっと見守っていてください……………」

カツシュ達が見上げる青い空に、グレンの爽やかな微笑が幻のように浮かんで……………

「いや、生きてるから、俺」

ふて腐れたようなグレンの声が、自分達の世界に浸っている男子生徒陣の背中に浴びせかけられた。

あの様子だとグレンは一晩中、なにがなんでも女子の部屋に行きたい男性生徒達の攻撃を受け続けていたようである（+ビィエルからどつかれまくっていた）。

実際、黒魔「シヨック・ボルト」の呪文を手加減し、いくら生徒達の身体にダメージが残らないように優しく意識を刈り取ってやっても、何度でも執念で復活しては執拗にかかつてきていたのだから、流星のグレンも未だに身体中が痛くて泳げるような状態ではなかった。

「……まったく、いつでもどこでも騒がしいことで……」

そんなグレン達のやり取りを見ながら眠気がきたので、サーシャはそのまま眠るのであった。

——夢を見る。

これが初めてではなくて……そして、もう見たくもない悪夢。

目の前には、母親が倒れて血の海に沈んでいる。

何回も何回も身体を揺すっても、母は何の反応もしない。とつくの昔に死んでいるのに、それを受け入れたくないのか、なんども揺すっている。

何名かの男の声で、我に振り返り顔を振り上げると、自分の額に銃剣を向けていた。

男達が何かを言い合っているが、そんなの耳に入らない。確かなことは、これから殺されるということ。

これから訪れる末路に、硬直してしまったまま動かない。何も悪いことしてないのに、この理不尽な訪れを受けるなんてと嘆いている。そんな思考などどこにもない。

そして、男が銃剣で刺そうとして――

「……くん……くん」

……。

「……君、……サーシャ君」

……。

「……サーシャ君ッ！」

「――ッ!？」

悪夢から目が覚める。現実に戻る。

五年前のあの血に塗れた部屋ではなく、目の前に広がるのはサイネリア島の白い砂浜と。

「ちよつと、貴方、大丈夫？」

「なんか、凄くうなされていたけど……」

水着姿のルミアがサーシャの身体を揺すつていて、システイーナが心配そうにサーシャの顔を覗き込んでいた。

悪夢を見たせいなのか、全身汗がびっしょりで気持ち悪い。

「……ちよつと悪い夢見ていたから、それでね……もう大丈夫」

そう言つて立ち上がるが、身体が少々ふらついていた。

「あの……本当に大丈夫？ 顔色悪いわよ？」

「大丈夫……大丈夫だから……」

サーシャはそう言うが、本当は大丈夫じゃなかった。

あの悪夢は何度も見る。

五年前、とある身分で一般と比べて自由ではなかったが、それなりに安寧としていた日常が突如、壊された。

あの男が全てを壊した。帝国連合を崩壊させ、自身の思い通りにするために権力を握つた。そして、それを盤石にするために、自分に敵対する者達を片っ端から抹殺を凶つている。そして、それは残念なことに順調に進んでいる。

「……で、どうしたの？ 皆で遊んでいたんじゃないくて？」

「あつ、それが、これから皆でビーチバレーでもしようつていう話になって……それで、

先生とサーシャ君もどうかなって思ったんだけど……」

「……あー、それだったら、途中からでもいい？今はちよつと乗り気じゃないっていうか、ね」

だから、今度はこつちが壊してやる。そのために国家保安委員会に入ったのだから。「うん、わかった。でもあんまり無理しないでね」

そう言つてグレン達の元に向かつていくルミア達を見送りながら、サーシャはある物以外を奪つていき、壊して今は権力の座にいる男に復讐して目的を果たすことを胸に誓うのであった。

因みに、サーシャはビーチバレーに途中で参加するのだが……

「……おい、サーシャ、どうしたその格好……」

「……？水着ですけど？」

「んなわけあるかッ!?なんだよ、見てるだけで寒くなりそうな水着は!?ていうか、寒いわ！涼しいを通り越して寒いわ！」

「仕方ないじゃないですか、暑いんだし」

サーシャは自称水着姿に——雪だるま姿で全身を包んで砂浜に立っていた。

白い砂浜に雪だるまという、なんともシユールな光景の中、グレンのチーム対サーシャのチームの試合が始まり――

あんな傍から見たら動きにくい格好にもかかわらず、動き回るサーシャなのであった。

その日はクラス一同、散々遊び倒した。

海から引き上げたら、観光街を練り歩いて。

日が暮れたら、皆でわいわい騒ぎながら砂浜でバーベキューをして。

楽しい時間は飛ぶように過ぎ去っていく。

そして――

時分はすっかり深夜。就寝時間を大きく回り、外はすっかり暗い。

大方の生徒達は、今日一日の遊び疲れで、すでに眠りについていた。

観光街は、オイル式の街路灯やランプが炊かれ、町はまるで夕方のように明るい。新し物好きな富裕層が好む最新式の照明設備であるガス灯ならまだしも、オイルのランプ

でこの明るさを出すのは相当なものだ。

オレンジ色に点々煌々と燃え揺らめく無数の炎の光が町の陰影を絶え間なく揺らし、土壁の建物と街路樹で構成されるサイネリア島観光街は、この上なくエキゾチックな雰囲気を出していた。

そんな町の外、ダークブルーに染まった海と水平線、空には白銀にの三日月が輝く白砂浜の海岸に。

「ほら、システイ、サーシャ君、早く早く」

「ねえ、ルミア……その……やっぱりまずいわよ……」

「いくらグレン先輩でもな……ていうか、あれだけ遊んだのに、元気だなあ」

「すぐに戻れば大丈夫だよ。それよりも早く海、見よう？絶対、物凄く綺麗だよ？」

「海なんて、昼間、散々見たでしょう？……あー、もう、貴女つて子はっつー！」

「まあ、いいんじゃない？ウチらがいるから」

砂浜に現れたのは、ルミアとシステイナ、そして護衛としてサーシャと……

「……一体、これから何をやるの？」

三人の後を雛鳥のようについてきたリイエル。

「ふふ、皆で夜の海を見るの。今日は月が明かるいから、きつと凄く綺麗だよ？」

「……そう。よくわからないけど」

因みに、四人の他に、離れた木陰に潜むようにグレンが腰かけていたのだが、それに気付いていなかった。

そして。

「…………あ」

波打ち際までやってきたルミアとシステイーナの二人は、その雄大で幻想的な、夜の海の光景に圧倒されていた。

「綺麗…………」

「…………本当ね…………月夜の海がこんな綺麗なものだったなんて、知らなかったわ…………」
緩く吹いている潮風が、四人組の髪や服の裾を揺らす。

「ね？システイ。来て良かったでしょ？」

「…………う。そ、それは、まあ…………確かに…………でも、これとそれとは話が別よ、ルミア！部屋をこっそり抜け出して海を見ようだなんて…………」

怒ったようにシステイーナが言うが、ルミアは穏やかに笑うだけだ。

「うーん、俺が『今夜は月がはつきりしているから、海は綺麗かもね』と言ったのが、運の尽きだったかな？」

サーシャは曖昧な表情で苦笑いするだけだ。

「あはは、システイも結局、止めきれずについてきちやっただじやない。やつぱり、見てみ

たかつたんじやないかな？」

「……………う、ぐ」

凶星だったらしい。言葉に詰まってしまいうスティーナ。

そもそも止めきれずに、ここまでついて来てしまった時点で同罪だ。

「はいはい、私の負けね。はあ……………まあ、せつかく規則を破つてまでこんなところに来たんですもの。堪能しなきゃ損ね……………」

「うん、そうそう」

「なんていうか……………ルミアって本当に見かけによらずやんちやだよね」

「そうなのよ。昔っから、やんちやなんだから……………」

「ふふっ、二人とも、ごめんね」

ルミアは悪戯っぽく笑った。

「それにしても本当に綺麗だね。ウエンディやリン達も来れば良かったのに……………」

「仕方ないわよ。あの二人、なんだかすごく眠そうだったし……………」

そして、二人は再びこの風景に魂を奪われ始める。

サーシャも、何かを物思いながら風景を眺める。

やがて、ふと。

先ほどから一言も発せず押し黙りっぱなしのリエルの存在を思い出したらしい。

「……リイエル？」

不安になったのか、ルミアは背後にいるはずのリイエルを振り返った。

その不安は杞憂に終わり、いつもと変わらない様子のリイエルがそこにいた。

「……どう、かな？リイエルにはやっぱり、退屈だった……かな？」

「……………」

リイエルはルミアの恐る恐るな問いかけに応じず、無言。

そんなリイエルの素っ気ない態度にルミアが再び不安を感じ始めた、その時だ。

「……そんなことは……ない」

ぼつり、と。

意外な言葉がリイエルの口から突いて出てきた。

「……………え？リイエル」

「こんなの……初めて見た……なんだろう……よく、わからないけど……」

迷うように。

言葉を探すように。

リイエルが一言、一言、言葉を一生懸命紡いでいく。

「……………この光景は……飽きない」

月明りによく目を凝らしてリイエルの顔を覗き込めば、リイエルは常に眠たげに細め

られた瞳を、今だけはいっばいに開いて、月夜の海を一生懸命見つめていたようだった。そんなリイエルの様子に、ルミアは安堵したような、そして慈しむ様な笑みを浮かべて言った。

「私ね、リイエルと知り合えて、とても良かったって、そう思う」

「……良かった？わたしと会えて？……どうして？」

リイエルはほんの少しだけ不思議そうに瞳を揺らし、問い返す。

「うーん、なんだろう？こういうのは理屈じゃなくって……」

少し困ったようにルミアは笑って。

「あなたと、こうして友達になれたことが、とても嬉しいの」

「……ともだち……？」

虚を突かれたように、リイエルが硬直した。

「……わたしと……ルミアが……ともだち……？」

「うん、そう。あ、もちろん、システイも入ってるよ？」

「ちよつと、ルミア……何よ、そのついで感」

「あはは、ごめんごめん」

ぺろつと小さく舌を出して笑うルミア、呆れたようにため息をつくシステイーナ。

そんな二人の様子を、リイエルは横目で眺めていて。

「……ともだち……よくわからないけど」

戸惑うように、言葉を切つて。

「……嫌じゃない」

そんなことを、いつものように感情の読めない表情で呟いて、再びリエルは月夜の海へとぼんやり目を向けた。

ルミアはそんな素っ気ないリエルを見てにつこり笑つて。

何を思ったのか、靴と靴下をいそいそと脱ぎ始めた。

「……ルミア？ 貴女、何を……」

システイーナの問いに応じず、ルミアはぼしやぼしやと海の中へと入っていく。

「ちよつとちよつと、ルミア！ 貴女、何やってるのよ!?」

そして、ほっそりしたその脛が海水に浸るくらいのところまで、ルミアが両手を大きく広げ、くるりと振り返る。

金糸のような髪と、服のすそが、ふわりと広がった。

満天の星を背に、月に照り返される海面に浮かぶ少女の無邪気な微笑み。

それは一種、侵し難いほどの神聖さと神秘さに満ちた光景だった――

「ふふっ、水がとつても気持ちいいよ……」

「……、こらっ！ ルミア！ 戻つてきなさいって！ 服が濡れちゃうじゃない！」

「大丈夫だよ、システイ。替えの服は持つてきてるから」

「そ、そういうことじゃなくて……」

なんと宥めたらよいものか。システイーナが一瞬、逡巡していると――

きらきらと輝く銀の飛沫が、宙を舞う。

「……きやあつ!?!」

輝く飛沫を受けたシステイーナが悲鳴を上げる。

その冷たい感触から、飛沫の正体が海の水であることをすぐに察する。

「あははっ!」

ルミアが両手で足元の水をすくって、システイーナに投げかけたのだ。

当のルミアは悪戯っぽく笑いながら、システイーナを見ている。

「や、やったわねーっ!?!もう許さないんだからっ!」

怒ったような素振り、システイーナが靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ捨てる。

そして、システイーナは、一瞬、波打ち際で躊躇うような素振りを見せたものの、すぐに迷いを振り払うかのように、海の中へと足を踏み入れ――

「このっ!?!のっ!」

「きやっ!」

ルミアへ向かって水を飛ばし始める。そんなシステイーナの表情は、怒っているとい

うより、どこか嬉しそうに生き生きとしていた。

「おーい、遊ぶのはいいけど、ほどほどにしとけよー?」

そんな二人のじやれ合いをサーシャは苦笑いで眺め、砂浜に腰かける。

今は、この星空を眺めていたい。

やがて、ルミアの呼びかけに応えるようにリイエルも靴と靴下も脱がず海の中へと足を踏み入れ、システイーナに大量に水をかけている。

そこからは、少女達は夢中で水かけっこに興じていた。

楽しげな笑い声。

怒ったような叫び。

時折上がる悲鳴。

ひっきりなしに聞こえてくる水音。

子犬や子猫がじやれ合うような、姦しくも微笑ましく少女達が戯れる光景。

きらきらと輝く水の珠が空を舞っている。

まるで、波間に踊るように……

「……まったく」

サーシャは、そんな少女達を微笑ましく流し見、そして再び星空を眺める。

しばらくすると。

「サーシャ君」

どれくらい眺めていたのか。ふと、声をかけた方を振り向くとそこには濡れ鼠になっていたルミアが隣に腰かけていた。

海の方を眺めると、システイーナとリエルが水かけっこをしており、すっかり濡れ鼠になっていた。

再び星空を眺め……しばらくすると。

「……五年前、まだ革命が起きる前なんだけど、一回サイネリア島に寄ったことがある」
「……サーシャ君？」

訥々と昔話を始めたサーシャに振り向くルミア。サーシャの顔はどこか懐かしむよ
うな、そんな表情をしている。

「その時に、この時間帯と同じぐらいに母とこっそり抜け出して夜の海を見に行ったん
だけど……その時もこのくらい綺麗な光景だった」

「……」

「懐かしい。こういう景色を二回も見れたし……この護衛任務を受けて本当に良かった
と思う」

懐かしむサーシャを見てルミアはくすくすと微笑む。

「……どうした？」

「ううん、なんかサーシャ君って従姉妹に似ているなあって思ってた」

「従姉妹……皇女様のこと？」

「うん。五年前、まだ私が廃嫡される前に、一回会ったことあるの」

五年前というのは、恐らくアルザーノ帝国と東セルフオード帝国連合の最後の首脳会談になったあの時のことなのだろう。

「その時にアナスタシア……ナーシャって呼んでいたんだけど、あの子もその前にここに寄って綺麗な星空を見たって言っていたの。その時の話している顔が今のサーシャ君とそっくりで」

そう言つてにつこりと微笑むルミアに、サーシャは一瞬、押し黙る。

「あの子、今はどうしているんだろう？革命で行方不明で……亡くなったという情報もあるけど……もしかして帝国にいたりして、とか思っちゃったりして」

革命で崩壊し、今は行方不明のアナスタシアの現在を案じているルミア。

「ルミア……実は……」

「……サーシャ君？」

サーシャが何か言おうとするが……

「……いや、なんでもない」

少し躊躇し、言うのを止めた。

「困みにだけど、ルミア。……リエルのこと友達って言ったけど、俺もその中に入っているかな？」

五年前と同じ景色を眺めながら、サーシャがルミアに問うと。

「ふふっ、もちろんだよ」

「……そう、か」

穏やかに笑うルミアに、サーシャがふつと笑みを零し。

「……そろそろ、帰りましょうか？」

「うん、そうだね。今日はありがとう」

そう言って、ルミアとサーシャは立ち上がり、システイーナ達の元へと向かっていくのであった。

Septi? padsmit (第十七話)

そして次の日、研究所見学の日がやってくる。

午前中に軽めの食事を取ってから、グレンと二組の生徒達は観光街の旅籠を出発。サイネリア島の中心部にある白金魔導研究所を目指し、そろそろと歩き始めた。

北東沿岸部の観光街周辺こそそれなりの開発と発展が進んでいるサイネリア島だが、実は島の敷地のほとんどは今もなお、手つかずの樹海であり、未知の領域でもある。

その未知の領域の生態系は、未だ完全には掴めておらず、魔術学院や帝国大学の調査隊が定期調査に入るたびに、新種の動植物や魔獣の発見が報告されるほどだ。

確実な安全が確保された島の北東沿岸周辺と野外散策用のいくつかの例外区域を除き、今の大部分は今もなお、一般人立ち入り禁止とされている。

今回の『遠征学修』の目的地である白金魔導研究所は、そんなサイネリア島のほぼ中心部に設置されている。

グレン達は北東沿岸部と中心部を繋ぐ道を、島の中央を目指して延々と歩く。石畳で

舗装された、樹海を貫く道の左右には鬱蒼と茂る原生林が踊っており、のびのびと手を伸ばす梢が頭上を覆い隠し、僅かな木漏れ日が道に細やかな光の切れ端を形作っている。

舗装された道とはいってもフェジテのような精緻な石畳には程遠く、自然の起伏がはつきりとわかるほど残っており、石の並びも雑で、歩きにくいことこの上ない。場所によつてはまったく舗装されておらず、道なき道になつている領域すらある。

軍生活の長かつたグレンや、現役であるサーシャ（日光が直接当たつてないから）と田舎地方出身で学院に通うためにフェジテにやつて来た数少ない例外の生徒を除き、基本的に都会つ子な生徒達は早くも根を上げ始めた。

まあ、そんなこんなで苦労しながら目的地まで向かう一行なのだが、その時。

「うるさいうるさいうるさいうつー」

突然張り上げられた声に、クラス全員が思わず足を止め、張り上げた声の持ち主——リイエルに注目する。これには、研究所に着いてからの行動を考えていたサーシャも、思わず思考を止めてしまうほどだ。

あの大人しいリイエルが、こんなにも敵意むき出しな激しい声を上げるなんて。

信じられない、という感情が、皆、その顔にありありと表れていたし、サーシャも今まであんなリイエルの姿なんて見たことなかった。

「関わらないで！もう、わたしに関わらないで！いらいらするから！」
「……っ!？」

「わたしは——あなた達なんか、大嫌い！」

当のリエルは一方的に子供のようになめき立て、システイーナの手を振り払うと、ふいつと二人に背を向け、肩を怒らせて歩き去っていく。

後に残されたのは、呆気に取られて言葉を失ったルミアとシステイーナだ。

「……な、なんなんだ……？」

「あの三人って……昨日まで結構、仲……良かったよな……？」

「なんだかんだで打ち解けられたと思ったんだけど……」

「……何があつたのかしら？」

ひそひそと。

そんなルミア達の様子を気まずそうに窺いながら、生徒達が口々に囁き合う。

(……一体、何が……?)

サーシャも、突然のリエルの豹変に訳も分からず、ただ、リエルの背中を見るだけだ。

昨日の夜遅くまでは、あの二人を嫌っている様子なんてなかったのは明らかだ。なのに、この突然の態度の豹変は一体、何なのか、さっぱりわからない。

何かあったとするならば……それは、ルミア達も寝静まった後から今日の朝の間だろう。今日の朝なんて、リエルはなぜか旅籠におらず、全員で探し回ったほどだ。

(訳が分からない……朝までに何があったんだ?)

いや、それよりも今、護衛の一人が護衛対象を拒絶しているということに、サーシャは今後の行動に支障が出るのではないのかと懸念を抱いていた。

背後にアルベルトが控えているとはいえ、囹であるこちらが護衛任務を事実上放棄するなんてあり得ないことだ。

原因はわからないが、こうして護衛対象を拒絶している以上、しばらくはサーシャがルミアに張り付かなければならない。

(……困ったことになった)

さて、どうしたものだろうかと、サーシャが計画の見直そうとした時。

「……あいつはさ、子供なんだよ」

ぼつり、と。背後からグレンが零していた。

移動隊列の殿を務めていたのだが、今の騒ぎで全体的に足が止まったせいで、追いついたらしい。

「見た目はお前達と同じくらいのならをしちやいるが……心はまだほんの小さな子供なんだ。そうならざるを得なかった特殊な生い立ちなんだ……」

(……生い立ち?)

グレンの言葉を聞き逃さないサーシャ。

そういえば、シーホークから出発する前にグレンはアルベルトと会っていた。

二人に気付かれずに、サーシャは二人の会話を盗み聞きしていたのだが。

——リリエルに気をつける。

——おいおい、もう気をつけてるよ。あいつが暴走しないように、どんだけ俺が……

——そういう意味ではない。リリエル……あの女は危険だ。

——俺とお前だけはリリエルの危険性は知っている筈だ。

——……あれはもう昔のことだぜ。今のリリエルは……リリエルだ。

(……あの会話を聞いた感じ、二人はリリエルの本当の素性を知っている。知っていてそれを隠している)

どうやらリリエルは、二年前に天の智慧研究会から保護されたという単純な事情ではないらしい。

(二年前、何があったんです?)

リリエルの素性を隠しているグレンを、サーシャは横目で見ながら、物思うのであった。

それから、二時間ほどが経過した。

切り立った崖に面した道を蛇行し、谷間にかかったつり橋を渡り、冷たく透き通った水の流れる渓谷沿いに進み……一行はとうとう、白金魔導研究所へと辿り着く。

「……こんな僻地に建てるなんて……もう少し良い立地あつたんじゃないの?」

少し疲労を感じ始めていたのか、毒づきながら正面の研究所を見上げる。

白金魔導研究所は、そのすぐ背後を切り立った崖から流れ落ちる圧巻の滝、両側を原生林に囲まれた神殿のような建物だった。研究所正面前広場は開けており、前後左右に間隔を空けて規則正しく並んだ正方形の敷石達、疎らに生えた水生の樹木達、そして敷石の間は絶えず綺麗な水が浅く流れている。

常に耳をくすぐる水の流れる音、滝つぼから常に上がる水煙が神殿の足元を微かに白く曇らせ、空に輝く太陽の光をきらきらと照り返し、七色の虹を鮮やかに纏うその風景。観光用の景勝地としてもまったくおかしくない絶景だった。

「古代遺跡の中に研究所が建っているのか、それとも研究所とこの光景がセットで古代遺跡なのか……」

なんとも現実感のない光景に、サーシャはついそんなことを口走ってしまう。

「はあ……はあ……もうだめ……」

「つ、疲れた……」

もつとも、周囲はすっかりくたびれてしまい、この光景を堪能する余裕はないのだが。リイエルは集団から少し離れた場所で、何をするでもなく立ち尽くしていた。

「えーと、ひい、ふう、みい、……ちゃんと全員いるな？はぐれた奴はいねーな？」

グレンが生徒達の人数を繰り返し確認していた、その時だった。

「ようこそ、アルザーノ帝国魔術学院の皆様。遠路はるばるご苦労様です」

グレン達の前に、ローブに身を包んだ一人の男が現れていた。

歳の頃、四十、五十の初老の男だ。頭の天辺はすっかり禿げ上がり、残った髪や口元に生やす髭にも白いものが見え隠れしている。だが、いかにも好々爺然としており、不思議と親しみやすい雰囲気を持っていた。

そして、サーシャはこの男を書類で知っていた。

(バークスIIブラウモン)

彼の名は、バークスIIブラウモン。白金魔導研究所所長で、現在諜報機関からある疑惑が浮上している男だ。

(まあ、こんな大勢いるところで、何かしでかすとは思えないが……)

サーシャがそう思っている中、グレンは額の汗を拭いながら背筋を正し、バークスに向き直り、微妙に丁寧じゃない物言いで挨拶する。そんな物言いに、バークスは機嫌を

損ねることなく朗らかに応じていた。

「ここにいらつしやる皆様は、帝国の将来を担う魔術師の卵達。そんな彼らの糧となり血肉となるならば、これ以上のことはございませぬ」

「はは、あんた、人格者だな。俺だつたら面倒くさくてやつてられませぬよ」

グレンは苦笑いしながら肩を竦めた。

確かに、今のバークスは人格者だ。誰がどう見ても人格者と思うだろう。

だが、疑惑が浮上していることを知っているサーシャから見れば、バークスの今は仮初の姿にしか見えない。

「それでは、早速参りましょう。グレンさん、生徒達をまとめて私の後についてきてください。私が研究所内を案内いたします」

「は？まさか……あんた自ら研究所見学の引率をやってくれるつていいのか!？」

ぎよつとしたように、グレンがバークスを見る。

「いや、流石にそれは気が引ける……あんたも自分の魔術研究で忙しいだろうに……別にあんたが直々にやらんでも、誰か係の者でも手配してくれれば……」

「いいんですよ。私としても魔術の研究ばかりでは気が滅入りますし、たまには若者と触れ合うのも良いのです。それに私の権限ならば、普段は立ち入れない区画をご覧いただくこともできます。やはり我らが帝国の未来を担う若者には、最高のものを見てい

ただき、たくさん学んで欲しいものですから」

「……ま、……マジっすか？まさかそこまでしてくれるとは……いや、ありがとうございます、ホントに」

流石のグレンも、このパークスの厚遇には恐縮せざるを得ない。

本当に人格者である。

だからなのだろう。

「ねえねえ、聞いた？ルミア。今回の『遠征学修』なんだか凄いことになりそう！最新の魔術研究を見られるなんて、物凄い幸運よ！普通は最新と銘打つても、一、二世代前の研究しか見学できないのに！」

浮き足立つシステムも、恐縮しているグレンとは違い、サーシャはパークスのあの視線を見逃さなかった。

ほんの一瞬だけ、ルミアを氷のように冷たい目でみているのを。

そして、それはルミアも薄々勘付いており、不安げな表情になっており……それを気のせいと自分に言い聞かせて、努めて忘れることにしていた。

それから時間はあっという間に過ぎた。

次から次へと目の前に現れる神秘の数々、尽きぬ驚きの連続。将来何らかの形で魔術に関わる道を志す魔術学院の生徒達にとつて、実に有意義な一時であった。

名残惜しい思いを抱きながらついた帰路、見学の興奮冷めやらぬ生徒達は悪路を踏破する疲労も忘れてひっきりなしに魔術論議に花を咲かせ、いつの間にか北東沿岸部の宿舎に到着した時には、もうすっかり日が落ちて暗くなっていた。

自由時間の開始である。元気のある者は町へ食事を取りに行ったり、露天を冷やかしに行ったり、疲れた者は宿舍の部屋へ休憩に戻ったりと、生徒達は幾つかのグループを作って思い思いに行動を開始し始めた。

そんな中。

『……護衛が護衛対象を拒絶した?』

「ええ」

旅籠の屋上にて、アナスタシアは通信魔導器でヤチエクとボリスに同時通信で今日の出来事を話していた。

『それは何故で?』

「私にもわからないわよ。昨日の今日で突然豹変したんだから。グレンは何か知ってそうだったけど」

正直、何が気に障ったのかわからない。今までが演技で、あれが本性なのかというと、

それは違う。おそらくどれもリエルの本当の姿なのかもしれない。

「どちらにしろ、そのおかげで、あの子をずっと見なくちゃいけなかったの」

『バークスが自ら出てくれたのか、唯一の救いでしたか』

「ええ、そう」

ため息を吐くアナスタシア。

「ねえ、ボリス。リエルのことなんだけど、調べることできる？」

『調べると言いますと？』

「二年前、リエルは天の智慧研究会の研究所から救出され、保護された経緯を持っているわ」

『二年前……確か、グレンⅡレーダスとアルベルトⅡフレイザーが研究所を襲撃した、あの時ですか？あの時は、内通者と連絡が取れなくなつたとかで研究所に襲撃せざるを得なかつたと……』

「そう、それ。内通者って結局どうなつたの？」

『内通者は死亡、しかし研究所が制圧した時に内通者が作成した資料を押収しています』

「……そこから、リエルの過去がわかると思う？」

『……調べてみましょう』

なぜ、その資料からリエルの過去がわかると思ったのか、疑問を呈するのが普通な

のだが、察したボリスはそう言って、通信を切った。

「ヤチエク、それと——」

ヤチエクに何か言おうとした、その時。

どかんツ！

と、どこからか何か蹴破るような強い音がアナスタシアの耳まで届いた。

「……?」

アナスタシアが、音がした方向を見る。音がしたのは旅籠本館だ。

何事かと思っていると、上空を飛び回っていたビィエルがアナスタシアに急降下してくる。

肩に乗ると、ビィエルがただならぬ様子で鳴く。危険を知らせるような鳴き声に、アナスタシアは事態の深刻さを察した。

「ヤチエク……問題が起きたわ」

『問題?なにが——』

ヤチエクの問いに答えることなく一方的に通信を切るアナスタシア。

「……わけのわからない問題が、さらにわけわからなくなってきたわ。いや、これではつきりした、と言った方が良いのかしら?」

ため息を吐くアナスタシアは、屋上から降りていく。

降りていきながら。

「……リエルは危険な女だつてことを……アルベルトの言う通りになつたわね」
そう言うアナスタシアの声音は……これまでにないほど冷たい声音だつた。

アルザーノ帝国・サイネリア島・後編

В?с?мн а д ц я т ь (第十八話)

今から一年半前のこと。

シリエーブリヤヌイグラードから南方に位置し、ルシタニアとエーステイの国境に位置する古都プレスコフ。その市庁舎の応接間にて。

「……やはり行かれるのか。敵の懐に」

上座の中央の席に腰かける高級将校が、向かい側に座っている男に言った。

「ええ、そうします」

向かい側の男が決定事項だと言わんばかりに返す。

「オ国家^ル保安^ガ委員^シ会は中央委員会閣僚附属機関です。極秘情報を取り扱っている組織でもあり、上手く入り込めば、そこからなにかしらの情報を得られるかもしれません。既に一人、オルガンに潜入しており、今は第一総局第三課課長に就いております。今なら全てではありませんが、機密情報の閲覧ができる権限もありますし、我々をスカウトする

権限もあります」

「そこに、貴殿と姫が潜入し、内部から崩壊させると……ふむ」

腕を組み背を深く預ける高級将校の顔は、不満げな顔を見せながらしかし、東、西、南からは赤軍が、北からはエーステイからの独立派に包囲されている現状、それしか方法がないのも理解しているような顔だった。

まあ、帝政派の精神的支柱であり、帝国連合皇族の唯一の生き残りである彼女を敵の中枢機関に送り込むのだ。当然、この案が提示された時には猛反発が起きた。

だが、この案が提示してきた人物は彼女——アナスタシア自身であることが男——ヤチエクからの発言でわかったことにより、大多数の人物が渋々ながら承知することになった。

だから、ヤチエクにはアナスタシア絶大な忠誠を誓っている高級将校——アレクサンドルⅡサムソフ騎兵大将が半ば納得しておらず、不服であるということもわかった。

「……それで、実は將軍にある物を託したいと姫から……」

もう決定事項なのだから、これ以上の言葉は無用とヤチエクは判断し、本題に入るために足元に置いてあった一つのスーツケースをテーブルの上に置く。

「それは？」

「革命前に陛下が」ある人物の調べ物を「命じ、結果を纏めた報告書です」

「……………」

「オルガンに乗り込む以上、この文書を全部持つて行くわけには参りません。この文書には革命政権の正体とこの革命の真実が書かれています。もし敵の手に渡れば、真実は永遠に闇に葬り去られます」

「して、この文書をどうしろと?」

「將軍は文書を開封してもらい、然る時にこの文書の内容をある人物に伝えてもらいたいのです」

「ある人物とは?」

「アルザーノ帝国女王アリシア七世」

「——ッ!」

スーツケースを受け取った瞬間、明かされた宛名先を聞き、手を止めるサムソフ將軍。

なぜこの文書を異国の首脳に伝えなきゃいけないのか、一瞬、疑問に浮かんだが、この革命は東セルフオード帝国連合国内だけの問題ではなく、もつと大きな思惑が渦巻いているとすぐさま直感した。

「この革命は、国内の問題に非ず。特にアルザーノ帝国政府にはなんとしても耳に入れ

ておかねばならない情報。陛下からの言葉です」

そして、これが亡き皇帝陛下からのお言葉である以上、サムソノフ将軍に断る理由なぞなかった。

「……了解した。陛下が心血注いでまで調査したこの文書、必ずアルザーノ帝国へ伝える」

「……感謝いたします。陛下もこれで報われるでしょう。 ヴッ・ドゥリヤ・ロディニイ 全ては祖国のために」

そして、ヤチエクは席を立ち、応接間から去ろうとする。

「将軍。わかっているとは思いますが、全てが上手くいけば、我々はこの内戦に勝利し、この母なる祖国を……いえ、世界を救うことができるでしょう。故に失敗は許されないということをし、ゆめゆめお忘れなきよう」

そう言い残して、応接間から去っていくのであった。

そして、サーシヤ達が遠征学修に出発する前。プレスコフは帝政派と革命政権・独立派との度重なる熾烈な攻防の末、赤軍によって陥落した。

この戦いで、サムソノフ将軍はプレスコフを防衛していた東セルフオード帝国連合軍

北西方面軍第三十軍団、ルシタニア大公国軍第十七師団と共に敵に突撃し、玉碎、全滅。玉碎直前、サムソノフ將軍はアルザーノ帝國政府上層部に例の文書を焼却処分した後、その内容を伝達しようと試みるのだが――

――その文書は、アリシア七世の元に届くことはなかった。

北東沿岸部の街を発ったアナスタシアは、サイネリアとう中央部に向けて、鬱蒼と茂る樹海の中を疾走していた。

「まったく、あの子、なんて速きなのツ！ルミアを抱えているつてのにツ！」

旅籠からルミアを担いで飛び出したリエルを追跡していたアナスタシアは、激しく起伏する樹海の木々の隙間を、ひらりひらりと身軽に走破していく。

その様はまるで林立する樹木の間を駆け抜ける一陣の風のような。

だが、リエルはそれ以上に速く駆け抜けており、かなりの距離を開けられていた。

まあ、リエルがどこに向かっているのかはある程度は目処がついているから、距離が開けられていても問題はないのだが、できればその前に決着をつけたかった。

「でない、面倒なことになるっていうのに……上手くないものね」

駆けながら、アナスタシアはぼやく。

「向かっている先は……白金魔導研究所。そこを少し外れた場所ね」
駆けながら、ちらりと周囲を見渡す。

鬱蒼と茂る樹木がどこまでも連なっており、その隙間を深淵に続くかのような闇が満たしている。微かにキリが出ているのか、空気は重く湿っぽい。いがらっぽい緑の匂いは、足を進める都度、どんどん濃く強くなっていく――

「あの情報――白金魔導研究所関連の資金の流れに微かな違和感があったあの情報を洗ったらバークスⅡブラウモンが天の智慧研究会と密かに繋がっていた可能性があったらしいけど、これで確定ね」

リエルが向かった先にバークスがいるというのは、連れ去った方向からしてもわかる。

「その資金は、極秘に地下研究所を造っていた。何らかの実験を行うために。そして、ルミアはそこに連れ込まれる」

その地下もある程度は目処がついていた。

なにせ、バークスの研究分野は特殊な環境を必要としているのだ。

それは、水。

白金術は土地に通う霊脈もそうだが、特に水は必要不可欠で、自然と地下水路が必要になる。大規模な水路を用意できる場所、土地の高低差、そして霊脈の条件。それだけ

揃えばこんな広大な樹木の中でも場所はかなり限られてくる。

そして。

樹海が尽き、一気に広がる視界の先には、周囲を深緑の樹木や山岳に囲まれた広大な湖があった。透き通った冷たい水を湛え、鏡のような水面に銀月が淡く映っている。日が高ければ、その湖畔を是非、釣竿や弁当を持って散策してみたい絶景だが、今はそれどころではない。

その岸辺で、アナスタシアは一旦、足を止めた。

「こういう時に、ピィエルがいて助かったわ。方角的に南西方面、そこに地下水路の入り口があるはず。不自然な水の流れがあるはずだからそれを辿れば見つかるはず」

そして、黒魔「エア・スクリーン」の呪文を唱える。

アナスタシアの周囲に圧縮空気の間が球体状に形成される。そのまま、二人が湖の中へ足を踏み入れると、周囲の水が球体状に彼女を避けていく。

「待ってて、ルミア。必ず助けるから」

そう言って、空気の膜に守られたまま、湖の中へ姿を消した。

しばらくの間、湖の底を無言で探索していたアナスタシアは、程なくして不自然な水

の流れが行き来する横穴を発見する。

確信と共に、その岩肌の横穴を発見する。

真つ暗闇の中を、指先に灯す魔術の光を頼りに進んでいく。

……どれくらい歩いただろうか。

やがて水中に不自然に開けた場所に出た。四方は明らかに人工的に石垣を並べて作られた壁。頭上を見上げれば、揺らめく水面が見え、淡い光が差しているようだ。

アナスタシアは「エア・スクリーン」の魔術を調整して、水の底から浮上する。

そして、水上に出たアナスタシアは傍にあった通路状の足場に飛び乗った。

周囲を見渡すと、そこは貯水庫のような場所だった。アナスタシアが今やってきた、一際大きなプールを中心に、水路と水路を挟む通路が、大小様々なプールとプールを繋ぎ、延々と迷路のように複雑に絡み合っている。所々に水生系の樹木が林立し、あちこちにヒカリゴケが群生しているその様は、白金魔導研究所の風景と酷似していた。

「……ビンゴ」

さて、これからどうするか。

ビィエルは今、白金魔導研究所で待機しているから、とりあえず『目』となるものを用意して先行させようとするのだが……

「……その前に」

アナスタシアは、左手を目の前の水路に向け、何か呪文を唱える。

すると、目の前の水路が表面から凍り始め、やがて水中の中も凍結してしまった。

「悪いけど、あなた達に構っている時間はないの」

実はこの水路の中には巨大な蟹が潜んでいたのだが、水上に出るまでもなく水中で凍らされ、息絶えたのであった。

「ふーむ、地下に着いたのはいいけど、出る場所が出る場所だったわね」

そう言つてため息を吐くと。

アナスタシアがいるこの区画のあちこちで水柱が上がった。

蟹だけではない。巨大な烏賊、半魚人のような化け物、ゼリーの塊のような不定形生物……多種多様な怪物が次から次へと姿を現わし始める。そのどいつもこいつもが、どこか歪な姿の出来損ないだった。

「……うへえ、キモ……」

ぞぞぞぞ、と。生理的嫌悪を覚えながら、アナスタシアは自分のにじり寄つてくる怪物達を眺める。

どこからどう見ても、自然にできた怪物ではなく、人工的に作られた怪物——キメラだった。そしてそのキメラたちは、自分を完全に餌と認識しているらしかった。

「アレかな？ほら、女の子は柔らかくて美味しい的な？つて、私食用じゃないし、さつさ

と突破しようかね」

一人でそう言いながら、氷の剣を錬成し、通路を駆け出した。

「……………あ……………うあああ……………あッ!？」

地下研究室に少女の熱を帯びた苦悶の声上がる。

鎖付きの手枷で吊るされた少女——ルミアの身体を描かれたルーンの術式に沿って膨大な魔力が疾走しているのだ。それは激しい苦痛となつて、ルミアを責め立てる。

旅籠でシステイーナとグレン、リエルの帰りを待つていたルミア。

すると、ドアからではなく、窓から何者かが乱暴に蹴破つて入ってきた。

蹴破つて入ってきたのは、リエルだったのだが、彼女の姿は——大剣を錬成して血まみれの状態だった。

身の危険を感じたルミアだが、逃げる隙をリエルが与えるはずもなく剣圧で気絶。目を覚ましたら自分は鎖に吊るされ、何もできない状態だった。

それからは、リエルの『兄』を名乗る男から、グレンは死んで誰も助けにこないと告げられたり。

バークスが研究所見学で見せた好々爺然はどこへやら、野心と欲望をむき出しにした

しており、中身がよく見えない状態ではあるが……辛うじて見える影から察するに、封じられた素体は、どうやら少女の姿をしているようであった。

今、素体と『アルター・エーテル』、そして『アストラル・コード』。理論上合成不可能だった三つの統合が終了し、後は素体の各種細かな調整と意識覚醒を待つばかりだ。だが、ルミアは諦めていなかった。

先生は絶対に生きています。実際にその死を自分で確かめない限り、私は信じないと、思っていた、その時だ。

遠くで、地鳴りのような音が突然、響き渡った。

「何事だッ!？」

作業を止め、バークスが怒声を上げる。

すると、この儀式部屋の入り口にエレノアの姿が現れた。

「今、遠見の魔術で確認しました……侵入者ですわ」

「何だ?! 馬鹿な! どうしてここが割れた?! そんなはずは——」

「……はて?」

するともう一度、遠見の魔術を確認すると……

「あらあらまあ……これは予想外でしたわ」

くすりと、エレノアは嫣然と微笑んだ。

「まさか、帝国軍ではなく、旧帝国連合の人間が来るなんて……不意打ちを喰らわされたわ」

あまりの予想外の来客に苦々しく、それでもどこか愉悦の表情で、エレノアが呟いていた。

因みに、頬にアルベルトが樹海でエレノアと交戦した際に付けた魔力信号の存在に気付いていたが、それを勝るぐらいに侵入者があまりにも予想外であった。

「そ、それは一体、どういうことだ!?!エレノア殿ッ!」

「さあ、どういうことでしょうか?とにかく敵戦力は一名。東セルフオード帝国連合第一皇女、アナスタシアⅡパーヴェルナⅡロマノヴァですわ」

「な、何イイイイイイイイイイ——ッ!?!」

あまりにも予想だにできなかったその名に、バークスは目を剥き——

「……………え?」

ルミアは自分の耳を疑う。

今さっき、エレノアは何て言った?

さっき、エレノアは侵入者の名をこう言った。

——アナスタシアと。

しかも、東セルフオード帝国連合第一皇女、と……

確かにそう聞こえた。

「……………ナーシヤ？」

エレノアの口から突然出た、行方知れずの皇女——従姉妹の名に、ルミアは痛みなど忘れて目を瞬かせるしかなかった。

Дев ятнадцять (第十九話)

「ひ、東セルフオード帝国連合第一皇女、だとおツ?!」

あまりの予想外の侵入者に、バークスは狼狽えており、作業を再開できるような状態ではなかった。

「なぜ、行方知れずの皇女が、こんなところに侵入してくるツ!? エレノア殿、その情報は本当なのか!」

「ええ、五年前の画像でしか見たことありませんが……特徴も画像の人物と一致しますわ。彼女が侵入してこちらに向かっているのは、ほぼ間違いないでしょう」

バークスとエレノアの表情はどこまでも苦々しいものであった。

「まだ、儀式の完遂まで時間がかかりますわ。それまでにこの部屋に至られると、儀式を台無しにされる恐れがあります。いかががいたしましょう」

「くう……おのれえ、行方知れずの小娘め……ッ!」

バークスがわなわなと震えながら、傍らのモノリス型魔導演算器に取り縋り、呪文を

唱えながら指を動かし、操作を始める。

石板状のモノリスの表面を、次々とルーン文字が走っていく……

「いいだろう！情報によると、奴がいるのは、まだこの中央制御室からは程遠い第四区画——あそこならば、対処は容易い！私の作品で蹴散らしてくれるわ！」

バークスは、矢継ぎ早に、モノリスの表面上にルーンを描いていく。

光の文字となつて刻まれたルーンを切つ掛けに、表面に様々なルーンが一気に羅列し、モノリス表面上を上から下へ、左から右へとせわしなく流れていった。

「作品、とは？」

「ふふふ、あの区画には私が作った合成魔獣が封印されているのだよ。その合成魔獣どもの封印を解き、あの小娘にけしかけてくれるわ」

歪んだ嘲笑を浮かべ、バークスが最後の操作をする。

「これでいい……さあ、行け……私の最高傑作達……ッ！」

己の勝利を何一つ疑つていないそんなバークスに、流石にエレノアも小さく嘆息する。

「僭越ながら、そんなもので彼女が止まるとは、とても思えません」

「そんなもの、だと……？」

バークスの顔がみるみるうちに怒気に染まっていく。

ナスタシアをめぐりかけて迫ってくる。

溢れんばかりの力が漲るそのしなやかな筋肉。身体能力も、反射速度も、生物として根本的に人間をゆうに超えた、規格外の存在を前に――

それでも、ナスタシアは猛然と駆ける速度を緩めない。

互いが互いを目指して駆け寄り、彼我の距離は指数関数的に消し飛んでいく。

後、数秒で接敵――

その時、ナスタシアが呪文を唱えた。

「凍エト・ザメリユザユシヤウ・シユトレラてつく、矢よ」

刺し穿つ氷の閃槍――東部諸国で広く使われている黒魔「シユトレラトゥウア」2。

二反響唱で放たれた二条の氷閃が空気を切り裂いて、獅子の怪物へ真っ直ぐ飛ぶ。

だが、敵もさるもの。

獅子の怪物は、足元を狙った第一の氷閃を跳躍してかわし、その跳躍を狙った第二の氷閃を、壁を蹴って、さらに跳躍してかわし――

そのまま、中空から一気にナスタシアへと躍りかかるのだが――

突然、獅子の怪物の背中から血飛沫が上がり。

「――ガ」

どうん、と。

凄まじい質量を感じさせる音と共に、怪物が床に叩き付けられ、バウンドする。

いつの間にか、獅子の怪物の背後にいたアナスタシアは、派手に転がる怪物など見向きもせず、さらに駆け抜ける。

その速度は微塵も落ちない。振り返りもしない。

「ああもう、多過ぎッ！バカじゃないのッ!」

アナスタシアがうんざりしたように声を上げた瞬間。

通路を駆ける彼女の前方と後方——その壁の一部が突如、扉のように開き、そこから何者かがぞろぞろと現れる。

それは人間の姿を模った、葉と蔦——植物の化け物だった。

その数、前方に四体。後方に四体。挟み撃ちの形だ。

「……………」

アナスタシアは止まらず、前方の蔦の化け物の一体に狙いをつけ、突撃する。

止まらずに突っ込んでくるアナスタシアに、蔦の化け物は触手を伸ばして、アナスタシアを捉えようとするが——

アナスタシアはそれを右にかわし、氷の剣を蔦の化け物の首の付け根に力強く振り下ろし、斜め真つ二つに斬る。

そして、左右にいた前方の三体の蔦の化け物は、アナスタシアから出た氷の人形に悉

く真つ二つに斬られ、首を刎ねられ、上半身と下半身が切り離される。

後ろの四体も同じような感じでアナスタシアから出た氷の人形に斬られ、沈黙。そのま駆け出す。

通路が尽き、丁字路が見える。

アナスタシアは迷わずほほ直感で右へと進む。

「一体、何体いるのかしら」

アナスタシアは駆けながら、ため息を吐く。

「もう気持ち悪い敵がうじゃうじゃと出てくるから嫌なんですけど？もう終わりにしてほしいわ」

ぶーぶー文句を垂れているうちに、今度は通路を埋め尽くすほど巨大なゲル状の無機生物がその体で壁を作ってアナスタシアに迫ってくる。

その半透明な体の中には、恐らく犠牲者か、あるいは餌だったモノの成れの果てか、人間の骸骨が何体分も埋まっていた。

「こういう気持ち悪いやつが来るから、リエルに迫いついてなんとかしたかったのよ、まったく……」

ぶつくさ文句を言いながら、予め詠唱済みにしてあった黒魔「アイス・ブリザード」の呪文を起動する。

凍てつく吹雪が通路を猛然と吹き抜け、瞬時にゲル状生物を凍てつかせる。

そして――

「これで最後にしてほしいわ。心の底からねッ！」

アナスタシアが鋭く剣を突き立てる。

剣が刺さり、アナスタシアがそのままの勢いで突き破る。

剣が刺さった箇所から蜘蛛の巣状にヒビが入り、びしり、と凍てついたゲル状生物が硝子のように割れて、砕け散った。

ゲル状生物の破片の上を、やはりまったく速度を落とさず、アナスタシアが飛び越えて、駆け抜けていく。まるで眼中にない、そう言わんばかりに。

そんな彼女に、さらなる魔獣達の気配が迫る。

だが――

「……止まりませぬね」

その時、からかうようなエレノアの言葉に、バークスは拳を震わせていた。

「くそ……小娘が……ッ！」

モノリス型魔導演算器の表面上に次から次へと送られてくる、自慢の合成魔獣達の惨

憚たる戦闘結果。

それを目の当たりにしたバークスは、忌々しげにモノリスを拳で叩いた。

「い、いいだろう……これまではタダの小手調べだ！あの程度でくたばられてしまつては、こちらも面白くないッ！こちら最高傑作で出迎わせてもらおう……ッ！」

血走つた目で、バークスがモノリス型魔導演算器を操作していく――

「ふ、ふははははッ！今度のこいつは凄いでお!?かき集めた魔鉱石から作り上げた宝石獣だッ！三属攻性呪文など効かんし、いかなる武器でもこの獣を傷つけることはできない！真銀か日緋色金オリハルコンの武器でもない限りなあ!?ふははははははは――ッ！」

エレノアは、そんなバークスを実に楽しげに見守つている。

「あちゃー、これは予想できなかつた」

思わずアナスタシアは頬を引きつらせながら、呟いていた。

通路を踏破し、大部屋を侵入した彼女を待ち構えていたのは――

「ウオオオオオオオオオオオオオン……」

見上げるほど巨大な、大亀の怪物だった。

その大部分が透き通る宝石のようなもので構成されている。

「宝石獣かー。ふむふむ、あれって確か、殆どの攻性呪文は効かないし、めちゃんこ硬くて武器も通らない……となると」

まあ、あまり手の内明かしたくないけど、アレしかないよね。

アナスタシアが皇族の家宝——皇帝しか持つことが許されないアレを使おうとした、その時。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ……」

大亀が後ろ足で立ち——アナスタシアめがけて、倒れ込むように、その豪腕を叩き付ける。

「……まあまあ、そんなに大振りしちゃったら——」

対するアナスタシアは、やれやれと肩を竦め、避ける気など微塵もない。

そして、彼女が居た場所を大亀の腕が叩き付けられ、施設全体が震えた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオ——ッ！」

大亀が雄叫びを上げる——なぜか避けなかったアナスタシアを踏み潰したことで勝利の雄叫びを上げるように見えたのだが——

「——下がよく見えないと思うわよお？」

大亀の足元から氷の破片が目鼻の所で集まり、そこからアナスタシアが突如現れた。

踏み潰されたはずのアナスタシアの右手には、彼女の身長より少し長い槍が握られて

いる。

そのまま、アナスタシアは大亀の鼻先に着地。左手を大亀の額に当てる。

「——オオオオオオオ……」

本能的に自身の生命の危機を感じたのか。

大亀の宝石獣は、アナスタシアを振り落とそうとするが——

「汝に余——東セルフォード帝国連合第一皇女、アナスタシアが命じる——」

ゆっくりと、殊更にゆっくりと。

アナスタシアは左手に意識を集中させ、一句一句言葉を紡いでいた。

すると、左手が青白く光り始める。光が段々と強くなっていく。

大亀はアナスタシアを振り落とそうとするが、振り落とせない。というより体が動か

ない。

まるで、アナスタシアに強制的に服従させられているかのように頭を下げる。

その光景は、主従関係——大亀が逆らつてはいけなないモノ——それこそ神か、邪神・魔王にひれ伏している光景そのものであった。

そして——

「——死ね」

冷酷に冷たい声ではつきりと大亀に命じ、飛び降りると。

ばしゃッ!

頭上で何かが爆ぜる音がして――

巨大な体がずうんと音を立てて倒れる。

大亀の宝獣は頭を失っており、その活動の停止を余儀なくされていた――

「……突破されてしまったようですね」

エレノアが啞然とするバークスに、くすりと笑いかけた。

「……ば、……馬鹿なッ!」

目の前の信じられない光景に、バークスは顔を真っ赤にして震えていた。

「右手に持っている槍は、聖ジェルジオの槍ではないか――ッ!? アレは、帝国連合の皇帝が代々持っている、竜殺しの槍――ッ! あの槍を持っているということは、まさか本物のなか――ッ!」

「ええ、そのようですね。本物の行方知れずの皇女本人ですわ」

落ち着き払った声色で、それでもどこか楽しそうにエレノアが言う。

「それよりも、バークス様。いかが致しましょう。あの区画を突破されてしまいましたら、この中央制御室まで、もう、目と鼻の先――早急に対処する必要が御座います」

「そんなことは、わかっておる！」

苛々と、バークスは青髪の青年へと振り返った。

「おい、その貴様！」

「……はい、僕に何か御用でしょうか？」

「後に残った儀式の細かい調整は任せる！お前でもそのくらいはできるだろう？」

「できますけど……バークスさんはどうするのですか？」

「ふん！私自らあの小娘を駆逐してやろうというのだ。劣っている魔術を戦争にしか使えぬ能無しに、真の魔術師の威力を教育してやるのだ！エレノア、お前も来い！」

「畏まりましたわ、バークス様」

そしてエレノアを伴い、バークスは肩を怒らせて部屋を出て行く。

残されたのは青髪の青年とリィエル、そしてルミアだ。

「さて……そういうことなら、気合を入れないとね……」

青年の口元には不気味な笑みが浮かんでいた。

「……どうやら、あれで最後だったようね。はあ、もう相手にしなくていいようで清々したわ」

大亀の宝石獣を倒したアナスタシアは、奥の扉から部屋を抜け、暗く狭い通路を進んで行く。

しばらく歩くと、不意に開けた空間に出た。

「(ハハ)は……?」

何かの保管庫だったようだ。

大広間のような室内は薄暗い。床や壁、高い天井の所々に設置された結晶型の光源——魔術の照明装置の光はかなり絞られており、足元がよく見えない。そして、辺りには謎の液体で満たされたガラス円筒が、無数に、延々と規則正しく立ち並んでいた。

それらガラス円筒の一つ一つが、部屋のあちこちに設置されたガラクタの塊のような魔導装置にコードで繋がれ、その装置は現在進行形で低い音を立てて稼働している。

「……これは?」

ふと、アナスタシアはガラス円筒の中に、球状の何かが浮いていることに気付く。

周囲が薄暗いため、そのガラス円筒の中身がよく見えない。

アナスタシアは何気なくガラス円筒に近づいて、中を覗き込んで——

——瞬時に、止めておけばよかったと後悔した。

「……ッ!?!」

思わずこみ上げた吐き気を堪えるように口元を押さえる。

背筋が凄まじい悪寒で総毛立ち、ぶわっと気持ち悪い脂汗が全身から噴き出した。ガラス円筒の謎の液体の中に浮いていたのは……人間の脳髓だったのだ。

「……何シユト・エトこれ？」

よく見れば、隣の円筒もそうだ。その隣もそう。その隣の隣もそうだ。

取り出された人間の脳髓が、延々と標本のように並んでいる——

——否、実際にこれは標本なのだろう。

人間の標本。見るも聞くもおぞましい、背徳と冒瀆の所業。

それらを前に、呆然と絶句するアナスタシア。

「……『感応増幅者』……『生体発電能力者』……『発火能力者』……」

ようやく歩を進めたアナスタシアは、立ち並ぶガラス円筒の傍らを次々と過ぎつていき、ガラス円筒につけられているラベルの文字を脳髓を見ないように読み上げていく。

「……これって、『異能者』の成れの果て……」

そう思うと、アナスタシアは足を速めてこの保管庫を速く抜けようと歩を進める。

(思えば、パークスは相当の『異能嫌い』……典型的な異能差別主義者だった)

異能。

ごく稀に、人が先天的に持って生まれる特殊な超能力を指す言葉。

基本、学べば誰でも扱えるようになる魔術と異なり、異能は生まれついでての異能者で

なければ使うことができず、現代の魔術では再現不可能な効果を持つ強力な異能も多い。

その自分が決して持ちえぬ卓越した力に対する羨望が、あるいは嫉妬か、異能嫌いの魔術師は少なくない。その無知さゆえに異能を忌避する人間も多い。

(この国は伝統的に異能は『嫌悪』の対象で、常に差別と迫害の対象となっている。だから、エルミアナは第二王女の地位を剥奪されている)

“異能”だけで、王女の地位が剥奪されるくらいヒステリックなのだ。

「……と、とにかく、あの子を助けないと……」

もうここにたくない。

そう思いながら、アナスタシアは保管庫を抜けようと顔を上げるが――

目の前にカラス円筒の中を見てしまった。

中にあるのは、脳髄ではなく、年はもいかない少女だ。歳は自分とルミアとそう変わらないだろう。

その少女は手足が切除され、全身を無数のチューブに繋がれて、魔術的に『生かされている』状態であった。すでに一個の生命として、独立して生存する機能を完全に奪われている。この装置から解き放たれたら、この少女は数分と生きられないだろう。

この少女は、あらゆる意味で『終わって』いる。生物としての体を成していない。肉

体が微かに生命反応を示すというだけで……もうとつくに『死んで』いたのだ。

「……………」

この時、アナスタシアの顔は後悔の念が滲み出ていた。

ルミアのことを利用価値があるといって革命政権にリークした。

無論、まんま革命政権にルミアをやるつもりはなく、革命政権を利用して最終的に自分の目的達成のために彼女を利用して――

無論、彼女を殺すつもりはなくて――

でも、このガラス円筒を見て、アナスタシアは気付いてしまった。もう遅いが気付いてしまった。

自分の思惑があまりにも甘過ぎたことを。

恐らく、革命政権がルミアを拉致したら、今日の前にあるような実験をするに決まっている。現に、噂では反革命分子を拉致して人体実験を行っているのだから。

「……………ッ！」

アナスタシアは矢も楯もたまらず、駆け出した。

少女が虚ろな目で口を弱々しく動かしていた気がしたが、そんなこと気付く余裕はなかった。

無我夢中で駆け出し、部屋の出入り口へと辿り着き、そのまま走り去った。

ДВАДЦАТЬ (第二十話)

……。

……。

……駆ける。

ひたすら、駆ける。

延々と続くと思われた通路もやがて終わりが見え。

どんどん、最後の扉の姿が目前に迫ってきて――

「――だらっしやあああああ――ッ！」

アナスタシアは地下研究所、最奥の部屋の扉を乱暴に蹴り開けた。

「――？」

「え、ナーシャっ!？」

「――なっ!？」

現れたアナスタシアに、その部屋にいた者達の視線が一斉に集まる。

リエル、ルミア、そして——青髪の青年。

「ナーシャ……本当にナーシャ、なの……？」

ルミアは未だ信じられないような目でアナスタシアを見つめる。

腰まで伸びていたが白い雪のような髪に、アメジスト色の瞳。

そして、彼女には叔母であるマリアベルの面影がどこかにある。

「本当に……ナーシャなんだ……生きて……いたんだね……」

彼女がアナスタシアだと確信したルミアは目を潤ませ、その名を呟いた。

「……久しぶりね、エルミアナ。本当は、もつとこう……違う場面で会えたら良かったんだけど……」

久しぶりの従姉妹の視線を受け、アナスタシアがそう返す。

なんかこんなところで再会しても正直、微妙である。

「……っ……ぐすっ……ナーシャ……よかった……本当に……無事で……」

東部での革命で行方不明になっていた従姉妹が……本物の従姉妹が今目の前にいることに、気丈なルミアも流石に安堵の涙を禁じ得なかった。

なにせ、五年も行方不明だったのだから。王室から追放された今も、アナスタシアのことは無事かどうか心配だったのだから。

「……さて」

一方、アナスタシアは正面奥に囚われているルミアの姿を改めて見る。鎖に縛られ、服を破かれ、年頃の少女に強いるにはあまりにも酷い、あられもないその姿。

ガラス円筒の少女……最悪の想像から比べれば、遥かにまじだが――

「誰よ、女の子にこういう格好させるなんて……ていつても、貴方でしょう？ 私の従姉妹をこんな格好にして……ええ？ この、変態」

それでもルミアのこの扱いは、アナスタシアの怒りに火を点けるのに充分過ぎた。

「何？ 今流行りの前衛芸術つてやつ？ 帝国では女性にこんな格好させるの？ 東部でもこんなやらないわよ！」

「う……ああ……」

凄まじい形相で睨んでくるアナスタシアの姿に、青年は明らかに怖気づいていた。

「ええ、そうなの。ええ……だったら、私が直々に採点してあげるわ。じつりよく

こうしで！ ええ、この私のイケてるセンスを以て、採点してあげる。遠慮はいらないわよ？」

そして、アナスタシアはリエルに向かってキンキン声を張り上げる。

「リエル！ 貴女も黙って見てるんじゃないわよ!? 護衛があんな目にあつて、なんとも思わないの!?!……その、つい、じつと眺めたい気持ちにはわからなくもないけど……」

そう言うアナスタシアは、鎖に縛められたルミアのあられもない姿を、ちらちらと

見る。とくに胸の部分。

「やだ、五年の間に、随分成長してるじゃない。いや、私もそれなりにあるけど」
「もう、ナーシャつたら!」

だが、五年前の、あのやんちゃなアナスタシアの変わらぬ姿に、ルミアは抱いていた不安が晴れていくのを感じていた。後はグレンの生存が確認できれば――

「それと、エルミアナ。貴女の教師――グレン先生は生きているわ。安心なさい」

アナスタシアからのグレンが生きているという言葉に、ルミアの不安は完全に晴れていくのを感じた。

「さて、従姉妹にここまでやってくれたんですもの。覚悟はできているでしょうねえ?」

ビキビキとこめかみに青筋を立てるアナスタシアに、青髪の青年は顔を青ざめさせて一歩一歩後ずさっていく。

「馬鹿な……なぜ、あなたがここに……バークスとエレノアはどこへ行つたんだツ!?まさか、やられたというのか!」

「……バークスとエレノア?」

不意に出た二名の名前に、アナスタシアは訝しむように眉をひそめ、身構える。

(バークスはともかく、あの女まで出しゃばっていたなんて……でも、どこ行つたのかし

ら？ここまで行く間に姿なんて……あ)

そういうえば、空気に同化するという東部の隠密魔術を使っていたんだっけ？それで気付かれなかったのかもしれない。

それでも、エレノアほどの外道魔術師が気付かないというのも、奇妙な話なのだが、バークスがアナスタシアの存在に気付かなかつたなんて、バークスは存外大した者でもなかつたのだろう。

まあ、そんなことは今は重要ではない。

この部屋の中に、エレノアとバークスらしき人物の姿がないことを確認する。今はこの青年を倒して、止める。

そう思つて、一步踏み出しかけた——その時。

「……それ以上、兄さんに近づかないで」

リエルが錬成済みの大剣を構えて、アナスタシアの前に立ちはだかつていた。

「リエル!? き、流石は僕の妹だ!」

リエルがアナスタシアに立ち向かつたのを見た『兄』と呼ばれる青年は、すぐにその余裕を取り戻す。

(兄……そう、この人が……)

そんな『兄』とリエルを交互に見るアナスタシア。

「例の素体の調整にはもう少し時間がかかる！それまでそいつを抑えるんだ！」
「……わかった」

その『兄』は、慌てて奥の儀式法陣へと駆け寄り、再び作業を開始する。

「……やっぱり、そうだったのね」

アナスタシアは、リエルから視線を外さずに対峙する。

あの『兄』の背中を追いたいのが、リエルがこうして一刀一足の間合いにアナスタシアを捉えている以上、下手に動くことはできない。

（……それに、時間をかけてはいられない）

なぜなら、リエルに背後から串刺しされて瀕死の重傷を負っていたグレンが回復し、アルベルト共に、地下研究所へ急行しているのだから。そして、もう到達してこちらに向かっているはず。

途中の合成魔獣はあらかじめ倒したから、そうそう時間はかからないはずだ。遅くても十分後にはここに着くだろう。

それまでに、決着をつけないと……いささか面倒なことになる。
だから。

「……ねえ、リエル」

アナスタシアは、剣を構えるのを止め、リエルをじつと見つめる。

「……何？そもそも、なんでわたしの名前を知っているの？」

「今はそんなことは重要じゃないの。重要なのは……」

実を言うと、アナスタシアはリエルの過去を知っていた。ここに突入する前にボリスから連絡が来たからだ。因みに、ヤチエクからもグレンとアルベルトの行動を聞かされていた。

「……貴女のお兄さんの名前」

「……？」

アナスタシアの意図が読めず、リエルがほんの少しだけ首を傾げる。

「そう、貴女のお兄さんの名前……教えて欲しいわ」

「……貴女が何を言っているのかわからない。なんでそれを今、聞くの？」

「そうね……じゃあ、こうしましょう？もし貴女がお兄さんの名前を言ったら、私はこの一件から手を引く。ええ、エルミアナを見捨てて逃げるわ。もう何もしないし、邪魔もしない。どう？」

「……」

リエルはアナスタシアの意図を読みかねて、しばらくの間、アナスタシアのことをじつと見つめていた。だが、元よりリエルは物事を深く思慮して行動するタイプではない。そして、それもアナスタシアは知っている。

「わかった。そんな簡単なことで、貴女がそうしてくれるなら」

アナスタシアの言うことを素直に真に受け、『兄』の名前を告げようとする。

「……私の兄さんの『名前』は……」

そう、普通ならばそれはとても簡単なことだ。物心ついた頃から共に支えあつて生きてきた兄妹の名前を言うなど、リエルに限らず誰にとつても造作もないことだ。

——普通なら。

「私の兄さんの『名前』は……」

だが——リエルは言葉に詰まった。

「……………」

沈黙、戸惑い……そして、焦燥。

リエルのその眠たげな能面を、様々な感情が色を変えながら移ろつていく。

「どうしたの？ やけに引つ張るのね？ そういうの、いらなからさっさと答えて」

ここぞとばかりに、アナスタシアがリエルを挑発する。

「ええ、ちよつとちよつと、貴女、お兄さんが大好きなものでしょ？ 『名前』を忘れたとか、あり得ないことなんですけどお？」

「違うー私の兄さんの『名前』は……ッ！ 『名前』は……ッ！……………ッ！……………うっ

……頭が……痛い……な、なんで……？」

微かに怒気を浮かべ、アナスタシアを睨みつけるリイエル。

だが、名前を言おうとしても、リイエルは口をぱくぱくさせるだけ。やがて表情を苦痛に歪め、頭を押さえて、脂汗を浮かべていく。

「まあ、そうなるでしょうね……ねえ、今どんな気分？」

アナスタシアはそんなリイエルに、淡々と言葉を連ねる。

「貴女は決して兄の名前を知らないわけでも、忘れてるわけでもない。けど、名前を思い浮かべようとする、どうしても出てこない。まるで霧の中に溶けていくようなその名前が霧散していく。変だと思って、よくよく記憶をさらってみると、その名前の部分だけがなぜか空白になっている。不自然にね。無理矢理その空白の中身を思い出すとすると、今度は頭が痛くなる……大方、こんな状態じゃない？ 違う？」

「……………ツ!? な、なんで……………? そんなこと……………ツ!?」

リイエルがあからさまに動揺を浮かべた、その時だ。

「リイエル! そいつの言うことに耳を貸すんじゃない!」

リイエルの向こう側で、必死に魔導装置を操作しているその『兄』が叫んだ。

「に、兄さん……兄さんの『名前』は……『名前』は……なんだっけ?」

リイエルが背後の『兄』に縋るような視線を送る。

あろうことか、戦闘の天才リイエルが戦闘がこれから始まるというのに、敵であるア

ナスタシアを視界から外したのだ。

「そんなの今はどうでもいいじゃないか！僕は僕だ！君の唯一無二の兄！それでいいじゃないか！」

「で、でも……わたし……ッ！」

狼狽えるリエルを前に、アナスタシアは不敵にほくそ笑んだ。

これがアナスタシアの狙い。

事前に調べたところによるとこのリエルという少女、どんなに揺さぶろうが、動揺させようが、面と向かって敵を相対した以上、リエルに不意を討つなど絶対に不可能だ。常にその意識は敵に対して払われている。

だが、あの『兄』が絡めば、話は違う。この情報はボリスから聞いたし、現に『兄』がしゃしゃり出てきた以上、完全にアナスタシアの思惑通りに事が運んでいた。

今、リエルは『兄』へと注意が逸れている。逸らさずを得ない状況に仕向けた。

もし、『兄』が口を挟まなかったら……単なる時間稼ぎになって、勝機が訪れることはなかった。

だが、事は上手く運んでいた。このタイミングを無駄にする選択は、当然ない。

「しっ！」

アナスタシアは剣を突き型に構え、迷わず間合いを詰める。

氷の剣の鋭い切っ先が、余所見しているリイエル的心臓付近めがけて襲いかかってくる。

「——ッ!？」

だが、なんとリイエルはその不意討ちを、余所見している体勢から、咄嗟に宙を横転してかわしてのけた。これだから天才は恐ろしい。この予知に近い戦闘直感は、リイエルに匹敵する戦闘能力を持たない者しか到達しえない境地だろう。

しかし——これはアナスタシアにとっては想定内の展開だ。

いくらなんでも無理矢理な回避行動に、今、リイエルの体勢は大きく崩れている。

《————……ッ!》

アナスタシアはなにかの呪文を呟き、右足を軸に身体を右旋回。リイエルの急所に狙いをつけ、右足で床を蹴り一気に距離を詰める。

魔術と突撃の二択。下がれば魔術の、留まれば串刺し。

体勢が崩れているせいで、今のリイエルが取れる選択肢は多くない。

ゆえに——戦闘の天才リイエルは、前に出ることを瞬時に選択。

「いやああああああ——ッ!」

腕と大剣を盾のように構え、正中線——体の急所を守ってリイエルが突進する。

リイエルの急所は全てくまなくガードされている。これではどんなにアナスタシア

が勢いをつけても、氷でできている剣はリエルの大剣により砕けてしまうだろう。

氷の剣を粉碎し、返す刀でアナスタシアを両断、それで終わり。

この一合で追い詰められたのはリエルではなく、突っ込んできたアナスタシアだ。そして——この展開も予想済み。

リエルに向かって突進してくるアナスタシアは——接敵する手前で突然、氷となつて砕け散つた。

「——ッ!？」

この予想外の展開に、思わずリエルに足が止まる。

(え? 彼女はどこに——?)

と、リエルが思つた瞬間。

リエルの背後から激しい衝撃が弾け、視界が激しく揺れて明滅した。

「あ、ぐっ——ッ!？」

その予想外の衝撃に、思わず身体がぐらりと傾いた。

(なにぞ?!?!まさか——)

「はい、正解はこちらでした〜♪」

リエルは背後からの少女の声で、事態を悟る。

さっきの突進してきたアナスタシアは、偽物だったのだ。

おそらく、この部屋に突入する前に、アナスタシアは偽物を用意して突入させ、本人は全員が偽物に気を取られている隙に、どこかに隠れ潜んでいたのである。

そして、突進してきた偽アナスタシアに気を取られているリエルの背後から本物は膝蹴りをかました。

リエルの防御はあくまで本物だと思い込んでいた偽物に対するガード。背後からの不意打ちまではフォロローしきれていなかったのである。

リエルはアナスタシアのことなど何一つ知らないし、『兄』、ルミアすらも欺いたのだから、この背後からの不意打ちは完全に予想外であった。

だが、この攻撃。もし運悪くリエルのその常軌を逸した動物的直感で、回避されたらアナスタシアの勝機はなくなっていたことだろう。

「ぐう——うっ！」

背後に受けた一撃で、リエルがぐらついたのは一瞬。

たかが一瞬、されど一瞬。

アナスタシアはこの一瞬の隙を見逃さず、リエルをそのまま押し倒し、馬乗りになった。

「ぐ——っ!?!けほっ！」

うつぶせに床へ叩きつけられたリエルは、肺の空気を一気に押し出され、一瞬、呼

吸困難に陥る。

だが、リエルに焦りはない。

確かにこの体勢はリエルに不利だが、全体的な力では彼女に勝っている。全身で押さえつけているから攻性呪文もこない。何を焦る必要はない——瞬時にそう踏んだリエルは、ここで自分の手足が氷に包まれており——愕然とした。

「偽物には予め、貴女の動きを封じるようにしておいたの」

実は、砕け散った氷粒は、そのままリエルの手足に付着し、瞬く間に氷の塊となつて動きを封じていたのだ。

リエルが、しまったと思った時には、もう遅い。

氷塊が地面にどンドン浸透していく。根を張るかのように浸透していく。

「まあ、こんなもんでしょ。よしよし。我ながら上手くいったわ。やったね♪」

「くっ……うッ！」

自身の手足を完全に封じられたリエルは、腕力にまかせて氷塊を破壊しようとするが——

「無駄よ。もうその氷塊は地面深くまで根付いているわ。私が解呪しない限り、貴女にできることはもう何もないわ」

アナスタシアが眼下で悶えるリエルへ、淡々と告げる。

「止めた方がいいわよ？でないとな今度は、氷が貴女の腕に圧迫を加えるから。もがけばもがくほどに、ね」

「……くっ……あッ!?!い、痛い……ッ！腕が……痛い……ッ！」

氷がリエルの腕を圧迫し始める。それでもアナスタシアから逃れようと、リエルは必死に腕を動かす。だが、もうどうしようもない。

「はあ、貴女つてどんでない女ね、リエル」

そんなリエルを、アナスタシアは呆れたように見下ろす。

「予め偽物を用意して、第三者からの介入を期待して、不意を討って、意表もついで、不意打ちまでして……ここまで手を打って止めなきやいけないなんて、世界広しと言えど貴女だけよ？リエル」

「《だ、大地よ・我が言の葉に耳よ——》」

「《はい、ストツプ》」

それでも諦めずに呪文を唱えるリエルの額に、アナスタシアは殺傷能力のない氷閃を放つ。

「あぐっ……」

アナスタシアの容赦ない攻性呪文は流石のリエルにも効いたらしい。額に爆ぜた衝撃に一瞬、リエルの意識が遠のき、唱えかけの呪文は失効された。

「ちよつと、大人しくしましょう？ お話ししましょう？ お話し。そう、貴女の過去のお話しとかを、ね。言うまでもなく、重要な話だから」

と、その時。

「リエルに……ぼ、僕の妹に何をやる気だ!? 離れろッ!」

リエルの劣勢を見て取った『兄』が金切り声を上げる。

「はあ? 貴方、うるさいわよ。少し、黙ってもらえる? ニセモノ」

だが、アナスタシアはそんな『兄』を蔑みが籠った視線で射竦めた。

「貴方がいまやってるそれ、『Project: Revive Life』でしょ?」

「なっ、なぜ、貴様にそれがわかる!?!」

『Project: Revive Life』……通称『ReLL計画』。貴方、この子の兄を標榜するくせに、なぜ本名ではなくリエルって呼ぶのかしら? ねえ、貴方の口から言ってみなさいな。『兄』の名前を」

「な……、き、貴様……一体、どこまで……?」

驚愕に慄きながら、『兄』が後ずさる。

そして。

「……え? ……『Project: Revive Life』? ……『ReLL計画』?」

そのあまりの不自然さに、流石のリエルも看過できなかつた

「……な、なんで……わたしの名前が……？」

何か恐ろしい真実の予感に、リエルが震えながらアナスタシアを見上げる。

「ねえ……どういう……こと？」

「……『シオン』よ」

「え？」

アナスタシアの突然の呟きに、リエルが戸惑う。

「貴女の記憶の中に住む兄の名前は『シオン』よ。二年前、天の智慧研究科に囲われている妹を逃そうと帝国宮廷魔導士団に亡命を打診して、結局、組織に裏切り者として粛清された——稀代の天才錬金術師で……リ・エ・ル・レ・イ・フ・オ・ードの生みの親よ」

そう呟いたアナスタシアは、突入前に連絡が入ったボリスの調査報告を回想するのであった。

Двадцять один (第二十一話)

それは、アナスタシアがリエル達が待ち構える部屋に突入する前のこと。

あのガラス円筒の少女を見て、一刻も早くルミアを助けないと、無我夢中で駆けていたアナスタシアの懐から音が鳴り響く。

アナスタシアは懐から音源——通信魔導器を取り出し、通信を起動する。

「……何？」

「……『姫』、リエルの件について報告が」

息を切らせながら応答するアナスタシアに、何があつたのかあえて聞かずにボリスが件の調査の報告をする。

「ああ……それで、どうだった？」

この報告次第では、リエルに対する攻略法が決まってくる内容なので、一度足を止めるアナスタシア。

「それが……シオン＝レイフォードが遺した資料を閲覧したのですが……あまりにも予

「想外でした」

「予想外でしたって、どういうこと?」

普段、淡々と報告するボリスの戸惑いの声に、アナスタシアは訝しむ。

「最初に要約して言いますと……リエル＝レイフオードは、普通の人間ではありません。彼女は——」

なにやらとんでもないことを聞いたアナスタシアは、そのままボリスの報告を聞くのであった。

——。

——そして現在。

「なに……今の……?」

リエルが過去の——二年前の記憶を思い出したのだろう。がたがたと震えながら呟く。

「なんで、みんな……わたしのことイルシアって……イルシアって誰……?」

リエルが暴れる気配が失せたことを察したアナスタシアは、手足を封じた氷塊を解呪し、リエルから離れる。

だが、リエルはそのまま寝そべったまま、震えるだけだ。

「ねえ……今の……なに？……なんなの？」

「私に聞かれても知らないわよ。貴女にどんな記憶が蘇ったかなんて。まあ、できれば思い出したくない記憶だろうと思うけど」

だが、リエルのこれからのためにも絶対に知った方が良い過去だとアナスタシアは思う。

「……そんな……あの青い髪の子……どうして……わたしの記憶の中にわたしの姿が……？これじゃ、まるで……」

他人の記憶が自分の中にあるみたい。

そんな台詞が喉奥から突いて出ようとしたとき、アナスタシアがとつとつと語りだす。

「二年前、当時、宮廷魔導士団特務分室に所属していたグレン||レーダスとアルベルト||フレイザーは天の智慧研究会が運営するとある研究所支部を強襲した。その支部にいたシオンという名の内通者と突然、連絡が取れなくなつたから。そしてその道中、イレッセの大雪林にてシオンの妹、イルシアを発見。だが、何者かに瀕死の重傷を負わされていたイルシアはすでに手遅れで……間もなく息を引き取つた」

「……………」

「まあ、ここまではあの二人が作成した当時の報告書の通りよ。けど、ここからの話しは報告書に載っていない話し。グレンはその後、件の研究所支部でシオンの遺体を発見、同時にガラス円筒に収まったとある少女を密かに回収、保護した。その少女はイルシアの『アストラル・コード』……イレツセの大雪林でことされる直前までのイルシアの記憶を受け継いでいて……名前を『リエル』と名乗った」

「……………」

要するに。それは、つまり。

「リエル。貴女はの正体は……世界初で現在唯一の『Project: Revive Life』の成功例。シオンの妹、イルシアの『ジーン・コード』から、錬金術的に錬成された身体を持ち、イルシアの記憶情報……『アストラル・コード』を引き継いだだけの魔造人間……シオンの妹、イルシアとは本質的には別人よ」

「……………あ……………あ……………」

「貴女に本当に意味での兄は……いなかったの。いるわけないの」

「う……………嘘……………そんなの……………うそ……………」

よろよろと。ふらふらと。

足元が崩落するような感覚を堪えながら、リエルが立ち上がる。

恐らく、グレンがリエルに本当のことを教えなかったのは、リエルこれを受け止

められないと——それと、リエルが帝国政府に何されるかわからないから、リエルには教えなかつたし、報告書にもこの事を書いていなかつたのだらう。そして、これを天の智慧研究会に利用されて、ルミアが拉致されるといふ失態を演じてしまふ遠因になつてしまつた。

だが——

「嘘かどうかなんて……もう、貴女もわかるでしょう？ シオンというキーワードで蘇つた貴女の記憶は恐らく——」

「う……うるさい……うるさいうるさいうるさい！」

そして、最後の砦に縋る敗残兵のように『兄』を見る。

「に、兄さん……嘘、だよね……？ 兄さんは、私の兄さんで……に、兄さんが誰かに殺されたあの記憶は……その……何かの間違いで……」

だが。

「うーん、やっぱり俺の最大の失敗はさ」

その『兄』が唐突に、口調を変えて語りだす。

「あの時、安直にシオンを始末してしまつたことだな」

「……え？ に、兄さん……？」

「俺が構想したプロジェクトの術式は、シオンが手を加えることによつて、いつの間にか

シオンの固有魔術と呼べる代物にまで変質してしまっていたんだからな。シオンがいないとプロジェクトの再現性がない……後でその事実が判明した時は正直肝が冷えたよ。ははっ、上手いかない時は何もかもうまくいかないもんだ」

「あの……兄さん？その……一体、何を言ってる……」

問いかけて、リエルは息を呑んだ。

その『兄』は、まるでゴミでも見るような眼で、リエルを冷ややかに見ていたのだ。

「ああ、そういうこと？」

合点がいったのか、アナスタシアが『兄』を鋭い眼差しで見る。

今にも殺しそうな冷たい目で。

「シオンとイルシアを殺したあんたは、リエルの記憶に自分がシオンとイルシアを殺している記憶をなんとかしないとイケなかった。でないと、リエルは多分言うことを聞かないだろうから」

「は……？」

「だから、口調をシオンのものに変えたり、兄妹間を出すためにお粗末にも髪まで青く染めて、お揃い感を出していた。そして、白魔術の記憶操作系の『キーワード封印』という手法を使って、リエルにシオンの名前を思い出させないようにしたのね。リエルを自分の駒にするために」

「……………う……………あ……………ああ……………ああ……………」

つまり、今まで不自然なまでに兄の名前を思い出せなかったわけは。

「二年前のあの時、もう少し時間をかけてお前の『アストラル・コード』——記憶情報を調整すれば、お前の中の兄は俺へと完全にすり替わり、俺にとつて都合の悪い事実は全て抹消されるはずだった。お前は俺の『妹』として俺の完全な手駒になる……………はずだったんだ。だが……………」

その『兄』は、憎々しげな表情でアナスタシアを睨む。

「あともう少しで完成、というところで……………帝国宮廷魔導士団が……………そうだ……………思い出した……………グレンⅡリーダーダス！あいつがああの時の魔導士だ！あいつが俺のリエルを勝手に持ち帰ったんだ！」

「……………やつぱり。そう言うことは、貴方……………ライネルね？」

「——ッ!？」

リエルの瞳が驚愕で見開かれる。

「二年前、シオンはイルシアだけでなくもう一人、組織からの救出をグレンに依頼したわ。しかし、ライネルという男だけは行方不明だった……………その口ぶりだと、貴方がライネルね？」

「やれやれ、どこから二年前の情報を得たのが知らないが、そこまで見抜かれたか。死に

ぞこないの皇女のくせに流石といったところかな？」

青年——ライネルは薄ら寒い笑みを浮かべて、アナスタシアとリエルを睥睨する——

「それにしてもお前、よく『シオン』がキーワードだつてわかつたな？」

「ふん、舐めないでほしいわね。彼女の今回の不可思議な行動を見れば、ちよつと彼女の過去調べればわかることよ。何か仕込んでいるつていうことに」

「やれやれ、予想外過ぎだよ。『イルシア』の兄の名前が『シオン』であるということ……まさか、行方しらずの皇女様が知っていたなんてな」

ライネルは肩を竦めてため息をついた。

「それに、安直にプロジェクトの頭文字を取つて『リエル』なんて名前を初期設定したのも本当に失敗だった……そのおかげで『アストラル・コード』を改竄しなければならなくなつた箇所が無駄が増えてな……記憶改竄が不完全になつてしまつたよ」

「……………う、あ……………ああああ……………」

リエルが後ずさる。信じられない、信じたくない現実に頭を抱えて後ずさる。

そんなリエルに、ライネルは生暖かい視線を向けて笑いかける。

「今回、最初にそのガラクタに接触した時、掌握するのにかなり時間がかつたのは意外だつたよ。不完全とはいえ、リエルの記憶の改変と封印は二年前にある程度終わつ

てたから、すぐにこっちに引き抜けるはずだったんだ。でも、なぜか予想外に手間取って……その後、グレンが現れたときは正直、肝が冷えたよ……それもそのガラクタが殺ったと思ったのに、まだ生きてる上に、この女が現れて全てバラされるなんて、全く予想してなかったよ……」

「……ガラクタ？……黙れよ、お前」

アナスタシアが新たに氷の剣を錬成する。ぼそりと呟くように吐き出されたその言葉の端々には、隠しきれない怒りが滲んでいる。

「ははは……怖い怖い……そう睨まないでくれよ」

だが、最初にアナスタシアの姿を見たときの怯えようはどこへやら。

今のライネルはなぜか、余裕綽々でおどけていた。

「うそ……でしょ？ 兄さん……」

一方、ライエルはそんな現実を未だ認められず、ライネルを兄と呼び、兄に縋りつく。「全部……うそ……だよね……？ 兄さんは、わたしの兄さんで……わたしは兄さんの妹

……昔からずっと……ずっと……そう、だよね……？」

だが、そんなライエルをあざ笑うように。

「もちろん、君は大切な『妹』だったよ」

ライネルはあっさりと言い捨てた。

「でも、もう要らないや。この子たちがいるから」

「もう、死ねよ。お前」

そのあまりにも無情な言い草に、アナスタシアは殺意を込めて呪文を口走る。

「《凍てつく矢よ》」

黒魔「シユトレラ2」。アナスタシアの指先から、氷閃が迸る。

虚空を切り裂く氷の一閃は、狙い過たずライネルへと真つ直ぐ飛来し――

だが、それはライネルとアナスタシアの間へ、不意に割つて入つた影によつて弾かれた。

「――ッ!？」

アナスタシアが指を突き出したまま、驚愕と共に硬直する。

ライネルを庇うように現れた、三体の影。

それは――三人のリエルだった。

着用している衣服こそ黒のボンデージだが、三人が三人ともリエルとまったく同じ姿形、体格で、リエルが得意とする錬金術によつて錬成された大剣を構えている。

代わりに、先ほどまで奥の儀式場にあつた三本の氷晶石柱が砕け散つていて――

まるで、悪夢のような光景がそこにはあつた。

『Project: Revive Life』が成功していた……ッ!？」

まるで想定外の事態に、アナスタシアが驚愕に目を見開いていた。

「どうして!?!あれはシオンがないと成り立たない固有魔術でしょ!?!一体、どうやって……まさか……ツ!?!」

「はっ……『どうせ、お前には無理だ』……とタカでも括っていたか?馬鹿め!」

くつくと愉悦に歪む笑いを上げるライネル。

「言っておくが、今回は完璧だぞ!?!なにしろ、余計な人格や感情は予め『アストラル・コード』から念入りに削除してあるからな!?!後から記憶調整なんていう、しち面倒臭い真似は二度とごめんだ!?!リエルの凄まじい戦闘技能だけを受け継いだ人形——俺の思い通りに動く、俺だけの操り人形だ!」

「う、あああ……ああ……」

眼前に立ち並ぶ、文字通り人形のような三体のリエル・レプリカ。

彼女達を前に、リエルは力なく両膝をつき、頭を抱えて……

「ああああああああああああああああああああ——ツ!?!」

とうとう、リエルの理性が崩壊を始めるのであった。

「どうだ、見たか!死にぞこないの皇女!これが俺の力だ!俺はこの力で組織をのし上がる!このルミアとかいう部品があれば、俺はリエルを幾らでも作れる!一匹作るのに結構な数の人間の魂が必要になるが、そんなの関係ない!作れば作るほど、俺は強く

Двадцять Два (第二十二話)

「あーらよつとおー！」

「——うあツ!？」

瞬時にリエルへと肉薄した一体のリエル・レプリカが、リエルの眼前で大剣を振り上げ、稲妻のような斬撃をリエルの脳天に落としてきたので、氷剣で大剣の腹を打ち、軌道を逸らせる。

そして、アナスタシアから氷の人形が現れ、リエルを担ぎ上げ部屋の隅の方へと転がした。

アナスタシアは、リエルを背後に庇うように少しづつ下がる。

「悪いわね、リエル。こうなった以上、こうでもしないと、戦いにならないから。……ああもう、なんでこんなことに……！」

確かに部屋の隅を背に戦えば、敵の攻撃が来る方向は全て自分の視野の内からだ。長大な剣も限定された空間では振り回すのに不便であり、必定、剣筋も読みやすくなる。

退路を断たれるという致命的な問題こそあるものの、この一方的に不利な状況では、

極めて合理的な選択だろう。

だが、リエルが不可解に感じたことは……なぜ、アナスタシアが自分を部屋の隅に連れてきたかということだ。これでは――

「――守っているみたいに思う？ 実際にはそうなのよ」

アナスタシアがリエルの心の中を見透かしたかのように呟く。

「まったく……貴女を死なせたら、エルミアナが悲しむでしょう？ 私、彼女が悲しむようなことは……したくないの」

じりじりとしり寄り寄って来る三人のリエル・レプリカ達を、アナスタシアは時折間を開けながらそう言う――

(なんとか有利な位置取りはできているけど……どうする？ これじゃ、焼け石に水じゃない)

部屋の隅に下がりながら、アナスタシアは冷静に戦況を把握する。

冷静に彼我の戦力差を考慮して――

(……どう考えても、不利すぎるでしょ、これッ！)

どんな戦術を取ろうが、どんな作戦を実行しようが、一度、戦端が開かれたらジリ貧になるだろうということを痛いほど確信することとなった。

「……どうして？」

リエルが呟くのと。

リエル・レプリカ達が餓狼のごとき瞬動で、アナスタシアへ殺到するのは同時だった。

「——ッ!？」

次々と迫ってくる三本の剛刃を、一体は氷剣で、もう二体は二体の氷の人形を一体ずつぶつけていく。互いに激しく喰らい合う氷剣と大剣に、衝撃音と火花が幾度となく爆ぜる。

「どうして……わたしなんか守るの？」

アナスタシアが横一文字の斬閃を屈んでかわし、続く叩きつける一撃を氷の人形が盾となつて攻撃を防ぎ、ばらばらに粉碎される。

三体のリエル・レプリカは代わる代わる矢継ぎ早に剣を繰り出し、アナスタシアは氷の人形が粉碎される度に次々と召喚する——

「さあね！どうしてだと思ふ？ああもうッ！しつこい！」

前方左右から疾風のように飛びかかってきた二体のリエル・レプリカ。

アナスタシアは刹那の判断で、右のレプリカの懐へ飛び込み、カウンターの突き蹴りを入れて吹き飛ばす。それと同時に、左から迫るレプリカには一体の氷の人形が裏返し蹴りを叩き込み、さらに突き飛ばす。

「それよりも、貴女は私がこいつらを相手している隙にエルミアナを連れて逃げなさい！そろそろグレンとアルベルトが来るから彼らの元へ行きなさい！」

間髪を入れず、正面から斬り込んできたレプリカの剛速剣を頭上で氷剣の腹で受け止め、その隙に氷の人形がレプリカの首根っこを掴んで投げ飛ばす。

「いい!? わかった!? わかったら、さっさと行く！」

左から霜風のように足元を薙ぐ一撃、右から天つ風のように首を刈る一閃。

アナスタシアは身を捻って軽く跳ね、空中を横転、回転する身体の上を風刃が吹き荒ぶ。

「わたしには……何も無いのに……」

着地と同時に、今度は三体のレプリカ達が一斉にアナスタシアへ斬りかかって来る。

それをアナスタシアは三体の氷の人形を召喚し、ぶつける――

「うるさいわね！ 何も無いわけじゃない!? 何も無いならとつくの昔に見殺しにしたわよ!」

決り込んでくるような剣の一撃を氷剣で受け流し、アナスタシアが吠える。

かなり魔力を消費している。連続で氷の人形を召喚しているから、消耗が激しい。

それでも休み暇はない。

襲い掛かってくるレプリカ達の連続攻撃はまるで鋼の竜巻だ。

それをアナスタシアは淡々と捌く、捌く、捌き続ける――

「わたしは……ただの人形……なのに……」

アナスタシアの周囲を唸り荒れ狂う三本の剛刃、その一瞬の間隙。

左のレプリカの剣撃を外しざまに、アナスタシアは瞬時に予唱済みの【シユトレラ2】を起動。

脇腹を掠められたが、顔面に殺到する氷閃をかわそうと、レプリカが大きく後退する。「ただの人形？ただの人形っていうのはね……この三体のレプリカ達のことを言うのよ！」

だが、油断した。その隙に、右のレプリカが繰り出す大剣がアナスタシアが持っている氷剣を粉碎した。

大剣を防ぐ手段が一時的になくなったとみたレプリカが、これ好機と、アナスタシアの正面から剣を振り上げて飛び込んできて――

「わたしは……作り物で……人間ですらないのに……」

大上段から振り下ろされた重剣を、瞬時に召喚した氷の人形で目前で防ぐ。

肉薄してくる二体目のレプリカが、がら空きになったアナスタシアの胴を鋭く抜きかかる。

アナスタシアは、すぐに氷剣を錬成しその剣撃を受け止める。

荒々しい衝撃が氷剣ごしに伝わり、危うくバランスを崩しそうになる――

「ぐう――ッ!? 作り物……だろうが……試験管から生まれてきたのが紛れもない事実だろうが……貴女はもう人間なのよ! 人形でもなんでも――あああああああああああああッ! もうッ!」

苛立たしげに吠え、アナスタシアは氷の人形を召喚し、人形は忌々しいレプリカを掴んで投げ飛ばす。

投げ飛ばされ、床をバウンドして転がっていくレプリカ。

だが、残った二人目、三人目のレプリカが次々と襲い掛かってくる――

「もう、本当にウザい! 邪魔くさい! こんなどころでくたばったら地獄行き――じゃなくて、貴女は貴女でしょうが!? それ以外の何者でもないのッ! 何、うじうじしてんのよッ!? さっきまでの、あのキレっぷりはどこいったッ!」

再び眼前を踊り狂う二つの剣舞を、片方を氷剣で、片方を人形で受け流す。

アナスタシアが攻めあぐねているうちに、二つの剣が再び三つになっていく。

アナスタシアも人形をもう一体召喚するが、魔力の消耗が激しく、長くは保ちそうにない。

「グレンに、あんなひどいことして……クラスのみんなに……ひどいこと言つて……」

「なら後で謝れ! 他の人は知らないけど、エルミアナはそれでも許す……はず! っていう

か、後でほつぺぐにぐにしながら話しをつける！それでいい!? ていうか、さっさと動け！こつちもう限界なんですけど!?!私を殺す気!?!」

びしり。

大剣を受け損ねた氷剣に、ひびが入る。

「わたしは……生まれた意味が——」

「ああもうツッ! やかましいわツ!」

瞬時にレプリカの腹めがけて鋭い蹴りを喰らわして、蹴飛ばすアナスタシア。

「意味がわからない? 誰だつて最初は生まれた意味がわからないわよ! 他人を元に造られたから? だから、なんなのよ!?! だったらこれからリイエルⅡレイフオードとして生きていけばいいでしょうが!?!」

氷剣の柄でもう一体のレプリカの頭を激しく殴りつける。

もう使い物にならない氷剣を放り捨て、頭を殴られて一瞬ひるんだレプリカの懐へ一気に飛び込む。

その腕を取り、胸蔵を掴んで足を払い、左足軸に回転、背負うように投げ飛ばす——
投げ飛ばされたレプリカに巻き込まれ、一体のレプリカがもつれ倒れた。

「で、次はこう言うつもり?」 兄さんのためだけに生きてきて、でも、その兄さんなんて最初からいなかったから、なんのために生きていけばいいのかわからないの“つてか!?!」

自分の存在価値と行動原理を人に依存するようなことばっかり言つて!?!ちよつとは考
えなさいッ!このおバカッ!

指を鳴らし、一体のレプリカの視界を吹雪で白く染める。そして人形が背後から頭を
殴りつける。

「本当に何も無いの!?!空っぽの人形なの!?!今までエルミアナと他の子達と接してきたで
しょ!?!あの子達と過ごした日々を思い出しなさい!言つとくけど、何もないなんて言わ
せないからね!何も無いやつは絶望なんてしないの!絶望するということ感情があるとい
うことは、貴女が人間であることの証であるのよ!」

次々やってくる斬撃を受け流しながら、アナスタシアはリエルに向かって叫んだ。

右手から斬りかかってくるレプリカから人形が盾になって碎け散る。もう魔力は底
を尽きかけていた。

「貴女が大切だと思う何か……なんでもいい、エルミアナでもグレンでも誰でもいい!
大切だと思うもののために生きなさい!意味とか資格とか理由とか——そんなもん、神
でもなんでもない貴女が考える必要はないの!世界は結構、単純なのよ!」

これで最後の——氷剣と人形を二体、召喚する。

これが破れると——アナスタシアの命はない。

だが、休む暇も、情け容赦もない。

レプリカ達が迫る、迫る、迫る——

二体のレプリカを人形が抑え、一体のレプリカに立ち向かう。

残された魔力も、身体の機能を総動員してでも戦い続ける。

結局、アナスタシアは、最後までリエルの前に立ちはだかることを止めなかった。

「もう一度言うわ……自分が大切だと思う何かのために生きなさい、リエル！ 貴女はもう人形じゃない！ 立派な人間よ！ いい加減、わかりなさいよお！」

部屋内に反響するアナスタシアの魂の叫び（ていうか、もう限界からくる叫び）。所詮、空気の振動に過ぎない音の羅列だというのに、それでもなお強く、肌で、心で感じられる圧倒的な熱。

ずきり、と。

アナスタシアの咆哮は、リエルの魂を震わせた。

頑なに凍てついていたリエルの心を、その熱がゆつくりと溶かしていた。

「うっ……あ……ああああ、あ……」

ぼろぼろと、リエルに目尻から涙が溢れ始める。

目の前で見知らぬ少女に、三体のレプリカが剣を振り上げて飛びかかって——

とつづく昔に二体の人形は粉碎され、氷剣もあと一撃喰らったら粉碎されるのに、ア

ナスタシアは構え——

(ああもう……私ったら、なにやってんのかしら……?)

身構えながら、アナスタシアは物思っていた。

だつて……アナスタシアとしてはリエルのことなど、何も知らないのだから。

だが――

(でも……私にはわかる。あの子は……もう必要な存在なのだから)

兄を失い、自分も失い、全ての抛り所を見失い、突然、なにもない虚空に放り出されたりリエル。

でも、もうリエルの中には答えは持っているはず。

過去への執着も、亡き兄への想いも、悲嘆も絶望も、そんなの関係ない……

リエルはもう……ルミア達からは必要な存在になっているし、リエルも、ルミア達が必要な存在になっているのだから。

なら答えは――もう言うまでもないだろう。後はリエルが行動を起こすのみ。

(……ああ、なんて羨ましい子)

だつて、自分も本当はルミアの側にずっといたいのに。

姿を隠しこそそしながら見守るのではなく、堂々とこの姿でルミアの側にいたい

に。

でも、今はそれは叶うのは難しい。だから会うにしても二人だけで、短い時間でしか会えない。

本当に、羨ましいと思う。

(まあ、それはそうとして……もう大丈夫らしいね)

剣を振り上げ飛びかかってくるレプリカを前に、アナスタシアは不敵に笑いながら、氷剣を構える。

背後から、今まで死に体だった少女が生氣を取り戻し、剣を取って立ち上がる気配がする。

それを感じ取ったアナスタシアは、瞬時に屈み込み――

「――うああああああああああああああああああ――ツ！」

――それは、まさに一陣の颶風くふうだった。

咆哮と共に、リエルが剣を取って立ち上がり、同時に、リエルの身体が残像すら置き去りにする峻烈の挙動で躍動した。

タイミングよく屈み込んだアナスタシアを台風の目に、荒ぶる暴嵐となつてリエルが吹き荒ぶ。

その刹那に翻る斬閃、三閃。

それだけで、たったそれだけで――

アナスタシアを攻め込んでいた三体のレプリカ達は血華を盛大に咲かせ、木の葉のよ
うに吹き散らされ、ただ人の悪意によつて生み出されたその悲しくも儚い生命の幕を引
かれた。

そのあまりにも急転直下の展開に、驚愕の表情で固まるライネルを他所に。

ライエルはアナスタシアを背中に庇うように立つのであった。

Двадцять три (第二十三話)

「ば、ば、馬鹿なああああ——ッ!」

リイエルによつて、三体のリイエル・レプリカが瞬時に倒され、床を転がった。

そんな光景を前に、ライネルは頭を抱えて青ざめながら叫んだ。

「なぜだ!?!なぜ、レプリカ達がそう簡単に倒される!?!同じなんだぞ!?!そいつらは、リイエルとまったく同じ性能を持つ人形なんだぞ!?!それなのに、そのガラクタ一匹にどうして俺のレプリカ達がこうもあっさり降されるんだ!?!」

恐慌に陥つたライネルを尻目に、アナスタシアは自身の身体の状態を一つ一つ確認する。

まあ、あれだけの攻撃を受けながら、大した傷もついてないのは奇跡だった。強いていうなら脇腹に少し傷がついたくらいだった。

(……私の肌、傷つけられた……)

むすつと頬を膨らましながら、同時に、そりやそうでしよ……と、アナスタシアは妙

に納得していた。

「そりゃ、そうでしょうよ」

立ち上がりながら、アナスタシアが言葉を続ける。

「……貴方。このプロジェクトを構想して関わったくせに、気付かないなんて……恐らくシオンならとうの昔に気付いていたかもね。このプロジェクトが始動した時に。充分にあり得ることよ」

「う、嘘だッ！そんな馬鹿なことがッ!?……有り得ない……有り得ない……ありえないありえないありえないッ！一体、どういう理屈で——ッ!?」

これは悪い夢だと言わんばかりに、ライネルが駄々をこねて喚き散らす。

やつぱこいつ、馬鹿だ、と。アナスタシアは溜め息を吐きながら答えた。

「理屈? そりゃ、リエルは『人間』なのだから」

「はあ!? 『人間』だと!」

「『人間』……わたしが……」

アナスタシアの言葉に、リエルは感じ入ったように反芻していた。

「単純な話よ。リエルはこの二年間、帝国宮廷魔導士団の魔導士として、常に過酷な戦いを潜り抜けてきたのよ? 戦士としての成長期にあつた戦闘の天才が、二年も死ぬか生きるかの実戦を積んできたのよ?」

それに対し、レプリカ達は二年前の『アストラル・コード』で作られている。

二年も実戦を積んだリエルと、二年前の『アストラル・コード』で作られ、今回が初実戦だったレプリカ達。

どっちが勝つかなんて、最早言うまでもない。

「要は、データが古かったのよ。リエルを『人間』として見ていなかったから、成長しているなんて考えてもいなかった。だから二年前の『アストラル・コード』で作られたレプリカで行けると高を括ってしまった。……皮肉ね。人間として扱ってなかったばかりに、人間であるリエルに敗北するなんて」

アナスタシアは憐憫すら籠った視線で、うろたえるライネルを一瞥した。

「ふ、ふざけるな！そ、そんな馬鹿なこと——」

「でも、もうそれは重要なことじゃないの。重要なのは——」

アナスタシアが氷剣の切っ先をライネルの首筋に向けて構える。

「もう貴方を守るものがなくなっただってこと……」

「……ひっ!?!」

「もうこれで終わり？もつとたくさん作ってた方が良かったんじゃないか？」

ライネルは慌てて周囲をきよきよと見渡し、しどろもどろに呪文を唱え始める。

「くっ……くっ!?!《猛き雷帝よ・極光の閃槍以て——》」

だが――

「呪文を唱える暇なんて、あげるわけないでしょ?」

いつの間にか、アナスタシアはライネルの目の前にいた。

氷剣の切っ先をライネルの首筋に向けたまま、一步一步、ライネルへと歩み寄ってくる。

「ひ、ひいッ!」

詠唱を中断してしまったライネルは、怯えるままに後ずさり……

アナスタシアは、そんなライネルを一步一步追い詰めていき……

そして。

「う、うああああ……ッ!」

壁際に追い詰められたライネルの首筋に、アナスタシアは氷剣の切っ先を当てていった。

「ナーシャ?! い、一体、何を……ッ!」

その様子を固唾を呑んで見守っていたルミアが、思わず叫び声を上げる。

「……決まっているでしょ? 彼を……殺す」

「――ッ!」

物腰は落ち着いているものの、アナスタシアの目は完全に据わっていた。

アメジスト色の瞳の冷たさは、ルシタニア奥地の——生命を悉く刈り取る極寒の地を
思わせるような冷たさだった。

そんなアナスタシアの姿に、ルミアは思わず息を呑む。

「ナーシャ！だ、駄目！いくらなんでもそこまでは……ッ!？」

「甘いわ、エルミアナ。この男は……生かしちゃいけない人種なの……」

ぎろりと睨まれて、ルミアは身を竦ませる。

「己の欲望のままに、なんの罪もない人達の犠牲を平気で積み上げる……それに対し、自
身にはなんの躊躇いも良心の呵責もない……それが正しいとさえ本気で思っている
……まるで革命政権のようにね。そんな連中を、私は許さない」

すつ、とアナスタシアが氷剣を左に振る。恐らく、首を刎ね飛ばすつもりだ。

「……目を瞑ってなさい。すぐ終わる」

そのアナスタシアの冷酷な瞳は、ルミアすらも見ていて背筋が凍った。

五年前、初めて会った時のアナスタシアの目は無邪気だったのに、今は殺気が籠った
冷たい目だ。

「ひいひいひい!？」

一方、ライネルは自身の悲惨な結末を想像し、身を震わせていた。

「嫌だああああ——ッ!？や、やめろッ!？やめてくれえええええ——ッ!？」

恐怖のあまり、ライネルは女のような悲鳴を上げていた。

「お、お願いだ、殺さないでくれッ?!し、死にたくない……ッ?!」

「勝手なことをぬかすんじゃないわよ……ッ?!」

ライネルの命乞いに、アナスタシアは憤怒のあまり肩を震わせていた。

「レプリカ一体作るために、何人の魂を犠牲にしたと思ってるの!?!自我すら奪われて無理矢理生み出されたレプリカ達に心があつたら何を思ったと思う!?!なんの関係もない命を、あんた自身のくだらない都合でオモチャにしやがつて……それで助けてくれ?殺さないでくれ?いい加減にしなさいよ、このクズッ!」

アナスタシアの烈火の劍幕に、ライネルは膝をがくがくさせ、心から震え上がる。

「う……うあ……た、助けて……死にたく……な……」

「ダスビダーニヤ。地獄に墜ちなさい」

聞かず、アナスタシアが氷劍を横一文字にライネルの首を刎ね飛ばそうと振り――

ライネルは、間近で氷劍を振るさまを、絶望に歪んだ表情で見つめるしかなく――がちがちと歯を鳴らし――

そして――とうとう――

氷劍が――

「ひ……い……いああああああああああああああああ――ッ?!」

——ライネルの首を——

——ひゅつと、風を切る音が木霊しただけで、刎ね飛ぶことはなかった。

「……………え？」

最悪の光景を覚悟し、身を硬くしていたルミアが恐る恐る目を開くと……

「あれれえ？折れちゃったあー？おかしいわね〜？なんでだろうね〜？」

あの冷酷で冷徹な雰囲気はどこへやら。

折れた氷剣を持っていて、すつとぼけているアナスタシアと……

「あ、あ、あ、あ……」

恐怖から来る憔悴のあまり何十歳も老けてしまったようなライネルの姿があった。

「あつ、そうか！さっきのレプリカの斬撃でえ、ひび割れちゃったんだー♪うっわー、すつかり忘れてた♪」

そんな白々しいことを言いながら、アナスタシアは折れた氷剣を放り捨てる。

「ひ、い……………い……………あ、ああ……………うっ……………あっ……………」

「ねえねえ、やると思つた？ひよつとしてビビつちやつた？あつはははは！やるわけないでしょ、バーカ！」

どこまでも人を小馬鹿したような態度で、アナスタシアがライネルを煽りまくる。

「もう疲れたのよ、つかれたの！」

「う……………あ……………ああ……………あ、あ……………」

「それに、貴方を殺したら、エルミアナに嫌われるんですもの。そんなの死んでも嫌だねえ！なんですすよ♪」

ひとしきり、ライネルをおちよくりまくって……

「まあ……………だから、私が言うことはただ一つ……………」

茫然自失のライネルの前で、アナスタシアは静かに、左足を軸に回転して。

「右足をライネルの顔面に——

「私の従姉妹に——手を出すんじゃないわよッ!？」

アナスタシア渾身の逆回し蹴りが、ライネルの頬に直撃して——

「ぎゃああああああああああ——ッ!？」

ライネルの体は派手に吹っ飛ばされ、ごろごろと転がって、やがて沈黙した。

「……………はあ、まったく、危うく死ぬところだった」

かなり疲れた表情でのたまいながら、アナスタシアは縛られているルミアの元へ向かう。

「……ナーシャ……よかった……」

ほつと、ルミアは安堵の息を吐いた。

「……じつとして、エルミアナ」

アナスタシアが氷剣を新たに錬成して剣を振るう。

すると、ルミアの腕を縛っていた手枷や鎖がばらばらに切断される。

一瞬、がくりと浮遊感を覚え、ルミアは思わず膝をついた。

「怪我はない……というより、服、ボロボロじゃ——」

そんなルミアの傍に膝をついたアナスタシアが、ルミアの状態を確認するが。

がし、つと。ルミアがアナスタシアを抱きしめた。

「よかった……ぐすつ……よかった……」

力強く、もう離さないと叫ばんばかりに力を入れて抱きしめるルミアに、目を丸くするアナスタシアだが。

（ああ、そうか……そうだもんね）

なにせ、革命が起きてから五年、行方不明だったのだ。

両親や姉妹など一族がどうなったのかも、当時の帝国政府・王家にも伝わっているは

ずだし、当然、まだ王女だったルミアにもその耳が入っているのである。

だから——

「その……ごめんなさい……心配かけて」

そう言うアナスタシアもルミアを抱きしめようとするが——

ふと、背後——正確には、部屋の通路から一人がこちらに駆けつけてきている気配がした。

もしかしてももしかしなくても、グレンがアルベルト——おそらくグレンが、こちらに辿り着こうとしていた。

もう時間ね、とアナスタシアはルミアの元から離れ——

「……行かないと」

「……え？」

涙目のルミアから離れたアナスタシアは、呪文を呟き、指を鳴らす。

すると、アナスタシアの足元から吹雪が巻き起こる。

「な、ナーシャ……ッ!？」

「今日はお別れよ。もうそろそろ行かないと」

「ま、待つて……ッ!」

ルミアが従姉妹の手を掴むが、吹雪がアナスタシアを包み込む。

「行っちゃ駄目ツ！行かないでツ！」

五年ぶりに再会した従姉妹。

その従姉妹が再びいなくなることに、ルミアは大きな不安に襲われた。もう従姉妹と会えないのは嫌だ——だから、私は——ツ！

だが——

「……エルミアナ」

ほぼ吹雪に包まれたアナスタシアがルミアの頭をくしやりと撫でる。

「……また会えるから」

「——ツ！」

「これで最後じゃないから。それに……私は貴女を見守っているから。姿は見えないでしようけど、いつも貴女の傍にいるから……だから——」

吹雪がアナスタシアを完全に包む直前、切なそうに薄く微笑んで——

「——また会いましょう、エルミアナ。そう遠くないうちに、ね？」

そう言つて、吹雪に包まれて——

アナスタシアの手の感触がどんどんなくなつていつて——

アナスタシアを包んだ吹雪が止んだ時は、アナスタシアは姿を消していた。

「……ナーシャ」

あまりにも突然で、とても短い従姉妹との再会は、こうして一応終わりを告げることになった。

だが、ルミアには先ほどまでの不安はなかった。

だって、また会えると、彼女が言ったのだから。

それに、またどこかで会えるような気がするから。

今は、その時を待とう。

ルミアの目の前には、シンプルなデザインのパインキーリングが置いてある。

ルミアはそれを手に取り、左手の小指に嵌めるのであった。

また、彼女と会えることを願って。

Двадцять чотирь (第二十四話)

……そして。

残念なことに、グレン達のクラスの遠征学修は、結局中止の運びとなった。

なにしろ、白金魔導研究所長、バークスIIブラウモンの突然の『失踪』。

政府上層部より突如下った研究所の一時的な稼働停止命令と、帝国宮廷魔導士団からの何の前触れもないサイネリア島内の調査探索隊——調査隊と銘打つにはどうも装備が物々しく物騒な一隊——の派遣。

それと同時に勧告された、島内の全観光客、全研究員への島からの退避命令。

最早、遠征学修どころの話ではなかつたのである。

無論、全ての真実が人々に明かされたわけではない。

天の智慧研究会が裏で囁んでいたという事実は伏せられ、全ては研究所内で起きてしまった『不幸な事故』が原因であると説明された。それで納得できるにしろ、できないにしろ、今回の事件はそういう形で闇に葬られることになったのである。

だが、島内には、やはりそれなりに数多くの人間がいる。

一度に全員が本土へ帰還するのは不可能だ。現在、ひっきりなしに帝国本土とサイネリア島を旅客船が昼夜間わず往復しているが、全ての人間が島内から退避するにはまだ時間がかかり、乗船は順番待ちの状態だ。

しかし、幸運にも、それがグレン達のクラスの生徒達に一日の空白を作った。特に予定のない、丸一日の自由時間である。

そんなわけで――

どこまでも青い空。燦々と輝く太陽。焼けた白い砂浜。

清らかな潮騒と共に、寄せては引き、引いては寄せ――千変万化する波の色。サイネリア島のビーチに、水着姿の少年少女達の楽しげな声が踊っている。

「えい」

やる気ない跳躍とハエ叩きのような挙動で放たれた、リエルの殺人スパイク。

どぎあーつと、空高く上がる砂柱。砂浜に大きく口を開けるクレーター。

「ぎやあああああああああ――ツ!?!」

「どおわあああああああああ――ツ!?!」

その威力に木の葉のように蹴散らされて宙を舞う、哀れな男子生徒達……

「……勝った」

「うん、ナイスシュート！リイエル！」

いつものように眠たげに、ぼそりと呟くりイエル。

そのリイエルに、太陽のような笑顔のシステイーナが背後から抱きついた。

「システイーナのトスが良かった」

システイーナに抱きつかれたリイエルは、どこか胸を張って誇らしげだ。

「あはは、息びったりだったよ、二人とも。……でも、もうちよつと手加減してあげてね？リイエル」

そんなリイエルを、ルミアが苦笑いでたしなめる。

「くっそお……リイエルちゃん、強え。ええい、くそ！このまま負けっぱなしでたまるか！皆！我こそはと思うやつは、気絶したカイとロッドの代わって俺に続けえ！」

「が、頑張れ、カツシュ……死なない程度にね……」

砂まみれになって地面に這いつくばっていたカツシュが根性で立ち上がり、外野のセシルが曖昧に笑って声援を送る。

カツシュの発破に応じて、次は俺が、僕がと、次々とクラスの男子生徒達が名乗りを上げ、即席のビーチバレーコートに参戦する。

コートの外で観戦に徹していた女子生徒達が、命知らずで勇敢な男子生徒達へ、きや

いきやい声援を送る。

そんな大騒ぎのクラスメイト達の下に。

「もう、男子つたら……リイエルにビーチバレーで勝てるわけありませんでしょうに」

「それよりも、私達、まだ辛うじて開いていた店舗から西瓜を買って来ましたわ」

「ね……皆で西瓜割り……しよう?」

呆れ顔のウエンデイ、穏やかに微笑むテレサ、柄にもなく高揚しているリン……買い出し組の三人が、ちょうど戻ってきていた。

「おーいいねえ、ナイスだけ、ウエンデイ! そろそろ喉も渴いてきた頃だったし、西瓜食った後で、リイエルちゃんにリベンジしてやるぜ!」

「……ん。受けて立つ」

そんな喧騒から少し離れた場所、ヤシの木陰にて。

やはり生徒達の中でただ一人、いつもの制服姿のギイブルが黙々と本を開いている。

そんなギイブルの下ヘカツシユか駆け寄っていき、何らかのやり取りの後、ギイブルはいかにも嫌そうに、面倒臭そうに、渋々本を閉じ、重い腰を上げていた。

楽しげな喧騒が絶えない、そんな賑やかな光景を前に。

「……成る程。これがお前の守りたかった光景が、グレン」

「さあな」

ビーチパラソルの下で寝そべるグレンへ、アルベルトが淡々と言葉を投稿っていた。

アルベルトの現在の格好は、簡素なシャツにサスペンダー付きのズボン、銀縁の丸眼鏡、そして白いローブを羽織っている。いかにも研究所の研究員といった風体だ。

「まあ、こういう日常は掛け値なしに良いもんですからね。……少なくとも、外道魔術師と戦うよりは」

そして、制服姿のサーシャが全身から冷気を放ちながら、アルベルトの問いに返す。

「確かに、この光景は掛け値無しに尊い。……今回ばかりは、俺はお前に謝罪せねばなるまいな。すまなかった」

「はっ、どうした？ 気持ち悪いな。らしくねーぞ？」

「……ふん」

不敵に笑うグレンの前で、アルベルトは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「しかし……お前達、どう思う？」

そして、アルベルトは少し声のトーンを落とし、グレンとサーシャに問う。

「どう思うって……そりゃー、ルミアとか、テレサあたりの水着姿は、やっぱ最高だなんて思う。なあ、サーシャ？」

「そうですね。俺はルミアの方が好みかな？ なんか丁度いいというかですね。ああ、でも、ルミアは好きな人いそうだし、叶わないかな……よよよ……」

「お？お前はルミアか？あいつモテるからなく。俺、実はあんまし年下にや興味ねーけど、何かに目覚めそうだ……あ、白猫はもういや。あれは多分、将来性もゼロ——」

「誰が水着の話と言った……ッ!？」

冷淡ないつも通りの声色の奥底に、近寄りがたい危険な何かを滲ませながら、アルベルトがグレン達へ左手の指を突きつけていた。

「いいだろう。貴様らの【愚者の世界】、【シユトレラ2】と、俺の【ライトニング・ピアス】……どちらが速いか試してみるか？」

「じよ、ジョークよお、ジョーク！アルちゃん、ジョークだつてばあ……あは、あはは……」

「だ、だからその物騒な指を引つ込めましょう？ね？」

真つ青になって滝のように汗を流すグレンとサーシャ。

「こ、今回の一件で例の組織との戦いに進展があるか、だろ？そんなのお前も本当はわかってんだろ？何も進展しねえよ。自信を持って断言してやる」

舌打ちしながらアルベルトが指を引つ込める。

「しよせん、外陣……第一団《門》クラスに過ぎないライネルが、組織の深奥に繋がる情報なぞ持っているわけがない。お前が始末したバークスも一緒だ。あの程度の連中が情報持つてるくらいなら、組織との抗争が建国有史以来続くもんか。お前もそれをわ

かっているからバークスの野郎を始末したんだろ？」

「……………」

「出てくるとすりや、魔術師による世界支配を目論んでいるってことと……………例によつて例の如く謎の『禁忌教典』とやらに対する意味不明の執着だけさ」

アルベルトの片眉が釣り上がる。

禁忌教典……………実はこの言葉、サーシャがこの間の魔術競技祭の騒動でエレノアから聞かされた時が初めての言葉ではない。

実は、帝国政府と天の智慧研究会との抗争においては、何かと出てくる言葉なのだ。

だが、その言葉の意味は現在に至るまで一切不明。それが文字通り、なんらかの書物を表すのか、別の何かの隠語なのか、一体何に使う物なのか……………それすらわからない。

「ホントにわけがわからない連中ですよね……………自分自身ですら『禁忌教典』とやらが、具体的になんなのかわからないのに、なんでそれをあんなに渴望するのでしょうか？」

「呪いにも似た強烈なカリスマを励起させる暗示呪法かもしれない。組織の求心力を高め、外部の協力者を募り、それらを手駒として操り易くするためのな」

「なるほど。それで末端の構成員や外部協力者には肝心要な情報を教えず、いつでもトカゲの尻尾切りができるようになってか……………やれやれ、考えれば考えるほど吐き気のある組織だぜ……………」

「重要な情報を知っているとしたら、エレノアがいたのですが……地下研究所で一人逃走している所を見つけて追いかけたのに、逃げられましたし……すみません」

「謝るこたあねーよ。アルベルトだって、足止め喰らっちゃつまつたらしいからな。あの女は一筋縄ではいかねえよ」

ウンザリしたように、グレンが空を仰ぐ。

「それに、行方知らずの皇女が地下研究所に侵入して、ルミアとリエルを助けたらしいからな。ルミアから聞いたところ、俺が部屋に入る直前に姿を消したらしいが」

そして、もう一つ。それは東セルフォード帝国連合第一皇女アナスタシアのことだ。

グレンとアルベルトが地下研究所に到達した時は、通路に合成魔獣の死体がごろごろ転がっていたし、グレンが最終の部屋に突入した時は三体のレプリカの死体と、気絶したライネル以外はルミアとリエルしかおらず、アナスタシアは既に姿を消していた。

帝国宮廷魔導士団は逃亡したエレノアと姿を消した皇女を搜索しているが、恐らく両者とも見つからないだろう。

「通路に転がっていた合成魔獣も、その皇女が始末したと見てもいいしな……だが、どうやってこの事件を知ったんだ、その皇女は？ 宝石獣もあの皇女が始末したのかと思うと、ヤバくないですか？」

「……内部に殿下の協力者とかいた可能性が高そうですけどね。ほら、すくなからぬ東

部人が帝国の省庁にいますし」

まあ、そう考えるのが普通だろう。となると、一番疑わしいのは帝国保安局情報調査室室長ボリスⅡアガプキンかヤチエクⅡレイエフスキなのだろうが、彼らが皇女に情報を横流しした証拠はないため、咎めることはできなかった。

もちろん、彼らが皇女と繋がっている証拠もなかった。

天の智慧研究会に、五年前に崩壊した帝国連合の皇女。

「やれやれ、今度は五年前に革命で滅ぼされた国の皇女様か……はあ、なんか面倒臭そうな展開になってきたな、アルベルト？……おい、アルベルト？お前、何、そんな怖え顔してんだ？」

心底ウンザリしたグレンがふと、鋭い目で遠くを見据えるアルベルトを見上げる。

すると。

「ははは、中々有意義な時間でしたよ、グレンさん」

アルベルトの口調と態度が穏やかな好青年のものへと、ころりと変わっていた。

「……たか。」

「貴方の術式解釈の切り口は斬新だ。また、どうか貴方と魔術論議ができる日を心待ちにしていますよ。それでは、私はこの辺で……」

紳士然とした口調でそう言い、アルベルトは踵を返して、すたすた歩き去っていく。

「……なんだ？」

「ああ、多分、こういうことかと」

グレンがぼかんとしていると、サーシャがこつちに向かつて来る三人娘の存在に気付く。

「あ、いたいた、先生ッ！サーシャ君ッ！先生達も一緒に西瓜、どうですかッ!?」
アルベルトと入れ替わりに、ルミアとステイーナがグレン下へ駆け寄ってくる。

そして、リエルもそんな二人の後を、雛鳥のようにちよこちよこついて来ていた。そんな三人の様子を見て、グレンは思わず頬を緩める。

「ふふ、先生……大分、お疲れみたいですな？大丈夫ですか？」

ルミアが気遣うように聞いてくる。

「はははっ、安心しろ。デカイ剣で串刺しされた時より大分マシだ」

「先輩、デリカシーなさすぎでしょ……」

現に、あまりのデリカシーのない言い草に、後ろにいたリエルがびくりと震える。

「う……」

そして、少し涙目になってるし。

「……あれ？」

苦笑いでリエルを見ていたサーシャが、ルミアの左手の小指に嵌めてあるピンキー

リングの存在に気付く。

「ルミア、それ……」

「あ、この指輪？」

傍でシステイーナが人差し指を立ててグレンの前に立ちはだかっている中、ルミアは左手の小指に嵌めてある指輪をサーシャの前に見せる。

「この指輪は……ナーシャが置いていったもの……だと思うの」

「……………」

大事そうに眺めるルミア。

「……………いつか、またどこかで会えるように、こうやって左手の小指に嵌めているの。そうすれば、願いが叶うって五年前にナーシャに言われて……」

「……………会えると、いいね」

「……………うん」

そう言って、ぎゅつと胸元で指輪を大事そうに持つルミア。

その時の、サーシャの顔はどこか安心していた顔をしていた。意味、分かっている安心しているような顔、と言うべきかもしれない。

すると。

「うるさい！このバカばか馬鹿ツ！そういうことじゃないわよ！あ、あんなのノーカ

ンツ！ノーカンなんだからツ！ううくくツ！もう知らないっ！」

突然、ふかーツ！とシステイーナはグレンを威嚇すると踵を返して走り去ってしまった。

何？何を話していたの？お宅らは？

「ちよつと、システイーナ!?あの、先生、サーシャ君、リエル。私、システイを見えますから！」

ルミアが慌ててシステイーナを追って駆け出す。

そんな二人の様子を、グレンとサーシャはきよとんと見送った。

「一体、何の話しをしていたんです？先輩」

「いや、白猫が白魔儀【リヴァイヴァー】でアルベルトの儀式進行の補佐と魔力供給をやったらしくてな……その一件で礼を言おうとしたら、急に顔を真っ赤にして、走り去った。……今回ばっかは本気でわけわからん」

「……さいで」

ていうか、【リヴァイヴァー】の儀式進行の補佐と魔力供給をシステイーナ一人で賄った？

(彼女の魔力容量、どうなってるのよ……?)

そうサーシャが思っていると――

「ルミアとシステイーナとあのコウジョ？ナーシャ？を守る。そしてグレン、あなたの剣になる。グレンが望む道を切り開くために、グレンが守りたいものを守るために、わたしは剣を振ってみようと思う。よくわからないけど……多分、それが、わたしが大切に思うこと……かも。だから、そのために生きてみようと思う……だめ？」

いつも感情の読めない、眠たげなりイエルが——その時は薄く微笑んでいた。それをグレンは信じられないものを目の当たりにしたかのようにして、硬直していた。

グレンをじつと真っ直ぐ見つめてくるリエルの目は——珍しく真摯で——少なくとも誰かに依存して、思考を放棄している人間の目ではないことはナーシャにもわかった。

「……物好きなのやつ。勝手にしろよ」

「ん。勝手にする」

ため息をついて手に平をひらひらさせるグレン。

にこりと笑って、小首を傾げるリエル。

「……そう。お前はもう『人間』なんだから」

ぼそりと呟くナーシャ。

そんな三人の下に、ルミアに宥められながらシステイーナが引つ張られてくる。システイーナはまだ顔を真っ赤にして、ぴーぴー何事かをわめいているようだ。

そんな光景に苦笑いしながら。
サーシヤは、口元が無意識に緩むのを抑えきれなかった。

アルザーノ帝国・フエジテ

k a k s k ・ m m e n d v i i s (第二十五話)

「……どうしても、お前の力が必要なんだ……」

アルザーノ帝国魔術学院の前庭の隅の方に。

グレンの苦渋と懊悩に満ちた声が響き渡った。

「許されないことだとはわかって……お前を巻き込んでしまうということもわかっている。だが、人の命がかかっているんだ……ッ！」

前庭の中央を行き交う生徒達の喧噪は、遠い。

そのせいか、グレンの淡々とした声は、妙に力が込もっているように聞こえた。「頼む、リイエル！俺に力を……お前の力を貸してくれッ！」

殊勝にグレンが頭を下げる先には、青髪の小柄な少女がいた。

リイエルⅡレイフオード。先月、とある特殊な事情でサーシャと共に魔術学院に編入された生徒だ。

「……………」

リエルはいつも通りの眠たげな無表情のまま、じっとグレンを見つめて……やがて、ぼつりと眩く。

「……大丈夫。わたしはグレンの剣。グレンのためにこの力を使うと決めた」

「リエル……ッ!?!いいのか!?!」

「ん。わたしの力がグレンの役に立つのなら……」

微かに頷き、リエルは地面に落ちていた拳大の石を拾い、小声で呪文を唱え始める。

その呪文に呼応するかのようには、リエルの手の中の石が、次第に黄金色の光を眩く放ち始める――

魔術。呪文を鍵句とした自己暗示からの深層意識改変によつて、人と世界は等価で互いに影響を及ぼし合うという魔術理論に従い世界法則へ介入、様々な超常現象を引き起こす奇跡の業。

今、リエルの起動した魔術により、ここにその奇跡が顕現する――その時だった。ただだだだと、何者かがグレン達の下へ、勢いよく駆け寄つて来て……そして。

「《何考えてるのよ……この・お馬鹿》――ッ!?!」

駆け寄つてきた銀髪の少女――システイーナが叫ぶ。

そして、その叫び声に即興改変された黒魔〔ゲイル・ブロー〕の呪文が、局所的に収

束する突風を轟、と巻き起こし、グレンを吹き飛ばす。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ッ!?」

まるで女のような悲鳴を上げながら、グレンの身体は空高く舞い踊り——
ばっしやああああんっ!

やがて、前庭の端の池の中へと墜落し、盛大な水柱が上がった。

「ぼぼおっ!……や、やるな、白猫……」

ずぶ濡れの身体を、池からよろよろと引き上げるグレン。

「最近のお前の呪文即興改変力はマジで凄いな……先生は嬉しいぞ……げほおっ……」
「……えっ?そ、それは……その、先生の教え方がいいから……じゃなくて!」

不意に褒められて思わず赤らめてしまった頬を冷まそうとばかりに、システイーナはぶんぶんと頭を振り、そして人差し指をびしりとグレンへ突きつける。

「リエルに金を錬成させて、一体、何を企んでいるんですか!?」

見れば、傍らで棒立ちしているリエルの手の平には、一塊の金がちよこんと載っていた。リエルお得意の魔術——錬金術で、先ほどの石から錬成した物だ。

「売るんだよ!」

対するグレンは、何の臆面もなく、真顔でそんな最低最悪なことを言つてのける。

「だから、それは犯罪ですって!?!リエルを巻き込まないでください!」

「うっさいやかましいー！リィエル（こい）の暴走のせいで、俺の給料はカットされまくり！このままだと餓死は確定ッ！背に腹は代えられないんじやああああッ！」

そして、いつものように侃々諤々、説教とみつともない言い訳合戦が始まる。

「あ、相変わらずだなあ……二人とも」

「またですか。懲りないですなあ、あの二人は」

そんな光景を、少し遅れてやって来た金髪の少女ルミアが曖昧に苦笑い、白髪の少年サーシャが呆れながら見守る。

なんで喧嘩してるの？とでも言いたげに、リィエルがルミアをちらりと見る。

そんな三人を置き去りに、システイーナとグレンの子供同士の喧嘩じみた説教合戦は、さらにヒートアップしていく。

「大体、先生が減給されるのはリィエルだけが原因じゃないでしょ！魔術講師としての自覚のない、職務怠慢な常日頃の態度が——」

「へーんだ、うっさいわい——つとお！」

グレンは無駄に素早い動きで、ひよいとリィエルが手の平の上に載せている金塊を摘まみ上げ、そして踵を返して走り去ろうとする。

「あつ！こら、待ちなさいッ！こら、《雷精の紫電よ》——ッ！」

そんなグレンの背を追いかけながら、その背に攻性呪文を撃っていくシステイーナ。

システイーナの指先から飛ぶ、いくつもの電気線。

「ルミア……先輩、飢えているらしいから、今度弁当作っていたほうがいいような気が……」

「あはは……そうだね」

相変わらずの大騒ぎの二人を、呆れと苦笑いとそれぞれの表情で眺めるサーシャとルミア。

他の道行く生徒達も一瞬、ぎよつとするが……

……ああ、また、あの二人か。

……いつものことね。

……飽きないなあ。

すぐにそんな感情が色濃く見える表情となり、呆れたようにその騒ぎを眺め始める。最早、この学院ではすっかりお馴染みで、見慣れてしまったその光景。

……と、その時だ。

背後から迫ってくるシステイーナをあしらうことに集中するあまり、前方不注意だったグレン。ふと前を見れば、目の前には馬車が停留しており……

「あ、ヤベ……」

「せ、先生……ッ!？」

眺めていたサーシャとルミアも、馬車の存在に気付くが、グレンを止めるには距離が遠すぎて間に合わない。

「どおわあああああ——ッ!?!馬あああああ——ッ!?!」

そして、グレンは馬車に繋がれた馬に顔面から衝突しそうになって尻餅をついていた。

その馬車は二頭立てのコーチ馬車であった。客室が妙に豪華なしつらえで、学院では見かけない馬車である。どうやら学院に招かれた来賓の馬車であるようだ。

「あ、危ねえ……」

あやうく衝突せずに済んだことに、サーシャはほっと胸をなで下ろす。

向こうでは、システイーナがグレンに追いつき、馬車の御者台に腰かける御者に、ぺこりと頭を下げていた。

「にしても……あの馬車って、見た感じ、貴族とか上流階級の人達が使う馬車だよな?」

「うん。あの馬車、学院では見かけないから来賓の方の馬車、なのかな?」

見かけない馬車を見て、サーシャとルミアが話していると。

「ははは……この学院に着いて早々、真っ先に君に会えるなんてね……」

馬車の客室の脇に据えられていた扉が開き、新たな第三者の声が響き渡る。どうやら、さつき着いたばかりのようだ。

「これには流石に、私も運命というものを信じてしまうかもしれない」

そして、客室の中から一人の男が姿を現し、優雅に地面へと降り立った。

グレンより少し年上の男だ。二十歳過ぎといったところだろう。

緩くウエーブのかかった柔らかな金髪、すらりとした長身。片眼鏡をかけた面立ちはいかにも貴族然と甘く整っており、気品に満ちあふれている。

「貴族だねえ」

「貴族、だね」

グレン達の騒ぎを眺めていた女子生徒達の多くが、突然現れた目が覚めるような美男子の姿に、一様に顔を赤らめ、浮き足立っている中、サーシャとルミアはごく普通に男の見た目の感想を言う。

少なくとも、身に纏う旅装用スーツやインパネスコートの生地は最高級から見たら相応な資産家だし、立ち振る舞いから見ても貴族のそれに見える。

長旅を経てきたらしく、その男の手にはスーツケースが提げられていた。

「にしても、運命か……はっ！まさか、あの男の運命の相手って——グレン先輩!？」

「違うと思うよ!？」

合点がついたという顔で妙なことをのたまうサーシャに、ルミアが珍しく突っ込む。

「久しぶりですね、システイーナ。君は相変わらず元気がいい。……まあ、そこが貴女という女性の魅力的なところでもあるのですが……」

当然、男はグレンにはなく、システイーナに対して言っているのであった。

「あ、貴方は——」

現れた男の姿を前に、システイーナの目が丸くなる。

男も優しげにシステイーナを見つめる。

まるで、それまでの空白の時を埋めるかのように、無言で見つめ合う二人。

そんな二人の間を穏やかな風が流れ、街路樹の梢を鳴らし、システイーナの銀髪を緩く揺らした。

「……えーと、あの人の言い方だと、システイーナの知り合い、なんだよね？ルミア、知ってる？」

「うーん。私は会ってないからわからないけど、システイーナの反応から見ると知り合い、なのかも……」

実際、サーシャとルミアの胸中は一連の騒ぎを遠巻きに眺めていた全ての傍観者も同じであった。

「そもそも、アンタ……誰？」

k a k s k ・ m m e n d k u u s (第二十六話)

クライトス伯爵家は、現代に生き残る有力領地貴族の家の一つである。

今から四十年前、和睦という形で終結したアルザーノ帝国・東セルフォード帝国連合とレザリア王国の『奉神戦争』。その長きに渡る戦いで帝国内の経済は乱れに乱れ、多くの帝国貴族が多額の負債を抱えて領地経営が破綻、没落した。

そんな困窮した貴族達の多くが、政府の中央集権化政策に便乗し、領地を積極的に王家へ奉還し、領地貴族から宮廷貴族へ、領主から代官へと鞍替えした。

だが、中には卓越した領地経営手腕を発揮して財政難を克服し、自身の領地を守りきった貴族もまた多く存在する。クライトス家はその中の一つだ。

因みに、東セルフォード帝国連合は当初は中立を保っていたが、レザリア王国が突如、国境を越えて侵攻。奇襲攻撃を受ける形でアルザーノ帝国側に参戦することになった。

当時、連合軍と構成国が独自に持っていた国軍、民兵で構成されていた北大陸最大規模の軍隊を持っていた帝国連合は、緒戦は突然の奇襲攻撃による混乱により、組織的抵

抗が出来ずにレザリア王国軍に敗北を続ける。

そこで、帝国連合政府は王国軍を奥地に誘い込んで殲滅すべく焦土戦術を実行。

この作戦が功奏し、さらに冬將軍の早めの到来により、レザリア王国軍を撃退することに成功。だが、この時、ユークレイン大公国東部を除く全域、白ルシタニア公国、モラヴィア王国、ユレスコ王国、ルブリンIIピャエスト王国、ラトガレ大公国、エーステイ公国、リシアニア大公国の全域を焦土と化して撤退したため、領土を荒廃されたこれらの貴族・国民の感情に反帝国連合——特に焦土戦術の中心的役割を果たしていたルシタニア大公国に対する反感を植え付けることになる。

この反感感情は、これらの地域で独立派が革命政権・帝政派よりも優位に立っている遠因になっている。

閑話休題。

さて、今も領地貴族の一員であるクライトス家だが、『奉神戦争』による財政難を克服するまでの道のりは他の大貴族——ナーブレス公爵家、シユウザー侯爵家、ノワール男爵家等の大貴族達とは違い、大変厳しいものであった。

なにせ四十年前前のクライトス家には、例えばナーブレス公爵領のように肥沃な土地から生産される良質の葡萄に支えられたワイン製造業を基幹産業に、金融業を営み、莫大な利益を上げる……などという領地経営を強力に支えるバックボーンが存在していな

かつたのである。

それゆえに、戦争の影響で経営が大きく傾いたクライトス家も、一時期は王家に領地を奉還するか否かと、領地貴族としての存亡が危ぶまれる時期があった。

しかし、クライトスの領地には経営を強力に支える産業はなかったが、魔術儀式の実践や魔術研究に適した優れた霊脈があった。そして、先々代領主が趣味で集めていた貴重な魔術書や魔導書、魔術関連品が、数多くあった。

そこで、クライトス家は当時一時的に出走しており、アルザーノ帝国魔術学院で最新の魔術を学んだ三男坊を呼び戻し、蒐集していた魔導書・魔導器を使つての魔術の学舎を設立し、その経営利益と学舎設立による周辺の経済効果で、領地財政を立て直すことを決意。

家の興亡を賭けた、この無謀とも思える試みは——結果的に大成功。アルザーノ帝国魔術学院にはない魔導書や魔導器に触れられるというクライトス魔術学院独自の優位もあり、政府から助成金が降り、年々生徒数も増え、あっさり黒字経営を達成してしまつたことにより、クライトス伯爵家は見事、領地経営難を脱却することになる。

今では、クライトス魔術学院は私立校でありながら、僅か四十年でアルザーノ帝国魔術学院に次ぐ、第二の魔術の学校として知れ渡るほどにまで成長している。

そして、魔術学院を設立するまで、魔術とは無縁だったクライトス家も本格的に魔術

学会に参入し、新興の魔術師一門として売り出しを始めることになる。

レオスⅡクライトスは、クライトス伯爵家の御曹司にて、クライトス魔術学院で噂の名講師、帝国総合魔術学会で今何かと注目されている期待の新星。

そんな人物の到来に、アルザーノ帝国魔術学院の面々はとにかく沸きに沸いた。

「……と、まあ色々と有名な講師なんだけとね」

生徒達がレオスに対して、浮き足立っている中、サーシャはルミアにレオスの一通りの経歴を教えていた。

初めてレオスの顔を見たサーシャだが、全く知らないわけではなく、レオスがどういう人間なのかはある程度は耳に入っていた。

「す、すごいね。魔術学院の講師を務めているかたわらで、魔術研究で研究成果や論文もいくつも発表していて高い評価を得ているなんて……」

「それに、人間性も良いらしい。あの年齢で魔術師としての礼節を完璧に備えていて学会でも好感度が高い。軍用魔術に関する造詣も深いらしいからね。話を聞いた感じ、後に躍進しそうな人かな」

サーシャの話聞いて感じ入ったルミアに、サーシャもまさかこの講師が来るなんてね、と内心驚いていた。

なにせ、この学院に来たのもこの魔術学院の一人の先生が、急病で倒れたため、その

療養期間中の間の臨時講師としてクライトス魔術学院からわざわざアルザーノ帝国魔術学院に来たのである。

こんな優秀な講師が来るなんて、普通なら歓迎するのだが。

「……………」

サーシャはどうも納得いかない表情をしていた。

「どうしたの？サーシャ君」

「…………わたしにはよくわからないけど、サーシャ、すごい難しい顔してる」

そんなサーシャの顔を見るルミアとリエル。

「…………なんでこの人なんだろうね？って」

「？」

不思議そうに首を傾げるルミアに、サーシャが言葉が続ける。

「いや…………さつきも説明したけど、彼ってクライトス家の御曹司なんよね」

サーシャは馬車から降りてきたレオスを思い出す。

「いや、確かに、アルザーノ帝国魔術学院とクライトス魔術学院は提携関係にあるらしいから、こちらの欠員の穴を埋めるために、一時的にこつちに派遣されてくるのは別に不思議じゃない。だけど、だからこそなんで彼なんだろうね？」

そう言うサーシャの顔には、やはり困惑と煮えきらないものが見え隠れしていた。

「クライトス伯爵家の次代当主候補、学会で今話題の期待の新星、クライトス魔術学院きつての名講師……なんでこんな大物が、こちらの病欠の穴を埋めるために、わざわざクライトス領から来たんだ？普通、こういうたのはもつと格下を送るものだと思っただけだ」

「……それは……」

サーシャにそう言われたルミアが、何か思っているのか、少し思い詰めた顔をする。

「それに……クライトス家は今、色々とか何かあるんだよね」

そしてサーシャは淡々と言葉を続ける。

「次代当主候補っていうことは、つまり他の当主候補者がいるんだよね。というのも今のクライトス家って、元々クライトス領を治めている主家筋と、クライトス魔術学院の初代学院長を務め、事実上クライトスを立て直した三男坊の分家筋で次期当主の座を巡って揉めているし。レオスは主家筋で、たしか父親は早くに亡くなっているはずだから次期当主に最も近い……そんな人がこの大事な時期にクライトス領を離れたっていうのがね……ていうか、よく主家筋も許したなって。妙なんだよねえ、考え過ぎかな？」

まあ、お家騒動なんて、それなりに歴史とかある名家ならば珍しくもないと言われればそれまでなのだが。

だが、サーシャがそれを差し引いても今回のレオスの来訪には嫌な予感がするのだ。

今、フェジテで変死体が発見されている事件も頻繁に起こっている。

それだけじゃない。一週間前ぐらいから、帝国に潜入している国家保安委員会の工作員が——真の同志が何名か何者かに殺害されているのだ。手口から見ても、独立派の一派の仕業と見られる。

最近、なにかと身の回りがどうにも色々ときな臭い。

(まさか、独立派との抗争が帝国にまで波及するなんて……)

何やら色々とは不穏なこの時期に、独立派の動きにも気を向けなくてはいけないなんて……

(……ボリスもヤチエクも、そして俺も気をつけなければな。独立派の組織によっては、学院内で事を起こしかねん)

思わずため息を吐きながら、サーシヤは窓の外を見る。

青い空。白い雲。燦々と注ぐ陽光。

窓の外にはいつもの通り、鋭角の屋根が立ち並ぶフェジテの街並みと——空に浮かぶメルガリウスの天空城の偉容があった。

フェジテで頻発している得体の知れない不穏な事件。

アルザーノ帝国内で起き始めている国家保安委員会と独立派の抗争。

そして独立派の中でも過激な組織が、後にあの男が再び引き起こした騒動に便乗して
——それにルミアが巻き込まれようとは、この時サーシャは思っていなかったのであつ
た。

k a k s k ・ m m e n d s e i t s e (第二十七話)

ところで、アルザーノ帝国魔術学院で行われている授業には、二種類の授業がある。

必修授業と専門講座だ。

必修授業とは、文字通り生徒達の誰もが必ず単位を修得しなくてはならない授業だ。魔術基礎理論に始まり、黒魔術学や白魔術学、錬金術実験、数理や生化といった各種自然理学にルーン語学……等々、魔術の基礎を広く学ぶための授業で、これ各クラスの担当講師が授業を行う。出席は必須ではなく、学期末に行う試験にさえ合格すれば単位修得可能なので、余所のクラスの担当講師の授業に潜り込んで履修することも可能だが、基本は自分のクラスの担当講師から必修授業を受けることになる。

一方、専門講座とは、学院の各講師が独自に開設する講座であり、講師自身の専門分野の魔術や研究成果についての授業を行うことになり、その内容は基礎的な必修授業と比べて、より深く掘り下げたものになる。生徒達も年次クラスを問わず、講義を受けた者が自由に選択して、専門講座を受けることになる。

レオスはアルザーノ帝国魔術学院にやってくるなり、病欠のグラムド先生の担当クラスの必修授業を受け持つ傍ら、早速この専門講座を開設した。

その専門講座とは――

「――これまでこのツアイザーの魔力エネルギー変換効率式を解説したきたわけですが……これで、なぜ、帝国で採用されている軍用の攻性呪文のほとんどが『炎熱』、『冷氣』、『電撃』の三属で占められるのか、皆さんも理解できたかと思えます」

魔術学院校舎西館、集まった生徒達で満員御礼な大講義室にて。

期待と尊敬の眼差しを一身に集めながら、教壇に立ったレオスが教鞭を執っている。

しん、と静まり返ったこの大部屋に、レオスの良く通る声が朗々と響き渡る。その声は明快で流暢でありながら、どこか甘く柔らかかで、コラールのようだ。

いかにも貴族然としたレオスの卓越した容姿も相まって講義に参加した女子生徒達は夢見るような表情で、その声に聞き惚れていた。

凜と背筋を伸ばした威風堂々たる姿、常に余裕の微笑みを絶やさないレオスは、年頃の少女にとってはまさに、幼い頃に夢見た理想の王子様の具現だ。

そんな中。

(……お見事)

サーシャはレオスの授業を聴講して内心、感嘆していた。

「そう、魔力を物理的な作用エネルギー……すなわち、物理作用力へと変換する際、『炎熱』、『冷氣』、『電撃』の三属がもつとも変換効率が良いのです。つまり、もつとも効率良く施術対象に損害を与えることができる魔力の使い方と言えるのです」

現に、レオスの容姿や声に興味ない男子生徒達もレオスの話に夢中で聞き入っている。

もし、ここに帝国連合軍の将兵が聴講していたら、なにがなんでもレオスを招聘しようとしていただろう。少なくとも帝国連合の魔導技術が飛躍するのは間違いない。

もつとも、革命が起きて絶賛内戦中の今となつてはそれも叶わないことなのだろうが。

因みに、帝国連合では『冷氣』が主力で『電撃』、『風』が補助という位置づけになっている。

——正確には、『冷氣』系の魔術は純粹の魔術で、『電撃』、『風』は銃弾、砲弾や六年前に実用化されたロケットを飛ばす際の補助的な位置づけになっている。

それにより爆発的な初速を發揮し、膨大な物理エネルギーを以て相手に損害を与えるという力業になっているのだが。

まあ、それはともかくとして。

(軍の一般魔導兵でも半分以上が、理解していない物理作用理論を、軍人でもない生徒達に

理解させた……こんな人がいたなんて……)

いつの間にか講義が終了していたが、サーシャはレオスがかなり有能な講師であることを改めて認識するのであった。

だが、その一方で――

(これが、軍の士官学校とかならまだいいけど……この内容を彼らに教えるのは早過ぎじゃないかな?)

サーシャは本日のレオスの講義内容を反芻する。

レオスは魔術師としての戦闘能力、戦闘技術を高める一辺倒の授業であり、グレンが行っている魔術師としての総合的な力量向上を目指し、ルーン語の文法や術式構築技術、自然理学の魔術的な応用と理解、その他、魔術師に必要な幅広い知識を深める授業とは同じ理論・実践主義でも根本がまるで違う。

いかに、効率よく魔力を破壊力に変換するか。いかに、効率よく人を殺傷するか。それら人殺しに特化した術を、どう運用するか――なんていうか、教える内容が場違いな気がするのだ。場所が場所なら、わざわざ血腥い部分を言葉巧みに美化しないで済むし、強大な魔術の力に対する華々しい一面のみを高々と歌い上げる必要もないはずだ。

魔術を志す者のほとんどが、大なり小なり自己顕示欲の塊だ。これは旧帝国連合でも帝国でもどこの国の魔術師でも変わらない。普通の人間とは一線を画した自分、他者が

持ち得ない強大な力を持った自分というものに憧れ、そんな自分にひとり悦に入る……どんな聖人君子な魔術師にも、そういった一面は存在する。

だから、今日のレオスの授業は——まだ新米の魔術師に過ぎない生徒達には、さぞ麻薬のように心へ深く染み入ったことだろう。

中には、「シヨック・ボルト」でも、やり方次第で人を殺せることに気付いてしまっているかもしれない。

(……なんていうか、あの人の魔術師なら大体想像が付きそうなことなんだけど……)

なんかズレているなこの人、と。サーシャはこつち——正確には、システイーナの方へ向かってくるレオスを見て、物思うのであった。

所変わって、帝国保安局情報調査室、室長室にて。

「……またか……」

ソファに腰かけているボリスは、苦々しい顔で向かい側に腰かけているヤチエクの報告を聞いていた。

「……これ何人目だ？ 同志が殺られたのは？」

「今日で、七人目だ」

向かい側のソファに腰かけるヤチエクの顔も、いつものおちやらかなような顔ではなく真剣で、危機感を募らせた表情でそう返す。

「両手、両足に銃弾を撃ち込まれ、最後に額にズドン。……同じ手口だ」

「……下手人は……独立派だな？ イメタリア三国の」

今までの手口から下手人を推測したボリスの問いに、ヤチエクはこくりと頷く。

「間違いない。リスアニア、ラトガレ、エースティの連中だ」

イメタリア三国。

東セルフオード帝国連合の構成国の中で、リスアニア大公国、ラトガレ大公国、エースティ公国の三国の総称である。

文化・言語が非常に類似している東セルフオード帝国連合構成国の中、この三ヶ国はルシタニア大公による同君連合に組み込まれる前から、独自の文化・言語を持っている数少ない構成国であった。

連合に組み込まれてからは、東部語の語学教育が三国でも行われるなどしているが、長年独自の歴史を歩んできた故に反発する者がこの三ヶ国では少なくなかった。

「そのせいもあってか、連合に組み込まれた当初から反帝国連合・反ルシタニアの機運が強いんだよなあ、あそこらへんは……四十年前の『奉神戦争』の焦土戦術を行ってからは尚更、な」

一通り報告し終えたヤチエクがため息を吐きながらそう言う。

「三国の独立派も数多くあるが、総じて帝国連合——特にルシタニアに対する印象はかなり悪い。この独立派の中にはルシタニア人を見かけたら問答無用で殺害する組織まである」

「これまで殺された同志も、一人除けばルシタニア人だ」

「……サーシャもルシタニア人だったな？」

「ああ。それと『姫』もだ」

「……………」

沈黙。二人の間に重い沈黙が訪れる。

無論、ボリスもヤチエクにも命の危険がある。

しかも、下手人は同志だけじゃなく、無関係の帝国国民まで巻き込む無差別テロまで行っているのである。

最近、変死体が国内のあちこちで頻繁に発見されており、帝国政府は全力でその怪事件の捜査に当たっている。変死体の体内から“ある物”が検出されてからは特にだ。

そのため、怪事件と同時に起き始めた無差別テロの捜査は、充分な人手を確保出来ないまま捜査に当たらざるを得なくなっている。

「俺達も危ないが、一番危ないのはサーシャと『姫』だ」

「……それに廃嫡王女がいる。下手したら、とんでもないことになるかもしれない」
「天の智慧研究会に、過激なイメタリア三国の独立派……」

もし独立派がサーシャ、アナスタシアを狙ってフェジテで無差別テロを行ったら。
もし、そこに護衛対象であるルミアが巻き込まれてしまったら。

面倒なことになるのは明らかだと、二人がそう理解した途端、頭を抱えるのであった。

「……一旦、ルミアから離れた方がいいのか……う？いや、それだと……」

一方、サーシャもボリス達と同じことを考えていた。

「え？サーシャ君、今、なんて？」

ぼそぼそと呟いていたサーシャは、ルミアの存在に気付く。

どうやら、かなり考え込んでいたらしい。

「ああ、いや……なんでもない。大丈夫よ」

「……？」

小首を傾げるルミアに、サーシャは考えるのを一旦中断する。

本当は何でもないわけではなく、むしろルミアに話した方がいいと思ったのだが、

サーシャは言わないことにした。

そもそも、これを言っただけでどうするんだ？下手したら、自分の素性がルミアにバレる可能性があるのに。

「で……ルミアはどうしたの？そんな困った顔して……？」

サーシャはルミアがほんの少しだけ、思い詰めたような表情をしていたことに気が付き、何か相談事があると察する。

因みに、システイーナはレオスと共にどこかに去って行っていた。

「その……サーシャ君にもお願いがあるの。その……申し訳ないんだけど……」
ルミアがサーシャに縋るような目を向ける。

「……？どうしたの？」

サーシャはそんなルミアを見て、ルミアのお願いを聞くのであった。

k a k s k ・ m m e n d k a h e k s a (第二十八話)

結局、あの後、ルミアの誘いを断らざるを得なかった。

というのも、あの後、一人の魔術学院の講師に呼び出されたのであるからだ。

あ、決してハー……ハクシヨン大魔王先生ではないので、ご安心を。

呼び出されたサーシヤは、講師と共に人気のない校舎裏でなにやら話していた。

話の内容とは――

「……七人目か……」

「ああ、ヤコブが殺られた……国軍省から出た後に拉致られちゃった……ッ！」

新米の講師として魔術学院に潜入している、旧スルビナ王国出身の元・貴族の子息であるゾランⅡチヨシツチが半ば狼狽えながらヤコブのその無惨な最期を語っていた。

「これで、七人……しかも、殺されたのはスルビナ人とルシタニア人……つまり、俺達も危ないぞ……ッ！」

「スルビナとルシタニア……」

これは本格的に危なくなってきた、と。サーシャはため息を吐く。

スルビナ人をルシタニア人を標的にしている、ということとは、下手人はイメタリア三国の独立派だけじゃない。

ボスナⅡスルビナ、およびフルヴァツカの独立派も絡んでいる。

東部諸国は帝国連合が結成されるまで、互いに互いを争い、領土を奪い合っていた。

その中で、周辺諸国の領土を切り取り領土拡張していた国が二ヶ国あった。それが、ルシタニア大公国と東部諸国の南部で中心的存在であったスルビナ王国である。

帝国連合を結成して以降も、婚姻・陰謀で構成国を属国・同君連合化していったルシタニアはもちろんなのだが、スルビナ王国も周辺諸国——特にボスナⅡスルビナ王国のボスナ人勢力とフルヴァツカ王国とは歴史的に熾烈な争いをしていたこともあり、この二ヶ国からのスルビナ王国の憎悪は凄まじい。

その二ヶ国は過去に——ルシタニアはボスナ人とフルヴァツカ王国を、スルビナ王国はイメタリア三国を連合に組み込む時に、互いに援軍を送っていたのである。

要するに、イメタリア三国とボスナ人、フルヴァツカの独立派が手を組んで今回のルシタニア人・スルビナ人に対する帝国民を巻き込んだ無差別テロを行っているというこ
とである。

「……数が多過ぎる」

サーシャは、予想外の独立派の結束に、頭を抱えてため息を吐いた。

「どうする、サーシャ？何か対策を打たないと……ッ！」

「……そうだな」

もし連中がサーシャとゾランの身元を特定したら、何しでかすかわかったものじゃない。学院内で、というのは、結果があるから難しいかもしれないが、前回の天の智慧研究会による自爆未遂テロの件もある。正直、油断できない。

「……ボリスに連絡を取ってみるから、ひとまずは自分の身を守りながら、お互いの連絡を密にしよう。正直、この学院に留まった方が理想的なんだが、そういうわけにもいかない。正当な理由がないと、怪しまれちゃうし……とにかく、周囲に気をつけていくしかない」

「そ、そうだな。そうするとしよう」

そう言つて、ゾランはそそくさと去つて行つた。

「……………」

なんとというか、彼、もつとしつかりした方がいいと思うのは自分だけなのだろうか？いや、彼は生粋の学者肌だし、現場で身体張るといふより、技術的な面で後方支援するタイプだからああいう性格でも多少は問題ないはないんだろうが。

それに、生徒・講師・教授陣からの評判もけっこう良いらしいから、もう少し自信持っ

ていてもいいような気がする。

そう物思いながら、サーシャは教室に戻ろうとして――

「システイーナ達の方、どうなったかな？」

あれからレオスと共にどこかに行ったシステイーナと、二人の後を付けているであろうグレン、ルミア、リエル達は結局どうなったのか、気になりながら教室に戻るのであつた。

そして、その後――

「……なして、そうなった？」

「うーん？」

放課後。

偶然ルミアと二人つきりになったサーシャは、システイーナとレオスのことと、その後、グレンが二人の間に乱入した話しをルミアから聞いたサーシャは、あまりにも予想斜め上に行く顛末に、ジト目で呆れていた。

あれからシステイーナはレオスと何か話していたらしい。

何を話していたのかは、二人の周囲に召喚していた使い魔を通じて聞いていたグレン

しか知らないのだが、ルミア曰く、最初はからかうネタが増えたと面白がっていたらしいが……

その後、突然怖い顔をして、システイーナとレオスの間に割って入ったらしい。

突然、何があつたのかはサーシャもわからないが、少なくともレオスが何かグレンにとつて気に入らない話しをしていた可能性が高いと判断した。

まあ、そこからは修羅場になったのは容易に想像できたし、実際そうなのだが——この時、システイーナの口から飛び出した爆弾発言が事態を予想斜め上の方向へ事態を動かしてしまうことになってしまう。

なんと、システイーナは自分はグレンと将来を誓い合つた恋人同士とレオスに爆弾宣言したのである。

もちろん、これはレオスの結婚を断るための口実であり、グレンとシステイーナは付き合つてはいない。

この発言に、グレンには関係ない話しだと余裕を崩していなかったレオスも流石に、動揺する。

これで諦めてくれるのかと思いきや——

「——それで決闘に発展するなんてね……どうしてこうなつた」

嘘から始まつたグレンとレオスの決闘に（しかも、言い出しつぺのシステイーナはや

けにピンポイントなりアクションをしていたため、妙な信憑性をレオスに与えてしまっていた)、ため息を吐くサーシャ。

しかも、グレンも逆玉できるじゃない☆つてのたまったらしいから、なんかもう……拗れに拗れまくっていた。

「しかも、先輩まで逆玉って言っちゃって……大変なことになってしまったね」

「うん……本当に、どうなるんだろう?」

苦笑いしているルミアだが、どこか不安に揺れていた。

「先輩が逆玉って言うていたという事は……ひよつとしてレオスはシステイーナに結婚の話でも持ち込んだのかな? ほら、システイーナは法的に結婚可能な年齢だし、上流階級層の婚姻は一般と比べると早いから、形式上、不自然じゃないし」

「私も実はよくわかってなくて……システイとレオスさんが話は先生だけ魔術で聞いていたから……多分……」

「まあ、実際婚約者って公言していたしね。レオスさんは」

だから別に結婚の話が出て、不思議ではいのだが。

「……………」

サーシャはレオスのこの行動に、奇妙な違和感を感じていた。

(だとしたら……なんでそんなに急ぐんだろうね?)

もしレオスが結婚を申し込んだとしたら、システイーナはもちろん断っているはず。まあ、本人は気付いていないが想い人がいる以上、断るのは不思議ではない。

だが、その後のグレンが間に割って入った時の様子を聞くに、レオスはそれでもシステイーナに結婚を迫っていたとも読める。

(レオスは……まあ、自身が手掛ける軍用魔術研究により専念できるようにしたいからとか言ってるんだろうけど……)

確かに、レオスの言い分はわからなくもない。

隣国であるレザリア王国との国際緊張は高まり続けているし、東部では革命政権——東セルフォード連邦が旧東セルフォード帝国連合——帝党派との内戦で優位になりつつあり、脅威が増しつつある昨今、次世代の軍用魔術研究・開発の重要性は高まっていた。

レオスはこの軍用魔術の研究が専門分野みたいだから、一時代築くための支えが必要……という意味で、幼なじみであるシステイーナに結婚を迫ったのだろうか……

(なんか……妙、だね……)

そうサーシャが難しそうな顔をして物思うと。

「……ひよつとして、サーシャ君もレオスさんから嫌な予感する？」

難しそうな顔をしているサーシャに何かを察したのか、ルミアがそう問うと。

「……杞憂であればいいんだけど、正直、そんな感じ。どう言えればいいのかわからないけど……なーんか、嫌なものをを感じるんだよね。例えば……白金魔導所所長だったバークスのような……あれと似ているような感じ。ルミアも？」

「私も同じ感じで……会ってまだほんの少ししか経ってないけど……人格的に申し分ない人だというのはわかるんだけど……でも……あの人は、何か……」

「そう……」

同じ嫌な予感を感じていたサーシャとルミアが顔を見合わせる。二人とも不安そう
な、物憂げな、そんな顔をしていた。

「……何も起こらなければ、いいんだけど……」

「うん……気のせい……大切な親友が見知らぬ男性に奪われてしまうのかも、と
思っているだけ……むしろ、本当にそうであった方がいいような……」

フェジテで頻発している物騒な事件。そして、帝国でちらほら起き始めている東部人
——ルシタニア人とスルビナ人を狙った無差別テロ。

色々と周辺がきな臭くなっている中、サーシャは物憂げな表情で空を見上げるので
あった。

そして、複数の男女からなる見知らぬ集団が覗き見していることをこの時、サーシャは気付いていなかった。

k a k s k ・ m m e n d ・ h e k s a (第二十九話)

——フェジテ市内に設けられた、とあるアパートの一室にて。

「何か、獲物はいたか？」

「ああ、いたぜ」

男二人が何やら話していた。

「男と女それぞれ二人。学生だ。男はルシタニア人、女は帝国人。おい、これは次の獲物はこの二人でいいだろ？」

「そうだな。そもそも、この男の方を狙っていたからな。まあ、罪もない無関係な女が一人いるが……まあ、いいだろう。どうせ、帝国人もルシタニア人も死に値するからね」

獲物を見つけて興奮気味に言う男に、薄く笑う男はどうやらリーダー格らしい。

「長年、僕達はやつらに虐げられ、抑圧されてきたんだ。余所者のルシタニアに……そして、そのルシタニアにあの女王は自分の妹をあの男に嫁がせて、あの忌まわしい魔女を生み出したのだからね……その時点でこの国も万死に値するね」

「あの魔女……行方知らずの皇女のことだろ？」

「まあ、どうせ姿を見せたところで何もできないだろうし……まあ、じっくり探して見つかるさ」

「ぎやははははッ！そんな時は、俺がじーっくり、教育して良い啼き方ができるようにしてお楽しみを堪能してから殺してやるよッ！」

下品な笑い声を上げる男。

「まあ、それにしても……今回の獲物は少しやつかいらしい。なにせ二人は学生……つまり、アルザーノ帝国魔術学院の生徒だ。……ふーむ？まあ、わざわざあのセキユリテイの堅い学院内で殺る必要はないか」

リーダー格の男がそんなことを呟く。

「今、我が故郷、ラトガレの戦況は独立派が圧倒的に有利……半年もしない内に政府も帝政派も殲滅できる。独立が達成した暁には、新たな大公を担ぎ出す連中とルシタニア人を皆殺しにする。そして、今度は国外に出てルシタニアを併合、皆殺しにする。そして、帝国の連中も殲滅するんだ。これにより、我らの……我が民族の復讐は達成され、祖先も報われることだろう。これは、その復讐の始まりにすぎないのだ」

そんな野望を口に出し……に、いと。リーダー格の男が口元を禍々しい笑みの形に歪めるのであった。

グレンがレオスに対して喧嘩を売った、次の日。

グレンとレオスが、とある女子生徒の伴侶の座を賭けて決闘をする……その噂は瞬く間に学院中へと知れ渡ることとなった。

「おいおい、まじかよ……？あの問題講師が、また何かやらかすのか……？」

「実は、レオス先生とシステイーナは、両親が決めた正式な許嫁同士らしいぜ……？」

「な、なるほど……二人とも名家出身だからな……有り得る話だ……」

「要するに、グレン先生の横紙破りかよ……み、みつともねえ……」

「逆玉の輿を狙ってるんだってさ……あの人らしいや……」

「許嫁のレオス先生はいいとして、一教師が女子生徒に手を出すなよ……」

「グレン先生、頑張つてえ……レオス様をあんな女に渡さないでえ……」

「そんなことより一人の女性を巡つて、二人の男性が争うなんて！きゃーっ！きゃーっ！
！ロマンよおーっ！」

以来、学院内の話題はこの決闘話で持ちきりだ。

グレンとレオス、どちらが勝つか。どんな決闘方式で勝負を決するのか。二人の動向に否応なく注目は集まっていく。

そして――

そんなこんなで、グレンが担当する二組のクラスにて。

「俺が見事、白猫とくつつく逆球の興、夢の無職引きこもり生活をゲットするために――
今からお前らに魔導兵団戦の特別授業を行う！」

「二二ふつぎけんなあああああああああああああ――ツ!?」

教壇に立つや否や、突然の授業内容を宣言したグレンに、当然クラス中が避難囁々となつた。

「俺達を巻き込まないでくださいよ!」

「そうだそうだ!ちゃんとして授業しろーッ!」

ぶいぶい文句を言う生徒達。

当然である。本来の時間割ならば、これから始まるのは黒魔術の授業なのだから。

「……これはひどい」

あまりに必死なグレンに、サーシャもちよつとドン引きする。

因みに、今度の決闘戦、つまり魔導兵団戦は、魔術師の集団戦を生徒達に経験させる

――いわば、実戦場における魔術師の戦術的な心構えを学ぶための模擬魔術戦――魔導兵の軍事演習のようなものだ。

この模擬戦において、生徒達はクラスごとに一つの魔導兵部隊となつて、担当講師の

指揮下で動き、他のクラスの講師が指揮する部隊と集団戦をすることになる。

帝国政府は、魔術師を諸外国に対する潜在的な戦力とも捉えており、いざ国難の際には学院の魔術師の卵達すら戦力として扱うことも視野に入れている。無論、そうなった例は少ないが、例えば四十年前の『奉神戦争』では、戦争の末期には魔術学院から有志の学徒出陣があり、そのおかげで辛うじて勝利を拾えたとも言われる（一方で緒戦で膨大な犠牲者を出していた帝国連合は、連合軍がレザリア王国領内へ逆侵攻したのも勝利の決め手になっていた、と。当時の帝国連合は国内にそう宣伝していた）。

そういった理由で、アルザーノ帝国魔術学院の授業では、良くも悪くも魔導兵団戦のカリキュラムが組まれており、特に男子生徒には必修となつている。

ただ、この魔導兵団戦……明らかにレオスが圧倒的に有利な条件と言えた。

軍用魔術の研究は、何も高い殺傷能力を持つ戦争用の呪文を開発・改良するだけはない。呪文の運用法や魔導兵の戦術・戦略に関する研究も含まれている。

つまり、常日頃それを専門に研究しているレオスに、圧倒的に有利な条件だというのは言わずもかなである。

そんなこんなで、現在に戻るのであるが――

「ええい、うっさい！各必修授業の進行は担当講師の裁量に任せられてるんだぞ!」

「う……」

「いやあ、俺も本当はお前らを巻き込むようなことしたくねーんだけど……そいえば、ちようど黒魔術の授業はちよおつと進んでて、魔導戦術論の授業はちよおつと遅れているなあ……ここは仕方なく、予定を変更するしかないかなあ……あくまで、仕方なく」

「さすが先生……普通の講師は絶対しないことを平然とやってのける……」

「そこに痺れないし、憧れない……」

「なんかもう、必死過ぎる……そんなに逆玉の輿がいいんすか……？」

最早、呆れ果て、諦めきった顔の生徒達。

システイーナに到っては、顔を怒りで真っ赤に染めてぶるぶると震えていた。

だが一応、グレンの言うことにも一理あるので、説教はできないようである。

「となると……」

サーシャはぐるりとクラス面々を見渡す。

グレンの担当する二組のクラスの生徒達は、ごく一部を除いて、どんぐりの背比べだ。

一方、レオスが臨時で担当しているクラスは成績優秀者達が集まっており、ハーレイの担当クラスに次ぐとされている。

さらに、この魔導兵団戦は魔術競技祭のように個々の尖った分野で鍛えるものではなく、全員、同条件で、同じ競い合いに挑まなければならない。

ゆえに、この勝負は最初から勝負にならない……というのがクラスの共通認識だし（現に丸眼鏡君が冷笑的にそう言っていた……気がする）、サーシャもまあ、使い物になる連中なんて一人もいないよなと思っていた。

特に、ギイブルのような生徒は。

ギイブルはこのクラスにおいてはシステイーナに次ぐ第二位の成績優秀者で、学年全体から見ても相当上位に入るほどののだが、そんなことは重要ではない。

「さて、さっそく魔導兵団戦……戦場における魔術師の戦い方、心得つてやつを教えようかと思うんだが……まず、始めに。お前らは多分、盛大に勘違いしてる」

生徒達の注視の中、グレンが肩を竦める。

「魔術師の戦場に——英雄はいない」

そんな宣言から、グレンの特別授業は始まった。

……。

……時間は飛ぶように流れ、それから数日後。

夕方のフェジテの通りを、サーシャが一人黙々と歩いていた。

因みに、システイーナ達には用事があるからと、先に帰らせている。護衛は以前は不

安だったが、今なら大丈夫だとリエルに任せている。

「……………」

サーシャは歩きながら探査魔術で周囲の様子を確認していた。
すると。

(……………やっぱり、つけられている)

サーシャは苦々しい顔で舌打ちした。

サーシャがリエルにルミアの護衛を任せて離れた理由……………それは、数日前から誰かにつけられているからだ。

それも一人ではない。二人、三人……………複数人からつけられている。

複数の視線が、サーシャに向けられていたが自分だけなのか、リエルは気付いていない様子ではなかった。もちろん、システイーナ、ルミアもだ。

(アルベルト先輩も、例の事件でアレが検出されたから、その出所を調査するために護衛任務から外れているし……………ああもう、なんでこんなにタイミング悪いんだよ?)

あまりにも状況が芳しくない中、サーシャは歩を速める。

すると、背後からついてくる複数の足音がサーシャにつられるように速くなる。

「……………」

段々と速めるサーシャ。背後からやはりついてくる人間がいる。しかも、その足音は

グレンでもアルベルトでもなくリイエルでもない。もちろん、システイーナ達、学院の生徒達ではない。全く知らない者達の足音。

そして、微かに殺気を感じさせる視線。

歩を速め、早歩きしていたサーシャは――

ダツ！と、走りだしてすぐそこにあつた路地裏に駆け込んだ。

路地裏に駆け込んだサーシャはそのまま、走る。走る。走る。

突き当たったら右へ、左へと曲がり、路地裏を駆け回る。

駆け回るサーシャの背後には、追いかけているのがわかった。

(……クソツ！)

舌打ちながらサーシャは、駆け回る。ひたすら駆け回る。

幸い、追いかけてくる集団は、このフェジテという都市の構造を充分に把握していな

かつたらしい。段々と足音が遠くなっていく。

そして、複雑に入り組む路地裏に迷つたのか、それとも諦めたのか。足音は遠くなり、

やがて聞こえなくなっていた。

もう折つて来ないと判断したサーシャは、路地裏から通りに抜け、中央区の市庁舎前

で足を止める。

「撒いたか……」

息を整えて、振り返るサーシャ。

一応、探查魔術と使い魔を召喚して周囲を索敵するが、敵正反応はなかった。殺意の籠った視線も感じない。

「まさか、こんな早く独立派に目をつけられるなんて……」

追っ手を撒いた後、サーシャは物憂げな表情でため息を吐いた。

「もし、ルミアに危害が及びそうなら……当然、守らないと……」

本当はルミア達から離れた方が最善なのだろう。サーシャの仮説が正しいなら、連中はルシタニア人とスルビナ人を主に狙って殺害している。帝国人はついでみたいな感じで巻き込んでいるのだろう。

願わくば、ルミアがこれ以上、他の組織から狙われないように……独立派に狙われないようにと、祈りながら。

サーシャは、帰路につくのであった。

k o l m k ・ m m e n d (第三十話)

……。

……。

……夢を見る。

それは、今となつては遠い日の物語。

まだ革命が起きる前の、平穩で皇女ゆえに不自由で、だけど幸せな家族に囲まれていた頃の記憶。

私の父は、東セルフオード帝国連合第四代皇帝パーヴェル一世で、母は北西端に位置するアルザーノ帝国女王アリシア七世の妹マリABEL。このなんともまあ、豪勢な両親の元に生まれたから、私は何かと注目の的となつていた。

片や、広大な領土と数ヶ国も支配している『十七ヶ国の君主』。片や、魔導大国から嫁いできたアルザーノの美しき姫君。

東セルフオード帝国連合皇族の血とアルザーノ帝国王家の血——大陸で絶大な影響

力を誇る二大国の王家の血を持っているのは、世界広しといえど、私と姉妹ぐらいだろ
う……今は私だけだけ。

そんなわけで、父から皇帝の座を引き継ぐことになったら、私は今までの歴代皇帝の
中でも最も世界に影響を持つ皇帝になるのではないのかと、小さい頃から言われてい
た。それで、隣国のレザリア王国がなんやかんやと言っていたらしいけど。

とにかく、そんな風に両親以外の宮殿内の人達から言われまくっていたから、いつし
か私は、皇帝になったら世界を守りたいと思うようになり、世間知らずな私はそれを
使用人とか侍女とかに言いふらしていたような気がする。

そこには、母の故郷でもあるアルザーノ帝国も入っていた……というか、当時それを
口に出していた時の私の知る世界は、東セルフォード帝国連合とアルザーノ帝国ぐら
いが世界だと思っていた。

もちろん、あの時初めて会った従姉妹——エルミアナに対しても言いふらしていたよ
うな気がする……今思えば、子供ながらとんでもない発言をしていたと思う。

とにかく私はそんな皇帝になりたくて、子供ながらにそんな憧れを抱いていた。

子供ながらの何とも甘い考え……現実には帝国連合はかなり嫌われていたにも拘らず、
必死に努力していた。子供なりに必死に努力すれば『世界を守る皇帝』になれる……と
思っていた。必死に頑張れば、なにかあった時に助け、皆を平和に安寧に暮らせるよう

にする皇帝になれる……と信じていた。

そんな甘々の激甘な理想を胸に、私は努力して……

そして、皇帝になれる道は革命によって絶たれた。

それだけでなく、この革命で私は、家族を失った。

家族も失い、帰る場所も無くなった私は共に逃げ延びた部下と共に、帝国連合内をあちこち放浪していた。というより、その後起きた内戦でそうせざるを得なかった。

そして、プレスコフで滞在していた時、私は重大な二択を迫られた。

一つは、国外に亡命してそのまま余生を過ごすか。その場合、亡命先は母の祖国——アルザーノ帝国になるだろう。

もう一つは、亡命せずに革命政権と独立派という二つの敵と戦うか。

正直、その時の私は迷っていた。だって、戦うって、私にはそんな力なんてない。

だからといって、やはり心の中ではまだあの夢が捨てきれいでいなかった。

悩んで、悩んで、悩みまくって……私は……亡命しなかった。

やはり捨てきれなかったのだ。『世界を守る皇帝』という甘つたるい夢を捨てきれなかった。

内戦で帝政派が正統派と新皇帝派に分裂して、革命政権側に押されている現状を理解しつつも……かなり厳しい状況でも、そのか細い可能性があるならばとそれに縋った

のだ。

だから、私は一族が古くから——ルシタニア大公として名乗り出る前から、とにかく古くから持っているあるある家宝を竜殺しの槍と言われる槍を持つて——

その時に、私は見知らぬ男——多分、幻覚かなんか見て、それで——

……………。

……………。

意識の隅を微かに突く、小鳥の囀り。

目蓋に朝の日の光を感じ、徐々に夢の中を彷徨う意識が浮上していく。

「……………」

むくりと、アナスタシアが無言でベッドから身を起こす。

ここはアナスタシアの自室。皇女なのに、ベッドに机などと必要最低限の家具しか揃えておらず、殺伐としていた。

「……………夢、か」

アナスタシアが身を起こし、ベッドから抜け出すと、机に置いてあった写像立てを取る。

写像立ての中には、五年前に撮った家族——父と母、アナスタシアと次女と三女が揃って撮影された写像があった。

自分以外、もうこの写像とアナスタシアの記憶の中にしかない家族。

外では厳格で威厳のある皇帝を振る舞いながら、家庭では優しく家族想いだった父。

アナスタシアと同じく元からやんちゃな性格でありながら、優しく、それで切れ者だった母。

やんちゃなアナスタシアとは対照的に、控えめで手先が器用であった第二皇女、タチアナ。

穏やかな気性であったが、母親のテイーテーブルから幾つかのビスケットを盗んだこともあるなどいたずら好きな一面があった第三皇女、マリア。

皆、今はもういない。革命で赤軍に殺された。

「……どうして、皆いなくなったの？」

写像立てを机に置いて、アナスタシアはベッドに腰かけて呟くのであった。

グレンとレオスの決闘当日の午後。

昼食を済ませた後、今回の魔導兵団戦演習に参加する生徒達は、駅馬車を使ってフェジテ東門から東へ延びるイーサル街道を行く。やがて街道の北側に見えてきた広大なアストリア湖南端付近の湖畔に、全生徒が集合する。

湖に面したほとりに立ち並ぶ緑の木々と色とりどりに咲いた花。遠くに望む山の稜線にかかった白化粧。冷たく澄んだ湖の水……平時ならばのんびり散策を楽しみたい場所だ。

この湖畔から北西部にかけて、学院が保有する魔術の演習場が広がっているのだ。

「しかしな……グレン先生……マジでマジなのかな……？」

「システイーナのやつ、もし先生が勝ったら、どうする気なんだ……？」

湖畔に集合した生徒達が、システイーナへちらほらと視線を向ける。

その視線を肌で感じていたシステイーナは、居心地悪そうに身じろきするしかない。

「流石に、グレン先生は口で言ってるだけだろ……？」

「いやいや、本気かもしれないぞ？だってグレン先生だし……」

ロッドとカイが、ひそひそとグレンの真意を探っている。

「つーか、そもそも先生はどうしてレオスに決闘なんか吹っつけたんだ？いくら逆玉狙いであっても、あの物臭がりが必要な面倒事に首を突っ込むのも妙じゃねーか？」

「まさか……先生、本気でシステイーが好き……なのかなあ？」

「うーん……あの方は、もっと年上の女性の方が好みのような気がするのですが……」
 カツシユが誰もが薄々思っている根本的な疑問を口にし、リンがなぜかほんの少し悲しそうに推察し、テレサがその推察の違和感を指摘し……

「きやーっ！きやーっ！禁断の恋愛よーっ！生徒と先生の禁断の恋愛よーっ！」

「ウエンデイ……君、そればかりだね……」

(……すげえ、はしやぎっぷり。ていうか、お嬢様言葉忘れてますわよ、ウエンデイさん)
 極上のゴシップを前に大はしやぎなウエンデイに、セシルがため息混じりに応じ、サーシャは頬を引きつらせながらそう思った(因みに、ギイブルはそんな連中ガン無視で、少し離れた場所で本を読んでいる)。

何はともあれ、魔導兵団戦前の緊張を紛らわせるためか、生徒達がひっきりなしに、噂話に花を咲かせていた……その時だ。

「うるさいぞ、貴様ら！静粛にしろ！」

ハ……ハンムラビ法典先生が集合する生徒達の前に現れ、高圧的に一喝。

途端、しんと静まり返る生徒達。

ギイブルが忌々しそうに、ぱたんと本を閉じた音が、寒々しく響いた。

「早速、これから魔導兵団戦を始めるが……まあ、生徒諸君らはこの魔導兵団戦演習に参加するのは初めてだろうから、この私が改めてルールから説明してやろう」

「……どれ？」

サーシャは、簡易的なボードに張ってあった地図をまじまじと見る。

(この地図は、北東に環状列石遺跡が一つで、南西にも置かないような列石遺跡が一つ。確か、ここがそれぞれのチームの根拠地になるんだよね。で、北東がレオスの陣地で先輩の陣地は南西、と)

今回の演習内容は、生徒達は指揮官である講師の指揮に従い敵根拠地へ進軍、交戦、敵の根拠地を制圧する事。つまり、どんなに敵を撃破しようがしまいが、先に本陣を取られたら敗北となる。あくまでも主要な目標は敵陣の制圧である。

(そして、地形は……中央の平原と、北西の森と、東の丘のこの三つ。ていうか、これ以外の進軍ルートはない)

で、まずは中央平原のルートなのだが。

(もつとも早く敵拠点に到達できるのが、このルート。けど、それはお互い様だから力尽くの突破はお勧めできない、と)

次に北西回りのルート。

(この森は、ここでの主導権が握れたら、中央の平原に攻めるのは容易だし、守りも容易い。ここを取るか取らないかで、平原の部隊の運命が決まる)

最後に東回りの丘ルート。

（ここは狙撃にはもってこいの拠点だね。この高地さえ抑えてしまえば、まあ、厄介なことこの上ない……んだけど、今回使うの魔術に遠距離狙撃の魔術はないし、敵根拠地からは遠回りのルートになってしまいうから今回はそこまで重要じゃないか）

と、あらかた地図を見終えたサーシャは、しばらく考え。

「中央から突撃するか、森を迂回して突撃するか、遠回りして突撃するか……どつちがいいのかな？ 白兵戦に持ち込めばワンチャン……」

ぶつぶつと突撃を連呼するサーシャに――

（（と、突撃？ え？ 突撃？ 白兵戦？ ……え？））

胸中は戸惑いで一致しながら、サーシャの呟きを聞き流すグレンのクラス達なのであつた……

「あ、あの……レオス……私……」

一方で視線で火花を散らし始めるレオスとグレン。そんなところにシステイーナがレオスの下に、気まずそうにやってくる。

「気にしなくてもいいですよ、システイーナ」

システイーナの言いたいことを察したレオスが、優しくシステイーナに笑いかける。

「貴女は、貴女のクラスのために全力を出してください。私を気にかける必要はありません。貴女が立ち向かってくるのも、まだ試練なのでしよう……私はきつと、それすら

超えて勝利を、そして貴女を勝ち取ってみせます。だから安心してください」

「レオス……」

そんな、どこか甘いやり取りがなされるのを見た、サーシャは。

「……キモ」

冷めた眼でレオスを見て、毒々しくそう吐き捨てた。

それだけじゃない、やはりレオスからはなんか嫌な感じがしているのだ。

あの甘いマスクと歯に浮くような言葉を言う連中は、大抵、裏ではその女性に利用価値を見出しているということだ。逆に言うと、利用価値がなくなるとその女性を容赦なく捨てる。レオスからは薄々とそんな感じが見られるような気がした。

(……これ、ルミアもやはり……)

今のレオスのことをルミアにこそつと聞こうと、ルミアの方を向くが――

「俺、上手く逆玉に乗れたら何しよっかなあーっ!? なにせ、もう働かなくてもいいんだしなーっ! 遊んで暮らすぜ、わっはっは!」

「あはは、先生つたらもう……まだ、勝負は始まってもないんですよ?」

「お、そうだ! せっかく逆玉で金に余裕ができるんだし、ルミア、お前を俺の妾にしてやろうか? んー?」

「えっ? 私が先生のお妾さんですか? ……ふふつ、それもいいかもしれませんね? 期待

しています、先生」

「めかけ……？よくわからないけど。ルミアがめかけになるなら、わたしもなる」

「ふっ……モテる男はつらい……まあ、任せとけ、任せとけ！」

などと、ルミアやリィエルを相手にグレンがロクでもないことをのたまっていたのを見た、サーシヤは……

「おおう……」

満更でもないルミアに、何も言えなくなり……

（（やっぱ、俺達、負けた方がいいんじゃないかね……？））

グレンのクラスの生徒達はため息混じりにグレンとレオスを見比べて、その胸中を、見事に一致したのであった。

k o l m k ・ m m e n d ・ k s (第三十一話)

「で、先生、どうするんだよ?」

演習場、南西の拠点——環状列石遺跡の真ん中に集まったグレンのクラスの子供達。皆を代表して、大柄な少年カツシユがグレンに尋ねる。

「もうすぐ開始の合図が上がっちゃうぜ? どういう作戦で行くんだ?」

環状列石の中央にはテーブルが据えられ、その上に演習場一帯の地図が載っている。

グレンがそれと睨めっこする様を、生徒達は固唾を呑んで見守っていた。

「基本的な戦い方は、先日までに教えた通りだ。問題は、どこを、どれだけの数で攻めるかなんだが……レオスの野郎がどういう戦術をとってくるかサツパリだから……」

「はあ……? なんか自信なさげだなあ……しっかりしてくれよ、先生」

「いや、俺、実は魔導兵の基礎的な戦闘術に関してはおわかるが、魔導兵の戦術的な指揮運用法に関してはそんなに詳しくねーし。てか、戦術指揮なんて畑違いだつーの」

この土壇場で明かされる驚愕の事実、サーシャを除くクラス一同絶句するしかない。

「つて、おいしいツ!? 自信あったから、その決闘ルールを受けたんじゃないの!?!」

「先生、いいのよ!? アンタが負けたら、システイーナがレオスの野郎に娶られちゃうんだろ!?! そんなの許せるかよ!?!」

「ああ、そうだそうだ! そんなの認められないぞツ!」

意外なほどに、この演習に乗り気な男子生徒達に、逆にグレンがぎよつとする。

「お、お前ら、一体どうして……?」

「先生……そんなの決まってるだろツ!? イケメンは敵だツ!」

カツシユの魂の叫びに、クラスの男子生徒達のほぼ全員がうんうん頷く。

「お前ら……」

それから始まった無駄に感動的な光景を見て、サーシャは呆れながら眺めていた。

そしてサーシャはルミアの下へ向かう。

「ねえ、ルミア。ルミアは、どう思ってるの?」

「ん? どうって……?」

「この決闘のこと。レオスと先輩、もしシステイーナがどちらか結婚した時、ルミアはどう思うのかなーって」

「うーん、それは……」

サーシャとルミアがちらりとグレンを一瞥する。

「ようし！お前らッ！今日は俺が上手く逆玉の輿に乗つて、遊んで暮らせるよう、俺に力を貸してく——」

「二「やっぱ、アンタも死ぬッ！」二」

「——ぐおわああああああああああああああああ——ッ!」

グレンは、男子生徒達の猛ダツシユからの一斉跳び蹴りを喰らつて、吹っ飛んでいた。「だって……片方はアレだし……レオスもレオスで……ね？」

「あ、あはは……」

呆れるサーシャと苦笑いするルミアであつた。

「まあ、先輩は何か思うところがあるから、こんな面倒事に首を突っ込まないし……多分」

サーシャはグレンが逆玉の輿狙いだということを……ほんの少しあるかもしれないが、それ以上に別の目的がありそうな気がした。

多分、グレンはレオスとの決闘に勝つ気はないかもしれない。引き分けにしてこの賭けはなし、そういう話で落ち着くかもしれない。

まあ——

「ああああああ——ッ!もう!変な想像は止めなさい、私!?!そんなのルミアに悪いじゃないっ!?!そもそもなんで、私があんなやつと——ッ!?!」

頭を抱えて悶々としながら、突然、天に向かって叫びだす白猫はまだグレンの真意がわからないらしいけど。

「ルミア。こないだから、システイーナ、なんか様子が変。顔を赤くしたり、怒ったり、何か咳いていたり、いきなり叫んだり……病気？」

「うーん……ある意味、病気なのかもね……」

「……病気？なら、医者にみせないと」

「あいにく、この病気はお医者さんじゃ治せないの」

「……？」

相変わらず眠そうなりイエルと苦笑いのルミアが、そんなシステイーナを見守っているのであった。

やがて、立ち会う審判員の講師達が遠くで狼煙を上げて——魔導兵団戦が始まった。

互いのクラスの兵力はそれぞれ四十人。

グレンはまず、中央の平原ルートに十二人、北西の森ルートに八人、東の丘ルートに一人進軍させ、残りを拠点に残した。

積極的に進軍はさせず、まずは様子見といったところらしい。

「……とまあ、このような感じでいったわけですが……」

拠点に残っているサーシャは遠見の魔術で味方の布陣を確認していた。

(まあ、レオスがどう仕掛けるかわからないから、この布陣はまあ……なんとかなるっ
ちやなるか)

一方で、と。サーシャは今度はレオス陣営の布陣を確認する。

(向こうは、中央に十八人、森に十二人、丘に九人……)

まあ、まず言えることは……丘に向かっている九人はご愁傷様……ということである。

まあ、それはそうとして、どうやら敵は全戦力を投入してそれぞれの戦場で、相手を上回る兵力を投入し、各個撃破する構えだ。確実に丘も制圧し、その後のグレン側の拠点制圧まで視野にいれた布陣である。

(うーん……)

サーシャはレオスのそんな思惑を察し、しばらく考え込み――

(……これ、ミリュウコフとサムソノフのおっちゃんがいたら、もつと上手くやっていたかも)

少し残念そうに、肩を竦めるのであった。

因みに、帝国連合軍ならば、一点に戦力を集中させるが一気に全戦力を投入しない。

まず最初に、後方に布陣している砲兵隊が敵陣地に向けて準備砲撃を短時間行う。

その隙に、前線の部隊――突破力に優れた機械化魔導重装甲兵を中心にした部隊が敵

前線の目の前まで接近、砲撃終了後に突撃を開始。

一点の拠点を制圧——帝国連合軍内ではこれを“傷”と呼んでいた箇所に、今度は後方に控えていた機動力が優れている機械化魔導軽装甲兵・騎兵部隊を中心とした部隊が突入。敵陣後方に広がっていき、“傷口”を広げていく。

そして、仕上げに歩兵部隊が傷口になだれ込み、敵を包囲・殲滅する。

一度突破されてしまったら、敵を瞬時に危機に陥れるこの恐ろしい戦術を、もし砲兵隊をまるでオーケストラの指揮者のように巧みに指揮するミリユーコフと、騎兵隊を指揮しているが装甲兵の重要性を認識していたサムソノフがいたら、見事にハマっていたことだろう。

要するに何が言いたいのかというと、戦力は一点に集中して段階を分けて運用した方が勝率は高くなるということである。

無論、レオスの戦術も自軍が戦力的に圧倒しているから仕掛けているのだろうが、これが、拮抗してしまっただけなら——

その結果は、すぐに表れ始めた。

魔術の戦場に英雄はいない。

最近の戦争は魔術なしじゃ成り立たない。

適当に火や雷の呪文を使うだけで馬は恐れのものき、騎兵はそのままだとまったく機能しなくなる（帝国連合軍の騎兵部隊は対魔術対策を施した上で運用している）。

隊伍を組んでの弓兵、銃兵の一斉掃射もごく簡単な対抗呪文一つで防がれる（これも帝国連合軍は銃弾に簡易的な魔術を付呪してある程度の対抗呪文を貫けるように設計しており、歩兵に多少の戦闘力を持たせている）。

重装歩兵を並べて密集陣形でも組めば、広範囲破壊呪文を打ち込まれて呆気なく全滅だ（それを回避するために帝国連合が既存の魔導技術を活用して生み出されたのが、魔導装甲兵である）。

魔術を使えない兵士は、現在は敵魔導兵掃討後の拠点制圧、兵站活動や後方支援くらいにしか役に立たない。敵の魔導兵に立ち向かうとすれば、それは捨て駒か敗北が確定しての玉砕である。

このように、近代戦争は『魔導兵』が最も重要な兵種となっている。グレンは、この『魔導兵』の戦法について解説する。

まず魔術戦は基本的に『近距離戦』と『遠距離戦』の二つのレンジにわけられる。

『近距離戦』は相手を目視できる距離で——つまり最前線で撃ち合うレンジ。

『遠距離戦』は相手を目視できない距離で、超長距離射程魔術で『近距離戦』に従事す

る魔導兵を援護するレンジ。

ただし、今回の魔導兵団戦は『近距離戦』のみ——ていうか、まだ『遠距離戦』で使うような魔術をまだ使えないから、グレンは『遠距離戦』を省略することにした。

現代の魔導兵戦術と部隊編成法は、基本的に一戦術単位ワンユニット三人一組スリーマンセルであり、攻撃前衛、防衛前衛、支援後衛と三つのポジションからなる。

実はこの編成、かなりの優れものであり、敵兵撃破率も味方兵損耗率も、統計的にあらゆるスコアが優れている——つまり、敵に被害を多く与え、味方の損害を最小限に抑えることができるということだ。

例えば、三人一組の魔導兵が、三人の散兵である魔導兵が対峙して、敵味方が同時に呪文を撃った瞬間があったとした場合。

この時、三人一組側の被害はゼロになる。逆に散兵側は一人は確実にやられる。なぜこうなるのかというと、三人一組側は、防衛前衛が対抗呪文を飛ばして三人を力バーしているのだから、被害はゼロになるのである。

逆に散兵側はこれを防ぐには三人が個別に対抗呪文を飛ばさないと防げない。だが、それだと損害は与えられない。攻撃しても損害は与えられないばかりか、被害が生じるだけである。

しかも三人一組側の支援後衛が攻撃に転じれば、散兵側は一度の攻撃で二人も失うこ

とになる。

二人は攻撃、防御をそれぞれ専念でき、一人は攻撃するなり、防御するなり、法医呪文を唱えたり等々、臨機応変に対応できる。

「——ということだ。これは机上の空論じゃねえ。戦場における生存率、撃破数その他もろもろのデータで統計的に証明されている事実だ。……これを『魔導戦力の比較優位性』っていう。魔術が戦場で使われなかった時代には、なかった概念だ。……ただし、相手次第、ていうかぶつちやけこいつらしかねーが、東部の『魔導装甲兵』だけには気をつける。いや、マジで、冗談抜きにヤバいからあいつら。特に重装甲兵ときたらもう……」

というわけで、帝国連合独自の兵種『魔導装甲兵』以外には圧倒的な優位に立てるこの編成・戦術なのだが、実はこれ、ぶつちやけ学生で運用するには無理があるのである。こんな編成、プロの魔導兵が長期的に十分な訓練を受けてようやくよくまともに扱える代物なのである。特に支援後衛は下手したら機能不全に陥る可能性すらある。

そこで、グレンが取った編成法は——

「《雷精の紫電よ》——ッ！」

「《大いなる風よ》——ッ！」

「《白き冬の嵐よ》ッ！」

中央の戦場に、生徒達の呪文の叫びが木霊する。

レオスのクラスの生徒達——総兵力数十八名、レオスに指導されたとおり、三人一組を組み、合計六戦術単位を構成。対峙するグレンの生徒達に攻勢をかける。

グレンのクラスの生徒達に向かって電気線が走り、突風が吹き荒ぶ。

対するグレンのクラスの生徒達——総兵力数十二名。圧倒的に頭数が足りない状況。

練度・武装・地形的条件が同じ場合、絶対に勝てないとされる兵力差は三倍。

兵力差一・五倍は絶対的ではないが、それでも相当苦しい状況だ。

まともなぶつかれば、グレンのクラスの生徒達は真綿で首を絞められるかのように、一人、また一人と順番にやられていくだろう。

だが——

「《大気の壁よ》——ッ！」

「《大気の壁よ》——ッ！」

レオス陣営が撃ってきた攻性呪文に対し、グレン陣営の生徒達は次々と黒魔【エア・スクリーン】——もつとも基本的な対抗呪文を起動し、空気障壁を広く張り、迫り来る突風を受け止め、飛んでくる紫電をそらし……

「頼む、カツシユ！今だ！」

「おうっ！《虚空に叫べ・残響為るは・風霊の咆哮》——ッ！」

「《雷精の紫電よ》——ッ！」

「《大いなる風よ》——ッ！」

対抗呪文を唱えていた生徒達の隣に待機していた生徒達が、カツシユを筆頭に、次々と攻性呪文を唱えていく。

まあ、なんというか……グレンのクラスの生徒達のある編成法により、有利にもなっていないが、不利にもなっていない——つまり、互角というあり得ない状況がそこに出
来上がってしまった。

k o l m k ・ m m e n d k a k s (第三十二話)

その時、平原の戦況を観察していた審判役の講師達は、驚愕に目を剥いていた。

「二人^{エレメント}一組・一戦術単位編成ですと……ッ!？」

そう、グレン陣営の生徒達は魔導兵運用の超基本・三人一組・一戦術単位を誰も組んでいない。攻撃前衛と防衛後衛、その二つのポジションで構成される、シンプルな二人一組・一戦術単位を組んで、レオス陣営に立ち向かっていたのだ。

中央平原の戦場において、レオス陣営は十八人、グレン陣営は十二人。

一見、レオス陣営の方が頭数が上だが……しかし、それぞれ戦術単位に換算すると互いに六戦術単位……つまり、互角である。

「そんな馬鹿な！」

講師達の一人が、声を荒げた。

「確かに戦術単位は互角だが、なぜ戦況まで互角になる!? 三人一組・一戦術単位は二人一組・一戦術単位より圧倒的に強い編成なんだぞ!？」

その講師が言うとおり、戦場の統計を取れば、敵撃破率・味方損耗率共に、三人一組・一戦術単位の方が優れた成績を残している。

そもそも二人一組・一戦術単位などというものは、味方が損耗した状況で、三人一組が組みなくなつたときに『仕方なく』やる戦術編成なのだ。

「くっ……やつてくれたな、グレン＝レーダス……ッ！」

その時、状況の裏に潜む落とし穴を察したハー……ハム先生が、忌々しそうに言った。東セルフオード帝国連合軍の将兵の間で、こんな言葉があつた。

曰く、一番恐ろしくない敵は生粋の研究者に率いられた素人の獅子、と。

なぜなら、研究者は実戦経験に裏打ちされたものでない、教科書どおりの戦術を自信満々に配下の兵に指示するからだ。

逆に、実戦経験を積んで、どんな状況でも勝利を掴む……勝利の嗅覚に優れている軍人に率いられた獅子は厄介な敵であつた。例え、獅子が素人であろうとも、である。

さて、それを踏まえて考えてみればこの摩訶不思議な戦況も、ある程度納得いくものであつた。

現代の魔導兵の戦いはチーム戦が基本中の基本である。要は、いかに、チーム内で息を合わせられるかが重要になる。

そして、二人一組と三人一組……どちらが息を合わせやすいのかというと、断然、前

者の方が合わせやすい。

つまり、互いのチームの練度の問題なのだ。今回の場合、実際に前線で戦うのは、魔導兵戦術について何一つ知らないズブの素人である生徒達であり、たった数日で高度な連携を要する三人一組・一戦術単位など、ものに出来ないのである。なにせ、プロの魔導士でも長期間の訓練が必要なからだ。

確かにレオスの指導力は素晴らしく、指導を受けた四組の生徒達は三人一組・一戦術単位が一応、形にはなっているが、要所でどん臭く、攻守の切り替えがもたついている様子が多々ある。もっとも重要なポジションである支援後衛が有効的に働いていなかったり、はたまた何もできず、手持ち無沙汰な者すらいた。

それに対し、グレン陣営の生徒達は二人一組・一戦術単位でよどみなく攻守を切り替えて、繰り返し呪文を行使していたものだから、レオス陣営の三人一組・一戦術単位はかなり無駄のある戦術になっていた。

レオスや、恐らく講師陣も論文や統計データを丸呑みにしてしまい、実際に演習を行うのは素人の獅子——つまり、生徒だという単純な事実を失念していたのだ。

とはいえ、最初から二人一組・一戦術単位で訓練して臨むというのはいくら演習でもかなり大胆な手であるし、より難易度の低い二人一組を組ませるにしたって、たった数日でどれだけの練度になるかわかったものではないから、それならばと三人一組でやら

せてしまうもの。

だが、一部の者しか知らないが、グレンは元・魔導士だ。それも実戦経験豊富な魔導士である。不利な状況で、なんとしても勝利を拾う……その嗅覚に優れていたのである。数日間しか訓練期間がないなら、二人一組の方が強い……グレンはそれを感覚的に察していたのだ。

一方、レオスは生粋の研究者であり、実戦経験はほとんどない。データや論文を読みあさり、魔導兵の戦術に関する造詣はグレンを圧倒的に上回るが……実戦経験に裏打ちされたものではない。その結果、魔導戦術の教科書どおり三人一組を選択。

この結果がこれだ。ややレオス陣営が押しではいるが……この頭数差で、この一進一退の互角の状況——通常あり得ない戦況となってしまうているのだ。

さて、この拮抗した戦況を見て、グレンが次に取る一手はハーヴァード大先生でもわかりきっているものであって……ていうか、サーシャでもやるのであって——

「……というわけで……行きましようか」

どのルートでも戦況が拮抗しているのを遠見の魔術で確認するや否や、平原と森に投入された予備戦力の中（丘は、彼女がいるから、放っておく）。

サーシャは平原ルートにいる敵を掃討するため、一人で敵陣に突撃した。帝国連合製の対抗呪文〔ニージユ〕を、前面を中心に180度展開した。

この〔ニージユ〕。複数の魔術障壁で圧縮された無数の非常に小さな氷のナイフが内蔵されており、攻性呪文が〔ニージユ〕に着弾すると、破壊された障壁から無数のナイフが飛び出して攻性呪文を無効化される。

一度攻撃を受けると破壊されるため、〔エア・スクリーン〕のように一度展開したきりではなく毎度毎度破壊された部分に障壁を展開しなければならぬが、それも、熟練すると素早く展開することができる。

サーシャも〔ニージユ〕を素早く展開できるわけだから。

「突撃、突撃イッ！」

平原に陣取っているレオス陣営までの距離、二十数メトラを駆け抜ける、駆け抜ける。

「ら、《雷精の紫電よ》——ッ！」

「《雷精の紫電よ》——ッ！」

突然、一人が突撃したことに、レオス陣営の生徒達はぎよつとして慌ててサーシャに向けて攻性呪文を一斉に撃ちまくる。

紫電が幾条もサーシャに殺到する。

「《雷精の紫電よ》——ッ！」

撃って、撃って、撃ちまくる。撃ちまくるのだが——

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アッ！」

次々と「ニージュ」を展開しまくる。

二十数メートルが急速に縮まる。

「これならどうだ！《虚空に叫べ・残響為るは・風霊の咆哮》——ッ！」

「《大いなる風よ》——ッ！」

「《白き冬の嵐よ》——ッ！」

点で駄目なら面攻撃と言わんばかりに、今度は「スタン・ボール」、
「ゲイル・ブロー」、
「ホワイト・アウト」などの広範囲を攻撃する呪文が飛ぶ。

サーシャに向かい「ニージュ」に着弾・炸裂する呪文達……

このような面攻撃を喰らったら、即戦死判定になるだろう。なにせ、最初の面攻撃を防いだとしても、その後の攻撃を防ぐ事は通常出来ないのだから。

……通常なら。

現に——

「——《雷精の紫電よ》——ッ！」

呪文から炸裂した地点から無傷のサーシャが現れ、一条の紫電が一人の生徒に向かって飛来し、仕留める。

「な——ッ!？」

仕留めたはずのサーシャが無傷で現れくるといふ予想外の出来事に、硬直してしまうレオスの生徒達。

その隙に、サーシャは「二ージユ」を解除して残り数メトラを駆け抜け——

「おつ邪魔しまーすッ!」

そのまま、レオス陣営の前線を突破して背後に回り、振り返りざまに紫電を一条放ちさらに一人仕留める。

「さて、ダヴァイ・ネムノゴ・ポイグラエム・ニイ・タクイエ（少し遊びましょ）？」
たった一人で前線を突破してしまったサーシャ。

そんな超絶的な突破力を生徒達に見せつけたサーシャに対し。

「ば、化け物だ……」

その強大さ、得体の知れなさ、桁外れの動きの東部人に、レオスの生徒達は恐怖に恐れ戦くのであった。

一方、丘でも——

「無理です！丘の拠点の制圧なんて不可能です！僕達には無理です！」

レオス陣營の丘ルート制圧隊の隊長、リトは脂汗を滝のように流しながら、通信の魔導器を耳元に当てていた。

『どういうことですか！相手はたった一人なのでしょう!?!』

咎めるようなレオスの声が、通信の魔導器から聞こえてくる。

「でも……相手は一人ですけど……、ば、化け物です!」

悪魔を見るような表情で、リトは前方二十数メートル先に佇む敵兵の姿を見つめる。

そこに、ちよこーんと佇んでいる少女は……リエルだった。

サーシャも生徒達にとっては恐ろしいことこの上ないのだが、リエルの方がある意味で恐ろしい相手に映るかもしれない。

まず、攻性呪文が当たらない。かすりもしない。

眠たげに左右へふらふら揺れるだけで、リエルは飛んでくる全ての紫電をひよいひよいかわしてしまふのだ。なんと対抗呪文を使わずに、である（実際には、この魔導兵団戦で使用可能な対抗呪文を、ともに扱えないだけだが）。

で、今度は面攻撃の呪文をリエルにぶつけるのだが――

ぶん、と残像が横ぶれして、一同の視界から消えるリエルの姿。

その一瞬で、リエルはレオス陣營の生徒達の死角へと高速移動したのである。

その結果、誰もいない空間を、大分遅れて虚しく炸裂する呪文達……

「な……なんなんだ、こいつ……」

後、何百回、何千回呪文を撃つたところで捉えられる気がしなかった。

しかも、これだけ超絶的な回避能力をもってレオス陣営を翻弄しながら、リイエルは何もしてこない。攻性呪文一つ撃つてこないのである（実際には、この魔導兵団戦で使用する可能な攻性呪文を、まともに扱えないだけだ）。

つかず、離れず、レオス陣営の生徒達の前に姿を見せ続けるリイエル。

「う……うう……」

その意味不明さ、得体の知れなさ、不気味さ、桁外れの動きから、お人形さんのような小柄な少女がとてつもなく巨大な化け物のように見えてしまう……

こうして、平原と丘はサーシャとリイエルという、化け物達の独壇場になるのであった（二人は現役の魔導士だから、生徒達を圧倒するのは当然といえば当然のだが、ルミア、システイナー以外の生徒達は知らない）。

k o l m k ・ m m e n d k o l m (第三十三話)

「くっ……グレン先生のクラスには、こんな方達がいたのですか……」

森と平原に重点的に向けていた遠見の魔術の目を丘に向け、改めて戦況を確認したレオスは、驚愕を禁じ得なかった。

「この子達の身体能力は規格外ですね……身体能力強化の白魔【フィジカル・ブースト】をここまで使いこなせるとは厄介な……彼らは軍関係者が何かでしようか……?」

だが、文句は言えない。

この魔導兵団戦で、自身の担当クラスの戦力は十全に使用していいことになっている。いくら軍関係者の生徒がいたとして、これを反則というのは筋が通らない。そもそも初期条件では、レオスのクラスの方が、グレンのクラスより、戦力的に上だったのだ。それに大前提として、これは私的な『決闘』である前に、学院のカリキュラムに組み込まれた、れっきとした『訓練』である。敵が強すぎると文句を言える戦場などない。

先ほどから予想外のことに、レオスの調子は狂いつぱなしだが……

（だが、丘の方は幸い、彼女は白間〔フィジカル・ブースト〕のみの生徒だと断言できる。この状況で手加減して、私のクラスの生徒達を討ち取らない意味はない……）

レオスは頭を切り替え、戦況の整理と対策に取りかかる。

（きつと、彼女は攻性・対抗呪文が極端に苦手で、攻撃能力がほぼ皆無……つまり、私の陣営から戦力を引つ張るための餌……私はまんまとそれにくらいついてしまった……）

レオスはこの丘の制圧と次の戦略を見通して、九人もの生徒達をこの丘に送り込んでいる。グレンが丘に送り込んだ一人というのは流石の様子見だと判断し、それを幸いに一気に丘の拠点を制圧することにしていたのだ。

だが、それはグレンの罠だった——

それだけではない。各方面にあえて弱く布陣してみせることで、こちらの一点突破という選択肢を奪い、各個撃破という手段を取らせ、ほどよく戦力を分断してみせる……実際の戦場ではまったく使えない間違った戦術だが、この状況、この規模の戦場で、この練度の生徒達が戦うなら……有効だ。

「くっ……リトさん、撤退です。その丘は放棄、まずは根拠地へと帰還を。……大丈夫ですよ。その子は放置してかまいません。恐らく追撃はしてこないでしょう……」

レオスも指示を飛ばす——

グレンが送った援軍が各戦場に到着し、グレン陣営の生徒達が押し返す。

ほどなくして、各方面でレオス陣営が次々と撤退し始めていく。

「さて……先輩、奴さん、撤退し始めましたよ」

平原でレオス陣営に突撃し、一通り暴れたサーシャが、宝石型通信魔導器でグレンに報告する。

『何人殺った!?!』

すると、グレンが鋭く問う。

『こちら平原。サーシャが五人、討ち取りました。こっちは二人やられましたけど……』
 宝石から、荒い息をついたカツシユの声が聞こえてくる。

『こちら森。三人撃破。被害はゼロ』

さらに、ギイブルの素っ気ない声。

『よーし、ご苦労、お前ら。つまり戦況は三十二対三十八……敵損耗率は二十パーつてとこか……欲言えば、もう一声いつときたかったが……まあ、そうは問屋が卸さんか』

「で、先生、どうするんです? 追撃しますか?」

『いや、やめとけ……丘の敵分隊が、そろそろ根拠地に戻ってる頃だ。もうそう簡単にいかん。ポーナス・ステージは終わりだ』

「レオスの動き、思った以上に対処が早いし、冷静ですね……レオスに突撃しても——」
 『お前、今日はどうしたの!?! やたらと突撃したがるけど!?! 何、リエル化してるの!?!』

「ん。レオス、斬る」

『斬るな！突撃するな！なんか今日のお前、怖い！』

なんか、今日のサーシャがやたらと怖い。

通信器越しに二人の会話を聞いていた生徒達が頬を引きつらせる。

『グレン。わたしはどうするの？』

今度はリイエルの声が聞こえてくる。

『お前はずつとそこにいろ。ぶっちゃけ個々の能力で勝る相手に頭上を押さえられたら勝ち目がねえ。レオスの野郎も最初にあれだけ戦力を丘に割いた以上、丘を利用した何らかの戦略を練っていたはず。正直、相手にしたくない。お前は丘を守るんだ』

『わかった。……わたしにはよくわからないけど』

『ま、攻性呪文も対抗呪文もロクすつぽこなせない上に、連携？何それ美味しいの？……な、お前にはぴったりの任務だろ？ファイト！』

『……ん。頑張る。グレンが、すごくわたしに期待してるし』

『はっはっは！お前って専門のインチキ錬金術以外、ほんつとダメダメなのな！もういつそ清々しいぜ！』

『グレン。そんなに褒めても何もでない』

……褒めてないよ。

通信器ごしに二人の会話を聞いていた生徒達が、ため息をつく。

『まずは、初戦の不意討ちが効をそうして、それなりに敵戦力を削った。これで、元々の自力の差と、俺とレオスの戦術家としての差は、ある程度緩和できるはず……』

通信器ごしに、グレンは次なる指針を生徒達に伝えていく。

『最強の女王を陣取らせたことで、向こうはもう丘には手を出せない。俺達に丘を押しえられた上に、今日は突撃バカになっているサーシャが平原に陣取っている以上、中央を中心に進軍……てこともない。頭上からの魔術狙撃を警戒せざるをえないし、サーシャ相手にかんりの損害を覚悟しなきゃならないからな。つまり必定、今後の戦いの中心となる舞台は……森だ』

そういうグレンの顔は悪そうに笑ってるんだろうなと、サーシャは物思う。

「ま、ここに待機となった以上、俺のやることはもうないね」

互いの平原部隊はかなりの距離を開けているし、敵は特にサーシャを警戒して牽制して睨み合っているのから、サーシャは森の戦いの推移を見守るのであった。

それから。

まあ、グレンが自らオトリとなっっているわ、事前にグレンが仕掛けたとみられる罠に

レオス陣營の生徒達が引つかかるわけで、あまりのロクでなしっぷりに、流石のレオスも若干キレ始めたり、生徒達も呆れ始めていたが。

それでも、森の中の戦いはまさに苛烈と混沌を極めた。

この魔導兵団戦が始まった当初、互いの陣營の頭数こそ同じだったが、レオス陣營が有利だったのは間違いない。

生徒達の魔術師としての総合力は、サーシャやステイナ、ギイブルとウエンデイといったごく一部の生徒を除き、平均的にレオス陣營の方が上だったからだ。

おまけに、戦術指揮官としては、軍用魔術を専門にしているレオスの方が、グレンより圧倒的に優れていた。

まともにやれば、小一時間ほどで簡単に決着がついてしまったはずだった。

だが、グレンは結局、最後まで、まともにやらなかった。

魔術を使用した『実戦』を想定して行うはずだった『模擬戦』。

だが、結局のところ、これは『実戦』ではなく、所詮、生徒同士の『模擬戦』にすぎない。

グレンはそれを逆手に取っただけ。

それに、そのロクでもない言動に呆れながらも、グレンが危険を冒してまで常に最前線にて指揮を執るせいも、なんだかんだで士気も求心力も高い。

それに対してレオスは、未だ遠く離れた根拠地に陣取っているため、遠見の魔術と通信魔導器を通した生徒達の報告によって戦況を把握しているため、どうしても指示がワントンポ遅れてしまう。死角の多い森の中では、遠見の魔術では全ての戦況をなかなか把握しきれないのも痛い。

だからと言って、レオスに前線に出る勇氣はない。

そもそもレオスのやっていることは“実戦”としては間違っていないくて、むしろグレンの行動が間違っているのだ。この演習では、指揮官は魔術による戦闘参加が禁止されている。当然、対抗呪文の一つも撃てない。今、この瞬間でにでも流れ呪文に被弾して、グレンが『戦死』してもおかしくない状況なのだ。

(これが、本物の戦争だったら、レオスのやり方はまあ、上手くいってたんだろうけど……)

そう、レオス戦術は大きな問題があるわけではない。

これが本物の魔導兵を指揮運用する実戦だったら……せめて、机上の戦場図と駒を用いて、実戦を想定して競う兵棋演習だったら……グレンに万が一にも勝ち目はなかった。

だが、今行っているのは実戦ではなく、あくまで生徒達による四十人対四十人のケンカ。

それをその通りに生徒達を運用するグレンの前に……レオスはその卓越した戦術指揮をちつとも發揮できなかつた。

だが、レオスも意地を見せた。次第にグレンの戦術指揮のくせを見ぬき、冷静さを徐々に取り戻し、的確な指示を自分の陣営に飛ばすようになる。

だが、それでも戦局はレオス側には傾くことは叶わず。

『双方、そこまでだ。たつた今、両陣営の戦力損耗率が互いに八十パーセントを超えた。ルールに従い……この勝負、引き分けとする』

ハーンの忌々しげな声が、魔術による拡張音声で戦場に響き渡る。

実際には開始から三時間ほどしか経ってないが……永遠にも感じられた魔導兵団戦は、ようやく終わりを告げたのであつた。

演習終了後。

参加生徒一同が再び集つた、アストリア湖のほとりにて。

「つ、疲れたあーッ！い、生き残つた……俺、なんとか生き残れたぞッ！うう……生きてるってなんて素晴らしいんだ……ッ！」

「お疲れ様、カッシュ。頑張つたね？僕は途中でやられちゃつたけど……」

「それでも、セシルさん、狙撃で大活躍でしたわね？ふふつ、格好良かったですわ」
 「あ、あはは……あんなのまぐれだよ」

お互いの健闘をたたえ合うカツシユやセシル、そしてテレサ。

「な……なぜ、この高貴なわたくしが『戦死』などという屈辱に甘んじなければ……認めませんツ！認めませんわ、こんなのツ！」

「ふん、見苦しいね。進軍する場所を勘違いして、敵に囲まれば当然だろう？」

「きい————ツ！最後まで生き残ったからって偉そうにしないでくださいませツ
 ！」

「ま、まあまあ、そう言わないで……ウエンデイ、それでも凄く活躍してたし……」

不本意な結果にウエンデイが不服そうにハンカチを噛み、ギイブルが冷ややかにそれを切り捨て、そんな二人をリンがおろおろしながら宥める。

その他の二組の生徒達も、地面に座り込みながら、今回の魔導兵団戦について、賑やかに談笑していた。

「はあ、終わった」

サーシャも地面に座り込み、ようやくこの茶番から解放されると安堵していた。だって、この決闘、グレンは元々勝つ気などなかったのだから。

「ま、お前ら、よくやったよ。あのレオス相手にここまでできりや御の字だ」

やってきたグレンが開口一番、生徒達にねぎらいの言葉をかけ、にやりと笑った。「お、おう……でも、いいのか？先生」

カツシユが微妙な表情でグレンを向く。

「その……システイーナを賭けた勝負だったんだろ？引き分けていいのかよ？」

「……ん？ああ、それな……」

と、グレンが何か言いかけた、その時である。

「貴方達ツ！なんなんですかその体たらくはッ！」

向こうの方から響いてきた怒鳴り声に、思わずグレンとカツシユが首を縮ませる。

「……何なのさ？」

サーシヤも怒鳴り声がする方に振り向く。

「あの無様な戦いはなんですか！貴方達が、もっと私の指示にきちんと従い、作戦行動を遂行していれば——」

見れば、グレンのクラスの生徒達が集まっている場所から少し離れた場所で、レオスが自分の陣営の生徒達を叱りつけている。

叱られた生徒達は、しゅんと肩を落として俯いていた。

「……ふん。自分の事は棚に上げて生徒に怒りをぶつけるか……器の小さい男だこと……」

そんなレオスにサーシャは冷ややかにそう切り捨てる。

元々、生徒達の実情をロクすっぽ理解せず、独善的に指揮していたせいでもあるのだ。

本当にレオスが勝たなくて良かったなど思ってる。もしレオスが勝っていたら、システィーナはこういう理不尽な怒鳴りつけをその身に受け続けることになっていたかもしれないのだから。

そして、そんなレオスの評判は二組内では落ちていった。

「なんか……感じ悪いやつだな……」

ぼそり、とカツシユが呟く。

「非の打ち所のない、完璧超人だと思ってたんだけど……どうも何か違うような……」

そして、ひとしきり自分達の生徒を怒鳴りつけ終わると、レオスはグレンの下へと肩を怒らせて、ずかずかとやって来た。

その時、サーシャはレオスの顔色を見て、思わず目を疑った。

レオスの顔色は、開始前の血色の良い顔色はどこへやら、今や病気を疑うレベルの土気色となっていた。

この時、サーシャは猛烈に嫌な予感がした。

だが、そんなサーシャのことなど露知らず――

「誰のせいだと思っっているんですか!? そんなことはどうでもいいんです! それよりも貴方、勝負はまだ付いていませんよ?」

「……は?」

グレンに食ってかかるレオスの言葉に、サーシャは今度は耳を疑う。

「いや……勝負が付いてねえって、アンタ……もう引き分けたろ……」

グレンは頭をぼりぼり掻きながら、面倒臭そうに呟く。

「これはお互い、白猫から身を退くってことでいいんじゃないか? ほら、白猫もどうやらまだ結婚する気はねーみてーだし……」

べしんと。

その時、レオスが投げつけた手袋が、グレンの胸を容赦なく叩いた。

「再戦ですッ! 今度は、私が貴方に決闘を申し込むッ!」

「エト・ブライニョ嘘でしょ!?!」

あまりにも予想外なレオスの行動に、サーシャは驚愕する。

レオスのこの執着するような態度。

何か嫌な予感がする。レオスとの決闘の裏に何かが悪意が動いているような気がする。

これは一旦、この場を収めてレオスの真意を問い質したほうがいい。

そうサーシャが判断し、グレンの元に向かおうとするが――

「レオス！先生！もう、やめてッ！いい加減にしてよッ！」

二人のやり取りをはたから聞いていたシステイーナは、とうとう我慢出来ず、その間に割つて入っていた。

「黙つてれば、二人で勝手に盛り上がつて、人を物みたいに扱つて――ッ！」

「ちつ……」エト・イドカトの馬鹿

自分の都合のいいように解釈して、グレンの真意にちつとも触れないシステイーナに、サーシャは舌打ちしてそう吐き捨てる。

なぜ、グレンがこんな面倒事に突っ込んだのかは、ルミアからしか状況を聞いていないサーシャにはわからない。

だが、確かなことは今回の決闘は、システイーナを守るためにやったことはさっきの引き分けだからお互いに手を引くという言葉から見ても明らかだ。

「おい、システイーナ」

本当はグレンの口からこの真意を言った方がいいのだが、もう待つている場合じゃないと、サーシャはシステイーナをレオスとグレンとの間から引き剥がそうと動くが――遅かった。

ぱんつ！と甲高い音が鳴り響く。

システイーナが、へらへら笑うグレンの頬を思いつきり平手で叩いたのだ。

「——嫌いよ、貴方なんか」

そう冷たく言い残して。

システイーナは、用意されていた帰還用の駅馬車の一つへと駆け寄って行った。

「システイ!?!ちよつと、待って!」

「システイーナ、すごく怒ってる……なんで?」

走り去るシステイーナの背を追うルミアとリリエル。

そんな少女達を見送ったレオスが、グレンへ嘲笑を向ける。

「……やれやれ、貴方は彼女を諦めた方がいいんじゃないですか?」

「……ふん。ほつとけ」

そして、生徒達がそんなやりとりを、はらはらと固唾を呑んで見守る中、グレンはくると踵を返した。

「さ、本日の魔導戦術演習はこれにて終了!お疲れさん!撤収だ、お前ら」

なんとも、気まずい空気のまま、生徒達はぞろぞろと、複数用意されている駅馬車に分かれて乗り込んでいく中……。

「……どうしてこうなるのかなあ、本当に」

サーシャは深くため息を吐くのであった。

k o l m k ・ m m e n d n e l i (第三十四話)

太陽が山の稜線に完全に沈みかける頃。

生徒達はフェジテの魔術学院校舎に到着し——そのまま解散の運びとなった。

演習の余韻冷めやらぬ生徒達の喧噪から、サーシャは一人そつと離れ、学院敷地から出る。

ルミアの護衛はリエルに任せて、サーシャはそのまま中央地区のとある人気のない路地裏に向かっていった。

路地裏に行った目的は、ゾランに呼び出されたからだ。

夕方になり、市庁舎の役人など多くの人々が行き交う中、サーシャは誰かにつけられないか振り返り、誰もつけていないことを確認すると、路地裏の中に入っていく。

陽が当たらないせいとか、一気に暗くなる。

サーシャはそのまま奥へ突き進み、ゾランが指定した場所へ向かう。

「ゾラン、話つてのは何？」

やがて、指定場所近くに来た時、サーシヤはゾランを呼びかける。
だが、返事がない。

「……ゾラン？」

まだ来てないのか？とサーシヤが懐中時計を確かめるが、時間は予定時間の五分前である。ゾランはこういう密会をする時に、普段は十分前に指定場所に着いているはずである。

「……………」

嫌な予感がしたサーシヤは警戒しながら奥に進む。

すると、嫌な予感は的中した。

奥の突き当りに、男が横たわっているのが見えた。

「——ッ!？」

その男は、ローブ——アルザーノ帝国魔術学院講師が身に着けているローブだ。

サーシヤは倒れている男が誰なのがわかった。なぜなら、倒れている男はサーシヤを呼び出した張本人なのだから。

「ゾランッ!？」

サーシヤは倒れている男——ゾランに駆け寄るが……すでに息絶えていることがわかった。

額を撃ち抜かれている。両手、両足も同時に射貫かれている。額を撃ち抜かれたゾランの顔は、絶望に歪んだ顔をしていた。

額、両手、両足……この手口は察するに、下手人は——

「独立派……イメタリア三国の……ッ!？」

その時、サーシャは咄嗟にゾランだった遺体から離れた。

半瞬、遅れたらサーシャはゾラン諸共吹き飛ばされていたことだろう。

その時——

「ルジタニア人だ、殺せ！」

どこからか、誰かがそう叫ぶ。

すると、上から複数の火線がサーシャに殺到する。

「——ちいッ!」

バックステップで火線を避ける。半周前にいた所に、銃弾が着弾する。

敵は上から発砲したのはわかるのだが、どこにいるのかまでは確認する暇もない。さつき来た道からも何人かの独立派の人間が、こちらに向かつてきている。

サーシャは、すぐさま来た道を引き返す。

サーシャが引き返したのと、独立派のメンバー三人が遭遇したのはほぼ同じタイミングであった。

ナル・シャイエツア
「邪魔 ツー！」

遭遇した独立派のメンバーの一人の顔面に、膝蹴りを喰らわせるサーシャ。

顔面に蹴りを喰らわせた一人が、吹っ飛び、壁に激突する。

独立派を一人無効化させた瞬間、左から別のメンバーがマスケツト銃の銃床で殴りつける。

サーシャは瞬時に氷剣を錬成、剣の腹で銃床を受け流す。氷剣の腹と銃床が音を立ててぶつかるが、銃床はそのまま滑り、左の男はバランスを崩す。

サーシャはすぐさま右の男の腹に後ろ足で蹴り、バランスを崩させる。

「……………それが……………ツ！」

前方の三人を無効化した後、振り返らずにダツシユするサーシャ。

マ・ヨークシン・アラ チェイス・アラ ニラギ・ムル・ミンナ
「逃げたぞ！ 追え！ 逃がすな！」

背後からはおよそ四人、なにやら叫び、サーシャを追う。

(こいつらが喋ってる言語……………こいつら、エーステイの人間か……………ツ!?)

イメタリア三国——エーステイの独立派の人間がわかったサーシャは舌打ちしながら通りに向かって駆け出す。駆け出す。駆け出す。

とにかく、連中に追いつかれる前に、通りに出なければ……………さもなければ、連中は今度は通りにいるフェジテ市民を巻き添えにするだろう。

そうだったら、どうなるか。恐らく帝国内では東部人のことをテロを誘発する要因として疎ましく思うことだろう。政府ではそうならなくとも、一般社会での東部人の肩身はかなり狭くなる。

そうなるのはいささか都合が悪い。サーシャはとにかく駆ける。

幸い地の利がサーシャにあるのか、独立派との距離が開く。

時折銃弾がサーシャに向かってくるが、距離が遠いのと、散発的な射撃のためかサーシャに当たることはなかった。

やがて、サーシャは中央区の通りに躍り出て、そのまま北地区へ駆け出す。

路地裏を抜けたら、向こうも追いつけないと判断したのか、独立派が追いかけてくることはなかった。

逃げ切ったサーシャはそのままフィーベル邸の方面へと歩く。

時分はすっかり日の沈んだ夜。

そして、フィーベル邸の近くで足を止め――

「……ビィエル」

サーシャがそう言うと、近くの段差に腰かけ懐から紙を取り出し何かを書き出した。

その後、ビィエルがフィーベル邸の屋上から降り立ち、サーシャの目の前に降り立つ。

「これを、リィエルに」

サーシャはビィエルの右足に紙を結び、リィエルの元へ向かうように言うと、ビィエルはそのままリィエルの元へ飛んでいった。

今度は懐から通信魔導器を取り出し、ある人物に通信を繋げるのであった。

そして……次の日。

システイーナとレオスの正式なる婚約が発表された。

システイーナが自らの意思でレオスの求婚を受けた——その噂と知らせに学院中に激震が走った。

その結婚式が僅か一週間後——その前代未聞の電撃結婚ぶりに、二重に騒然とした。まるで歌劇のような、この急転直下のドラマチックな展開に、何も知らない学院の生徒達は沸きに沸いた。

レオスの決闘を受けたグレンはどう出る——？

一人の少女を巡る、二人の男の戦いの結末やいかに——？

学院中の注目が集まる。この争いの終着点に、否が応でも期待が高まっていく。

……が。

グレンは約束の時間になっても、レオスとの決闘の場に現れなかった。

それどころが、学院に姿すら見せなかった。

さらには、グレンはその日以来、音信不通となった。

逃げた。

誰もが当然のように、そう結論し……

ここに、グレンの学院内における評判は地に落ちるのであった。

そして、この結婚騒動の影に隠れがちになっていたが、グレンより少し前にこの学院に赴任したゾランが連絡が取れず行方不明。サーシャもこの日から学院に姿を見せなかった。

当初は皆一様にデマを疑うが、学院内に出回ったレオス直々の告知書や、授業時間以外は常に寄り添うように一緒にいるシステイーナとレオスの姿に、どうやら噂は本当らしいことがわかり……

一部の女子生徒達は発狂寸前であった。

だが、噂から一步引いた、観察眼の鋭いごく一部の生徒達は気付いただろう。

何かおかしい、と。

幸せそうなシステイーナの笑顔はどこか固く、影が差していると。

「……システイーナ、話がありますわ」とある休み時間。

教室で、ウエンデイ達、何人かのクラスメートがシステイーナに詰め寄っていた。

「貴女……本気ですか？本気でレオス先生と結婚するんですか？」

ウエンデイが、レオスから受け取った結婚式への参列招待状をシステイーナに突きつけながら、訝しむような表情で問い詰めていく。

「う、うん……そうよ……元々、私達、許嫁同士だったし……わ、私もレオスのお嫁さんになるのが、子供の頃の夢だったから……すごく幸せ」

一見、非の打ち所のない笑顔だが、システイーナの表情はやはりどこか固い。

それから、魔導考古学はどうするのか？今週末に挙式なんて、やはりおかしいとか、お互いの両親が参列できない結婚式など聞いたことなどないとか……

ウエンデイ達は次々と問い詰めていくが、やはりシステイーナの答えはやれ現実の幸福とか、やれ幸せになれると思うとか、やれ元々そういう予定だったとか……

システイーナがそう言えばそう言うほど、ウエンデイ達は不安と疑いの色を濃くしていく。

ルミアも何も答えず、暗い顔で黙って俯いているのを見れば、尚更である。

「システイーナ……貴女、やっぱり、どこか普通じゃありませんわ。ひよつとして……あ

のレオスという御方に、何か弱みでも握られているのではなくって……?」

「……………え?」

一瞬、システイーナが心配そうにこちらを見ているルミアをちらりと流し見て……

「そ、そんなことあるわけじゃないじゃない!こんな幸せな結婚ができるなんて、今でもちよつと信じられなくて……夢心地なだけ!心配しないで!」

そう言つてシステイーナは笑うが……やはりその笑顔はどこか作り物じみている。

「やあ、システイーナ」

そこへ、不意に現れるレオス。

思わず身構えるカツシユやウエンデイ達。

「今週末の式の予定について、少し打ち合わせがあります。お時間よろしいですか?」

「あ……………うん、わ、わかつたわ、レオス……………」

そうして、寄り添うように並んで、教室から出て行く二人。一見、仲睦まじそうに見えるが……一同はそれをどこか怪しむような目で見送る。

「……………ルミア」

その時、システイーナ達のやりとりを見守っていたリエルが、ぼそりと呟く。

「……………あいつ……………斬つていい?」

「リエル?」

ルミアが、リエルの横顔を見る。

リエルは普段の眠たげな能面からは信じられないほど、鋭く冷たい目をしていた。

「れおす？……あいつ……嫌な感じがした……すごく、嫌な感じがした……わたしにはよくわからないけど……うん、あいつは……きつと、敵」

「ダメだよ、短絡的なことをしちゃー！」

一歩踏み出しかけたリエルを、ルミアが慌てて背後から抱き止める。

「何も証拠がないの！下手なことをしたら、リエルが逆に捕まっちゃうー！」

「でも……システイーナは……多分、あいつのせいで、苦しんでる……なんとなく……そんな気がする……」

ぐつと、リエルが拳を握り固める。

その拳は注視すればやっとなるほど、ほんの微かに震えていた。

「待って……もう少しだけ、待って！先生が……グレン先生が、きつとなんとかしてくれ
るから……ッ！」

「でも、グレン、いない。三日前からどっか行った」

「……………」

「サーシャもいなくなった。三日前、二人とも、これから数日間、絶対にルミアから離れるなって……言い残して……それつきり」

(サーシャ君……一体、どうしたの……?)

システイーナとレオスの結婚とグレンの決闘放棄の影に隠れがちだが、サーシャも三日前から学院に姿を現わしていない。

思えば、最近のサーシャはやたらと周囲を見渡すなど、落ち着きがなかったような気がする。

(サーシャ君も……もしかして……)

もう一人、頼りになる少年がいないことに一抹の不安を感じながら、ルミアは三日前の出来事に、思いを馳せるのであった。

k o l m k ・ m m e n d v i i s (第三十五話)

……三日前。

魔導兵団戦の演習も無事終了し、時分は、すっかり日の沈んだ夜。

ルミアはフィーベル邸の応接間にて、システイーナの帰りを待っていたのだが……

「システイ!?!それ本気なの!?!」

「……本気よ。私……レオスと結婚するわ」

帰って来くるなりシステイーナの突然の宣言に、ルミアは仰天した。

てつきり、グレンと仲直りして帰ってくると思っていたのに、いきなりこれである。

あまりにも不意打ちで、予想外の展開だ。

「ちよ、ちよつと待つてよ、システイ!」

それからルミアは、激しい口論をシステイーナと繰り広げた。

一体、何があったの?本気なの?そんなの絶対おかしいよ!話が急すぎるよ、両親に黙って結婚なんて変だよ!夢はどうするの?お祖父様との約束は?学院はどうするの?私達もう離れ離れになっちゃうの?私、そんなの嫌だよ……ッ!

二人は真夜中になるまで何度も何度も同じ事を繰り返し、喧嘩のように話し合った。だが……結局、システイーナは最後まで、レオスと結婚するの一点張りだった。だが、わかったこともある。

システイーナは言葉を濁すが、何度も繰り返し問い詰めるうちに、おぼろげながら見えたのは……先刻、グレンと和解するために、学院の屋上でグレンと会っていたときに、レオスがやってきて……何かがあつたらしいこと。

「私のことは放っておいて！別にいいでしょ!?私、レオスのこと、ずっと昔から好きだったんだから！レオスのお嫁さんになるのが私の子供の頃からの夢だったの！」

「シ、システイー……」

システイーナが、本当にレオスと結婚したいと思つているはずがなかった。

まだ本人は自覚していないようだが……ルミアはシステイーナが心の底で誰を本当に想つているのか、知つている。

それにもし、これがシステイーナの心から望む結婚ならば……そんな、今にも泣きだしそうな表情で、こちらをじつと見つめてくれるわけがないからだ。

レオスとの間に、何かが起きたのは明白。

レオスに何か弱みのようなものを握られてしまったのはもう疑いようもない。

だが、ルミアにはどうしようもない。

多少、法医呪文が得意なことを除けば、魔術師としてはごくごく平凡な自分。親友が窮地に陥っているというのに……何もできない。何をすればいいのかもわからない。

こんな時に頼れる人と言えば……

「……先生……ッ！」

よつて、ルミアは不甲斐なさとしわけなさで、自分を呪い殺したくなるような思いを抱きながら、フィーベル邸を飛び出し、グレンが居候しているセリカの屋敷へ。

時分は、もうすっかり真夜中。

照明具も持たず、証明魔術の使用も忘れ、街中の所々に設置されたランプ灯の弱々しい光を頼りにフェジテを駆けるルミア。

夜も深いがゆえに、静寂と暗闇に包まれたフェジテの街は、まるで死霊の街のようだ。人が暗闇に対して抱く原初的な恐怖に必死に耐え、やっとセリカの屋敷へ辿り着く。

（お願い……先生……起きてて……ッ！）

祈るような思いで、屋敷の正面玄関口の呼び鈴を鳴らし続け……

どれくらい、そうしたらだろう。

「……誰だよ、うつせえな」

やがて、グレンが玄関をほんの僅かに開き、亡霊のような目でルミアを覗き見た。

「……ルミア?」

「先生——ッ!」

その瞬間、ルミアは微かに開かれた玄闔扉に身体をねじ込んで、強引に屋敷内に割つて入り……グレンに抱きついていた。

「……なッ!?!」

後ろによるめきながら、なんとかグレンはルミアを受け止める。

流石に驚愕に目を瞬かせるグレンに、ルミアは涙を流しながら必死に訴えた。

「先生、お願い! 助けてッ! システイが……このままじゃシステイが……ッ!」

泣き喚きながら、ルミアは自分の知りうる限りのことをグレンに伝えた。

……そして。

虚無と無気力に取り憑かれた表情のグレンは、ルミアの話聞いていくうちに、次第にその瞳に光と力を取り戻していき……

「……任せろ」

ただ、一言。

ルミアの頭を撫でながら……そう力強く、言った。

……三日前を泳いでいた意識が、ふと、現在に返る。

「大丈夫……先生は『任せろ』って言ってくれたよ……」

ルミアは自分の抱く不安を押し殺すかのように、自分に言い聞かせるように、抱きかかえるリイエルに言う。

だが……グレンはあの夜以来、未だ何の音沙汰もない。

次の日に行うはずだった、レオスとの決闘もすっぽかして、姿を消してしまった。サーシャも、原因はわからないが、姿を現わさず連絡も取れない。

だが、それでも。

ルミアは信じている。信じてグレンを待ち続ける。

……待ち続けるしかない。

(……先生……お願いします……どうか……)

信じて祈り続ける……

……だが。

結局——グレンが学院に姿を現わすことはなかった。

そのまま、一日過ぎ……二日過ぎ……とうとう週末となって……

本日は、システイーナとレオスの結婚式である。

フエジテ西地区のとあるアパート。

そのアパートの一室から二人組の男が、煙草を口にくわえながら出てきていた。

二人とも暇そうにしている。いや、現に暇なのだ。

「……なあ、暇すぎねえか？ここに來てから二時間経つが、何もすることがねえ」

「見張りがあるだろ。これはボスの命令だ。しくじつたらなにされるかわかったもんじゃねえ」

「けどよお、見張りつつたつて誰もここに俺達がいるなんて割れてねだろ」

いかにも留守番が不満そうな男に、窘める男。

だが、不満げな男の言うとおり、ここに自分達がいることは誰にも知られているはずがない。

帝国政府にも、帝政派にも、国家保安委員会にも……だ。

「それにしても、あのルシタニア人を取り逃がしちまたのはなあ」

「ああ。今までの連中よりも勤が鋭く、すばしこかつたらしい。爆弾を仕込んだスルビナ人の死骸を見るなり、すぐに飛び下がったらしいから……あれが一番の不安材料なんだが……」

「はっ！たかがガキだろ？ただのガキに何が——」

不満げな男が、ルシタニア人の少年を取り逃がしたことに不安なっている男に対し、一蹴しようとするが……

……不満げな男の言葉は最後まで続くことはなかった。

「……おい？」

不安げにしていた男が、不満げな男に振り向くと、男は首を押さえていた。

……首から大量の血を流しながら、首を押さえていた。

「な、なあ……ッ!？」

くわえていた煙草を落とし、男は後ずさる。首を搔つ切られた男は大量の血を流しながら地面に倒れ血の海に沈む。刻一刻と生命が男から流れ落ちる。

男は後ずさり、敵の姿を探すが——ふと、背後の首筋からひんやりとした冷気が感じられた。

何か針状の物が、自分の首筋に当たっていることは瞬時にわかった。だから、下手に動いたら血に沈んだ男の後を追うことを否が応にも理解することになった。

「——動かない方がいいと思うよ？その男のようになりたくなければ、ね」

背後から少年の声が出た時、男は戦意を喪失し両手を上に挙げた。

「さあ、部屋の中を拝見してもいいかなあ？拒否したら……わかるよねえ？」

男に氷の針を当てている少年——サーシャは、ゆつくりと冷たい、殺気のこもった声で要求すると、戦意を喪失した男は抵抗することもなく（既に息絶えた相棒の後を追いたくないと）刻々と頷くのであった。

——話は再び数日前に遡る。

サーシャがエーステイの独立派に襲われた、その日の夜遅く。

サーシャはボリスにゾランが独立派に殺された後の襲撃を報告した後、しばらくの間ルミア達から距離を取ることにした。

独立派はゾランの殺害に成功したが、サーシャを取り逃がした。

となると、あの連中がサーシャとボリスの推測通りなら……

連中はサーシャを執拗に狙ってくるだろう。当然、学院の関係者も巻き込んで……

そのような状態で、ルミアの護衛を続けるのは連中を始末しない限り、どだい無理な話だ。

ゆえに、サーシャはルミア達と距離を取り、ボリスとヤチエク達とこの独立派——規模、隠家などを特定することにした。その間はルミアの護衛はリエルに一任される形になるが、今のリエルならば大丈夫だろう。もつとも、今の状態じゃルミアの護衛も

ままならないのだが。

独立派の特定を進める一方、サーシャはビエルを学院周辺に放ち、様子を見る。

すると、学院では学院でとんでもない事態になっていた。システイーナがレオスと結婚し、グレンが決闘をすつぽかし連絡が取れない状態になっていた。

一体、何があつたのか？グレンはなぜ決闘をすつぽかしたのか？システイーナは自ら望んで結婚するつもりなのか？そこがわからない。

そもそも、レオスのこと自体『クライトスの御曹司』という前情報しか知らない。

そこで、ビエルを使ってレオスとシステイーナと二人でいる時を狙って情報を収集することにした。

そして、真実はあっさり判明した。

二人の会話から——レオスがルミアとリエルの素性を盾に、システイーナを脅して結婚を迫っているという事実が——

サーシャは舌打ちした。

クライトス伯爵領の御曹司？とんでもない。レオスは間違いなく、天の智慧研究会に所属する人間か——もしくはは研究会に通じている人間だ。

ルミアの素性は国家最高機密だし、そもそもリエルの秘密は政府すら把握していない事実なのだ。知っているのは自分達リエルの関係者と……行方知れずの皇女と天

の智慧研究会だけだ。

(でも、なんでルミアじゃなくシステイーナを?)

レオスが天の智慧研究会の人間じゃないならば、彼は一体何者だ?

そこがいまいちわからないが……とにかく、脅してシステイーナを手に入れようとしている以上……レオスは『敵』とみなすしかないだろう。

(とにかく、この件は先輩も把握しているのだろうか? いずれにしろ、俺は動けないし……なんといつても……)

サーシャもだが、グレンも置かれている状況は最悪だ。

サーシャと違い、味方が誰もいないのだ。

セリカはどうやら学院地下にある迷宮探索中でいない。アルベルトは例の変死体遺棄事件の調査に当たっている。天の智慧研究会が絡んでいる可能性が以上、学院の連中は巻き込めない。

貴族が相手ではフェジテの警備官では手も足もでないし、そもそも信じてもらえるか疑問だ。

リエルももちろんダメだ。天の智慧研究会の手の者が近くに迫ってきている可能性が以上、今、ルミアの傍から離れることはできない。

軍や政府に通報しようにしても——時間がかかりすぎる。明らかに重大な事件性の

ある以前の学院テロ事件の時とは、わけが違う。

その間に、システイーナをクライトス伯爵領に連れて行かれてしまつてはもう泥沼だ。爵位持ちの貴族の領地は基本的に治外法権、たとえ女王陛下といえども簡単には干渉はできないのだ。

つまり、グレンがシステイーナを救うには——グレン一人で、レオスを打倒しなければならぬらしいのだ。

そして、そのために残された時間は少ない——週末にはもう結婚式なのである。

(なんなんだ、これ!?!状況悪過ぎでしょ!?!偶然にしちや、出来過ぎてるツ！)

例えるなら、相手に心を完全に読まれながら、戦い盤をプレイして、そして相手の予定通りに追い詰められたかのような……そんなあまりにも出来過ぎた、気持ち悪い状況か。

(まるで、あの男と相手しているかのような……つて、まさか、今回の頻発している変死体も……そんな、あり得ないツ！)

サーシャは、約一年前に帝都で起きたあの事件を思い出す。

一年余前、当時、帝国宮廷魔導士団特務分室に所属していたある男によつて引き起こされた事件。

この事件により、帝国政府の要人や軍の高位魔導士達は片っ端から殺され、特務分室

からも何人かが殺された。

その中には、サーシャの先輩でありグレンの同僚であり、グレンの理解者であった女性——帝国宮廷魔導士団特務分室、執行官ナンバー3《女帝》のセラシルヴァースも含まれていた。

裏切った男はグレンによつて討たれるが、この事件の後グレンは誰にも何も言わずに特務分室を去ることになる。

だが、言つても始まらない。

システイーナの方は……グレンに任せるしかないし、サーシャも独立派の方をなんとかしなければならぬ。

(レオスが何者で何を企んでいるのかはわからないが……いずれにしろ今の俺に出来ることは、ない)

よつて、サーシャは独立派の特定に集中することにした。

そして、結婚式前日に独立派の隠家を特定することに成功した。

仕掛ける日は、結婚式当日と決めた。その日に隠家を襲撃する。

ボリスは数日前に、国家保安委員会第一総局直属の特殊部隊——ヴァインペル部隊を派遣している。もうすでにフェジテに着いているはずだ。

(今回のレオスの来校と、変死体の怪事件、そして独立派……なんでこう、面倒なことが

まとめてくるのやら……)

明日の襲撃の準備をしながらサーシャはため息を吐くのであった。

k o l m k ・ m m e n d k u u s (第三十六話)

……………。

……………。

……一方で。

「本っ当に……どおしくして、こうなっちまったんだらうな……う？」

今、グレンは長い長い今までの回想を終えて、我に返る。

とつくに聖カタリナ聖堂を後にしたグレンは、麻のように入り組んだ狭い路地裏を、一陣の風のように駆けている。

レオスとの決闘をすっぽかしてから、システイーナとレオスの結婚式当日の間、グレンはレオスがシステイーナを脅して結婚を迫っていることを知り、フェジテの知る人ぞ知る闇市を回っていた。

そこで、なげなしの金をはたいて武器や魔術的な素材を買い集め、魔道具を作製する。消費付呪型の呪文を簡易起動する巻物を書き、宝石を加工して護符を作り、爆晶石な

どの各種晶石類を用意し、サイネリア島の時にアルベルトから受け取ったパークツション式回転弾倉拳銃の推薬を調合し、その予備シリンドラーを調達し、ナイフに呪的効果を付呪し、飛針にルーンを刻み……資金と時間が許す限りの装備を整えていく。

まるで魔導士の頃に戻ったような感覚を覚えるが、なにせ今、作製したり用意している物騒な各種装備は、グレンが現役の魔導士時代に、仕事で使っていたものだった。

こんな玩具で、レオスにどれだけ通用するかわからないが、怖気ついている暇も余裕もない。

誰も味方がいない中、グレンは結婚式当日にシステイーナを攫うことにした。

システイーナを攫えば、レオスは間違いなく追ってくる。

式場の公衆の面前で花嫁を攫われたとなれば、レオスは貴族の面子にかけて追ってくるだろう。家名を守る為に。そのままみすみす花嫁を奪われては末代までの恥だからだ。

そして、システイーナを餌に、レオスを自分に有利なフィールドへおびき寄せて……そこで打倒する。短絡的だが、それしか方法がなかった。

そして、システイーナを攫うことに成功した。

グレンの腕の中では、花嫁姿のシステイーナが、先ほどから相変わらず暴れながら喚いている……

「離してッ！お願いッ！先生、離してッ！私はレオスと結婚しないと……ッ！ルミアが……ッ！リイエルが……ッ！」

「……はあ~~~~~~~~やれやれ……」

グレンの深いため息が、フェジテのどこかに木霊するのであった。

フェジテ東地区市壁外、郊外。

市壁内の高級住宅地の赴きとは異なり、疎らに見える木造や小屋、緑の牧草地が延々と広がり、針葉樹林の雑木林があちこちに群生し、所々古代の碑石が点在している——発展した中央の方と比べれば、実にのどかで牧歌的な風景。

そんな風景の一角——雑木林の陰に紛れるように——その馬車はひっそりとあった。貴族が所有するような豪華なコーチ馬車である。馬は繋いでいない。御者もいない。その馬車へ、静かに近付いていく三人の影があった。

一人はアルベルト。

そしてもう一人は十代後半……緩くウェーブがかかった髪が特徴的な、涼やかで落ち着いた物腰の少年。

最後の一人は老人ではあるが筋骨隆々で、ごこかヤンチャ坊主っぽい雰囲気醸し出

す男だ。

《法皇》のクリストフに、《隠者》のバーナード。

アルベルトと同じく魔導士の礼服に身を包む二人は、帝国宮廷魔導士団の特務分室に所属するアルベルトの同僚だった。

「……間違いありません。あの馬車から、僕の『結界』に反応があります」

結界魔術に関しては特務分室随一と名高い少年——クリストフが神妙に言った。

「ふむ……確かに血の匂いが強くなって来たわい」

老人——バーナードの言葉に、アルベルトが静かに頷き、馬車の客室扉の前に立つ。

そして、周囲に油断なく注意を払いながら、アルベルトはその扉を開いた。

途端、むせ返るような特濃の血の匂いが三人を襲った。

「……………うっ」

覚悟はしていたというのに、クリストフが思わず口元を押さえて顔をしかめる。

客室内は地獄であった。血まみれで、生前どのような容姿をしていたのか判別困難なほど全身から崩壊した何者かの死体が横たわっている。全身から噴水のごとく派手に出血したらしい……客室内は床から天井に到るまで、ドス黒い血にまみれていた。

「ほう……典型的な『天使の塵』切れの禁断症状で死んだ中毒者じやのう」

慣れたものなのか、バーナードが顎髭をなでながら、こともなげに言う。

天使の塵。鍊金術の悪夢とも言われている最悪の魔薬。最近のフェジテで頻発している変死体からもこの魔薬が検出されていた。

被投与者は思考と感情を投与者に完全に掌握され、筋力の自己制限機能を外され、ただ投与者の命令を忠実なまでにこなす無敵の兵士となる。

だが、その代償に一度投与されたら最後。被投与者は確実に廃人と化し、もう二度と元には戻らない上、定期的に『天使の塵』を投与されなければ、たちどころに凄まじい禁断症状と共に肉体が崩壊し、死に至る。投与を続けてもいずれ末期中毒症状が死に至る。

たった一度の使用で、肉体的に生きてはいても、人としては死んだも同然の——中毒者は、死霊術師が使役する屍人と似たような存在でありながら、生み出すのに、死霊術のような手間暇かけた儀式がまったく必要ない。

他者に投与するだけで、屍人同然の強力な下僕をし、お手軽に量産できる凶悪極まりない魔薬であるがゆえに——皮肉をこめてこう呼ばれるのだ。

死者を迎えに来た天使の羽粉——すなわち、『天使の塵』と。

「ふむ……中毒者特有のあの症状が、肌に出ておらんの……まだ、それほど投与は重ねられてはいなかったようじゃな……」

「噂には聞いていましたが……まさか、こんなに酷くなるものとは……」

「そう言えば、クリストフ。お前はこの『天使の塵』絡みの案件に関わるのは……今回は初めてだったな」

アルベルトの言葉に、クリストフは神妙に頷いた。

「はい。……以前も、こういう事件があつたんですよね？当時の僕はまだ新人だったから、深くは関わってはいませんが……」

「ああ、そうだ。今から一年余前の話になる」

「あの一件で、随分と特務分室の仲間も減つたのう。あの物狂い一人のせいだな」

ふん、と。バーナードが忌々しそうに鼻を鳴らす。

「しかし……どうして、あの人はそんな事件を引き起こしたのです？僕達と同じ、特務分室の人間だったのでしょうか？」

「さあな。今となつては判らん。奴は、グレンと……セラが始末したからな」

「セラさん……ああ、あの《風使い》の？彼女のことは……残念でした」

「……死人に口なしとはこの事だ」

と、その時だ。

三人の顔に緊張が走った。

「おい、お前達……気付いておるかの？」

「……ええ、わかっています、バーナードさん」

三人が、周囲をちらりと見渡す。

すると、どこから集まってきたのか農民風の簡素な出で立ちの人間達が、いつの間にか大勢でアルベルト達を遠巻きに取り囲んでいた。連中の頬は痩せこけ、顔色は土気色、目は虚ろで……その動きはどこか機械じみている。

その手に、鋤や鍬、鎌などを抱え……連中はゆつくりとその包囲網を狭めてくる……「かあゝゝゝつーこの状況から察するに、あいつら、絶対『天使の塵』の中毒者じゃぞ!?ぐっは、面倒臭ツ!」

バーナードがうんざりしたように頭を抱える。

「あいつらつて、やたらしぶといから嫌なんじゃよなあ〜」

「この馬車を調べた途端の、この襲撃……僕達は案外、この事件の真相に近付いているのかもしれないですね」

「しかし、こりゃあ……ますます思い出すのう、あの一年余前の事件を。ホント、何から何までそっくりじゃわい」

「無駄口を叩くな、翁、クリストフ。詮索は後だ。今は切り抜けるぞ」

アルベルトが静かに一喝すると同時に。

中毒者達が一齐に、信じられないほどの俊敏さで、アルベルト達に向かってくる。

その死人のような顔色の悪さとは裏腹に、野生の獣のように躍動するその圧倒的な俊敏さは、明らかに人の領分を超えたものだ。

ざざざざざと、下生えを踏みつける無数の音が、みるみる迫ってくる。

「ち——」

アルベルトは予唱呪文を時間差起動、身を翻し、二反響唱で放つ。

黒魔「ライトニング・ピアス」の雷光が二閃、虚空を切り裂き、向かってくる中毒者の二人の脳天を精密無比に射貫き——

二人倒されても、中毒者達は構うことなく、アルベルト達へ猛進し——
そして——

——同時刻。

東地区が大きく離れたフェジテの西地区の某所。

独立派が隠家に使っていた、とあるアパートの一室にて。

「さーて、貴方達は一体なにしようとしていたのかなあ？」

一人始末し、一人を脅して室内に入ったサーシャ。

連中が次は一体、何しでかすのかを調べるために男の首筋に氷のナイフを突きつけ、

前に進ませる。

(……………にしても……………変ね)

部屋に入るなり、サーシャはある違和感を覚えた。

人の気配がないのだ。いるのはサーシャとこの男だけ。始末した男は玄関に運び込まれている。

普通なら何人かいるはずなのに、二人しかいない。

「……………そういえば、貴方達のお友達はどこに行ったのかな？まさか、捨てられた？同情はしないけど」

廊下を歩いている中、サーシャは嘲笑を込めて男に問う。

まあ、同情はしない。こいつらはルシタニア人とスルビナ人を見つけ次第、問答無用で殺しまくっていたのだから——時には帝国の人間まで巻き込んで。むしろ、ざまあ見ろという気持ちだ。

「……………仲間なら、今出払ってる。お前のカノジョを攫うためにな」

「は？」

男から出た予想外の答えに、サーシャは目を瞬かせる。

「カノジョ？……………何言ってるの？俺にそんな女いるわけが——」

「この前、お前と二人つきりになってた金髪の女、いただろ？あの女を攫いに行ったん

だよ」

「——ッ！」

金髪の女、この前二人つきりになっていた。

(まさか……)

金髪の女の知り合いなんて一人しかいない。しかも、この前なんて……魔導兵団戦演習前に二人つきりになっている。

「どういうこと?!?なんで彼女を?!?彼女はまったく関係ないだろッ！」

先ほどまでの余裕っぷりはどこへやら、サーシャは鬼気迫る顔で男の胸倉を掴む。

「決まってるだろ。その女からお前の居場所を聞かためさ。お前を殺すためにな……無論、女も殺すだろうがな」

鬼気迫る顔のサーシャに対し、男は脂汗を流しながら薄ら寒く笑う。

「それに関係ない?馬鹿が、お前と一緒にいるだけでももう無関係じゃ——」

男はそう言うおうとするが、言葉は最後まで続かなかつた。

「……もういい。先に逝った奴とおねんねしな」

なぜなら、サーシャが男が言い終わらないうちに男の喉を氷のナイフで掻つ切つてしまったから。

自らの血の海に沈み、死にゆく男に見向きもせずサーシャはアパートを出る。

(あの男の言い方から察するに……仕掛ける日は今日……今日はシステイーナとレオスの結婚式)

今日は聖カタリナ聖堂でシステイーナとレオスの結婚式が行われているはずだから、そこに彼女——ルミアがいる。

独立派はそこを狙って襲撃、ルミアを攫うつもりだ。

護衛にリエルがいるから、手も足もだせずにルミアが連れ去られる……という可能性は低いのだが。

(万が一のことがあるから、連中よりも早く聖カタリナ聖堂に向かわないと……ッ！クソがッ！)

サーシヤは舌打ちする。

なにせ、独立派は魔導兵団戦演習の前——グレンがシステイーナに結婚を迫っていたレオスに対して決闘を吹っかけた、その後から自分に目をつけていたのだから。

そして、そこに運悪くルミアがいて。それを見た独立派はルミアがサーシヤと付き合っているとは勘違いしてしまつて……

「急がないと……ッ！」

再び舌打ちしながら、サーシヤは中央区にある聖カタリナ聖堂に向かうのであった。

k o l m k ・ m m e n d s e i t s e (第三十七話)

一方で同じく西地区の狭く薄暗い、路地裏にて。

「はあ……はあ……取り敢えず、撒いたか……くそ、流石に疲れた……」

荒い息を吐きながら、グレンが横抱きに抱えていたシステイーナを下ろす。

「——ッ！」

途端、システイーナが意を決したかのように駆け出そうとして——

グレンは咄嗟に手を伸ばして、システイーナの腕を掴んで引き留める。

「離してッ！離してよッ！もういい加減にしてッ！」

今にも泣きそうな顔でシステイーナが喚き、手足を暴れさせた。

「お、おい!? 静かにしろって!？」

「貴方なんか大嫌いッ！私はレオスと結婚するのッ！レオスと結婚しないと——ルミアが——リエルが——だから——ッ！」

「はあ……そりやもういいっつの。俺はお前の味方だ」

「……………え？」

「事情は知ってる。ルミアとリイエルを守るために……………お前はたった一人で戦っていたんだろ？……………よく、頑張った。後は俺に任せろ」

「……………ッ！」

すると、システイーナは一瞬、目を見開いて……………次第に肩を震わせ、目に涙をにじませて……………

「せ、先生……………先生え……………わ、私……………ッ！ひつく……………うう……………」

感極まったように、システイーナはグレンへひしと抱きつき、静かに嗚咽する。

……………やがて。

システイーナが落ち着くと、グレンは早速本題に入る。

そもそも、今回の結婚騒動、レオスの行動がわけがわからなすぎるのだ。

最初はレオスが天の智慧研究会の関係者かと疑ったが、やっぱり違う気がする。

かろうじて有り得そうなのは、クライトス家の現状から察するに……………システイーナを妻に娶ることでフィーベル家を傘下に置き、分家筋に対してのアドバンテージを得ることなのだが……………これは、最低の悪手だ。

こんな強引に婚姻をまとめてしまえば——上流階級層同士の婚姻ならば、間違いなく帝国政府は介入する。分家筋も黙っているはずがなく、下手したら全面戦争になる。

しかも、万が一、レオスがルミアとリエルの秘密を盾に取って脅したことが表に知られれば、ルミア達もだが、レオスもクライトス家も破滅する。面子を何よりも尊び、重視する貴族にとって、この事態はなんとしても避けたいはずだ。

そして、何よりフィーベル家……システイーナの父であるレナードがこんな暴挙を許すだろうか？ましてや、システイーナはフィーベル家の大事な跡取り娘である。いくらレオスの父親等、家族ぐるみの親交があるとはいえ、流石に許すはずがない。

「——まるでクライトス伯爵家なんて、自分なんて、どうなつてもいいと言わんばかりの暴挙っぷり……やつが何を考えているのか、まるでわからねえ。何かを企む時は、自分が一番得する形にもつていく……その大原則がなりたつてねーんだ……」

「……じゃあ、なんのために、レオスは私を脅してまで……う？」

「ぶつちやけ……この問題を差っ引いてもなお……お前を愛していた、結婚したかった……としか言いようがねえ……馬鹿げているが」

「……それはないわ。あの日、レオスがまるで別人のように豹変して、私を脅してきた時……私、なんとなく、わかった。この人は……私を愛してはいないんだって……」

どこか寂しそうに、切なそうに、システイーナが呟く。

「……そうか」

と、その時。

「……………ん？……………別人？」

ふと、気付いた。

確かにレオスの目的や動機を考えれば……………明らかに常識では考えられない状況だ。

この一連の騒動を引き起こしたレオス。

だが……………仮に、この一連の事件が、レオスとは別の人間の思惑の下に動いているものだとしたら、どうか？確かにクライトスがどうなるうが、システイーナがどうなるうが関係ない。陰謀の大原則に、一応、筋が通ることになる。

なら、もし、そんな第三者がこの事態に裏で囁んでいたとしたら……………何が目的だ？

人の目的というのは、基本的に、事態がもつとも派手に動いている部分の裏に隠れ潜んでいる。

では、この一連の結婚騒動で、もつとも派手に動いたのはどこか？

それは考えるまでもなく、当事者のレオスと、システイーナと……………そして、グレン。そして、どこをどう考えてもレオスとシステイーナに、その第三者の目的はない。

レオスに対して個人的な恨みを持つ者の犯行だとしても……………あまりにも回りくどいし、そもそも、グレンを巻き込む意味はない。

となると、消去法で……………

(……………そんなバカな。それこそ、ありえねえ……………一体、どこの誰が、そんな暇で、何の得

にもならねえことを……ッ!?)

あまりにも突拍子もない想像に、思わずグレンが頭を振った——その時だ。

「せ、先生……ッ! 誰か来る……ッ!?!」

システイーナが怯えた声を上げる。

いつの間にか、人の気配が二人に迫っていたのであった。

「なんで、『天使の塵』の末期中毒者が出てくる……ッ!?!」

独立派よりも先にルミア達と合流すべく、中央区に向かって駆け抜ける途中。

数名の人間がふらふらと徘徊しているのが見えた。

誰もが光り灯らぬ虚ろな目、土気色の顔色をしており……包丁や麵棒、シャベルなどで武装し、病的で剣呑な雰囲気をつけていた。

そして、連中の全身に、血管が網目のごとく浮いていた。

「どうして、こんな時に『天使の塵』が出てくる……ッ!?!」

サーシャは中毒者に気付かれないように、別の道に曲がる。

(今回のレオスの行動に、この『天使の塵』……これって、もしかして……)

どちらにしろ、敵はかなりのやり手だ。

(あの連中、やたらとしぶといからなるべく相手にしたくない。ていうか、相手する暇もない)

中毒者は恐ろしくタフだ。

痛覚もほとんど麻痺しており、生半可な痛みや負傷では止まらない。

頭を潰せば中毒者は死ぬが、何しろ動きが俊敏で、しかも数がそれなりにいるからすぐに始末することができない。

なるべく中毒者と相手にしないように、すり抜けながら中央区に向かう。

「……ビィエルッ!」

目的地に近付く中、サーシャはビィエルを呼ぶ。

「聖カタリナ方面に行つて、ルミア達を探してッ!あとルミア達に近付く不審な連中もッ!」

上空からサーシャの肩に降り立ったビィエルに、サーシャがそうまくし立てるとビィエルはすぐさま飛び立ち、聖カタリナ方面へ飛び立った。

徘徊する中毒者の間をすり抜けながら、サーシャは駆ける、駆ける、駆け抜ける。

駆け抜けながらサーシャはビィエルの視界を通して、聖カタリナ聖堂周辺を見下ろす。

フェジテという大都市の中心部でルミア達と探すのは時間がかかると思っていたが、

思ったよりも早くに見つかった。聖カタリナ聖堂から北方面に向かっている。

「向こうも大騒ぎだろうな……ああもう、一年前のあの事件とそっくりじゃん」

そう言いながら、ルミア達に合わせるようにサーシャも北地区方面に行き先を変える。

このまま北地区に向かえば、学院に到達でき、安全は確保される。そして幸いにも、北地区は騒ぎになっていない地区の一つである。

このままいけば、安全圏内に――

――だが。

「――ッ！」

北地区に向かうルミア達に、複数の人間が向かっているのが見えた。数は確認しただけで四人。

この集団は恐らく――

「だよなあ、そうは問屋が卸さないよなあ……チクシヨウが……ッ！」

自分と独立派――どちらが速く到達するのか考えた結果、独立派が速く到達するのは間違いないことだろう。

サーシャは舌打ちしながら、さらに速く駆け抜けるのであった。

フエジテ中央区から北地区に向かう途中。

グレンがシステイーナを攫った後、一般市民風の、どう見てもこの結婚式の関係者じゃない人間が聖堂内に入ってきた。

包丁や麵棒などの武装をして。

そのあまりにも剣呑な雰囲気にリエルがすぐさま大剣を錬成してルミア達の前に出て戦闘態勢に入る。

このまま、リエルとただならぬ雰囲気の一般市民との流血沙汰になろうとした、その時。

煙幕が聖堂内に充満し、その後、三人組の男達——一人はルミアは見たことのある男が降り立ち、老人から逃げるように言われ、聖堂から脱出したルミア達一同。

外に出ると待ち騒ぎになっており、とにかくルミア達は学院がある北地区に向かう。

騒ぎが大きいのは一般住宅やアパートが並ぶ西地区で、中央区はそこまでの騒ぎになっていないらしい。

このまま、北地区に向かおうとした、その時——

「……………え？」

突然、誰かに腕を引っ張られたルミアはそのまま路地裏に引きずり込まれる。

「ルミアアツ!」

全周囲に警戒をしていたリエルが、ルミアの異常を察し、すぐさま引き返すが——突然、地面が隆起し、壁となってリエル達とルミアの間を遮る。

「ルミアアツ!」

「ちよ、なんだなんだあ?!」

「え!?!ちよつと、なんなんですよ、この壁は?!」

リエルもカツシユ、ウエンデイ達も突然ルミアと隔たった土の壁に驚くが——

ルミアは驚く暇もなかった。

なぜなら、ルミアの胸元——心臓に銃口と細剣のような剣——マスケツト銃と刺突型の銃剣が突きつけられていた。

「——ッ!」

かつての魔術競技祭の時に、暴走していた王室親衛隊の衛士達に突きつけられた、あの時の状況に——しかも、こっちの方が明らかに殺意がある状況に、ルミアは息を呑んだ。

しかも、他にも三人、マスケツト銃を構えてルミアを狙っている。少しでも不審な動きをすれば、躊躇なく発砲する……そんな構えだ。

(……………の人達)

ルミアは、この集団が天の智慧研究会の面々ではないことを直感でわかった。

四人の男女が何やら話している。共通語で話していないから、何を話しているのかわからないが、東部語と似たような感じがした。

(でも……どうして……?)

なぜ自分が東部の人間達に狙われているのか?

心臓が激しく動悸し、呼吸が荒く苦しくなってくる中、ルミアが混乱していた、その時。

「はいはいはい、お前達、よおしくやった」

四人の男女の背後から、男の場違いかと思わせるくらいの軽い声が響き渡った。

「さあて、なーんかでつかい剣を振り回しそうな女の子がいたし〜? 彼女が来る前にさっさと終わらせようぜ」

男はそう言いながら、ルミアに向かってずかずかと歩いてくる。

退路は土壁によって既に塞がれている。獲物を見るかのようにぎらぎらと目を狂気に輝かせた男が至近距離に迫る。

そして――

「単刀直入に言うぜ? ルシタニア人のガキはどこだ?」

「……え?」

男からの問いに、ルミアは一瞬硬直した。

(ルシタニア人……？もしかして、サーシャ君のこと？)

どうして、サーシャのことを聞くのか？

一瞬だけそう考え、そして、この男がサーシャに何らかの害を与えるつもりだとルミアは察するのであった。

k o l m k ・ m m e n d k a h e k s a (第三十八話)

「……貴方達は一体、何者ですか？」

銃剣を突きつけられた当初、ルミアは思考が真っ白になって硬直するが。

やがて、落ち着きを取り戻したのか、凜然と……恐れず、屈せず、ルミアが問いを投げける。

「貴方達は何が目的なのですか？サーシャ君を……どうするつもりなのですか？」
静かな不屈の意志を燃やしつつ、独立派の男を睨み付け……

「返答次第では……私、許しませんから」

ルミアの気丈な瞳が、凜と真っ直ぐに、男を射貫いていた。

仮初にもその身に流れる王家の血の為せる業か。

「ッ!？」

今にも殺されそうにも関わらず、ルミアが纏っているその風格と気品に、その一瞬、男は気圧され、たじろく。

だが、男はすぐに我に返って、ルミアを睨みつける。

「……ガキが、気に入らねえ目しやがって」

こんな年下の小娘に一瞬でも吞まれてしまったことに、耐え難い屈辱を感じたらしい。

男は据わった目で、身動きの取れないルミアの下へと歩み寄っていく。

「いいから、さっさと吐きやがれ。ルシタニア人のガキはどこだ？ ああ？ ……吐かないとブツ殺すぞ？ おいコラ」

男はルミアの細首を片手で鷲掴みにし、締め上げていく。

「さあ、吐けやゴルア！ 殺すぞ？ おら、さっさと吐きやがれ」

「かはっ……あっ……ぐっ……うう……」

苦悶に喘ぐルミアの顔を、男は嗜虐に満ちた愉悦の目で覗き、さらに締め上げる。

常人ならば、本能的な恐怖に吞まれてしまい、自己の保身のために何らかの情報を吐いてしまいかもしれない。

だが、自身の身に危険が迫っているにもかかわらず、ルミアはサーシャのことを答える気はなかった。

そもそも、サーシャがどこにいるのか知らないし、知っていても答えてはいけない。

締め上げ酸素を求めて身体が悲鳴を上げる中。

ドシユ。

不意に、肉が鋭い刃物か何かが入つような音が響き渡つた。

突然、締め上げから解放されるルミア。酸素を求めて激しく咽る中、ルミアは自身の身体には何も異常がなかった。

異常があつたのは、ルミアを締め上げた男の方だ。男の胸部から氷の剣が突き出ている。否、背後から貫かれている。

男は自身の身に何が起きたのか理解できず、口から血を流しながら胸部を突き破つてきた氷の剣を見下ろす。

緩慢な動きで背後を振り返ると、そこにはルミアと同じアルザーノ帝国魔術学院の制服を着ていた、アメジスト色の瞳と白髪少年が立っていた。

そう。男達が先日、中央区の路地裏で殺害し損ねたルシタニア人の少年——サーシャ自らが男の前に現れたのだ。

……もつとも、先ほどまでルミアに銃口を向けていた三人はすでに血の海に沈み、息絶えていたし、男も致命傷を負っていたのだが。

「……………め……………ッ！」

口から吐血しながら、男はサーシャに何か言おうとして、そして倒れて息絶えた。ルミアはサーシャを見上げる。

「間に合った……ルミア、怪我はない？」

かなり急いでいたのだろう。息を切らせたサーシャがルミアの下に駆け寄り、手を差し伸べる。

ふと、サーシャの顔を見る。

まだ、意識がすっかりしていないのか、どうかはわからない。

だが、サーシャの顔を見た時、やはり従姉妹——ヤンチャで強気だったあの子に似ていたような気がして……

いや、実際に従姉妹に似ている。

だからなのか——

ルミアは思わず、サーシャに——

「……ナーシャ……？」

「——ッ!？」

本当になぜかルミアの口からそんな言葉が出てきた。

あまりにも予想外の言葉に、サーシャは差し伸べた手をぴたりと止め、目を見開くのであった。

サーシャは、ルミアからの予想外の言葉に驚愕のあまり、硬直していた。

西区から中央区へ全力で駆け抜け、独立派に締め上げられていたルミアをすんでの所で救出したサーシャ。

四人の独立派を始末したサーシャは、解放され酸素を求めて咽ていたルミアに手を差し伸べようとしたのだが――

「……ナーシャ?」

そう聞いた瞬間、サーシャは驚愕のあまりに差し伸べた手を止め、硬直していた。

え? ナーシャ? 何言ってるの? 俺はサーシャだよ。

……と、普通ならばそう言えばいいのだが、サーシャはそう言わずに固まった。

(……なんで?)

むしろ、サーシャは内心ではいえ狼狽えていた。

「え? な、何……言ってるの……? そんなわけ……」

サーシャは、ナーシャであることを拒否するのだが……もうすでに遅かった。

ルミアは機微に聡い子だ。

普通にやんわりと拒否すればいいのに、狼狽えながら拒否するサーシャを――ましてや、さっきのリアクションを見てしまったルミアは、サーシャをじつと見つめる。

「……サーシャ君。貴方は……誰なの?」

そう言つて見つめてくるルミア。サーシャが本当のことを話すまで、ここでも動かないといつて強い意志が見て取れた。

その真摯な瞳を前に、サーシャも黙つてしまう。

そばらく、重い沈黙が、二人の間にのしかかり……

……やがて。

「ねえ……どうして、貴女つて普段はほんわかしてるのに、こういう時に鋭くなるの？」
根負けしたのか、サーシャは深いため息を一つ吐き、そんなことを呟いた。

今までとは違つた口調でサーシャはばちんと、指を鳴らす。

サーシャの姿が——変わる。

白い髪が腰まで伸ばした、少女の姿に。アメジスト色の瞳。

その姿は——ルミアの従姉妹で東セルフォード帝国連合第一皇女、アナスタシアであつた。

「……ナーシャ。じゃあ今まで……」

「だから言つたでしょ？」 貴女を見守っているって」

まさかこんなに早くバレるなんて思つてなかつたけど、と。物思いながら再び手を刺し伸ばすサーシャ……ならぬ、アナスタシア。

「でも、どうして——」

「話は後。それよりも……来るわよ。新手が」

ルミアの疑問を途中で遮り、アナスタシアは振り返る。

建物の陰からさらに複数の人間がちらほらと現れる。全員、マスケット銃を武装している。銃口をこちらに向けている。

「……こつちッ！」

「う、うんッ！」

アナスタシアがルミアの手を引つ張つて路地裏に駆け込んだ半瞬後、何条もの銃弾が二人がいたところに着弾した。

「追え！あの二人を殺れ！」

背後から物騒なことを叫んでアナスタシア、ルミアを追い始めるのであった。

アナスタシア達は逃げる。ひたすら逃げる。

その行く先には、次から次へと新手の独立派が現れては、アナスタシア達に殺到する。果てのない逃走の中、散発的に発生する戦いが続いていく。

「しつこいッ！」

アナスタシアが、数本の剣を召喚し、右側に放つ。

薄暗い路地裏の空間を斬り裂く氷剣、二本。

今正に、右側から襲い掛かった男——独立派のメンバー——が、その左肩と右脚を射貫かれる。

「あがああああああ——ッ!？」

男は、身の毛もよだつような悲鳴を上げ、地面に倒れ伏して、蹲った。

「ナーシャッ！左ッ！」

その男の様子も見る暇もなく、ルミアが声を上げる。

アナスタシアを狙い、今度は左の抜け道から飛び出してきた、新手の独立派のメンバー。ナイフをすらつと抜き、腰だめに構え、アナスタシア目掛けて猛速度で突進し——

「ち——ッ！《凍てつく矢よ》——ッ！」

アナスタシアが素早く反応し、左手を独立派のメンバーに向けて、呪文を唱える。

狙いを定めた同時に起動する「シユトレラ2」。

氷閃が空気を切り裂き、吸い込まれるように右脚に命中。

「ぎゃ——ッ!？」

突進してきた男はそのまま転倒し、顔面が地面に直撃する。

そして、息を吐く暇もなく。

「トウリスタ、トウリスタ
撃て、撃てッ！」

「タツブケ・タツブケ・ナドゥ・ドゥツァ
殺せッ！なんとしても殺せッ！」

また、新手の独立派のメンバーが路地裏の奥から現れ、アナスタシアとルミアに向かつて殺到する。姿を知られてしまった以上、何としてでも二人を抹殺するらしい。

「な、ナーシヤッ?!」

「エルミアナ、目を瞑ってなさいッ！手を離さないでッ！」

アナスタシアは、やむを得ないといった表情でルミア目を瞑るように言い、呪文を唱えて複数の氷の人形を召喚する。人形はそのまま襲い掛かってくる独立派の連中に向かつていく。

その次の瞬間、舞い上がる血飛沫。

氷の人形が腕を、脚を、上半身と下半身をバラバラに斬り裂く。斬り裂きまくる。

「……………ッ！」

「ごめん、あと少し、あと少しだから！それまで、耐えて」

肉が鋭利な刃物で斬り裂かれる音が否応なしに耳の中に入り、ルミアは苦悶の顔を浮かべる中、アナスタシアはルミアの手を引き、駆け出す速度を速める。

縦横様々に入り組む路地裏を、次々と現れる独立派に追い立てられるまま、ある場所へと向かう。

すぐ前の丁字路を右に曲がろうとすると……

「一斉射ツ！撃てえツ！」

「——ツ!?!」

その道の先には、数名の独立派構成員が、一列横隊を組み、マスケット銃を構えてるのが見えた。

アナスタシアは舌打ちしてすぐさま元の位置に引込む。

アナスタシア達が引つ込んだのと、マスケット銃の一斉射は同時に行われ、半瞬前にアナスタシア達がいたところを、複数の銃弾が空気を切り裂いてく。

「ビィエルツ！」

アナスタシアがビィエルを呼ぶと、再装填しているマスケット銃兵の目の前にビィエルが現れ、羽根を最大限羽ばたかせて風を生成。そのまま銃兵を吹き飛ばした。

「ここを真っ直ぐ行ったら広場があるから、そこまで行くわよ！話は時間が許す限りそこでするから！」

「うん、わかった！」

一通り、独立派を一掃したアナスタシアはそのままルミアの手を引いて、路地裏を目

的地まで駆け抜けるのであった。

k o l m k ・ m m e n d ・ h e k s a (第三十九話)

そして。

そのまま二人は、フェジテ北地区から西地区郊外——旧住宅地区画へと辿り着いていった。

ここはフェジテ西地区でも新住宅地区画とは異なり、人っ子一人存在しない。

フェジテの人口増加対策と、旧時代に作られたがゆえに煩雑な区画構造の整理のため、近々、大がかりな再開発が予定されている立ち入り禁止区域なのだ。

二、三世代の古い建物が、複雑に入り組んだ道に沿って並ぶゴーストタウン。

その一角、建物に囲まれている広場に隣接している建物の一室に——アナスタシアとルミアの姿があった。

「はあ……はあ……これでひとまずは落ち着いたってことで……」

荒い息を吐きながら、アナスタシアは周囲を見渡す。

周囲に独立派の気配はない。全部始末したわけではないと思うが、それ相応の損害を

与えたらしい。敵も慎重になつているのかもしれない。

「ここに居るのは……まだ私達だけね」

さて、これからどうするか……

と、いつても、まだ独立派の連中は諦めたわけではない。

だから、ここで身を隠し、敵をやり過ぎさねばならない。なにより、ルミアに話をしなければならぬのだから。

「さてと……どこから話した方がいいのかしらね……」

アナスタシアはルミアを見て、どのように説明しようかと考える。

アナスタシアから言葉が出るのを真摯な顔で待つルミア。

しばしの沈黙が、二人の間を流れる。

そして。

「……昔、東の帝国にある女の子がいました」

「……？」

ルミアは話の前後が読めず、一瞬、訝しく思うが……

「その女の子の父親は十七の国を統べる皇帝で、母親は西の帝国から嫁がれてきた王女様。そんな両親の元に生まれた女の子はどういうことか、自分が皇帝になつたら世界を守りたいとか本気に思い、それを本気で目指し、次期帝位継承者として一生懸命に努力

しました」

「！」

両親が皇帝と王女様。次期帝位継承者。

いつか、どこかで聞いたフレーズに、ルミアが少し目を見開いた。

「だけど、その女の子は現実を全く見ていませんでした。自分の国がどれぐらい世界中で嫌われていることも……ましてや、連合の構成国からも嫌われており、これではしよせん、世界を守る皇帝など、おとぎ話の中だけの話、夢の中の夢でした」

「ナーシャ……それって、ひよつとして……？」

ルミアも、その話が暗喩する構造に気付いたらしい。

ふつと、アナスタシアが自嘲気味に口元を歪める。

「と、現実ではそういう感じだったんですが、そんな甘ったるい夢を応援していた人達がいきました……母と二人の妹達はそれを素敵な夢だと言ってくれて……父は何も言ってくれなかったけど……まあ、家族は全体的にその夢を応援していました……」

淡々と続く、アナスタシアの話。

ルミアは神妙な表情で、静かにアナスタシアの言葉に耳を傾け続ける。

「そして、そんな感じで皇族としての不自由はしなかったけど、やっぱりどこか不自由な生活を送っていたのですが……五年前、あの革命で家族は皆、殺されてしまいました」

「……ッー」

その展開はルミアでもわかっていた。わかっていたが、改めてその顛末を聞くとあの時のことを思い出す。

まだ自分が王女だった頃の——帝国連合で革命が起きたという報告を受けた時の母親の顔を……妹の死を聞いた時、普段は毅然としていたアルザーノ帝国女王が、今まで誰にも見せたこともないほど狼狽えて憔悴した、あの時の顔を思い出す。

そして、アナスタシアは変わらない調子で肩を竦める。

「まあ、そんなわけで急に家族も失い、父親と宮殿に逃れて……その宮殿からも脱出したわけですが……女の子は皇帝になるために、国を取り返そうと誓ったのでした。めでたしめでたし……」

アナスタシアの話は、物凄く簡単に、端的に、あえてふざけような口調で語られている。

「……ナーシャ」

だが、その軽い言葉の裏に、一体どれほどの苦悩があったのか……なんでもなさを装うその表情の端々に、それが見て取れてしまった。

「でも、私はその夢は素敵だと思うよ？ 平和な世界を生きる私達には、きつと想像もつかないほどの過酷な人生をその子は歩んでいたんでしょう……」

「さあね？ 少なくとも異能だからと王室を追放されて、今は最悪のテロ組織に狙われている元・王女に比べたらまだマシかもよ？ 多分」

「でも、それでもわからないよ」

ふう、と。ルミアが何とも複雑な表情で息を吐く。

「その話と、ナーシヤが自分の姿を隠してまで『サーシヤ』として私達に接したのと、一体、何の関係が……？」

「……巻き込みたくなかったのよ、貴女達を」

やれやれと、アナスタシアはぶいっとルミアから顔を逸らし、気まずそうに言う。

「え？」

「私が皇帝になって、帝国連合を再び一つにしようとして動いているわけなんだけど……そんな私を消し去りたい連中はごまんといるのよ」

「……………」

アナスタシアの置かれている状況を僅かながら聞いたルミアが押し黙る。

「ねえ、ルミア。東部はね、今、かなり悲惨なことになっているの。帝国政府や国民が思っている以上に、ね」

アナスタシアは物憂げな表情で空を見上げた。

「お父様とお母様、そしてタチアナとマリアを殺した革命政権は、自身が気に入らない者

達を片端から処刑している。裁判もなしに。独立派——中でも共和派は、同じ独立派でも王党派諸共、自身と異なる民族を迫害している。今回の連中のようにアルザーノ帝国を憎んでいる輩までいるわ。お父様にお母様を嫁がせた共犯者としてね。そんな連中が己の目的を果たす上で共通している障害は……私よ」

時間が過ぎていく。

時間が過ぎていき、やがて、夕方に差し掛かろうとする。

「だから、私は『サーシャ』として姿を変えて、特務分室に入つてそして……ここに来たの……今の私では力がないから力をつけるためにもね。その前に死ぬわけにはいかないわ。……それに、もし、貴女達の前で『アナスタシア』として表舞台に出たら、革命政権と独立派、そして新皇帝派はこぞつてこのフェジテに殺到するわ。私を殺すために……貴女達を巻き込んでまで。それだけは……嫌なのよ……だから私は、時が来るまで日陰にいなきやいけない……望もうと望むまいと関係なしにね」

アナスタシアの話が終わり……しばらくの間、沈黙が二人の間を支配する。

やがて、ルミアが沈黙を破り、言った。

「辛かった……よね？ 本当はナーシャとして、私と皆と一緒にいたいのに……」

「別に？」

ルミアの言葉に、アナスタシアはそっぽを向いたまま、拒否するが……

「ナーシャって、辛そうな時、顔を逸らす癖があるよね？辛そうな顔を見せないように」
「……そんなわけない」

凶星なのだが、それでも意地を張るアナスタシア。

……だが。

「……でも、ちよつとだけ……そうかも」

「……？」

小さく零れたアナスタシアの言葉に、ルミアは首を傾げる。

「……ねえ、エルミアナ……ていうか、ルミアって呼んでいい？」

「……？」

「それと……こうやって二人でいる時は……いいでしょ？短い時間だけど、この姿でいても……別に、寂しいわけじゃないし」

ぶつぶつとそっぽを向いたまま言う、アナスタシアに。

「うん、いいよ。むしろ私は……嬉しいかな？従姉妹と久しぶりに話せるし、何より……ナーシャと一緒にいたいから……だから……私に話してくれてありがとう、ナーシャ」

そう言つて、微笑むルミア。

小さい頃（今でもだが）は見た目によらずやんちゃな従姉妹の微笑みが、どこか暖かくて……久しぶりにそれを感じて……

「そりゃ、私と貴女は従姉妹なんですよ。こういう話は貴女ならしてもいいことですし。」

今まで、照れくさそうに呟くだけだったのにそんなのどこへやら。高飛車気味にそう言うアナスタシア。

「でも、なんか私って従姉妹から信頼されてないなんて……それはさすがに傷ついちゃうなあ……」

「なっ！ち、違うし!?それは、その……いつかは——」

「ああ、まさか従姉妹からそんな扱いを受けるなんて……私、非常に悲しいことですわ」「ねえ、ルミアさん!?貴女、怒ってます!?怒ってますわよね!?悪かったから、許して!ごめんなさい!お願いしますッ!怒りをお鎮めください、ルミア様!」

心なしか、怒っていいそうなルミアに、アナスタシアは慌ててぺこぺこ頭を下げて……ルミアはそんなアナスタシアを見て、冗談だと言わんばかりにクスクスと微笑んで……そんな、二人の間の時間が少しずつ動き始めて……

「いやあ……まさか、まさか……行方知らずの皇女に出会うなんて……おかげで手間が省けました。我々の目的を果たすために貴女をここで殺すことができるなんて」

そんな二人に冷や水を浴びせたのは……

「ナーシャッ!この人達……ッ!」

「……チツ！親元のお出ましね……従姉妹との一時の貴重な時間を潰さないでもらいたいわねッ！」

いつの間にか、何の前触れも気配もなく、部屋の入り口に複数の集団を率いている男——今回の襲撃グループのリーダー格と見られる男が、極上の獲物を見つけた蛇のように卑しい笑みを浮かべてアナスタシアを見ていたのであった。

n e l i k ・ m m e n d (第四十話)

「……なるほどね……予想通りだわ」

独立派の親玉と対峙したアナスタシアは、舌打てして呟く。

「な、ナーシャ、この人達は……ッ!？」

「こいつらはエースティの独立派——その中で最も過激な一派よ」

無数の銃口を向けられる中、ルミアを庇うように前に出たアナスタシアが忌々しそうに独立派を睨みつける。

五年前に起きたルシタニアでのマクベス主義者による革命が起き、帝国連合が崩壊した時、連合を構成していたルシタニア以外の構成国では革命政権、帝政派、独立派による三つ巴の血で血を洗う内戦が繰り広げられていた。

エースティ、リスアニア、ラトガレ——いわゆるイメタリア三国も例外ではなかった。この三国は元々、独自の文化を持っていたからか、現在は独立派が革命、帝政派に対し優位に立っていた。

だが、その独立派でも二つの派閥に分かれていた。同君連合、併合される前の政体——大公・公を元首に擁立しようと企図する王党派と……王党派に対し不信感を抱き、王がない政体——共和派に分裂していた。

その共和派でも独立を達成した後、異なる派閥・民族と共存していくことを目的とする穏健派と異なる派閥・民族を徹底的に排除し、純血なる自民族のみで構成し独立を目指す過激派に二分され、表向きは歩調を合わせていたものの、中には敵諸共、穏健派を攻撃する過激派までいる始末であった。

そして、今、アナスタシアとルミアの目の前にいる独立派は——その過激派——エーステイ民族会議の中で最も過激な組織——純血派の連中であつた。

「——ルシタニア人だけでなく、異なる民族は徹底的に殺して回り、それだけじゃなく同じ民族でも王党派も攻撃しているし、エーステイ人でも少しでも他民族の血が入っているとわかれば、徹底的に排除する……そしてアルザーノ帝国に対しても人一倍憎んでい
る輩よ」

「殺し回るとは人間きの悪いことを……我々は目的達成のための必要な経費を払っているまで……無駄な殺しなど一切やってませんよ？」

睨みつけるアナスタシアに、嘲笑するように口元を歪める男。

「そして……要は貴女は邪魔なんです、はい。なので、ここで殺します……そこにいる従

姉妹——エルミア女王と共に、ね。別に彼女を殺しても帝国政府はなにもできないでしょうし、母親に捨てられたから別に構いませんでしょ？」

「貴方ねえ……ッ！よくもぬけしやあしやあと……ッ!?あの時に貴方が処刑されればよかつたのに……ッ！」

今すぐ、この男を殺したい衝動を、アナスタシアは必死に堪える。

「……ナーシャ、この人、誰なの？」

「マルトラール。革命前から帝国連合内での一連の無差別テロを主導した、最悪のテロリストよ」

気丈に振る舞うが、この狂気じみた男——マルトラールに対して少しばかり動揺しているルミアへ、アナスタシアが忌々しそうに吐き捨てる。

「革命後は、エースティを支配しようと独立派に加わって、無関係の人々を『必要経費』として虐殺しまくっていて……国内での東部人を狙った無差別テロも起こしていて……私を殺そうと襲って、失敗したら貴女を連れ去って拷問しようとして……それで今に至るわけ。今までの事件はこの男が引き起こしたってことよ」

「な……ッ!?!」

「先日から行方不明になっていることになっている、ゾランという魔術講師……彼もこいつらに殺されているの……そして、私も殺そうとしたけど失敗して……貴女から私の

居場所を聞き出そうと連れ去ろうとして……もちろん、聞き出した後、貴女を殺すつもりだったらしいけど……」

「そ、そんなこと……」

「そんなことを平然とするのがこいつらなのよ……ッ!」

アナスタシアが烈火の如くマルトラールを睨みつけると、マルトラールは微笑んだ。まるで今までの鬼畜の所業を褒め称えられたかのような笑いだ。

「まあ、いいわ。ここで全員地獄に叩き落としてあげる」

アナスタシアは、左手から氷の剣を錬成する。

「それよりも貴方……一体、何を企んでいるの?」

「はて?何を企んでいるのかと言われましても……貴女達ルシタニア人を皆殺しに——」

「へえ?ルシタニア人を皆殺しにするために、帝国に来たってわけなの?まだエースティにはルシタニア人、かなりいるはずよね?随分と余裕なのね?」

「……………」

「しかも帝国人まで巻き込んでまでの無差別テロ……帝国まで敵に回すなんて、普通に考えれば無謀とも思える行動を平然とやってのける……どこからどう考えても、別の目的があるでしょ?帝国を敵に回してまで貴方は何をやりたいわけ?」

そもそも、まだ独立も達成していない——しかも、その中の過激な一派に過ぎない彼らが帝国を敵に回しても何の得にならないのである。

アナスタシアは民族会議（純血派）のこの行動が不思議でならなかった。

「世界を自分の物にするためですよ」

「……は？」

思わず、ぽかんと口を開いて忘我するアナスタシア。

「ところで、殿下……貴女は私達にこう問いましたね？」 帝国を敵に回してまで何をしたいのか？」と

話にまったくついて行けないアナスタシアを置き去りに、マルドラーが誇らしげに言う。

「世界を支配するためですよ」

なんだ？こいつ……呆れて物も言えないが、アナスタシアの顔にもルミアの顔にも、雄弁にそう書いてあった。

そんな二人を置き去りに、マルトラーの歌劇のような一人語りは続く。

「貴女は何も知らないでしょうけど、私の故郷は……エースティは連合に併合されるよ
うな国ではなかった。あの国は、神に祝福された選ばれし国なんですよ」

芝居がかった大仰な身振り手振りと共に、言葉を連ね……

「だがそんな偉大な国が、邪悪な意思の下に作られた魔国に支配されてしまった……本
当の悪の国に支配されてしまったからには、それを見て見ぬ振りをするのは偽善者だ。
……そうでしょう？ そんなのを許していいはずがない」

左手を胸に当て、右手を大きく振り、見得を切る。

「……………」

「ゆえに我々は五年前の革命を機に、立ち上がった。祖国を売り、にもかかわらず平然と
また権力を掌握しようとする王党派と革命政権と帝政派を、高貴なるエーステイ人以外
の民族を片端から始末することにした。皆殺しにしてやがては、このアルザーノ帝国と
いう邪悪な国を滅ぼすことにした」

「……………」

「そして今、私の目の前に行方知らずの皇女がいる……ッ！ 神に祝福された祖国を土足
で踏みじった悪魔の一族の最後の生き残りが……ッ！ おお、神よッ！ これは偶然なの
か……ッ！？ 否ッ！ 断じて否だ……ッ！？」

キレのある所作、軽やかな足運びで、ぐるりと小さく円を描くように歩き……かッ！
と目を見開いて天を仰ぎ、天に向かって声高く叫び……

「……………」

「だから、殿下。これはほんの始まりに過ぎない」

そして、コートをも、ぱつと鳴らして、再びアナスタシア達へと向き直る。

「まずは殿下、貴女を殺す。……そこにいる元・王女と共に仲良く死んでもらいます。そして、次に、この帝国内にいる東部人を虐殺して帝国王室も全員、虐殺する」

「……………」

「そう！帝国連合、帝国、東部人……我らは土足で踏みにじつたこれら野蛮人を皆殺しに……世界を支配して、正義を執行する偉大な支配者となる……ッ！」

……沈黙。困惑。静寂。

そして……

「バツカじゃないの、アンタ……」

ふつふつとこみ上げてくる侮蔑と激情、生理的嫌悪の中、アナスタシアが呻く。

「……………じゃあ、何？ゾラン……彼はルシタニア人の盟友であるスルビナ人だったけど……死ななきゃならない人じゃなかった。そんなやつを待ち伏せて、寄つてたかつて殺したのにそれが正義だと？」

「ええ、正義ですとも」

マルトラールの口調は、揺るぎない自信にも満ちたものだった。

「彼はスルビナ人で、スルビナ人はルシタニア人に与した時点で彼らも死ななければならぬのです。彼は何もしておらず、非常に痛ましいことでしたが……スルビナ人であ

る以上、彼の死は必然だったのです。主は、きつと天なる御国にて、彼の者のことを思い出してくださるはずですよ」

「無差別テロに巻き込まれた帝国人……彼らは何の罪も関係ない一般市民だったはずよ。そんな人達を巻き込んで、殺すのは必要経費、だと？」

「ええ、必要経費です」

マルトラールの口調は、己が言葉に微塵の疑いも持っていないものだった。

「仮令、その歩む道がどんなに罪深く血に塗れていようとも、辿り着く先に理想が存在するなら、それは正しい道だ。そうでしょう？」

迷いなくそう言い切るマルトラールの微笑みは、どこまでも朗らかで力強い。

「……私達とは関係ないエルミアナを連れ去って、殺そうとしたのも……ッ！」

「ええ、必要経費です」

「貴女ねえ……よくもぬけぬけと……ッ!？」

「いやあ、当初とは違う迷惑になってしまいました……むしろ、最高の展開になりました。感謝しますよ、エルミアナ女王」

そして、マルトラールは、肩を震わせて笑い始める。

「貴女の従姉妹であり、貴女のおき理解者である彼女……貴女はさぞかしなりふり構わず守ろうとしたんじゃないんですか？彼女を守るために、道中で私の部下を殺しまくつ

たんじやないですか？なにせ、貴女の家族は、あの男に殺されてしまったんですからね！貴女が必死になるのもわかりますよ！ふっ……ふっ……あっはははははははははははは——ッ！」

「この男……ッ！一体、どこまで狂って……ッ！周囲も、無関係な連中も、何もかも巻き込んで、それを……ッ！」

「そうです。なにもかも全て……我らの悲願のための必要経費なのですッ！」

「どこまで狂ってるんだ、アンタはああああ——ッ!？」

「狂ってませんよ、私は至って正常ですよ」

アナスタシアの咆哮に、マルトラールは平然とそう言い放つ。

「殿下、貴女には話しましょう！私は帝国連合と帝国と世界の真実を知ると同時に——世界の全ての理を支配する力の存在も知ってしまったのです——そう、『禁忌教典』をッ！」

「な……んですって……ッ!？」

マルトラールから出た『禁忌教典』という言葉に、アナスタシアは驚愕するのであった。

nelik・m mend・ks (第四十一話)

「だが、あの力はあまりにも人知を超えているッ！人が触れていいものじゃないッ！ゆえに資格がいる——あれに触れていいのは、絶対に正しい人間だけだッ！もし邪悪の手に渡れば、世界は滅びるだろう！」

「そんな力……」

「ええ、そうです！考えるまでもない！恐らく今、貴女もそう思ったのでしようが、私が押さえなければならぬ力だッ！あの力はッ！」

「……………」

「しかし、私は自問するんだ……果たして本当に、今の私にその資格があるのか？」と

「……………」

「なにしろ、私は目的を果たすための事を何も成していない。そんな私に『禁忌教典』を手にする資格があるのか？いや、断じて否だ！世界が認めても、私自身が認めない！」

「……………」

「ゆえに！私は貴女を殺し、自身の悲願を達成する一步を踏み、『禁忌教典』を手にする資格を得るッ！そして、その力で、祖国を解放し、我々に仇なしたルシタニアとアルザーノ帝国を滅ぼし、世界を我々エースティ人の下の支配下に置くッ！」

「……………」

「わかりますかね、殿下ッ!?我々に害をなした悪、これから害をなすであろう悪は、真に支配すべきである我々の手によって裁かれ、滅殺されるのですッ！この我々がいる限り、この世界に『悪』という存在は一片たりとも許さないッ！この手で滅ぼしてやるッ！塵だッ！」

そして、マルトラールは神々しきすら感じる力強い瞳で、アナスタシアを真つ直ぐ見据え——

堂々宣言する。

「これが我々の悲願と言わずして——何と言うッ!？」

イカれてる、気が触れている、狂ってる、頭がおかしい、壊れている……マルトラールを一言で言い表せば、結局、それだ。それしかない。

だが、それ以上に——恐ろしい。

マルトラールが狂人であることは、もう疑いようがない。常人にはまったく理解できない境地に生きる『外れた』人間。これを狂人と呼ばずしてなんと言う？

そんな狂人が、常人を遥かに超える知性と力を持ち、狂人なりの悲願と信念をまっとうしようとして、明確な目的意識と緻密な計画性をもって、実現不可能な無謀な目標へ真っ直ぐ邁進するのだ。しかも、自分がもつとドス黒い邪悪であることに気付いてすらいない。

このマルトラールという男は救いようのない狂人でありながら……同時に、一種の聖者にも似た究極の求道者なのだ。それだけに、自身の行動に何の迷いも躊躇いもない。こんな恐ろしいことが、他にあるか？——無い。

「……な、ナーシャ……貴女」

怖い。気丈なルミアですらもこの男は怖い。

単純な恐怖だけを論ずるなら、以前、ルミアが遭遇した外道魔術師……レイクやジンなど比較にならない。彼らの目的は誰しもが持ち得る人間の欲望の延長線上……要するに、まだ理解が及ぶ範疇だ。

だが、このマルトラールに関してはルミアはもちろん、常人の理解はさっぱり及ばない。理解できない物に対して人が抱く原初的な恐怖を纏う彼が、とにかく怖い。

と、その時。

「……これでわかったでしょう？ルミア」

不意に、アナスタシアが溜め息混じりにそう言った。

「……ナーシャ……?」

ルミアがアナスタシアを見る。

そこには、ルミアを東部のゴタゴタに巻き込んでしまったことに、申し訳ない顔をしていた従姉妹の姿がそこにいた。

「……ごめんなさい。貴女を巻き込むつもりはなかったのに、結果的に巻き込んでしまった……でも、東部は今、こういう人間が湧いてくるほど混沌としているの……」

「……………ッ!」

「だから力を持たないといけない……でないと、例え国を取り戻し、皇帝になったとしても……またバラバラになる……東部つて、皇帝が力を持っていないと、たちまち内側から分裂してしまう国家なのよ……」

彼女の決意を垣間見たルミアは、何も言えなくなってしまう。

「だから……悪いけど、貴方達はここで死んでもらうわ」

そして、アナスタシアは静かに殺気が籠った目で——氷の剣の切っ先を、マルトラールに向ける。

「やれやれ……まだ年若い少女なのに、もう蒙昧になってしまっているなんて……」

予想とは違い、抵抗の意志を見せたアナスタシアに、マルトラールは肩を竦める。

「周りを見てください。ここはもう私達の部下で占められているのですよ?外にも私の

部下達が、つまりはこの地区は既に私達の領域なのです。見つかった時点で貴女方の勝ち目なんて——」

「うるさい。黙れ。しゃべるな」

だが、アナスタシアはびしやりと切り捨てた。

「一体、誰に向かつて物を言っているの？ 私は皇女よ？ そこら辺の王族よりも遥かに高貴な血筋を持つ皇女よ？ 貴方ごときが偉そうに口を開かないでくれるかしら？」

すると、これまで基本、常に余裕を崩さなかつたマルトラールの表情に、初めて苛立ちのようなものが交じり始める。

「……せっかく、教養ある話ができるかと思つたのですが……性格まであのマリアベルという忌々しい女にそっくりなんですわ……」

「そう。それがどうしたのかしら？」

「残念ですが、貴女はここで私に殺されるのです。そうすることで、私の悲願は——」

「ふん——バツカじゃないの？」

アナスタシアは鼻で笑つて、言い捨てた。

さつきまでの激情とは裏腹に、アナスタシアはマルトラールに容赦なく言いまくる。

「悲願？ 笑わせるわね。さつきから話を聞いてりゃ、被害者意識全開だし、逆恨みにも程があるし。ていうか、今までボケーっとして併合されたくせに、何今更悲劇のヒロイ

ンぶってるの? 『禁忌教典』? そんなの貴方如きが手に入れられる代物じゃないわよ。
おわ か り?」

そこまで言うか……と頬を引きつらせるルミアを尻目に、マルトラールの表情がどんな憤怒の色に満ちていく。

「貴女は……この私を……侮辱するのですかッ!」

「……事実でしょ? 逆切れしないでくれる?」

「気が変わった。貴女は殺す。苦しませずに殺そうと思いましたが……この世のありとあらゆる苦痛を味わわせながら、殺す……女で生まれたことを後悔させてやる……」

その、激しい憤怒が燃えた冷酷な眼差しはまるで悪魔のよう。

だが、そんなマルトラールをアナスタシアは、ゴミを見るような蔑みの眼差しで見下す。

「はあく……本当のこと言われてキレるあたり……もう、貴方に勝ち目はないわね」
「……貴女は何言っているのですか? 殿下」

アナスタシアのため息をする姿に、マルトラールは訝しむように眉をひそめる。

「いや、言葉通りの意味よ? 貴方達に勝ち目はない、これに深い意味はないわ」

そして、尊大に腕を組み、嘲笑するような目をマルトラールに向ける。

「貴方ごときが、私を倒せるわけないじゃない」

「どういう……意味だ……ッ!? 貴様ッ!」

わなわなと、マルトラールが震え始めた。

「この小娘がッ! この私を侮辱し、悲願を否定するのかッ! やはり、貴様は滅びなければならぬッ! こんな魔女を生かしては、世界のためにならないッ! だから——」

そんなマルトラールを完全無視して、アナスタシアが背後のルミアに告げる。

「ルミア。しばらく私達に付き合ってもらおうわよ?」

「!」

「正直、ここからは戦闘無しで切り抜けるのは無理よ。しかも、数が多いし? 貴女も殺されるから、貴女だけを逃がすという選択肢もないし? 死なせてしまったら、先輩とシステイーナ達に何言われるかわかったものじゃないわ。だから、ここは覚悟を決めて、一緒に切り抜けないといけないの」

「……………」

「まあ、だからといって貴女に戦えとは言わない。意図的ではないにしろ、東部だけの問題に貴女を巻き込んでしまったし、貴女は戦闘は苦手だし……だから、私の傍にいてくれないかしら? その代わり、貴女を無事に守りとおして見せるわ。約束する」

すると。

「もちろんだよ、ナーシャ。貴女も私も一緒に、皆の所に帰ろう?」

「……………」

そして、二人は力強く微笑みあつて。

「頼りにしてるわよ……私の大切な従姉妹」

アナスタシアが前に出る。それに寄り添うように、ルミアはアナスタシアの後ろに。

二人で、マルトラール率いる独立派と対峙する——多勢に無勢だがそんなの気にする様子もなく。

「アナスタシア!! パーヴェルナ!! ロマノヴァツ! エルミアナ!! イエル!! ケル!! アルザーノツ! この魔女達め……ちい——ツ!」

マルトラールが、わなわなと拳を震わせる。

「殺せ——ツ! この魔女達を殺せえええええ——ツ!」

マルトラールは後ろに付き従っている部下に、そう叫ぶ。

アナスタシアは、マルトラールが言い終わらない内に——

「ヤチエクツ!」

すると。

アナスタシアが叫んだ瞬間、両側の壁が粉々に粉砕した。

粉砕した壁から複数の武装した集団が部屋になだれ込んでくる。

「^{ウイッツイイゴ}掃しろッ!」

そう叫ぶと共に現れたのは——ヤチエクだった。

現れた瞬間、独立派の何人かが銃弾に倒れる。

そして、瞬く間に部屋という狭い空間の中で白兵戦が起きる。

「ルミアッ！飛び降りるわよッ！」

「え……ッ?!?ちよ——ッ?!?」

不意打ちを喰らい、注意が逸れた瞬間を見逃さなかったアナスタシアが、ルミアの腕を掴んで抱きかかえ——窓を破って飛び降りた。

地面に着地して、ルミアを下ろすと、外は独立派とアナスタシアの部下——つまり、帝政派の戦闘があちこちで起きている。東部語の怒声が飛び交う。

アナスタシアとマルトラールが対峙している間に、ヤチエクとフェジテに至急派遣されたヴィンペル部隊が到着し、独立派に気付かれないように配置についていたのだ。

「さあて……ここままでコケにされたんだからやり返さないとね……やられたらやり返す……倍返しだッ！」

「ねえ、ナーシャッ！それよりもこれからどうするのッ!?!」

戦場のド真ん中でドヤ顔でのたまうアナスタシアに、ルミアが袖を引っ張る。

「………ビィエルが上空で旋回しているから………こつちッ！」

空を見回して、ビィエルを見つけたアナスタシアは、ルミアの手を引っ張りビィエル

が旋回している所に向かって駆け出す。

二人は、帝政派の援護を受けながら、広場から抜け出し、駆けるのであった。

nelik・mmend kaks (第四十二話)

駆ける――

視界が激流のように後方へ翔け流れる。

ルミアを抱き抱えたアナスタシアは、ビィエルがいる場所を目指して、再開発地区をまさに飛翔するように駆け抜けていた。

黒魔〔メチエーリ〕。

東部語ルシタニア方言で暴風雪という意味のこの黒魔術は、生前、帝国宮廷魔導士団特務分室所属、執行官ナンバー3《女帝》のセラールヴァースが、もつとも得意とした、帝国の軍用魔術〔ラピッド・ストリーム〕を完コピした、旧帝国連合の軍用魔術である。

因みに、この魔術。〔メチエーリ〕という暴風雪という名が付いているのに、冷氣系の魔術ではない。というのも、帝国にパクられたとは思わせないために付けられた、いわ

ばダミー名称みたいなものである（もつとも、そんな小細工が通用するはずもなく、瞬時に帝国に悟られてしまったわけだが）。

ルミアの異能で増幅させた術を駆使し、アナスタシアは建物と建物の間を飛翔する――

建物を蹴って跳ぶ瞬間、「メチエーリ」再起動し、激風を身に纏って弾丸のように推進する。

さらに、右から押し寄せてくるように迫ってくる壁に足から着地し、その勢いのまま数歩壁を駆け抜け、失速する瞬間、「メチエーリ」を再起動、再び激風を身に纏って跳び、前方へ推進する。

やがて――重力に従い、高速で流れる道路が眼下に迫ってきたら――「メチエーリ」を再起動、再三巻き起こる激風で半ば浮きながら地面を翔け滑り――

さらに、追撃の「メチエーリ」の再起動。

地面すれすれを滑空していたアナスタシアの身体が、空にかつ跳び、舞い上がる――
「よつと……ッ！」

アナスタシアの全身を包む無重力、遙か眼下にある地面。

次なる建物がアナスタシアに猛速度で迫り、その屋根に着地。

すかさず、「メチエーリ」を再起動して、空に身を躍らせ、推進――

「うわ、うわわわわわわ……ッ!？」

アナスタシアに抱き抱えられている気丈なルミアも流石に真つ青になるほど、無茶苦茶で、奇っ怪で、出鱈目な、人外の動き——黒魔【メチエーリ】の連続起動による、高速三次元機動術。

帝国軍では【ラピッド・ストリーム】の連続起動による魔導技のことを、『疾風脚』と呼ばれている。

要は、自ら起こした風の爆発に、自ら吹っ飛ばされることを連続で行って高速移動するという実に馬鹿げた技である。

実際に空を飛べるわけではなく、燃費は最悪中の最悪、小回りも利かず、屋内では使用不可能だが、こういった建物みたいな足場が多く密集し、かつ開けた地形における機動力は単なる身体能力の強化による機動力を遥かに上回るという。

その分、制御を誤れば、たちどころに壁に激突したり、その勢いで地面に磨り下ろされたりなどして即死するのだが。

【ラピッド・ストリーム】を完コピした【メチエーリ】でも、当然、『疾風脚』のような高速移動は可能なわけだ。

「な、ナーシャ……ちょよ、ちょよと……ひゃあッ!？」

あまりにも出鱈目な機動にルミアがしがみつく中、アナスタシアはバランスを崩すこ

となく、ビィエルの下へ向かう。

再開発地区のあちこちで帝政派と独立派の戦闘と……同じく再開発地区のどこかで戦闘が発生している中、アナスタシアは迷うことなく、ビィエルの所へ向かう。

「ねえ、ナーシャ、これから何するつもりなの!？」

激流の中、ルミアはアナスタシアへ声を張り上げる。

「私達、戦うんでしょ!?! でないと、切り抜けられないって……どうして、ビィエルの所へ——」

「あそこの戦闘はヤチェク達に任せるわ」

そうは言っても、再開発地区での戦闘区域からはアナスタシア達はもう、かなりの距離が開いてしまっている。

ビィエルが旋回している区域には誰もいないはずなのだ——

やがて、ビィエルの下へ辿り着いたアナスタシアは、平面状の屋根の上で止まり、ルミアを下ろす。

「ナーシャ?」

「……そろそろ、来るわ」

怪訝そうにするルミアに、アナスタシアが人差し指を口に当てた、その時。

眼下の道路——二十メートルほど奥の曲がり角から、一組の集団が現れた。

「え？」

「はは、予想通り……ッ！」

その集団と先頭にいる男に、ルミアは見覚えがあった。

その集団と先頭の男は——独立派とマルトラールだったのだ。

時折、後ろを振り返りながら足早に去っていくその様から見るに——マルトラールは再開発地区から逃れ、行方をくまますようだった。

「嘘……ッ！」

あの部屋から脱出する時は、マルトラールはそこにいた。

当然、その後のマルトラールの行動なぞルミアとアナスタシアは知らないし、逃走を始めたとしても、どこにいるのか見つけるなんて時間がかかる。少なくとも、迷いなくこの場所に向かうことはない。

だが、現に二人の眼下にはあの最悪のテロリストがいたのだ。

「どうしてわかったの!?! こっちに來ることを……ッ!?!」

「あの男はね、あんなにご高説ぶっているくせにかなりの小心者なのよ」

「——ッ!?!」

「自らは絶対に手を下ささない。汚いものは部下に押し付け、成功したら自分の手柄、失敗したらその部下に押し付け、処刑する。現に貴女を連れ去って拷問にかけようとした

時、私達を殺そうとした時、あの男は部下にやらせようとしたでしょ？そして、自分の身の危険が迫ると、我先にと逃げる」

「で、でも……ここに来るなんて、ピンポイントで予想なんか——」

「そうよ。だから、もしかしてと思って時々下を見ていたら、要所要所にヤチエクが部下に配置につかせていたのよ。御自分の身体に傷が付きたくないし、一人だと心細いマルトラールがここに来るように仕向けるためにね。ビエルはその目印よ。どう、ルミア？私達、意外と優秀でしょ？」

ルミアはもう、ただただ、驚愕するしかない。

本来、こんな作戦なんて事前に打ち合わせてはいないのだろう。そもそも、独立派がルミアにも目を付けていたなんて、アナスタシアも知らなかったのだから、当然、今までの展開は予想外の中の予想外なのだから、なおさらである。

だが、アナスタシア達はそんな状況でも、敵を追い詰めていた。それぞれの考えで動き、相手を追い詰めていたのだ。

これはもう相手を信じているというよりも、一種の以心伝心の領域に近いものだ。

「そして……ここでも実に気が利いているよね、ホント。優秀な部下を持つと色々と楽だわ」

対するアナスタシアは、この展開を読んでいて、待ち望んでいたといわんばかりに。

指笛を吹き、甲高く、辺りに響き渡らせた瞬間。

マルトラールが率いる独立派の左右の建物の窓から複数の発砲音が一齐に響き、銃弾が独立派に容赦なく襲いかかった。

突然の待ち伏せ攻撃に、独立派は混乱に陥り、マルトラールも足を止める。

その隙を突くように、アナスタシアは屋上から飛び降りるのであった。

「ナーシャ!？」

屋上に取り残されたルミアに見向きもせず、アナスタシアは眼下にある道路に降り立ち、氷剣を錬成する。

そして、そのまま脱兎のごとく、マルトラールとの距離を縮める。

マルトラールは混乱を極めた戦場から離脱しようと、逃げ出そうと振り返るが、そこには氷剣を構えたアナスタシアが急速に距離を縮めてくるところであった。

「——ッ!」

二十、十五、十——

アナスタシアが距離を詰める。詰める。詰める。

「く——ッ!」

慌てて、懐から回転弾倉式拳銃を取り出す。

たかが、一瞬。……一足。

されど、一瞬。……二足。

その一瞬で——三足。

アナスタシアは、マルトラールとの一足一打の間合いに飛び込んでいた——

「終わりよ」

「ちい——ッ！この——ッ！」

半瞬、遅れて、撃鉄に指をかける。

照準をアナスタシアに向け——引き金を引き発砲する——

だが、それよりも、ほんの一瞬だけ速く——

「地獄に墜ちろお——ッ！」

ここまで駆け抜けた運動量と、あらゆる激情を乗せて——アナスタシアの氷剣が——
空気を引き裂き、マルトラールの心臓を——刺し、貫く。

「が————ッ!?!」

その衝撃で銃が手から離れ、身体が浮く。

その勢いのまま、アナスタシアは止まらずに建物の壁にめがけて突進していき——マルトラールの身体から突き出ていた氷剣の切っ先を壁に突き刺す。

串刺しになり、宙に浮いたマルトラールはそのままがつくりと力を失っていき、項垂れる。もうすでに息絶えていた。

「……ふん……お似合いね。その姿……実に皮肉が利いているじゃない……」

アナスタシアから見て壁に突き刺されるその姿は、かつて部下に裏切られて十字架に磔にされ、神になったような姿。

そんなマルトラールの姿を前に……アナスタシアは思わず冷笑を禁じ得なかった。

「ナーシャー！」

建物で佇むアナスタシアの下へ、屋根から階段で下りて、建物から出たルミアが駆け寄った。

「……た、倒したの？」

串刺しになり息絶えているマルトラールを見ながら、ルミアはアナスタシアへ尋ねる。

「ええ、そのはず……」

アナスタシアが背後を振り返ると、残りの独立派の連中はヴィンペル部隊に始末されていた。

アナスタシアが、隊員の一人にマルトラールの検死をするように顎をしやくる。すぐさま隊員がマルトラールの下へ向かい、検死を始める。

「はあ、これで危険人物の一人が消え去った——」

狂人が一人消え去ったことを確信し、アナスタシアは肩の荷が幾分軽くなったと思つた——

——のだが。

「で、殿下ッ！この男はマルトラールではありません！影武者です！」

「……は？」

隊員から放たれた信じられない言葉に、アナスタシアは一瞬、自分の耳を疑う。

やがて半瞬遅れて隊員の言葉の意味を理解したアナスタシアは、マルトラールの所へ足早で向かう。

『マルトラール』のはずだった男の頭は——禿げており、隊員の手にはカツラが握られていた。

前情報によると、マルトラールの右頬には刺青が彫つてあり、この男にも同様の刺青があるのだが——

それをよく見ると、それは刺青ではなく、塗料で塗られていたものだった。

つまり……この男はマルトラールの影武者。本物のマルトラールはまんまと逃走に

成功したのだった。

「ちっ……くそが……ッ！」

まんまと逃してしまったことに、アナスタシアは舌打ちした。

「……一枚、敵が上手でしたな、姫」

「ええ、そうね……逃げ足は本当に一流ね、あのクソ野郎……ッ！」

広場の敵を掃討したのか、ヤチエクがいつの間にかアナスタシアの傍におり、ため息混じりにそう言う。

「……他の敵は？」

「広場の敵は全員始末しました。他の区画の敵もほぼ一掃したとの事。マルトラール本人は逃しましたが、フェジテで活動する純血派は壊滅したと言っても過言ではないでしょう」

「そう……フェジテの警備官は……そろそろ来てもおかしくないでしょうね」

「はい。独立派がエルミアナ王女を連れ去るのを目撃した者が複数、いたようでして……それに、この戦闘で通報した者もいるかもしれませんが」

となると、もう長居は無用である。

マルトラールを逃したのは痛い、今は警備官に見つかる前に撤収しなければならぬ。

「ヤチエク、撤収よ。貴方達は速やかに離脱して。警備官に見つからないように。独立派の死体は、時間がないからそのままでもいいわ。私は、ルミアを連れて離脱するから……二人にして」

「承知しました。では、姫、王女……私達はこれにて……」

ヤチエクが二人に頭を下げる。そして、ヴィンペル部隊を連れてすぐさまその場を去っていく。

十秒後には、そこにはアナスタシアとルミアしかいなかった。

nelik・m mend kolm (第四十三話)

辺りに訪れた静寂。

夕日も沈み、夜の帳が下り始めている中。

「……終わったの？」

ルミアが、ぼそりと問う。

「ええ、ひとまずは終わったわ」

「そう……」

「……そろそろ、行きましょう」

「うん……」

そして。

薄闇が入り混じり始めた黄昏の中。

誰もいない再開発地区を、アナスタシアとルミアは、歩く。

無言。

二人とも、しばらくの間、何も語らず、歩いていた。
……やがて。

延々と続く再開発地区も終わりに近付いた頃。

後、少して、いつものフェジテに、日常の世界に戻る……そんな時。

「ねえ……ルミア……」

ぼそりと、アナスタシアが不意に呟いた。

「私は本当に、貴女の傍にいて見守っていて……いいの？」

「……」

「東部の問題に、無関係であるはずの貴女を巻き込んで……他意がなかったとはいえ、その……」

そんなアナスタシアの言葉を塞ぐように……

「……いいよ」

ルミアが優しく言葉を重ね……立ち止まり、アナスタシアの顔をじつと見る。

「現に私が貴女の側にいるのが、答えじゃないかな……？」

「……そう」

それきり。

アナスタシアはもう、何も問わなかった。

アナスタシアは再び歩き出すが、その時、ほんの少しだけ、口元を笑みの形にしている……そんな気がした。

きっと、アナスタシアの問題はそう簡単に終わらないだろう。

マルトラールは逃亡し、フェジテにいる組織は壊滅状態になったが、彼がこれで諦めるとは思わないし、敵は彼だけではなく、彼女は他の独立派と革命政権と新皇帝派とも戦わなければならない。母親に捨てられたとはいえ、システイーナ達がおり、魔術競技祭で和解した母親がいる自分が、何か少しわかったように言った程度で簡単に解決する問題ではない。

だが、状況がどうあれ、行方不明だった従姉妹が本来の姿では短い時間になるが、自分の側にいてくれる……今は、それで十分だった。

(……ナーシャ……)

ふと、ルミアはアナスタシアの横顔を見る。

今日は、色々なことがありすぎた。システイーナとレオスの結婚騒動、アナスタシアと独立派との戦い、東部の内戦……そして……内戦で溢れ、帝国にも顔を出し始めた民族間の怨念の権化とも言うべきマルトラール。

考えなければいけないことが……色々ありすぎる。

ルミアが垣間見た東部の問題はあまりにも根深すぎる。

自分なら、この現実に向き合うことなど出来ず、逃げるだろう。

だが、アナスタシアはそんな現実には逃げずに、向き合っている。逃げようと思えば、少なくとも、亡命先はこの帝国にあるのにもかかわらず。茨の道を歩んでいる。

そんな、自分よりも過酷かもしれない従姉妹に……自分は何がしてやれることはあるのだろうか？

(……わからない。……でも、今は……この時だけは……)

彼女の側に、いよう。

この後、ナーシャが『サーシャ』になるまでは。

今だけは、この心地好い雰囲気を楽しむことにしよう。

短い時間だけど、この二人の時間を大切に。

今、この時だけは――

……

……

「さて……そろそろ、『サーシャ』にならないとね」

「そうだね。ねえ、ナーシャ。今日はありがとう……」

「……どういたしまして……はあ、それにしても、今回は皆にどう説明しようかしら……」

……。

……こうして。

フェジテでは、とある一人の人間が、天使の塵を使って引き起こした悪夢の事件は終わった。

天使の塵の餌食になった最終的な犠牲者数は、八十四人、さらに行方不明者多数。

これが、たった一人の人間が出した犠牲であることを考慮すれば、信じられないほど鬼畜かつ許されがたい悪魔の所業といえる。

ジャティスⅡロウファン。

一年余前、帝都で大惨劇を引き起こし、グレンに殺されたはずのその者の名は、まだ人々の記憶に新しい。

かの者の再来に、全てのフェジテ市民が恐怖に震撼し……残された遺族達は、やり場のない怒りと悲しみに咽ぶことになる。

レオスⅡクライトスもアルザーノ帝国魔術学院に派遣される前に、ジャティスに天使の塵を盛られ、犠牲者となった一人だった。

ジャティスはグレンを倒すために、グレンがレオスに決闘をふっかけるように仕向

け、システイーナを餌にしてグレンを誘き寄せたのがこの結婚騒動の真相であった。

もつとも、そんな真相が世間に公表されることはなく、ジャティスがレオスを操り、フィーベル家を掌握させ、クライトス家の財産を手中に収めるといふそれなりにわかりやすく、納得できる理由が捏造されたのたが。

グレンのほうも納得がいかなかったらしいが、クライトス家たつての願いで、ジャティスの企みを阻止するために、クライトス家がグレンに依頼し、システイーナを攫わせ、ジャティスを撃退し、クライトス家の名誉を守った……ということにされてしまった。

クライトス家が政府の報道機関を通して正式にそのような声明を世間に発表し、グレンに謝礼と勲章まで贈ったため、レオスとの一連の決闘騒動で地に落ちたグレンの名誉も回復、逆玉の輿目当ての最低男から一転、実は身を挺して生徒を守った教師の鑑だったと評価されるようになる。

一方で、ジャティスが引き起こした事件に便乗するように、東部諸国の独立派の過激な一派、エースティ国民会議純血派がフェジテで無差別テロを画策するという事件が発覚。

最近、頻発していた東部人を狙った無差別テロもこの組織によるものだと発覚。

旧帝国連合の内戦の影響が帝国にまで波及し始めたのを象徴するこの事件を、帝国全

土は身を持って知ることになる。

行方不明になっていたゾラン・チョシツチが、中央区の路地裏で遺体として発見。下手人が独立派だとわかったこの事件は魔術学院でも衝撃が走った。

そして、この事件にルミアも巻き込まれるが、すんでの所でサーシャが自身の身を賭して救出し、独立派の目を潜りながら脱出。なんとか事なきを得た。

最近、学院に来ていなかったサーシャが一体、どのようにしてこの件を察知したのかわ不明だが、とにかく、一人の女子生徒を自身の危険も顧みず助けた生徒として学院では評価されるようになる。

だが、サーシャにとっては評価されるようなこともなかった。

結局、これは自身の……東部諸国での問題でしかなく、それにルミアを巻き込んでしまったのだから。

グレンとサーシャは身に過ぎた評判を、複雑な気分で眺めるしかなかった。そして——ジャティスとマルトラールの事件から、幾ばくかの日々が過ぎ——

とある日のこと。

「すまん！遅刻した！てへぺろ☆」

何の悪びれた様子もなく、教室に姿を現わしたグレン。

「こらああああ——っ！」

当然のように、システイーナが猛然とグレンの下へ駆け寄って、叱り飛ばす。

「一体、何やってるんですか!?!もう授業時間半分以上過ぎちゃってるじゃない!」

「いやあくちよつと考えごとしてたら、つい……」

「最近はずつと遅刻しなかったのに、やつぱり先生は講師としての根本的な自覚が足りません!いいですか、講師たるものくどくどくど……」

そして、いつものように説教と言いつ合戦が始まって……

「まあまあ、システイ。そんなお小言ばかりしてると授業時間終わっちゃうよ……」

「けんか、よくない」

ルミアが仲裁に入り、リエルが眠たげにぼそりと言い……

「なんか……色々あったけど、いつもの光景だなあ……」

「そうですね。むしろ、なんかほっとしますわ」

「僕としては、少しは成長して欲しいところなんだけどね……」

そんな見慣れた光景に、カツシユやウエンディ、ギイブル……グレンのクラスの生徒達は皆、呆れ半分、苦笑いである。

「相も変わらず、やかましいなあ、あの二人は……」

そんな学友達と共に、サーシャも呆れ半分の苦笑いである。

そんな中、サーシャはふと物思う。

正直、任務でこの学院に来ているとはいえ、場違いなところだと思っていた。

今までやってきことを考えれば……特務分室にもグレン達にも自身の本当の姿を隠してまでルミアの護衛をやっているを考えれば……それは覆せない厳然たる事実のはずだ。

ただ……

「……どうしたの、ナーシャ？」

隣の席にいたルミアが誰にも聞こえないように、声をかける。

そんなルミアを、サーシャ（アナスタシア）はちらりと見て、そして――

「……改めてこれからもよろしくね。ルミア」

いつまでやってるんだと、グレンに対して口々に文句を生徒達が呟く中、サーシャはにと口元を緩め、ルミアにそっと耳打ちする。

「……はい。ふふっ」

ルミアが微笑んでそう返して。

そして、今日もいつものように、騒がしく授業が始まるのであった――

アルザーノ帝国・タウムの天文神殿

С о р а к Ч а т ы р ы (第四十四話)

ジャティスの天使の塵の事件と、マルトラールの無差別テロ未遂事件の後。

サーシヤは穏やかで、平和で、平凡で、ちよつと退屈な日々……戻っていた。

ドラマチックな展開なんてありえないけど、それだけに尊い日常の世界。

そんな優しい時間を、しばらく享受できる。

従姉妹に身バレしたが、皆といる時は護衛として、二人だけの時は従姉妹として接することができる。

そんなことを、ぼんやりと考えていた……そんな矢先。

——その事件は起こった。

アルザーノ帝国魔術学院、二年次生二組の教室にて。

授業前、教壇では異様な雰囲気醸し出されていた。

「……それで、ウチ達に何か言うことがあるんじゃないですか？」

ニコニコと微笑みながら、サーシャは目の前にいるグレンに問いかけていた。

微笑んでいるが、雰囲気は寒い。氷点下に達しているんじゃないかと思うくらいに寒い。

その寒さは、ルシタニアの奥地で猛威を振るい、ありとあらゆる生命を根こそぎ刈り取るかねない極寒の地の如しであった。

「え？ええ？な、なんのことかなあ……？ボク、言いたい事なんて、あ、あああああるわけわけ……そ、それよりもさ、寒いなあ……」

一方のグレンはしどろもどろにそう返すが、顔面中は脂汗がたらたらと垂らしまくっていた。

「え？？だつて、先輩は学院側から今回の遺跡調査を依頼されたんでしょ？でも、これつてえ、普通は第三階梯以上を取得した四年次生か修士学生以上から募集して編成するはずなんですけどねえ？なあんでえ、ウチらに限定しているんですかねえ？」

さらに冷気を放ち、グレンの顔をニコニコ顔で覗き込むサーシャ。

気のせいだろうか、教室の気温がさらに下がっているような……生徒達はそう感じながら、サーシャから放たれる雰囲気の気圧されている。

「い、いやあ……一応、一人前の魔術師と見なされる第三階梯を遺跡調査に動員すると、規定で雇用費が発生するからに決まって——じゃ、じゃじゃじゃなくてですねッ！ ていうか、寒いッ！」

あからさまに、ぎくりとして、グレンが寒さに凍え、震えながらしどろもどろに答える。

「……た、『タウムの天文神殿』なんて、た、探索危険度F級だろ!? せ、せつかく安全な遺跡なんだから、さつきも言ったように、お前らに見聞を広めてもらいたくてでな!?」
 いかにも、誤魔化したれ!と言わんばかりの雰囲気と理由だった。

「そ、そう!これは優しいグレン先生が、教師として、愛するお前達のためを思って開設する『遺跡探索調査実習』……そう、特別講座なのだっ!感謝せい!」

「《嘘つくな・この・バカ先輩が》ああああ——ッ!」

苦しい言い訳と共に、白々しい高笑い声を上げるグレンの顔にめがけて、サーシャは「シヨック・ボルト」を打ち込みまくる。

「ぎゃああああああああああああ——ッ!」

「本当は、魔術研究の定期報告論文を、まったく書いてなくて、クビになるのを逃れようとしているのと、どうせ金がないから人件費をケチってウチらから募集しようとしただけでしょうがあ!」

顔面に電撃を叩きこんだグレンの胸ぐらを掴んでうがーっ!とまくし立てる。なぜこのような事態になっているのか?

まず、グレンが颯爽と姿を現わした。

切れのある所作で教壇に立ったグレンは、なにやら熱弁を振るい始めた。

そして、『タウムの天文神殿』の遺跡調査に何人かを同行させようと言い始め、生徒達が反論しにくそうな言葉を並べる。

その後、サーシャが遅れて教室に入ってきた。

そして——現在に至る。以上。

そんな、グレンの核心をグツサリ突いてしまったサーシャの言葉を聞いて。

「く、くびですか!」

さっと顔を青ざめさせたルミアが、がたと立ち上がる。

「今の話、本当ですか!先生、本当に論文を執筆されてなかったんですか!」

その表情は今にも泣き出しそうで、見ていると心が痛むほどだ。

(や、やめて、ルミア……そんなに泣きそうな顔しないで……ッ!)

現に、ルミアのそんな顔を見たサーシャの冷気が段々と弱まっていた。

「あ、あつははははは——ッ!な、な、なんのことだが、ボクにはサパーリ!」

——あ、やつば書いてなかったのね、このままだとクビになるのね。

目を泳がせてキヨドるグレンの姿に、生徒達の誰もが呆れながら、そう確信した。

「はあ、自分の不始末を生徒に向けるなんて……しかも人件費削減のために……(医者でも送ろうかしら?)」

サーシャのため息と共に冷めた視線が、グレンに冷たく刺さる(そして、ぼそりと不穏なことを、素の状態——アナスタシアの時の口調で呟く)。

「な、何言っちゃってるの、サーシャ君!? よりにもよって教師という聖職者たるこのボクが、そんな教師の風上にも置けない下賤な真似すると思う!? トラスト・ミーツ!」

すっかり声が裏返った、説得力皆無なグレンの妄言が虚しく響く。

グレンの唐突な遺跡調査員募集の裏背景が見えてきた生徒達は、皆一様に顔を見合わせながら、どうしたものかと相談天国を形成し始めた。

「と、とにかくだ! 遺跡探索調査なんて、お前ら生徒には結構、レアな体験だろ!? 遺跡探索に限らず、魔術師ってのは案外フィールドワークが多いんだ! こういう野外に出る経験、積んでみて損はないと思うんだがな!?! な!?! な!?!」

グレンが必死に捲くし立てていく。

サーシャが冷めた視線をグレンに向ける。

「た、確かに遺跡探索調査は本来、危険がつきものだ。襲い掛かってくる魔獣、荒ぶる大自然の驚異、予想だにしない古代の罠に守護者……遺跡探索で死人が出ることだって珍

しいことじゃない。だから、決して参加を無理強いはしない！」

死人。その言葉に、ごくりと生徒達が息を呑む。

だが、サーシャはさらに冷たい視線を送る。観念性と圧をかける。

「だが、今回行くのは、あの『タウムの天文神殿』……繰り返すが探索危険度F級、超・初心者向けの遺跡だ！それを踏まえて、調査に行きたいというやつは——っというか、ああああああ——っ！もう！」

サーシャの圧力に根負けしたグレンが、ばっ！と、身を捻りながら天井高く跳躍し——

「どうか、この哀れでゴミくずな俺に力を貸してください、お願いします——っ！」

月面宙返りからの両手両膝額五点着地。

見事な固有魔術「ムーンサルト・ジャンピング土下座」が起動していた。

情けないグレンの姿に、クラス中の生徒達があきれ果てていた……その時である。

「どうか、お顔を上げてください、先生」

何の迷いもなく、ルミアが立ち上がっていた。

「……その遺跡調査、私にお手伝いさせてください」

胸元で手を組み、穏やかな笑みを浮かべ、まっすぐグレンを見つめている。

その佇まいはまるで聖女。後光が差しているかのような、神々しさだ。

「う……」

ルミアのそんな揺るぎない姿に、システイーナは挙げかけていた手を所在なさげに机の下で彷徨わせ……

「……て、天使……?」

「て、天使様だわ……」

グレンは土下座の体勢のまま、呆けたようにルミアを見つめ。

サーシャも、思わずアナスタシアの口調が出ている中、まるで崇めるかのようにルミアを見つめていた。

(な、ナーシャ……『サーシャ君』のまま、口調がナーシャになつてるよ……)

そんなサーシャ(中身はアナスタシア)に、ルミアは思わず辺りを見回すが、幸い誰もサーシャの口調に違和感を感じてはいなかった。

「ふっ……お前ならそう言ってくれると思つてたぜ……ま、わかつてたがな!」

やがて、しゅぼつと、得意げな顔で立ち上がり、もうこの太々しい態度である。

「はい。先生が良い論文が駆けるように、私、頑張りますね!……と言つても、素人の私がお役に立てることがあるのかどうかわかりませんけど……」

「ろ、論文? なつ、なんつのことだか、俺、サパーリわかんねーけど!」

ひとしきりキョドると、グレンは真摯な笑みをルミアに向ける。

「……役に立たないなんて、んなこたあねーよ？お前が得意としている法医呪文、野外に出るなら必須技能さ。つーか、ぶつちやけ言うと、生徒で調査隊を組むなら、ルミア、お前はどうしても来て欲しかったくらいだ。あんがとな」

「先生……」

そんなグレンのいつになく素直な言葉に、ルミアは嬉しそうにはにかんだ。

(……あの子ったら、本当にお人好しなんだから)

そんなルミアの様子を、サーシャはため息を吐き、そして。

「じゃあ、俺も行きますよ」

「よくわからないけど……わたしも行く」

サーシャと、のそりと立ち上がった小柄な少女——リエルの護衛二人組も続く。

「だって、わたしはグレンの剣だし。任せて。グレンとルミアはわたしが守る」

「まあ、万が一にも何かあったら先輩とルミアだけじゃ不安ですし、一応露払い役はいるでしょ？」

いつものように眠たげな無表情で、何の感慨もなく、機械的にそう宣言するリエルと仕方なくそう言うサーシャ（もつとも、ルミアが行くという時点でサーシャも自動的にそうなるのだが）。

「お、お前らなあ……まあ、いいや。前衛戦力としてのお前らは申し分ない……今回、そ

の力はいらんとは思うが……ま、頼りにしてるぜ？二人とも」

「ん」

立て続けのルミアとサーシャとリエルの参加表明に（任務の関係上、自動的にそうなる）、「ああ、やつぱりね……」「あの三人なら参加するだろうな……」という空気が、クラス中に漂い始めた。

そんな空気を他所に、サーシャはグレンの元からルミアの隣の席へ戻って着席し、そつとルミアに耳打ちする。

「……貴女って、本当にお人好しなんだから。お陰で私も行くことになったじゃない」

「そう言ってるけど、ナーシャだっけかなりのお人好しだと思っただけ先生を心配していたらしいから」

「……なわけないでしょ。ただ、軍時代からの付き合いが長いだけよ」

耳打ちで返してくるルミアの言葉に、サーシャ（アナスタシア）はそう言っただけ息を吐く。

そして、ルミアは隣のシステイーナにそつと耳打ちする。

「ほら、システイも早く」

「う、うん……わかってる……けど……むむむ……」

「システイ？」

だが、システイーナはなぜか、不機嫌そうな、悔しそうな、複雑な表情で押し黙ってしまっており、一向に参加に名乗りを上げる気配を見せない。

そんな親友を前に、ルミアは不思議そうに小首を傾げ――

「あ……これ、あれだ……拗ねてらっしゃるわ」

システイーナの今の状態を察したサーシャは、そう言うのであった。

С о р а к П я ц ь (第四十五話)

——この時。

サーシャは、システイーナが子供つぼく拗ねていることに気付いた。グレンに対して何か言いたいことがあるのも気付いていたが、それ以上にグレンに言つて欲しいことがあつたのだろう。

要は、システイーナは、ヤキモチを焼いていたのである。

『ルミア、お前はどうしても来て欲しかったくらいだ』

『ま、頼りにしてゐるぜ？リィエル』

確かにわからなくもない。ルミアとリィエルは、あの根性三回転半捻くれ講師にそこまで言わたのだから。素直じゃないグレンの性格を鑑みれば、これは物凄い信頼度だと言える。

別に、ルミアとリィエルの技能や能力を考えれば、おかしくもなんともない。

ルミアの法医呪文はちよつとしたプロの法医師並で、中身が皇女でも現役の軍人でも

あるサーシャもこの分野は敵わないほどだし、同じく現役の帝国軍魔導士たるリエルの戦闘能力は猪突猛進の脳筋とは言え、超一級品だ。

危険があるかもしれない野外の遺跡探索という枠組みにおいては、クラスの生徒達の中で、グレンが真つ先に二人を頼るのは至極当然のことだ。

当然、サーシャも現役の帝国軍魔導士。ルミアの護衛任務もさることながら、万が一を考えれば、サーシャとリエルの二人がいるだけでも探索か捗るのは間違いないことだろう。

では、システイーナは？というところ……

結論から言うと、今回の遺跡探索ではシステイーナは必須の存在と言っても過言ではなかった。何せ、このクラス——いや、学院の中でも彼女は一番、魔導考古学に詳しいのは間違いないのだから。

それに、これはグレンから聞いた話だが、先日、フェジテで騒動を起こし、再び表舞台に現れたジャティスという真正銘の狂人をグレンと一緒に撃退したのだ。

グレンと一緒にだったとはいえあの狂人と戦い、撃退したという事実にはサーシャも驚きも隠せなかったが……まあ、なにはともあれ、今回の遺跡探索にはシステイーナは必須である。

恐らく、グレンもそのことを考えているだろうし、後はシステイーナが手を挙げれば

いいのだが……

(絶対、見栄とか意地とかが邪魔してるよな、これ……)

システイーナの本音が、この遺跡探索に是非とも参加したいというのは『タウムの天
文神殿』という言葉にかなり反応していたから、サーシャにも十分伝わっていたのだが、
システイーナのなけなしのプライドと微かな嫉妬、グレンに対して素直になれない気質
が本音を邪魔しているようだった。

参加はしたいが、ルミアやリエルと違って、ぞんざいに扱われるのは、嫌なのだろ
う(実際は、ありえなくも……ないだろうが)。

眉根を寄せて、むむむ……と考え込むシステイーナを見て、そう思うサーシャ。

「えーと、他に誰か参加希望者いないかー?」

教壇上では、グレンが生徒達に呼びかけ続けている。

ほんの一瞬だけ、グレンがちらりとシステイーナを流し見たが……頭を押さえて思索
に耽るシステイーナは、結局、その視線には気付かなかった。

そして、何を思いついたのか、ぱあっと表情を明るくするシステイーナ。

恐らく、いかに自分の面目を潰さないようにして参加を表明しようと考えて、思いつ
いたのだろうが――

「なら、僕も参加させてもらいましょうかね」

システイーナに先んじて、誰かがそう宣言する。

なんと意外なことに、その声の主はギイブルだった。

出鼻をくじかれたシステイーナの首が、かくんと傾く。

「僕は先生の進退になど、まったく興味ありませんが。でも、野外の遺跡調査への参加経験は、実戦経験と同じく経歴にハクが付きまますから。将来の進路選択の際に有利……もつとも、F級なんて大した肩書きにもなりません……ま、参加してあげましょう」
そう言うギイブルを他所に、システイーナは思わず頭を抱えてがたーん、と机に突っ伏した。

ギイブルに同じような理由を、先に使われてしまったのだろう。

(……普通に、参加表明すればいいのに……)

そんなシステイーナをジト目で見るサーシャ。

そんなシステイーナを他所に、ギイブルの参加表明に触発された生徒達が次々と手を挙げ始める。

「先生っ！俺！俺！俺を連れて行ってくださいっ！俺、遺跡探索とか、そういう冒険に憧れていたんです！な、セシル！お前も一緒に行こうぜ！」

「そうだね。古代の遺跡には僕も将来、学者を目指す身として興味があるよ。僕とカッシユも参加してよろしいでしょうか？」

「おいおい、お前ら遊びに行くんじゃないんだぞ？まあいい、助かる」

大柄なカツシユと、細面の読書少年セシルが参加を表明し……

「あつ……あの……先生……わ、私も……」

「うふふ……私も参加させてさせてくださいいな、先生？」

小動物的な雰囲気のパニーテール眼鏡つ娘リンと、モデル顔負けのプロポーションを誇る美少女テレサレレイデイも手を挙げる。

素直にグレンが先生でいてほしいと思ひ、そのために参加するリンと、実家が有力商会で、グレンが断れる状況にないところを上手く突いて、物資を採算度外視で融通。学院とのコネと取引実績を作るといふ目的で参加するテレサ。

まあ、どんな目的があるにせよ、これで八人。

その度に頭を抱えてうめくシステイーナに、ジト目で見るサーシャ。いや、もう普通に言えよ。

そして。

「あー、そうそう、残りの一人なんだが……これは俺の中でもう決まってるんだ」

「なっ——」

突然のグレンの宣言に、システイーナが愕然として硬直する。

(……？誰なんだろう？)

サーシャも、グレンの方に視線を向ける。

「実はな……その残りの一人、俺から頭を下げてでも同行を頼みたいやつなんだよ」
グレンがそんなことを言つて、システイーナの方を向いた。

「……お？」

サーシャはまさかと思ひ、システイーナの方に振り向くが……

(……いや、待てよ?)

ふと、サーシャはグレンが頭を下げてでも同行させたい生徒がシステイーナではない
と思ひ始めた。

遺跡探索になると、システイーナの魔導考古学の知見も必要といえど必要なのだが
……同時に、遺跡内の碑文の解読も重要になる。

(そーいや、このクラスに暗号解読系の魔術が得意な生徒がいたような……)

まさかと思ひ、サーシャがシステイーナの五つ後方の席に腰かけていたある女子生徒
の方を振り向くと――

「ウエンデイ。最後の一人はお前だ。頼む、同行してくれないか？」

案の定、ウエンデイさんでした。

がたんツ!

一方のシステイーナは、脱力のあまり、額を机に打ちつけてしまっていた。

(いや、だから普通に言えば良かったんでしょ?!)

そんな、サーシャがシステイーナに心の中で突っ込む一方。

「どうして高貴なわたくしが、そのような辺鄙な場所へ行かなくてはならなくて?」

ウエンディは、頬杖をついてあきつてを向いており、露骨に嫌そうにしていた。

うん、わかるわかる。なんで超高貴な血筋を持つ私も行かなくっちゃならないんだろ? ルミアが行くと言ったからです。ですが、決して、ルミアのせいにはしません。私が行くと言ったのですルミアのせいにはしません(早口)。

「論文を書くために遺跡内の碑文を再解読したい。ひよつとしたら、今までとは違う解釈があるかもしれん。暗号解読系の魔術に関しては天才的なお前の力が必要だ」

「……………」

何か物思うところがあるのか、押し黙るウエンディ。

グレンが両手を合わせ、ぺこぺこ頭を下げる姿を見たウエンディは、やがて嘆息一つ。

「……………はあ……………仕方ありませんわね……………」

洩々といった感じで、グレンに応じていた。

「時に見聞を広めることも民草の上に立つ貴族の務め、時に赤き血の求めに應えることも青き血たる者の義務……………気は進みませんが、わたくしも同行いたしますわ」

うん、わかるわかる。私も皇女だからね、赤き血の求めに應えないとね。赤き血?(ル

ミアを見て）いいえ思っくそ青き血の少女が行くからこそ私も行くことになったのです
反省はしてません（早口）。

そんな感じで、サーシャは再びシステイーナに視線を戻すのだが。

「……………」

システイーナは動かない。しゃべらない。まるで石像のように固まっていらつしやる。

「システイ、どうして……？あんなに遺跡調査に行きたがってたのに……」

「システイーナ？……ん、固まつてる。……変なの」

ルミアの心配そうな声も、リエルのまるで他人事な声も、システイーナには届いていない。

まあ、グレンからの募集背景がどうであれ、この千載一隅のチャンスをつまらな
意地と見栄で間抜けに零し落としてしまったのだから無理もない話であった。

周囲の生徒達も『ルミアとリエルが参加するのに、どうしてシステイーナは参加し
なかつたのだろう？』……そんな疑問を顔にありありと浮かべ、戸惑っている。

サーシャは、ルミアの肩につんつんと指をつつき、そつと耳打ちする。

「ナーシャ？」

「ルミア。システイーナは実は……」

「ごによごによと耳打ちするサーシャ。

「……あく、そうなんだね……あはは……」

サーシャから一通り聞いたルミアは苦笑いするのであった。

「これで調査隊の参加メンバーは決定だ！皆、協力、マジで感謝するぜ！詳しい日程と準備については、後のミーティングで！」

何やら高説していたウエンディからさりげなく逃れたグレンが、再び教壇の上に立つてそう言った、その時である。

「……ん？」

ふらふらと。

まるで夢遊病者のように、システイーナがグレンのもとへ歩み寄っていく。

「な、なんだよ、白猫……さては論文書くのサボったことに対する説教だな!？」

自分の前に立ったシステイーナに対し、思わずグレンが身構え、後ずさる。

「ち、違うつ！あれは違うんだ、白猫っ！し、強いて言うなら時代のせい——」
が。

「……うう……あう……あう……あう……」

「……？」

「その、あの、その、あの、その、あの……」

システイーナは涙目で口をぱくぱくさせているだけだ。何かを訴えかけるような懸命な表情だが……その口から具体的に意味を持った言葉が紡がれることはない。

「……………う、うう……………ッ！むう……………ッ！ふう——ッ！」

「い、いや……………マジでなんなんだ……………？怖いぞ、お前……………」

怒ったように、拗ねたように唸るシステイーナ。

まるで敵を威嚇する猫のようなその仕草に、流石のグレンもちよつと引き気味だ。

システイーナの後方で苦笑いしているルミアとサーシャが、システイーナの本音を同時に手話（魔術師の必修技能の一つ）で表現し（しかも一挙手一投足が見事にシンクロしている）、ルミアはグレンへ手を合わせて、ぺこぺこ頭を下げた。

「……………ああ……………そういうこと？いや、俺はてつきり……………」

それで、ようやく察したグレンが頭をかきながら、呆れたような安堵したような顔で、ため息を一つ吐く。

そして、皆の前で堂々と宣言する。

「つーわけで、だ。調査隊に参加する生徒達のリーダー役、お前に任せたぞ？白猫」

「……………えっ？」

その瞬間、きよとんつと目を見開くシステイーナ。

そんなシステイーナに、グレンが当然とばかりに言葉を畳みかける。

「いや、お前は連れていくに決まってるだろ？つーか、首に縄をかけて引きずつてでも連れて行くぞ？実は最初からそのつもりだったんだ……うん」

「どっ……どうして、私を……？」

「え、えーと……だつて、俺、やつは魔導考古学そのものに関してはお素人だし……なんつーか……相談役つーか、専門家が居るだろ？お前、古代マニアだし」

「せ、専門家……私が……？」

「ま、とにかく、お前だけは担当講師権限で強制参加だ。お前の意思など知らん。拒否れば単位落としてやるぜ、くつくつく……」

いかに悪役風に笑うグレン。

「な……なんて人なの！」

だが、まるで幽霊のように生気がなかったシステイーナの瞳に、力が戻っていく。

「単位を盾にして生徒に同行を強いるなんて最低！す、素直に頼めないわけ！」

「悪いなあ。俺、そんな殊勝な性格じゃねーんだ。知ってたんだろ？」

「うう……、……し、仕方ないわね！今回だけですよ！今回だけ！こんな横暴がいつまでも続くんなんて思わないでくださいね！?そもそも、この度、こんな事態に陥ったのは、先生の普段からの怠惰な勤務態度が原因であつて——」

システイーナは怒ったようにまくし立て、いつものように説教へと繋がっていく。

だが、その浮き足立った様子は、誰がどこからどう見ても、遺跡調査に参加できることが、嬉しくて嬉しくて仕方ない……といった雰囲気であった。

((やれやれ、面倒臭い子だなあ……))

その時、グレンを含め、クラス全員の胸中が見事に一致したのであった。

С о р а к Ш э с ц ь (第四十六話)

それから——一週間。

通常授業をいつも通り進める傍ら、遺跡調査計画の立案、スケジュールの調整、必要物資の手配、参加生徒達を集めてのミーティング、生徒達への野外活動時における生存術の指導……出発前にやるべきことは山のようにあった。

そして、慌ただしく日は過ぎ——いよいよ、遺跡調査出発の日。

仄かな宵闇と朝霧のヴェールが包む早朝、グレン達は屋根上に二階席もある大型の貸し馬車に搭乗し、フェジテを発った。

「風が気持ちいいわね……」

「うん」

吹きさらしの二階席の一角に陣取ったシステイーナが、緩やかにそよぐ風に流れる髪をなで押さえながら、しみじみと呟き、その隣のルミアがにこにここと応じていた。

フェジテ城壁北門から外に出たシステイーナ達を迎えたのは、まず辺り一面に広がる

広大な農地、そして自然の息吹を感じさせる冷たく澄んだ空気であった。

馬車が北上するは、フェジテと帝都オルランドを結ぶアールグ街道。

その街道は、緩やかな起伏とカーブを繰り返しながら、はるか北北西先、地平線の彼方へと吸い込まれるように消えていく。街道の西には小高い丘が姿を連ね、東には鬱蒼と茂る森、さらにその先に延々と連なる荘厳な雪化粧連峰が見える。

火が上がると、空は抜けるように蒼く染まり、雲が穏やかに流れていった。

若草の青い匂いが鼻をくすぐり、空を舞う鳶が笛のように通る声で鳴く。

ちようど差し掛かったすぐそばの牧草地では、羊達がもしやもしやと草を食んでいる。

その長閑で牧歌的な風景は、見ているだけで心が洗われるようであった。

「やっぱり、たまには外出もいいものですわね……」

「うん……そう、だね……空気が美味しいね……」

同じく二階席に搭乗したウエンディとリンも、いつになくご機嫌そうだ。

「……羊。もこもこ。たくさんいる」

リエルは眼下の羊達がとても気になるらしい。ルミアの隣にちよこんと腰かけ、眠たげに細められた目で、じくつと穴が開くように羊を見つめていた。

そして、ルミアの向かい側に腰かけていたサーシャは、そんな景色には目もくれずに

複数枚の絵葉書を眺めていた。

絵葉書には街の景色が描かれている。街並みと辺り一面の銀世界が描かれていることから、少なくとも帝国のいずれの都市ではないことは確かであった。

「サーシャ……何、見ているの？」

「ん？ああ、これ？東部の主要な街並みが描かれた絵葉書。趣味なんよ、これを集めるのが」

羊を見飽きたのか、リエルがサーシャの隣にちよこんと腰かけ、サーシャの手に持っていた絵葉書を覗いていた。

サーシャは、リエルに一枚、見るか？という感じで手渡す。

その絵葉書は旧東セルフオード帝国連合の主要都市が描かれた絵葉書の中でも旧帝国連合の首都——冬都シリエーブリヤヌイグラード——通称、シリエブヌイで、サーシャの中でお気に入り一枚だった。

「……ん。綺麗な街並み」

「わあ、綺麗な街並み……これってもしかして、『北海の真珠』？」

「そうそう、『世界で最も美しい首都』と呼ばれる我が東部の首都でございますよ。その風景は絵葉書の中でしか今は見られないけど」

受け取った絵葉書を眺めるリエルに、ルミアが目を丸くして絵葉書を見つめる。

世界最北端に位置している首都である冬都は、北海に面しており、運河が縦横に巡るその美しい街並みから、『北海の真珠』『世界で最も美しい首都』の異名を持つ都市として世界中からも観光客が訪れていた。

もつとも、内戦が起きている現在には、観光は望めない。そもそも、革命が起きた地でもあるから、都市自体が破壊されているところもある。

このような美しい街並みは、内戦が終わって復興しない限りは絵葉書の中でしか見られないだろう。

「す、凄いわねえ……こんな綺麗な街があったなんて……」

『『北海の真珠』……噂では聞いていましたけど、この壮麗さ……きつと、現地に行ったら凄い景色が見られそうですわ……』

「うん……凄く、綺麗……それしか、思い浮かばないよ……」

絵葉書だけでも伝わる冬都の壮麗な街並みに、システイーナ達も感慨的に目を丸くしながら、見つめていた。

「ルシタニアって元々は東部諸国の中の一小国に過ぎなかつただけど、東に領土を拡張して東方諸国まで国境を接するようになったんだよね。そのせいで、例えばシリエブヌイかた極東の都市——ヴラジヴォストークまでだと、移動だけでもかなり時間がかかるから、こういう絵葉書は東部諸国内では凄く人気なんだよね」

「あ、そうか。大陸の北部を丸々領有したもんね、ルシタニアって」

帝国内での移動でも、フェジテから帝都オランダまで三、四日かかる。

レザリア王国、ルシタニア大公国のように広大な国土ではないアルザーノ帝国内でもこれぐらいの日数がかかるのだから、帝国よりも遥かに広いルシタニア国内での移動だけでもどれほどの日数が必要なのかは、行ったことのないシステイーナ達ですらも容易に想像出来てしまうのであった。

「ねえ、システイ。順調にいけば、日が沈む頃には遺跡に到着するんだよね?」

ひとしきり、東部のことを話した後、ルミアが今回のスケジュールを思い浮かべながら、システイーナに問う。

「そうよ。『タウムの天文神殿』って、結構、近場の遺跡なのよね……まあ、着くまでのんびりしましょう?」

システイーナはそう笑って応じ……やがて、何かを思い出しかのように、その笑顔を次第に渋面へと変えていく。

「それにしても……せつかくいい風景だつていうのに、先生達は……」

「下の階は今、ずっとテレサのターンになっているからねえ……」

階下の馬車内に引きこもる風情のない連中に、深いため息を吐くシステイーナに、サーシヤは絵葉書を眺めながら、下の階の様子をこうまとめるのであった。

現に馬車内では——

「どうだ、ハートのフラッシュだッ！」

「あらあら、うふふ……残念です、先生。私の手はフルハウス。私の勝ちですね？」

「ぎゃああああああああああ——っ!? うっそ、マジで!？」

「ぐっはっ!? このタイミングで!? テレサ、強っ!？」

グレンやサーシャを除く男子生徒一同は、紅一点テレサを交えてテーブルを囲み、ポーカーと呼ばれるトランプゲームの真っ最中であつたのだが——

「くっそーそんな馬鹿な……ッ! かつて帝国公営カジノにこの人ありと謳われた伝説の賭博師たるこの俺が……ッ!？」

テレサに為す術なくあしらわれているグレンが悔しげに頭を抱え——

「嘘だ……確率的に……統計的に……この展開はありえない……ッ!？」

ゲーム開始前、『ポーカーは運じゃありませんよ? 確率と統計が物を言う知的な数学ゲームですから(キリッ)』と眼鏡を押し上げて豪語していたギイブルも……顔を屈辱に歪め、脂汗を垂らし——

「……天運って、本当にあるんだなあ……あ、テレサ、メダルもう十枚貸して」

「さ、流石は富豪の娘だね……あ、僕も十枚」

完全にテレサの養分と化しているカツシユとセシルは、すでに諦めの境地であった。まあ、完全にずっとテレサのターンであった。

グレンにいたっては、イカサマを駆使してでも、テレサに勝てない。テレサがカードを何枚か適当に入れ替えると、決まってデカイ手を引き込むのである。

そして、グレンは次のゲームで帝国宮廷魔導士団時代、《隠者》のバーナードに教えてもらった(汚い)必殺技で、テレサに勝とうとするのだが……

「あら……?何か流れがよくありませんね……」

テレサは自分に配られた手札を見るなり、いきなり全部、捨て山に捨てた。

因みに、今、テレサが捨てた手は、グレンが罫として仕込んだフォアカード。ファイブカードには及ばないが、相当に強い手である。テレサはそれを迷いなく捨てた。

「先生、五枚くださいな」

何か恐ろしいことが起こる予感に震えながら、グレンがテレサに新しいカードを恐る恐る五枚配り……

「あらあら?ロイヤルストレートフラッシュユができてますね」

「ふっざけんなああああああああああああああああああああ——ッ!」

テレサがにこやかに広げたスペードの10、J、Q、K、A……ポーカー最強の手役

を前に、グレンは目を剥いてカードを頭上へ放り投げ、絶叫するのであった。完全に、ずっとテレサのターンであった。

(末恐ろしい娘……)

馬車内から響いてくる悲鳴に、サーシャはテレサの本物の天運・剛運に頬を引きつらせていた。

サイネリア島のピーチバレエで見せつけた、女性らしいワガママボディに、おっとりしてその実抜け目ない性格をしていて、そしてこの天性の強運の持ち主……

「……チート女学生テレサじゃん」

「え、えーと……サーシャさん……？ 貴方、絶対、邪な考え持っていたよね？ ね？」

「ま、まあ、間違つてはいない……とは思うんですけど……」

そんなテレサに対し思いついたことを口にしたサーシャに、システイーナは主にテレサのワガママスタイル——特に、テレサが持っている二つの山岳が頭に浮かび、ウエンディはこの当たらずとも遠からずなサーシャの一言に納得しかけるなど、両者はそれぞれの反応でサーシャを見るのであった。

С о р а қ С е м (第四十七話)

数日前――

フエジテ某所のアパートのある部屋に、一人の少女がベッドに腰かけており、通信魔導器で誰かと通話していた。

「……………やっぱり、そうだったのね」

通信相手から聞かされた少女――アナスタシアがため息を吐いた。

『はい……………先日のエースティ独立派による無差別テロで殺害された東部人の内、何名かが国家保安委員会の工作員であることが帝国政府に知られてしまいました』

「……………まあ、そうなるでしょうね」

通話相手――帝国保安局情報調査室長ボリス。

ボリスの口からは、先日まで頻発していた無差別テロでの犠牲者の中に国家保安委員会の工作員が含まれていたことを帝国政府に察知されたことを報告する内容であった。

独立派の犠牲になった工作員は、全員、政府機関の省庁に潜り込んでいた者達。

自国の政府機関に国家保安委員会——つまり、革命政権の人間が紛れ込んでいたということがわかれば、そのままじつとしていくはずもなく——

『発覚以降、既に何名かが帝国政府の“網”に引つかかりました。中には——我々の同胞も……』

「でしようね……彼らが素直に正統派の人間って明かせば情状酌量の余地はあるかもね」

やれやれ、とアナスタシアは肩を竦める。

帝政派は現在二つの派閥に割れている。第一皇女アナスタシアを擁立したい正統派と、生き残りの大貴族の中から新たな皇帝を擁立したい新皇帝派だ。

この二つの派閥は前者がアルザーノ帝国が、後者がレザリア王国から様々な支援を受けており、帝国と王国の代理戦争とまではいかないまでも、所々では両者の衝突が発生している。

そして……両者とも革命政権子飼いの諜報機関、国家保安委員会に人員を送り込んでいる。

要は、帝政派の人間だと明かしても、帝国が支援している正統派の人間ならばまだなんとかなるものの、王国から支援を受けている新皇帝派の人間ならば、生きてそこから出られるという保証はなかった。因みに、革命政権の人間ならば問答無用で封印され

る。

「貴方もヤチエクも……バレてはないでしょうね？」

『そこは御安心を。私達に政府の手は来てませんので』

「そう」

重要な二人がまだ割れていないという朗報に安堵するアナスタシアに、ボリスが淡々と告げる。

『しかし、ヤチエクからもたらした情報によりますと、どうやら、他の独立派も帝国に人員を送り込んでいるとのこと。それと、上層部も補充だけではなく、増員する方針を昨日決定したとのこと』

「さらに来るの？それに増員って……？」

『マルトラールが他の独立派にリークしたのでしよう。貴女が帝国の中に潜んでいることを。他の独立派がマルトラールの言葉を鵜呑みにしていないのか、少数とはいえ、様子を兼ねてか、フェジテに複数の人員を送り込んでいるのは確かです。上層部の増員も、独立派の動きに察知しての動きと見て違いありません』

「あれは、本当に誤算の誤算だったわ。まさか、ルミアにバレるなんて……いや、本人は確信を持っていたんじゃないんでしょうけど、私があんな反応をしたのが運の尽きだったね」

『フェジテにいる独立派はザスローン部隊に密かに始末させるように、一部フェジテへ派遣させます。革命派の方は、直接手を下すのはいささかマズいので、間接的にはなりませんか……』

「それで、いいわ。フェジテにいる純血派は全滅したし、他の連中もそこまでのことをする度胸はない。白昼堂々と学院を襲うことも、街中で騒ぎを起こす可能性は限りなく低いしね」

そして、アナスタシアは次の話題に移すのであった――

……。

……。

……。

ヒヒイイイイイイイインッ！

馬の、天高く嘶いた音に、サーシャは目を覚まし、意識が現在に還る。

そして、身を乗り出すと、馬車の前方と後方、森の茂みの中から、無数の黒影が飛び出してきた、馬車をあつという間に取り囲んでいた……

その影の正体は、サーシャも知っていた。

「なんで、シャドウ・ウルフが……」

今起きている状況を整理するために、辺りを見回すと……原因がわかった。

周囲は、馬車は鬱蒼と茂る森沿いに進んでいた。

要は、従来の街道ルートを大きく外れて進んでいたのだ。

「どうして？こうなってるのかなあ？」

馬車が十数匹のシャドウ・ウルフに囲まれている中、サーシャは御者台の方へ向かう。シャドウ・ウルフとは、鋭い爪と牙、らんらんと光る眼、読んで字のごとく影のように真黒な毛並みを持つ、狼型の魔獣だ。

森に生息する魔獣としては、決して珍しくない存在であるが——極めて危険な存在だ。

その鋭い爪牙の威力は言わずもがな、もつとも厄介なのは、人に真似できぬその圧倒的な敏捷性だ。攻性呪文にしろ、銃にしろ、並の腕では連中を捉えきれない。

「こんな場所に、こんな危険な魔獣が住み着いていたなんて聞いてない……御者さん、貴方、一体、どういうつもりなんですか……ッ!？」

「……………」

だが、対する御者は、こんな状況でも無言。馬が暴走しないようにきつく手綱を引くだけで……微動だにしなかった。

「くっ……ッ！」

齒噛みするシステイーナ。

「……………」

サーシャは、そんな無言な御者を少しばかりの殺意が籠った目で見下ろす。

この御者は一体、何を企んでいるのか？

天の智慧研究会の連中か？それともそれに通じている人物？

それとも……可能性は低いけど、マルトラールとは別の過激な独立派の連中か？

いずれにせよ、今はこの状況を切り抜けなくてはならない。

「これは、マズいね……」

サーシャは、シャドウ・ウルフ達を見ながら難しい顔をしていた。

シャドウ・ウルフは魔獣だ。

『魔』という名を冠するだけあって、ただの獣ではない特殊な能力を持っている。

その能力とは——『恐怖察知』。

シャドウ・ウルフ達は、標的が自分達に対して抱く恐怖の感情を敏感に察知する能力を持っている。その恐怖で、標的が自分達の襲ってよい獲物かどうか判断するのだ。

逆に言えば——シャドウ・ウルフ達に対して、恐怖を持っていなければ、切り抜けるのは容易なのだ。

だが、サーシャはシャドウ・ウルフ達との戦闘は避けられないと確信していた。それは、二階席にいる面々を見ればわかる。

「皆、怖がっちゃだめよ！怖がったら——」

シャドウ・ウルフの能力を知っているのか、システイーナが警告の声を上げるが、もう遅い。

「あ、あ……う……ひい……魔獣……あんなにたくさん……ッ！」

「うう……ど、どうして、わたくしがこんな目に……ッ!？」

リンやウエンディなどは、すっかり青ざめてしまつて、震えている。

「まあ、そうなるだろうね。まだ魔術師の卵だし、温室育ちの子供……こんな魔獣に囲まれて平静に保てるのはそれなりに実戦経験のある軍人か、頭のおかしい人だけだね。

……システイーナは怖くない？」

「でしようね……私も怖いんだもの……」

現役の軍人であるサーシャは平然としているが、システイーナは緊張に暴れる心臓を深呼吸で乗りこなしている状態であつた。

非常に厄介なことになつてしまった。

シャドウ・ウルフは一度、獲物と狙い定めた存在に対しては非常に勇猛果敢で、退くことを知らない。こうなつたら攻性呪文を前にしても恐れない。

実際、システイーナ達の恐怖を察知したのか、目の前のシャドウ・ウルフ達は低く身構え、攻撃態勢だ。今や彼らにとつて自分達は格好の獲物であるらしい。遠巻きに、襲い掛かる好機を今か今かと待ち構えている。

「厳しいね……攻性呪文の弾幕を張ろうにも数が足りないし、一体、一体、狙っていたら他のやつとの接近を許しちゃうし」

比較的平静を保っているシステイーナを含め、ルミアと下の階にいるグレン達を含め、でも、少々心もとない。

「……システイ、大丈夫？」

「わ、私は大丈夫よ。それより、リエルは……？」

「ううん、駄目。さっきから揺すって呼びかけてるけど、目を覚ましてくれないよ……」
こんな時に一番頼りになる小柄な少女は、ルミアの膝を枕に丸まって、すっかり眠りこけている。

「こんな時でも起きないって……なんでなん？」

「多分、昨晚、私達と一緒に遊びに行くのが楽しみで眠れなかったって言ってたし」

「はあ……リエルが眠くなるような難しい話をしたのが、裏目に出たわね……」

思わずため息をついてしまうサーシャとシステイーナ。

システイーナがどんな難しい話をしていたにせよ、軍人やルミアの護衛としては失格

だ。ましてや、後方にいるはずのアルベルトは中央に呼び戻されており、しばらくはフエジテに戻ってくることはないのだからなおさら自分達がしつかりしないといけないのだ。

(どうしたものかねえ……)

サーシャは難しい顔をしていた。

手はないわけじゃない。あの槍——聖ジェルジオの槍をもつてすれば、この程度の魔獣は造作もない。

サイネリア島で遭遇した宝石獣のように、頭を潰してしまうこともできるし、なんなら服従させてこの先の露払い役として使うこともできる。

サーシャにとって、この程度の魔獣は大したことではないのだ。

では、なぜ難しい顔をしているのかというと、聖ジェルジオの槍を出すにはある条件じゃないと取り出せない。

それは、自身の正体——つまり、『サーシャ』ではなく『アナスタシア』としてじゃないと槍を出すことはできないのだ。『サーシャ』のままだと槍は取り出せないし、当然、シャドウ・ウルフ達を服従させることもできない。

ルミアには先の事件でバレてしまってるものの、革命政権と新皇帝派と独立派に狙われている現状、システイーナ達においてそれと正体を明かすわけにはいかなかった。

では、氷の人形を召喚する手段は？

(それが出来たとしても、召喚できるのは四、五体。それで、この数を捌くのは厳しい。一撃で相手を葬れるほど、シャドウ・ウルフもそこまで甘い相手じゃない)

リエルが起きていればまだ何とかなるが、サーシャとグレンだけじゃ、馬がやられる恐れがある。完全に怯んでしまっているウエンデイを除き、システイーナとギイブルならやれなくはないが……今の彼らの実力では、かなり手間取り、頼りにはなり難い。「馬車の中や上にいる限り、連中は私達には手を出せないけど……馬をやられたら身動き取れなくなっちゃう……なんとか馬を守りきらないと……」

難しい顔で、シャドウ・ウルフ達にシステイーナが狙いを定める。

いずれにせよ、シャドウ・ウルフ達をなんとかしない限り、前には進めない。

「とにかく、御者さんは、こちらに。後で、色々と聞きたいことがありますので。場合によつては……力づくでもその口を開かせますんで、お覚悟を……」

氷剣を錬成するサーシャの口から出る、聞いた者を凍えさせるかのような冷たい声に、隣にいたシステイーナは思わず一步、後ずさる。

と、その時だ。

「待ていッ！てめえらッ！」

ばんっ！馬車の窓が、大音響を立てて開いた。

ようやく外の様子に気付いた、我らがグレン先生のご登場である。

「この不届き者め！俺の生徒達に手を出そうたあ、いい度胸じゃねえかッ！」

威風堂々と腕を組んだグレンが、不敵にそう言い放ち――

「この俺が成敗してくれる――とうっ！」

窓のさんに足をかけ、跳躍、そのまま馬車の外へ飛び出し――

「――ふっ！」

前方宙返りにひねりを三回加え、華麗に着地を決めて――

ぐきり。

グレンの右足首から、変な音がした。

「……………」

グレンはそれから数秒間、華麗に着地を決めたポーズのまま、硬直して。

「ぎゃあああああああああ――っ!? 足、くじいたあああああああああ――

――っ!?」

そのまま、足首を両手で押さえて悲鳴を上げ、ゴロゴロと転げ回っていた。

「ひいひいひいぎゃあああああ!?! 痛すぎるううううう――ッ!?!」

「馬鹿なの、貴方!?!」

頭が痛くなり、同時に突っ込むサーシャとシステイーナ。

「何やってるんですか、先輩!」

「そ、そうですよ! っていうか、なんで舗装されてない場所に、そんな変な飛び降り方するのよ!?! 馬鹿なの!?!」

本つ当に肝心な時に頼りにならない講師である。

「システイ! サーシャ君! 大変! 先生が——」

「そ、そうだわ、まずいわ!」

ルミアの悲鳴に、システイナが気付く。

そう、自分達は安全だ——馬車の中や上にいる限りは。

だが、グレンは馬車の外に出してしまった。しかも、間拔けな負傷をして。

そんな隙を、シャドウ・ウルフ達が見逃すわけではない。

「グウルアアアアアア——ッ!」

それを好機と見た、三匹のシャドウ・ウルフが、馬や御者より先に、無防備に地面に転がるグレンを獲物と見定めて、一斉に駆け出した。

「くっ……ッ! 《雷精よ》——ッ!」

システイナが慌てて呪文を唱え、駆け寄ってくるシャドウ・ウルフを狙う。

だが、シャドウ・ウルフ達は、システイナが放つ雷閃などひらりとかわして、空を飛ぶように跳躍し——グレンを目がけて一気に肉薄する。

その鋭い爪牙が、蹲るグレンへと殺到し――

「せ、先生——ッ!？」

次の瞬間に広がるだろう最悪の光景に、システイーナが悲鳴を上げた……

まさに、その時。

「《罪深き我・逢魔の黄昏に独り・汝を偲ぶ》——」

不意に、システイーナの耳へ、そんな聞き覚えのない呪文が届いた。

その刹那、ひゅご、と御者台から旋風が吹き荒れて――

「ギャウウウウウンッ!」

「ギャンツ!」「ギャワン——ッ!？」

グレンに襲い掛かっていた三匹の魔獣が鮮血をまき散らし、空に吹き飛んでいた。

「……えっ?」

驚愕に目を見開くシステイーナ。

「……ん?」

見れば、けろつとした顔で背中に隠していた拳銃を抜きかけていたグレンの前に……

「……」

いつの間にか御者が、グレンを背にかばうように立っていた。

「……なあんだ、貴女だったんですか……」

御者が唱えた呪文に心当たりがあつたサーシャは、突然の反撃で硬直していた一匹のシャドウ・ウルフに対して、氷剣を投擲して始末し……

「……せっかく、先輩の即興の演技に付き合つてあげたのに……もう、ウチらの出番はないですな」

もう自分の出番は終わりといわんばかりに、サーシャは階下の馬車内に下りていくのであつた。

С о р а к В о с е м (第四十八話)

結局、あの後は、御者による一方的な虐殺となった。

鉄などと比べものにならないほど驚異的な剛性と韌性を兼ね備えた真銀ミスリルという魔法金属で鍛えられた片手半剣を手に持った御者による、一方的な虐殺。

馬車を取り囲んでいた魔獣の二匹を始末する。

その付近には、剣を振り抜いた御者の姿があり――

しかし、それもすでに残像で、その直後に別の場所から断末魔が上がる。

それはあまりの速さに、空気を裂く音すらしない無音の神速剣であった――

後は、その繰り返し。

次と。次と。また次と。

そして。

最後のしやどう・ウルフと御者が、地を交錯する雷のごとく、鋭くすれ違った。

刹那に振るわれた剣閃が、情け容赦なく魔獣の急所を捉える。

だが、本来一個の生物として、人より優れた存在たる魔獣の意地か、あるいは偶然か。その魔獣の爪牙が、すれ違う御者の外套を……びり、と裂いていた。

鮮血をまき散らし、どさり、と地面に前のめつて倒れ伏す最後のシャドウ・ウルフ。その一方で。

吹き抜ける風に翻られ、破れた外套が御者の身体を滑り落ちていき……

途端、フードの奥から眩い金髪がまびろ現れる。黄昏に燃え上がる麦穂のように燦然と輝くその髪が、風に乗ってさらりと棚引き、見る者の網膜を鮮烈に灼いた。

野暮つたい外套の下から現れた、黒いゴシックドレス。

その艶美で優美な曲線を描く御者の背格好には、見覚えがありすぎる、その正体は――

「あ……、あ、アルフォネア教授っ!?! どうしてこんな所に!?!」

「や。皆、元気かなー?」

一同を振り返りつた御者は――セリカⅡアルフォネアであった。

どういうわけか、雇った御者といつの間にか入れ替わっていたセリカ。

「悪いな。別にお前達を怖がらせるつもりはなかったんだ。ただ、『タウムの天文神殿』

へ向かうならこっちの方が近道だったんでね……魔獣がこの近辺に渡って来てたのも予想外だったし……すまん、すまん、余計なお節介だったな」

まったく悪びれもせず、そう言つてのけ……

「さて、唐突だが……私もついていってやるよ、グレン。私の力を貸してやる」

セリカは、なぜかグレン達にそのまま同行を申し出ていた。

「もちろん、私は何も口出ししないぞ？ 今回の探索隊の隊長はお前だ。私は隊長の指示に従う一人の隊員つて扱いでいい」

悪戯っぽく笑うその姿からは、その真意はまるで見えない。

「ま、腐つても枯れても、それなりに名高き第七階梯だ。……上手く使えよ？」

だが、追い返すわけにもいかず、むしろ今回の旅程における生徒達の安全面を考慮するならば、世界最強の魔術師たるセリカの同行は願つてもない話だ。

セリカの参加はそのまま、なし崩し的に決定してしまうのだが……

(まあ、こうなるよね……うん知つてた)

サーシャは、この展開がわかつていたとばかりに馬車内を見渡していた。

正午にさしかかることで日差しが強くなり、吹きさらしの二階席にいると余計な体力

を消耗してしまう……ということ、セリカと交代で御者台にいるグレンと側にいるルミアを除いての生徒一同は馬車内に集まっていた。

当然、セリカも馬車内の隅の席に腰かけたのだが……

(ど、どうしてアルフォネア教授ほどの御方が……?)

(あの生きた伝説が……俺達と一緒に……?ま、マジか……?)

(な、なんか緊張するよう……)

生徒達はセリカの席からなるべく離れた位置の席で固まって、縮こまっている。

(拝啓、お父様、お母様、お元気ですか?……今、馬車内の雰囲気は最悪です)

システイーナもそんな馬車内の様子に、ため息を吐いていた。

無理もない。確かに生徒達は、アルザーノ帝国魔術学院に、セリカⅡアルフォネアという大陸最高峰の魔術師が籍を置いているのは知っていたし、学院内でその姿を見かけたこともある。グレンとセリカが実は師弟関係であるという話も知っている。

だが、このセリカⅡアルフォネア。東部諸国でもその名が広まっている彼女には良くも悪くも様々な噂や逸話、伝説があるのだ。

近代魔術史の教科書に、度々名前が出てくるのは、まだ序の口。

曰く、二百年前の魔導大戦で邪神の眷属を殺した英雄、曰く、とある町一つ虐殺した殺戮者、曰く、帝国軍で戦略兵器扱いされていた《灰燼の魔女》、曰く、実は古代の魔

王の生まれ変わり——等々、枚挙に暇がない。

おまけに、学院で授業やクラスを受け持たないセリカは、ただでさえ生徒達とまともに言葉を交わす機会がほとんどない。その魔性の領域に達した美貌も、精緻すぎるがゆえに冷たさと硬質さを醸しだし、一種、近寄りがたい雰囲気を出している。

そんな、あまりにも雲の上の人物が、これから数日間、自分達と行動を共にするのだ。生徒達が緊張に身構えるのは当然であつた。

カツシユやギイブルらは女の子達の手前、男の意地で平然を装い、ウエンデイら女子生徒達とはかくセリカから距離を置いている。リンなどは怯えまくつてテレサの背中に隠れてしまつてゐる始末である。

何も背景がなかつたリイエルと違い、セリカに纏わる人離れた膨大な背景が、セリカと生徒達の間、図らずも大きな距離と溝を生み出している。

サーシャやルミア、システイーナ、リイエルなど、グレン繋がりで、セリカと面識がある生徒を除き、生徒達はセリカという規格外の存在に完全に委縮してしまつた。

「♪」

当の本人は、我関せずとばかりに、余裕の表情で本などを開いたりしているが。

「……アルフォニア教授」

さすがにこのままの空気で、目的地に向かうのはちよつと……と思つたサーシャがセ

リカに話しかける。

「教授はどうして今回の遺跡調査に？」

「……………ん？……………理由か？理由……………そうだな……………」

セリカは本に落としていた視線を外し、ちらちと前方へ向ける。

前方の小窓からグレンが馬車内の様子を覗き込んでいたような、気がした。

セリカは、しばらく前方を向いて……………ふつと穏やかに口元を緩め……………

「……………別に？……………なんとなく、だ」

再び本に視線を落としながら、そんなことを言った。

「なんとなく……………ですか？」

「そ。なんとなく、だ」

「そうですか……………」

どうも理由について話す気はないらしい。どこか拒絶の意志を感じた。

が、サーシャはこれがセリカⅡアルフォネアという人なんだろうと思いい、諦めて会話をそこで終了してしまった。

「え、ええーと……………」

せつかくこの空気がなんとなくかなると期待していたがすぐに終わってしまったので、システイーナは困ってしまう。

「そ、そうだ、教授！ちよつと聞きたいことがあるんですけど!」

「……………」

「さっきの魔獣退治の時なんですが、なんでわざわざ剣を使ったんですか？教授なら普通に攻性呪文を使えば、もつと簡単に……………」

「……………」いや、だって……………あの位置で私が攻性呪文ブツパしたら、お前達まで吹っ飛ばっちゃうじゃん？地形も霊脈も変わっちゃうだろうし……………」

何を誇ることもなく、さも当然、とばかりに言つてのけるセリカ。

「ただけなのよ……………頬を引きつらせながら、システイーナはさらに続ける。

「そ、それにしても、たった一人であれだけの敵を撃退しちゃうなんて……………凄いなーっ！憧れちゃうなーっ!」

「ははは、フィーベル。お前、私のこんな噂を知らないか?」

「え?」

「曰く……………セリカⅡアルフォネアは、たった一人で数万の敵国軍を皆殺しにした……………つてな?それと比べたら、あんな雑魚共……………くつくつく……………」

「え、……………ええー……………?そ、それは本当の話で……………?」

「……………さあ?どうだったかな……………?どっちだと思う?」

冗談とも本気ともつかない曖昧な返答で、悪戯っぽく笑うセリカ。

(う……逆効果だわ……)

システイーナは掌で顔を覆って、ため息をついた。

セリカのこの人を食ったような態度は別に珍しいものではなく、実にいつも通りだ。だが、今は拙い。今のやり取りを聞いた生徒達は、ますます萎縮してしまっている。

セリカに限っては、どんな馬鹿げた話でも『嘘』と断じきれないのだ。『本当』でもおかしくない……それだけの力が、セリカにはある。

セリカもそれを理解して、生徒達を脅かして楽しんでるような節がある。

「ふふっ……」

小悪魔的な笑みを浮かべ、セリカはちらちらと生徒達を流し見していた。

(この人……)

(も、もう……この人ったら……っ！)

あの弟子にして、この師匠あり。良くも悪くもセリカはグレンの師匠らしい。

さて、どうしたらいいものか……サーシャが呆れ、システイーナが辟易していると……

「……ん……う……セリカ……う」

ぼそりと、リエルの呟きが馬車内に漏れる。

見れば、馬車の座席の片隅で丸くなっていたリエルが身を起こし、眠たげにお目々

をこすっている。今、ようやく目覚め、セリカの存在に気付いたらしい。

「……いたの？セリカもくるの？」

リイエルは、ひよいひよいと器用に座席を乗り越えて移動し……

セリカの隣の席に、ちよこんと飛び乗り、セリカに顔を寄せた。

意外かもしれないが、なぜかりイエルはセリカに懐いている。

サーシャもだが、リイエルが帝国宮廷魔導士団に入団したときは、すでにセリカは退団していたので、二人は直接的な面識があつたわけではない。が、グレンを通してセリカと知り合つたリイエルは、以来、どういふことかセリカによく懐くようになった。

リイエル曰く『なんか、他人のような気がしない……よくわからないけど』とのこと。

「まあね。私も一緒に行くことにしたんだ。よろしくな？」

セリカは微笑みながら、リイエルの頭をくしゃくしゃと撫でた。

どうやらセリカも、リイエルに懐かれるのは満更でもないようである。

「……そう。……何を読んでいるの？」

早くもリイエルの興味は、セリカが開いている本へと移っていた。

「これか？これはな……『メルガリウスの魔法使い』っていう童話さ」

本を開いてリイエルに見せるセリカ。

リトグラフという技法によって四色印刷された挿絵はとうに色あせ、活字で印刷され

た文章は所々霞んでいる。童話と銘打つには文章量が多く、重厚な本だ。挿絵が多い小説と呼んでも差し支えないくらいである。

「ん？」左手に魔法を打ち消す赤い魔刀……右手に魂を喰らう黒い魔刀……夜天の乙女が課した十三の試練を乗り越えて……十三の命を得た、魔煌刃将アールⅡカーン？」
 リイエルが目を細めながら、眼前に開かれた本の内容を、たどたどしく読み上げる。

「ついに……魔王にすら……その刃を向けて……う？なに、これ？」
 「……『メルガリウスの魔法使い』の序章の山場だわ」

不意にシステイーナが口を挟む。

「いわゆる主人公の『正義の魔法使い』が登場するのは第二章から。それまでは魔王とその配下の魔将星達がいかにして魔王の下に集い、天空城を作ったか……という話ね。中でも魔将星が一柱、魔煌刃将アールⅡカーンは序盤の狂言回しの役割を担っているわ」

「ほう……詳しいみたいだな？」

セリカが感心したように、システイーナを流し見る。

「え？あ、はい……私達メルガリアンにとっては、この本も重要な研究資料ですから」

童話『メルガリウスの魔法使い』。

空に浮かぶ城を舞台に、正義の魔法使いが、人々を苦しめる悪い魔王をやっつけて、囚

われていた姫を助け、皆を笑顔にする……大体、そのような話である。

「これだけ聞くと完全に子供向けの話だが、作中には様々なミステリーや謎解きようそ、主人公の葛藤を描いた重厚なドラマがある。時に敵である魔王やその配下達にもスポットが当たり、群像劇のような体にもなっており、案外大人も楽しめる作りだ。

「これはただの童話じゃありません。帝国各地に残った伝説や民間伝承を集め、著者のロラン＝エルトリアが独自の解釈の下、編纂した古代神話大成でもありますから」
すると、セリカがくすりと笑い、本を掲げて見せる。

「これは子供の頃のグレンが好きだった本でな……今回の旅の道中の暇つぶしに、何か本をつて思つて書架をあさつたら、これが目に留まつてな……懐かしくて、つい」

「……えっ?」

セリカの言葉に、システイーナが目を瞬かせる。

「……いい、意外だわ。先生がそんなものを好んでいたなんて……魔術なんて人殺しの道具だくなんて豪語する先生なら、真つ先に下らないって言いそうなものですけど……」
「今はヒネちやつてな。確かに魔術は人殺しの道具という一面もあるが、決してそれだけじゃない……あいつも、腹の底ではわかっちゃいるんだらうが……」

(まあ、そうだろうなと思つていたけど……)

やれやれ、とセリカが苦笑し、肩を竦めて見せる中、サーシャは現役時代のグレンの

ことを思い出す。

今もそうなのだが、特務分室時代のグレンは、一言でいうなら“十を救う”だった。必要なら、九を救うために一を切り捨てるアルベルトや、どんな犠牲が出ても、それが効率的なら容赦なくやるイヴとは違い、十を救うために動いていたのが、あの時のグレンだった。

そんなグレンだから幼少期はきつと魔術が大好きで、『メルガリウスの魔法使い』などを読んで将来、正義の魔法使いになりたいという夢を持っていたであろうことは、容易に想像できた。

宮廷魔導士団時代に重なった不幸——一年余前のジャティスが引き起こした事件でのセラというグレンの唯一の理解者でもあり……恐らく、お互いに想い合っていたであろう女性の死が決定的となり、一時は生きる気力がなくなってしまうが……昔は純粋で真つ直ぐな子であったのだろう。何より、今も何かあれば、生徒たちのために身体を張っているのだから。

「——だからな……お前たちには、本当に感謝しているんだ」

サーシャがグレンのことで物思っている中、どうやらセリカは何事か——恐らく、グレンのことについて長々と生徒達に語っていたらしい。

複雑そうな表情をしていたセリカだが、不意に、自分に視線を集める生徒達を見直し

て、笑っていた。

黄金色に輝く麦畑を照らす、暖かい陽光のような笑みだ。冷たさなんて欠片もない。数々の悪辣なる噂や、信じがたい武勇を持つ女と……同一人物とは思えない。

そんなセリカの不意討ちに、息を？み、目をぱちくりさせて戸惑う生徒達。

「グレンのやつが、またああして元気にバカできるのも……きつと、お前達のおかげなんだろうな。私一人がべつたりと、あいつを囲つて、甘やかして、守つていても……あいつはきつと立ち直れなかつた……だから……ありがとうな」

この話はもう終わりだと言わんばかりに、セリカが再び本を開き、視線を落とす。

そのジエスチャーの通り、セリカはこれ以上、何も語らなかつた。

半開きの窓から、緩やかに風が吹き……セリカの豪華な髪が緩やかに棚引く。

そんなセリカの姿に、ウエンデイやリンら生徒達も、あるいはすでにセリカと面識がそれなりにあつたサーシャやシステイナーすらも、この時、悟つたのだ。

まるで、悪魔か魔人であるかのように、人々に語られ、噂され、畏れられるセリカ。なんていうことはない。

そんな彼女も自分達と同じ……ただの人間であつたのだ、と。

Сорак Дзевяць (第四十九話)

やがて、一行を乗せた馬車は、緩やかに起伏する草原を西へと進む。

そのまま、のんびりと馬車に揺られていき……

傾いた日が遠い山の稜線にさしかかる頃——その遺跡は、ついに一行の前に姿を現した。

仰げば、透き通る柘榴色のように暮れなずむ大空。

見渡せば、遙か遠くに美しく紅の差す連峰、その麓に広がる美しき湖の乱反射。

見下ろせば、黄昏色に燃え上がる広大な草原。

そんな絶景を仰望できる切り立った崖の縁……この一帯でもっとも空に近き高台に。

その神殿は……静かに鎮座していた。

「あれが……『タウムの天文神殿』か……」

石で造られた、巨大な半球状の本殿。周囲に並び立つ無数の柱。渦を巻くような不思議な幾何学模様、石で構成されたその壁面にびっしりと刻まれている。

独特な建築様式で造られたその神殿は、背後に背負う圧倒的な勝景に負けることなく、その確かな存在感を誇示しながら、そこに在った。

「……『タウムの天文神殿』……私……どうとう来たんだ……」

神殿をじつと見つめながら、システイーナが感慨深そうに呟いた。

システイーナに限らず、その偉容を魔の当たりにした生徒達は皆、例外なくその不思議な雰囲気と存在感に圧倒されている。

「……おいおい、お前ら。ぼおつとしてる場合じゃないぜ？」

そんな空気を破るように、グレンが手を打ち鳴らし、さつそく指示を飛ばす。

「本格的な調査は明日から、今日はここで野営だ。野郎共は天幕を張れ。リンとテレサは夕飯の準備を。セリカ、念のため野営場周辺に守護結界の敷設を頼む。白猫、ウエンディはその補佐だ。ルミアは馬の世話を。サーシャ、リエル、お前らは周囲を哨戒し、危険な魔獣がいなかどうか探れ、いたら遠慮なくやつつけていいからな？そして、俺は——」

てきぱきと卓越したリーダーシップを発揮し、指示を終えたグレンは、唐突に、ごろりとその場に横になる。

「……疲れたから、寝るわ……夕飯できたら起こしてね、ふあ……お休みい……」

「あ、先輩、ビィエルが突っ込んで来ますよ」

「《アンタも・何か・働きなさいよ》——っ！」

「ぎゃああああああああああああああああああああ——っ！」

サーシャがグレンに向けて指差しし、上空から急降下してきたビィエルがグレンを吹き飛ばし、システイーナが即興改変で唱えた黒魔〔ゲイル・ブロウ〕で追い打ちをかけるように吹き飛ばす。

「という訳で先輩、ビィエルの世話をお願いしますね〜?」

「《皆にばっか・働かせて・貴方っていう人は》——ッ!?!」

「痛い! 痛い! 突くなっ! ごめんなさいっ! すみませんっ! ちよつと調子に乗りました、ひいひいひいひいひい——っ!?! だから、突かないでええええええええええ——っ!?! 電撃も止めてええええええええええ——っ!?!」

その場は、たちまち大騒ぎとなる。

そんなグレン達を、セリカは愛おしそうに一瞥し、ふつと笑みを零して。

「……………」

改めて、タウムの天文神殿に向き直る。

「…………『タウムの天文神殿』…………こころならば、あるいは…………」

いつになく、思い詰めたような表情で。

セリカが、誰へともなく、そんな眩きを零していた。

——同時刻、某所にて。

『……来たのね、セリカ……』

塗り潰したかのような深淵の暗闇の中で。

その異形の者は、やはり誰へともなく、そんな眩きを零していた。

遺跡に到着した、次の日。

万が一の時のため、セシルやリンなど何人かの生徒を待機・連絡班として守護結界内の野営場に残し、グレンは早速、遺跡内へと足を踏み入れる。

グレンを先頭に、アーチ型の神殿入り口から遺跡内へ入ると、すぐに日の光は届かなくなり、視界は闇が支配的な暗黒の世界へと変貌した。

実はこの遺跡、巨大な一枚岩を掘削して形作る、という謎の建築様式で造られたものであり、外から日の光を取り入れる機構が何一つない。

ゆえに、先頭のグレンが指先に灯した黒魔【トーチ・ライト】……魔術の光を頼りに、一歩一歩少しずつ、遺跡内の通路を進んでいく。

そして、そんなグレン達を手荒く歓迎する者がいて——

「こ、こんなの聞いてませんわッ！ここは安全な遺跡なのでは——」

「いいから撃て！ほら、来たぞ!？」

「ああもう！今回、こんなのばっかりですわッ！」

通路の奥からグレン達を目掛け、人影が実体化したようなものやら羽を生やした小さな妖精のようなものやら人魂のようなものやらが、殺意マシマシで通路の奥から襲ってきたりしたり——

「ちい……っ！ええと、なんだっけ!？わ、《我は射手・原初の力よ——》……」

「ま、ま、まだ、《魔弾——》……」

そんな異形達——狂霊という文字通り妖精や精霊が狂化した存在の襲撃に慌てながら、生徒達は黒魔【マジック・バレット】という狂霊達に効果がある無属性系の攻性呪文を使って、詠唱がおぼつかないながらも撃退したり（システイーナだけ、やたらと冷静で【マジック・バレット】を矢継ぎ早に連唱していたが）——

システイーナ達が撃ちもらした狂霊達を、リエルが魔力付呪された大剣で……サーシャが詠唱した【マジック・バレット】で打ち落としたり（因みに、グレンは男性のわりに魔力操作の感覚が生まれつき乏しくて、無属性系呪文が苦手であった）——

最後は、セリカが生徒達を下がらせて自身が前に出て、数十発もの【マジック・バレット】を周囲に出現させるというアタマオカシイ技を生徒達に披露して、狂霊達を一瞬で

殲滅させたり——

え？セリカだけだったら、すぐに終わったんじゃない？と思いますでしょ？私も思いますが、でも、セリカが『生徒達に極力やらせてみよう』とか言ったから、生徒達にやらせてただけなんです。

まあ、学院じや戦闘訓練はできても実戦経験は積めないし、その一環として今回の狂霊はちようどいい相手ではあるし、合理的といえば合理的でもある。それに、いざという時に備えてセリカ、サーシャ、リエルがフオローに回っているから、そこまで心配することでもない。

その後は、時折、湧いて出てくる狂霊達と戦いながら、グレン達は遺跡内を進み、やがて第一祭儀場に着く。

その時、グレンの様子がおかしかったような気がしたが、生徒達は調査のためグレンの指示通りに動いていく。

そんな調査を一日、二日、三日……祭儀場、礼拝場、天文台、靈廟……と一日ごとに一つずつ同じ手法で調査していき……

そんな、単調ながらも、野営場に帰還したあの和やかな雰囲気のある遺跡調査から五

日目の真夜中。

しん、と骨にまで染みるような夜の寒気の中、サーシャはある地点にいた。

遺跡前の野営場から、北に少し歩いた岩山の陰には……

「はあく、やつと入れるわ〜」

サーシャの目の前に広々と現れたのは、岩に囲まれた天然の温泉であった。

微かに鼻を突く硫黄の匂い。含まれる鉱物で僅かな濁りを見せる湯の色。

なみなみと湛えられたその湯面からは大量の湯煙が上がり、周辺を白く霧がける。

この位置からでも仄かに感じる熱気が、夜の寒気に冷えた頬を優しく痺れさせた。

この天然温泉は、つい先日、セリカが発見したものだ。

セリカ曰く、この辺りは霊脈的に旧火山帯であり、探せばどこかにあるだろうなと

思つて探したら、案の定あつた……とのこと。

入浴に使うには湯温が少々高過ぎだったようだが、そこは流石セリカ。「氷のルーン」

を温泉に囲む岩に刻み、程よい湯温に調整してくれたらしい。

この功績により、セリカは、今まで濡れタオルで身体を拭いて済ますしかなかった女子生徒達（＋サーシャの姿をしていたアナスタシア）の信仰と崇拜の対象と化した。

「温泉を見つけてくれた教授には頭が上がりませんなあ……まあ、自分が入りたかつ

たつたのもあるでしょうけど」

いくら自由奔放な性格のセリカでも、女性だからなのか気にはしていたのだろうし、何よりこの気遣いは非常に助かる。

「さあて……誰もいないうちに、お風呂、お風呂♪……できれば、他の女の子達と一緒に入りたかったけど……それで、イチャイチャして……ふふふ……」

なんか冗談めいているようなそうでないような……なんともいえない軽口を叩きながら、口調がすでに素になつているサーシャ(アナスタシア)は岩陰で服を脱いでいく。
……ちなみに、先日。

『俺は覗くツ！楽園を目指すツ！たとえ、この命が燃え尽きようとも——ツ！』

と、熱く語るカツシユと、アナスタシアを除く生まれのままの姿となつた見た目麗しい少女達の間で、この温泉を戦場に壮絶なる魔導大戦が繰り広げられ……激戦の末、カツシユが無念の敗北を喫したのだが……それはまた別の話である。

「さて、と……」

脱いだ制服を岩陰に隠し、サーシャの姿を解いたアナスタシアは、いよいよ温泉の中に身を沈めていく。

「はあ〜、生き返るわ〜」

たちまち、心地良い熱がグレンの身体を包み込んでいく。

寒気で感覚が鈍った指先やつま先が、鈍い痛みを伴う痺れと共に蘇っていく。

巡りのよくなった血行が、凝り固まった肩や腰を解きほぐすような感覚。

連日の遺跡調査で溜まった疲労が、全身から溶け流れていくかのようであった。

「極楽、極楽〜♪」

見上げれば、無骨な岩山が縁取る夜空は、満天の星を湛えている。

流れる雲の中に恥じ入るように隠れる月もまた、風情があつて良い。

グレンとセリカのような大人ならば、これにブランデーでもあれば、実に最高のシチュエーションだと思うだろう。

「〜♪〜♪」

しばらくの間。アナスタシアは星空を眺め、鼻歌など歌いながら、入浴を楽しんでいた。

……やがて。

「……寂しい」

ふと、空を見上げながら、アナスタシアは誰へともなく、そんなことを呟いていた。無理もない。自分の血筋を考えればなおさらである。

幼い頃から周囲から持て囃され、アナスタシア自身もそれに浮かれていなかっただけではない。が、その一方で必ずしも本心で言っているわけではないということもわかっ

ていた。

幼い頃から共に学んできた同年の子も、どこか距離があつて……とにかく、亡き妹達などの家族以外で本心から接してきた者はいなかつたと思う。

(……あの子を除けば……)

湯の熱に当てられ、ほんの少しだけ胡乱になる意識の中、アナスタシアがそんなことを思っていると……

「……ん？」

温泉周辺に立ち並ぶ岩陰に、ふと、人の気配を感じた。

「……誰？」

身構えて、アナスタシアが誰何する。

「私だよ、ナーシャ」

すると、その人の気配が何の躊躇いもなく、アナスタシアが浸かる温泉の方へとやつてくる。

立ち上る湯煙をかき分けて姿を現したその人物は……

「……なんだ、ルミアか」

「ふふ……やっぱりいた」

ルミアであつた。

温泉の縁に立ったルミアは——一糸纏わぬ姿だった。

腕にかけられたタオルのカーテンや立ち上る大量の湯煙が、彼女の透き通るように艶やかな白肌を、申し訳程度には隠しているが……

十五、六の少女にしては成長している胸部と艶めかしいボディラインは……到底誤魔化しきれぬものではない。

ルミアの姿を確認したアナスタシアが、力を抜く。

「……どうしたの？もう寝たんじゃなくて？」

「そうなんだけど、ナーシャが温泉の方へ行くのを見たから、ね」

ルミアはくすりと笑って身を屈め、流麗なる脚線美を誇るおみ足を湯に入れ……そのまま温泉の中へとその身を沈めていく……

「それに……ナーシャがすごく寂しそうにしてるかもと思うと……一緒に入ろうかなって」

「私、お姉ちゃんだから寂しくないもん」

温泉の中に入ってきたルミアはぷいっとそう言うアナスタシアに微笑みながら、すいすいと寄っていく。

「……それに、ルミアってシステイーナ達と二度風呂してたでしょ？私、その後を見計らって来たのに」

「うん、そうなんだけどね……あはは」

「……………」

なぜか突然顔を真っ赤にするルミアに、アナスタシアは小首を傾げる。

実はアナスタシアが入る前に、グレンが入っていたのだが、セリカが入ってすぐさま出た後、ルミア達が温泉に入ったのだが。

先に入っていたグレンはなぜか潜ってやり過ごそうとするというありとあらゆる面で悪手な手段をとってしまったのだ。

その結果、どうなったか？当然、耐えられるはずがなくグレンは裸の少女達の前に姿を現し……システイーナがお空へかつ飛ばしましたとき。

まあ、そんなことはアナスタシアには知る由もなかったのだが。

そして、二人はそのまま、お互いに寄り添うように湯を楽しみ始める。

湯の熱以上に、互いに感じる互いの熱。息遣い。

さつきまでの女子同士の賑やかではないが、落ち着く二人の雰囲気。

語る言葉はいらない。穏やかに、優しい時間が、緩やかに流れていく……

ふと。

「それにしても……初めてだよね……ナーシャ……」

ルミアがそんなことを呟っていた。

「ん？」

「こうやって一緒にお風呂に入るのって今までなかったから……なんか新鮮だね」

「そりゃ、従姉妹とはいえ、生まれも育ちも住みも違う国だったし……皇女と王女だったしね、私達……」

「そうだね。五年前のあの時が初めてだったから……もう、そんなに時間が経ってたんだね……」

再び無言になる二人。

（そうなんだよね……私達って、五年前なんだよね。最初の出会いは……）」

五年程前、アルザーノ帝国と東セルフォード帝国連合との首脳会談で、まだ王女だったルミアがマリアベルとアナスタシアの部屋の中に入ってきた。

それが二人の最初の出会いだ。

それから、数ヶ月後に帝国連合が革命で崩壊し、以降はアナスタシアの消息が途絶えるが、現在は、二人きりの時だけアナスタシアとしてルミアと一緒にいる。

あの時、ルミアと過ごした日々はとても楽しかった。

話だけしか聞いていなかった従姉妹と初めて会ったのもそうなのだが、それよりも心の底から楽しめたのは……

「……貴女が初めてだったから」

「ナーシャ……?」

ふいにアナスタシアの口から零れた言葉に、ルミアが首を傾げる。

気付けば、いつもの強気な自信に満ちた少女の姿は、そこにはいなかった。

「私に心から接してきたのは貴女が初めてだったのよ。ルミア」

どこか、寂しそうにしていた、弱々しい少女の姿がそこにあつた。

「ねえ、ルミア……私って……貴女と会うまで……退屈で、面白くなくて、寂しかったの」

「……ナーシャ?」

「私の血がどこの家とどこの家の血が流れているのは……知ってるでしょ?」

「うん……ナーシャのお父さんが皇帝で、お母さんが叔母さんでしょ?」

「そう。その二人の間にできたせいなのか、家族以外、皆お世辞しか言わなかったの……」

流石は姫様、あの二人の血を受け継いでいる御方……そして……皇帝の座についたら、

帝国連合は偉大な国家になる……そんな器を持つている御方……と」

「……」

「でも……もちろん、浮かれていた自分もいたけど、なんか……寂しくて……なんで皆お世辞しか言わないのって……」

訥々と幼少期を語り出した、アナスタシア。

ルミアは、今は耳を傾けるしかない。

「でも、貴女はそうじゃなくて……皆が言わなかったことを遠慮なく言ってくれて……お世辞なんて言わないし、むしろ容赦なかったような……でも、そうやって本心から接してきてくれて……あの時は、本当に楽しかったな……なのに……」

次第に、アナスタシアの震えがルミアにも伝わってくる。

「ねえ、ルミア……なんでかしらね？……なんで、私達って、こんな目に遭わなくちゃいけないようになったのかしらね……？ 私は家族を殺されて……貴女は異能だけで王室から追放されて……お互いにそれぞれの敵に命を狙われて……どうしてこうなったの……？ どうして……」

……それつきり。

肩を震わせるアナスタシアの口が、紡ぐことはなかった。

しばらく。

二人の間を、重苦しい沈黙が支配し……

やがて。

「……大丈夫だよ、ナーシャ」

アナスタシアの背後に回り、ルミアが背後からアナスタシアを抱きしめて言った。

「大丈夫。大丈夫だから……私がいるから……確かに私も色々あったけど……私は今、すごく幸せだよ？ だって、システイもいるし先生も、リエルも、クラスの皆もい

るし……なにより……」

本心から。

精一杯の真心を込めて。

「……ナーシヤ、貴女とこうして一緒にいることができるから……従姉妹もあるけど、それ以上に大切な人だから」

そう。

ルミアにとって、アナスタシアは従姉妹で、妹のようで、友人のようで……色々と形容できる存在だが……これを一言で纏めるならば……

それは、きつと……

「……大切な人、か……」

アナスタシアは、ぼつりと問い返す。落ち着いたのか、震えはなかった。

「ルミア、貴女は本当に……私を大切な人と……そう思ってくれているのね？」

「……え？」

不意討ちのようなアナスタシアの返しに、ルミアは呆気に取られるしかない。

二人の間になんともいえない沈黙が流れるが。

やがて。

「……いふ」

アナスタシアが笑みを零し、ルミアに寄りかかる。

そして、何やら呪文みたいな言葉を呟く。

「ナーシャ……？」

「甘えさせて……今は」

そう言つて、アナスタシアはルミアの両手に自身の手を重ねる。

「皆寝ているから……今なら二人だけだし、今だけでも……ね？」

「……いいよ。私も、もっとナーシャといたい……」

「……いいわよ。このまま……しばらく、二人で……」

お互い、自身が置かれている状況が似ているからなのか。

似ている者同士、身も心も寄り添うように身体を密着して……

満天の星空の下、温泉の周囲に人払いの結果を張り、グレン達が寝静まっている中、二人はしばらくそのまま湯の中で寄り添って過ごすのであった。

П я ц ь д з я с я т (第五十話)

ここは、一面銀と氷の世界。

そこには時間も、道も建物も何も無い。

ただ、雪が積もり、氷が張っているだけで完結した、その世界——

それを己の精神世界だと……夢と現実狭間、意識と無意識の境界に形作られた、自分の領地だということ……その幼さゆえか、はつきりと理解出来てはいなかったが、直感的に理解はしていたかもしれない。

ただ、そうとはいえ、今までプレスコフ市庁舎のある部屋にいたはずの自分が、気付いたら辺り一面の銀世界と氷——控えめに言って殺伐した世界にいることに、とてつもない不安に襲われていた。

確か、宮殿から脱出する際に持ち出されたルシタニア大公家が所有している槍を手に取るために、部屋の中にいて……簡潔な儀式みたいなことをして槍を手に取って……

なのに、私はなんでここにいるのだろうか？

皆がない、自分だけしかないこの殺伐とした世界。
すると。

『……ふーん』

背後から男の声がした。

振り返ると、そこには若い男がいた。外套に身を包み、フードを目深に被っているせいで顔ははっきりと見えないが、自分と同じ……というか、父、祖父と同じ白い髪が見え隠れしていた。

『突然、人間が現れたから何事かと思ったら……お前は……』

どこからともなく現れた男が、少女を値踏みするかのように見る。

表情がよくわからない男に、見られるのが怖いのか、少女は少し後ずさる。

『……お前に流れている血の半分は俺のと……残り半分の血は……そうか。あいつはあれからも……そろそろだな』

やがて、男がなにやら意味不明なことを呟き、少女へ対してにっと笑みを向けるのであった。

『……いいぜ、力を貸してやる』

——そこは精神世界。外界の時の流れとは切り離された世界。

故に、その邂逅は——何の隙にもならない、ほんの阿頼耶の時の出来事。

これは、まだ少女——アナスタシアが『サーシャ』として国家保安委員会に潜り込む前の話である。

「ほう……う……このだだっ広い部屋が、『タウムの天文神殿』が誇る大天象儀場か……」

遺跡調査開始から六日目。恐らく最終日となるだろうその日、一同はついに最深部——大天象儀場——へと辿り着いていた。

綺麗に磨き抜かれた半球状の大部屋の中心に、謎の巨大な魔導装置が鎮座し、その傍らには黒い石板のようなモノリスが立っている。

その魔導装置は一見、巨大な天秤のようだった。寸胴の本体部分には、剥き出しの歯車や謎の機械機構がごちゃごちゃ絡みあっている。その頂点に設置された斜めに傾くアームの両端には、切頂二十面体状にカットされた巨大な結晶体が取り付けてある。

この魔導装置の正体は天象儀装置。これも古代魔術が生み出した一種の魔法遺産であり、光の魔術によってこの半球状の大部屋内に星空を投射する……という機能を持つ。

それ以外のことについては、ひたすら謎だ。

なにせ、この手の魔法遺産に定番の霊素皮膜処理が、この天象儀装置にもしつかり施してあり、分解して調査することはおろか、運び出すことすらできないのだ。

はたして、この装置に何の意味があったのか？何のために作られたのか？

未だ不明な、謎の魔導装置であった。

「この天象儀って、見たことないけど、結構すごいらしいよ？ルミア」

「へえ、そうなの？サーシャ君」

二人はいつも通りであった。むしろ、昨夜での温泉でのやり取りで距離が縮んだような、そんな感じになっていた。

と、そんな時。

「あの……先生？せっかく、『タウムの天文神殿』にやって来たんだし、この天象儀装置で星空を見てみませんか？」

大天象儀場に足を踏み入れるなり、システイーナがそんなことを言い始めた。

「はあ？星空あ？面倒臭えなあ……」

そう言いながらも一瞬、システイーナに身構えるグレン。

（いや、貴方は昨晚、ルミア達に何したんですか？）

昨晚の出来事を知らないサーシャが、そんなグレンにジト目で流し見る。

とはいえ、昨晚のルミアの顔の赤らめっぷりからなんとなく想像はつくと言えはつづののだが。

一方、グレンは今までの調査結果から論文の構想を練りたいため、システイーナの提案に渋るが、セリカが後で手伝うということで渋々ながらモノリスを操作していく。

「えーと……確か、こうだったかな……う……くそ、古代語の文法、うぜえ……」

ぶつくさ言いながら論文で書かれている操作手順と書式に従い、魔導装置の機能を制御するモノリスの表面に指を走らせ、令呪を書き込んでいくグレン。

古代人が誇る魔法——古代魔術。

近代人には、その根本的な原理を分析・理解することはできない。どのような魔術的調査を行っても、近代魔術ではその古代魔術の魔術式が読み取れないからだ。

だが、原理はわからずとも、その機能と操作法だけは、近代魔術でも判明している。

「……これで、よし……と」

固唾を呑んで一同が見守る中、グレンはモノリスの表面に浮かび上がる、とある光の文字の一文を叩いた。

すると、天象儀装置が低い駆動音を立てて起動し始め——

ふっ……と、室内が塗り潰されたかのような深淵の闇に包まれ——

次の瞬間、世界が——変わった。

「……………ッ!？」

星雲が、流星が、圧倒的な臨場感と迫力をもって一同の頭上に顕現する。震える魂を捉える満天の星。美しき幻想宇宙空間。

闇に大粒の銀砂を大量にまぶしたかのようなその光景に、誰もが言葉を失う。今、自分達が部屋の中にいるなど、到底信じられない。

光の魔術による星空の投射?……………否。

その瞬間、一同は確かに、広大なる小宇宙の中に存在していたのだ——

「……………古代人つてのは、超高度な魔法文明を築いておきながら、時々、こういうどーでも良いことを、すっげえ大がかりにやるよなあ……………?なんでだ……………?」

星空を呆けたように見上げるグレンの減らず口も、その程度だ。

「さあな?文化や意識の違いなのか……………なんらかの宗教儀式的演出か、もしくは単なる娯楽か……………その辺りが通説になってはいるらしいがな……………」

そう応じ、口を開いて忘我するグレンに代わり、セリカがモニリスを操作する。

装置の動作が停止され、たちまち、元の姿を取り戻す大天象儀場。

「さーて、調査を開始しよう、皆の衆。何、天象儀なら後でいくらでも見れるさ」

どこか物惜しげなグレンや生徒達を促しつつ、セリカの音頭で調査が開始された。

そして、またいつも通り、床の紋様や碑文を写し取ったり、魔術で隠し部屋や魔力痕

跡を探したり……そんな単調な作業が始まる。

だが、この単調な作業も今日で終わり……そう思えばこそ、広い部屋のあちこちに散っていった生徒達の動きも、幾ばくかのメリハリのあるものとなっていた。

(にしても……妙だねえ……)

床の紋様を手でまさぐりながら、サーシャはこの遺跡調査を始めてから持っていた違和感について考え込む。

(この遺跡には霊素皮膜処理が施されていて、破壊は不可能って教授は言っていたけど……この遺跡にそこまでする価値があるのかなあ?)

『タウムの天文神殿』等の、帝国内にある遺跡群とは数も少ないし趣が少々異なるが、東部諸国内にも古代文明らしき遺跡群はちらほらと存在する。

その遺跡の中には『タウムの天文神殿』のように霊素皮膜処理が施され、分解や持ち出してからの調査が不可能になっている遺跡が存在しているのだが、全ての遺跡がそうではない。

旧帝国連合の遺跡調査によれば、霊素皮膜処理が施されている遺跡は、古代文明時代の時に非常に重要な機能——主に軍事面としての機能を持っていた施設なのではないかという調査結果が出されていた。

逆に言えば、霊素皮膜処理が施されておらず、野ざらしにされて廃墟同然になってい

た遺跡群には重要な機能は見つからなかった。

つまり、靈素皮膜処理が施されている『タウムの天文神殿』には軍事面であれ、その他であれ、なんらかの重要な機能を持っているはずなのだが……

(この遺跡には、それらしいものがない……現に、価値が低いと評価されているし、こうして調査しているのも、数年前の調査で浮上した仮説を提唱した魔術師があまりにも天才で学会とかが無視できるような代物ではなかっただけだし……)

けど、何かあるはずなんだよなあと、サーシャは同時に思う。

何せ、靈素皮膜処理が施されているのだから。特にあの天象儀装置には必ず何かがある。ただの天象儀装置に靈素皮膜処理が施されているというのはいくらなんでも過剰すぎる措置なのだから。

だが、一体、あれが何の機能を持っているのかわからない。その天才魔術師も、その他大勢の魔術師達も、この天象装置だけは何なのか、その正体を明かすことはできなかった。

何かがある。何かがあるのだが、何なのかわからない。『タウムの天文神殿』のことを一言で表すならば、この一言がぴったりのような気がした。

サーシャがそんなことを考えていた……その時だった。

「ん——」

それは本当に、唐突だった。

きん、きん、きん——

辺りに突如、魔力反響音が響き……一瞬、床の紋様をなぞるように蒼い光が走った。

「な——ッ!？」

蒼い光を咄嗟によけ、サーシャが慌てて振り返る。

すると、天象儀装置が駆動しているではないか——

しかも、さつきまでとは明らかに違う動作で。

(な、なに、あの動き……ッ!?)

あまりにも違う不思議な挙動で——

何事かと呆気にとられるサーシャ、グレンや生徒達を尻目に、天象儀装置のアームが先ほどと同じように室内に星空を投射し——星空が徐々に加速しながら回転していき

——やがて、全ての星々が狂ったように頭上を暴走回転し、銀線となって無数の同心円を描き——

やがて、天象儀装置がゆっくりと動作を止め——星空が消えていき——

「……え?」

大天象儀場の北側の空間——しかも、サーシャがいるところに、蒼い光で三次元的に投射された『扉』が出現していた。

それは明らかに、離れた空間同士を繋ぐワープゲートの類だ。

その虚空に出現した『扉』の奥は深の闇を湛え、その『扉』の向こう側が、一体、どこに続いているのかはまったく不明だ。

そんなどこに行くのかわからない『扉』が出現したちよほどの地点に、サーシャがいて――

「え、ちよ——ッ!？」

あまりにも突然のことに流石のサーシャも動けず、『扉』の中へ吸い込まれるように呑み込まれ、その向こう側へ——姿を消した。

「サーシャ!？」

「嘘ッ!？」

あまりにも唐突に訪れた予想外の事態に、グレンとシステイーナ含めて呆気に取られる一同だが。

さらに予想外の事態は続き……

「ば……ばか、な……どう、して……」

顔色を真っ青にし、冷や汗がびっしり浮かび、いかにも気分が悪そうなセリカが、出現し、サーシャを呑み込んだ光の扉を、目が血走らんばかりの勢いで睨みつけていた。

「……ほ……星の……回、廊……? そうだ……《星の回廊》だ……ッ!？」

何か意味不明な事をぶつぶつ呟いているセリカ。

「……そんな、はずは……今さら……?でも、私は……確かに……ッ!」

そんな意味不明になことを、まるで讒言のように呟き、セリカが立ち上がり。

「……そう、そうだ……私は……」

ふらふらと、まるで炎の光に引き寄せられる羽虫のように、セリカが『扉』へと歩み寄り……

そして。

突然、何かに背を蹴られたかのように、セリカが猛然と駆けだした。

虚空に開かれた、その謎の『扉』を目指して——

「アルフォネア教授!」

「セリカ!」

予想外に次ぐ予想外に、一同は何も身動きが取れず。

セリカはいきなり、その『扉』の中へ跳び込み、その向こう側へ姿を消した。

「馬鹿な——ッ!?セリカ!お前、何やってんだ——ッ!」

サーシャのも予想外だが、セリカのこの行動は完全に予想外だ。まさか遺跡探索において百戦錬磨のセリカが、そんなド素人以下のことをやらかすなんて——こうして目の当たりにしてもにわかには信じられなかった。

「おい、セリカッ！そこから先は、どこに通じているのか、まだ何もわからないんだぞッ！?!いくらなんでも無謀すぎるッ！行くな、サーシャを連れて戻って来——」

グレンが慌てて、後を追おうとするが——

それは、時間切れだったらしく。

再び、場に奇妙な魔力反響音が辺りに響き渡り——

「な——」

グレンの目の前で——セリカとサーシャを呑み込んだまま——

その『扉』は消えてしまった。

「……くそっ！サーシャッ!?!セリカアアアアアアア——ッ!?!」

グレンが『扉』があつた場所の床に飛びつき、拳で叩き、叫ぶ。

絶句。

誰も、何も言葉を発することは……できなくなつてしまった。

П я ц ь д з я с я т А д з ? н (第五十一話)

「……ん」

謎の『扉』に吸い込まれるように飲み込まれた後、サーシャは瞼を開ける。

仰向けに倒れていたサーシャの視界に映ったのは石造りの天井。

「……もう。一体、何があつたつていうのよ……ていうか、ここはどこなの？」

むくりと上体を起こしたサーシャは、周囲の様子を確かめる。

天井は、床、壁、全てが石造りの小部屋の真ん中であつた。サーシャの傍らには、小型モノリスがある。石のブロックを積んで建築されているため、タウムの天文神殿内ではないことは間違いない。

どうやら、あの『扉』のせいだ、ここに飛ばされてしまったらしい。

「……先輩につながるかしら？」

そういつてサーシャは、懐から通信魔導器を取り出そうとするが。

「！」

その時になってようやくサーシヤは自身の状態を理解した。

雪のように白い髪が床までさらさらと流れ、美しい河を作っている。服装も学院の制服ではなく、白のワンピース姿。

つまり、今のサーシヤは『サーシヤ』じゃなくて……

「……危なかった」

今のサーシヤは、『アナスタシア』であった。

このまま気づかずにグレンに連絡取ろうものなら、面倒なことになっていたのは間違いなかったことだろう。

それでも、通信が出来る状態なのかは確かめたいから、アナスタシアは通信魔導器を起動し、グレンを呼び出す。

だが。

「……つながらない」

グレンが通信魔導器を取る様子はなく、そのまま呼び出し音がなるだけだった。

とりあえず、自分が謎の『扉』に呑み込まれてグレン達の前から姿を消してしまった以上、グレンはなんらかの方法でここに来るのは間違いないだろう。今でも、その方法を模索しているかもしれない。

あの人が見捨てるなんてことは、外道魔術師などよつほどのこと以外はないのだから。

ら。

だから、アナスタシアは、グレンが来る前に『サーシャ』の姿に戻ろうと指を鳴らすのだが……

………。

……。

「……え？」

何も起きない。

いつもなら、指を鳴らすだけで仮初めの姿と本物の姿サーシャに自在に変身することができるのだが……なぜかできない。

「ちよつと……」

もう一度指を打ち鳴らすアナスタシア。

だが、結果は先ほどと同じ。

その後も、何回も指を打ち鳴らす……アナスタシアが『サーシャ』の姿に変身することはできなかつた。

「……なんで？」

ひとまず指を打ち鳴らすのを止め、ため息を吐くアナスタシア。

非常に不味いことになってしまった。このままではいろいろと不味い。

ふと、自分の傍らを見るとそこには槍が無造作に置かれていた。
聖ジェルジオの槍。

ルシタニア大公家——東セルフオード帝国連合皇族の始祖となった聖ジェルジオが、当時ルシタニアを含む東部を荒らしまわっていたドラゴンを一突きで殺した、竜殺しの槍。そして、その聖ジェルジオの末裔ともいわれるルシタニア大公家が所有している家宝であり、現在アナスタシアが大事に持っている家宝である。

その槍をアナスタシアは手に取る。

「……ねえ、どうして……？」

その槍に向かって話しかけるアナスタシア。

「どうして、私の変身を解いたの？ どうして、何の断りもなしに『あなた』が出ているの？」

何やら意味不明なことを呟くアナスタシア。

物に向かって意味不明なことを話しかける今のアナスタシアの姿を見たら、引く者数多であることだろう。

しばらくすると。

「……って、答えてくれるわけないか」

諦めたように肩を落とすアナスタシア。

だが、原因がわからないがこうなってしまった以上、考えてもしょうがない。

アナスタシアは頭を切り替え、自分が謎の『扉』に呑み込まれる前の状況を整理することにした。

謎の『扉』が現れ、呑み込まれる直前に見たのは、天象儀装置を操作するモノリスにシステイーナとルミアが呆けていた姿であった。

あの状況から察するに、二人が操作モノリスに何らかの操作をして、あの『扉』が出現したものと推測できる。

操作したのはシステイーナでルミアが彼女の側にいたということは、システイーナがルミアの能力アシストをこつそりと使っていたということだろう。

ルミアの能力は『感応増幅能力』——触れている任意の相手の魔力を一時的に超増幅させ、結果として魔術を強化する異能だ。先日 of フェジテでの事件の時、旧エーステイ公国の過激な独立派の首領マルトラールを追撃する時にアナスタシアもルミアの能力アシストを受けたことがあった。

システイーナがルミアの異能を使って、天象儀装置の調査をしていた時にあの『扉』が出現した……ということなのだろう。

そして、自分が呑み込まれて、現在に至る。

「……なんか、妙ね」

ここまで状況を整理したアナスタシアは、ある違和感を抱いていた。

「前情報によると、あの天象儀装置は何人も高位な魔術師が調査したけど、その結果のどれもが“ただの天象儀装置”だったらしいじゃない。でも、そのただの天象儀装置からあの『扉』が現れた」

普通、あり得ないのだ。何人も高位の魔術師——その中には、件の天才魔術師も術式も徹底的に調べた結果がただの天象儀装置だったのだ。あの『扉』がその時に出現していたのなら、学会でその論文が堂々と掲載されていることだろう。

だが、そんな記述がなされた論文は出てきてないし、だからこそ『タウムの天文神殿』の価値が低いのだ。

その価値の低い遺跡の、ただの天象儀装置から、あの『扉』が出現したのだ。つまり、それは今までの魔術師達に見えない術式がその魔術師達よりも階梯が低いシスティーナには見えていたことになる。

そんなこと、今まで調査してきた魔術師や学院の教授陣に話してみたらどういう顔をするだろう？ 信じられない……十中八九そういう顔をするだろう。

それほど、あり得ないことが起きてしまった。ルミアの能力であり得ない現象が起きてしまったのだ。

(ルミアの『感応増幅能力』……何か違う)

思えば、先の遠征学修旅行先の事件。

ルミアは、とある外道魔術師に囚われ……『Project: Revive Life』の儀式に、術式の一つとして組み込まれ、能力を強引に使わされたことがある。

だが、先述したが『感応増幅能力』とは、本来、触れた相手の魔力を一時的に増幅させ、結果的に相手が行使する魔術を強化するだけ——それだけの能力なのである。

だから、どれだけルミアの能力を酷使させようが、元々から理論的に達成が不可能であつた『Project: Revive Life』は——成功した。成功してしまつた。

今回の件も——恐らく、それと同じだ。

(ルミアのアシストを受けたシステイーナが見た術式は、近代魔術では解析が不可能だった古代魔術の術式かもしれない。ルミアの能力がそれを見せた)

ルミアの能力には、不可能を可能にしてしまう『何か』があるのだ。

そして、それこそが——恐らく、天の智慧研究会の狙い——

「……色々と疑問に思うところはあるけど……それは置いといて、今は……」

そう、今はそれよりも目の前に置かれているこの状況を打破することを考えなければならぬ。

改めて部屋の周囲を確認するアナスタシア。といつても、小型モノリス以外、特にな

にかがあるわけではなく、アナスタシアは小型モノリスの前に立つ。

「さて……私にもシステイーナが見たと思われる術式が見えるのかしらね？ 普通なら無理でしょうけど」

そう言つて、アナスタシアは黒魔〔ファンクション・アナライズ〕を起動する。

「……………」

……そして、すぐに。

「……駄目ね。どこをどうみてもそれらしい術式なんて見当たらない。やっぱり、近代魔術では解析できないし、ルミアの能力で見えたということがこれで確定したわ」
それがわかったら、もうこの小型モノリスを調査する必要はない。

アナスタシアは、先に進もうと槍を手に持ち、部屋を出る。

アナスタシアが部屋を出た先にて。

「な……………」

眼前に広がる光景に、アナスタシアはただ呆然とするしかなかった。

天井、壁、床、全てが石造りの通路の光景は、はつきりいえば異常であった。

そこには、そこかしこに干からびた死体——無数のミイラが転がっていたのだ。

しかも、皆一様に恐怖と無念の形相に、その顔を歪ませて——

「……………な、なにが……………あつたの……………」

激しく動悸する心臓を押さえつつ、アナスタシアは足下のミイラを恐る恐る検分する。

その朽ちかけた独特な衣装と、手にした杖から察するに……

「……魔術師……？しかも、全員……？でも、この傷つて……？」

謎のミイラ達は例外なく、焼け焦げていたり、身体の一部を欠損していたりと外的損傷が激しかった。恐らくは、それらの外傷が生前の彼らの命を刈り取ったのだ。

つまり、これは明らかに……

(……殺された？……誰に？かつて、ここで一体、何があったの？このミイラ具合からして……殺されてから相当、時間が経っているみたいだけど……？)

と、その時だ。

「……うっ」

不意に感じた目眩と吐き気に、アナスタシアが片膝をついて頭を押さえる。

気分が悪い。空気が悪い。漂う濃厚な『死』の匂い。こうして、ここにいるだけで背筋から熱が奪われていくような……正気が、命が削られていくような気配……

この階層には、何か良くないモノが充満している――

「くそ……」

駄目だ。正直、恐ろしい。震えが止まらない。

ここは——地獄。怨嗟と死の穢れに満ちた、呪われた空間だ。

きつと、生きている人間が足を踏み入れていい場所ではなかったのだ。

ここはマジでヤバイ……呑み込まれたとはいえ、ここには二度と来たくない。

己が理性とは関係なく、否応なしに、アナスタシアの中で様々な感情が渦巻いていくが——

「……落ち着け……落ち着くの、私……」

この状況を打破しなければ待っているのは死。その状況を前に、アナスタシアは深く深呼吸し、気持ちを落ち着かせた。

そして、前に進めようとした……その時だ。

「……………」

ふと足を止め、周囲に数本の氷剣と氷の人形を召喚する。

直後、ずる、……り……、と、後方から何かが這う音が響いた。

「——ッ!?!」

音に反応し、アナスタシアが振り返る。

アナスタシアが指先に魔術の光を灯し、その音がした方向へと向ける。

すると、後方にある曲がり角から、長い髪の女が這い出てくるのが見えた。

「教授? いったい——」

アナスタシアがその女に向かって歩き出して——その足は数歩で止まった。違う。セリカじゃない。

ずるり。

その女には……左腕がなかった。

ずるり、ずるり……

もつと言えば、その女には下半身もなく、干からびた臓腑を引きずっていた。

ずるり、ずるり、ずるり……り……

女はそのまま、石像のように固まったアナスタシアに這いずりながら近付いてきて……幽鬼のように振り乱した髪の間から、アナスタシアを恨めしそうに見上げ……

その眼窩に眼球はなく、無限の闇色が湛えられていて……

「……ッ!《殺れ》ッ!」

硬直から解放されたアナスタシアが女に指差して詠唱し、浮遊する氷剣を飛ばす。

ドス、ドス、ドス、ドス、ドス——ッ!

女の頭、右腕、上半身に次々と刺さりまくる氷剣。瞬く間にハリネズミと化す女はそのまま動かなくなる。

だが、それで終わりではなかった。

「——ッ!?!」

突如、アナスタシアの足下のミイラ達が動き出し、素早く彼女の足に取り縋ろうと、彼女の背中に組み付こうとして――

二体の氷影がミイラ達を撫で切る。

こうしている間にも、周囲のミイラ達が次々と動きだし、身を起こし始め、死霊達がどこからともなく現れ始める。

「ちよつと、ちよつと、ちよつと――ツ!?」

そのあまりの数の多さに、アナスタシアは捌ききれないと脂汗を流すが。

「……足止めして頂戴……」

ぼそりと呟いて、アナスタシアは刃先を上に向け槍を地面に突き立てる。

その呟きを聞いてなのか、複数の氷の人形はそれぞれ四方に散らばり、ミイラ達をバラバラに切り裂いていく。

「……汝に余――東セルフォード帝国連合第一皇女、アナスタシアが命じる――」

ゆつくりと、殊更にゆつくりと。

アナスタシアは左手を地面につき、意識を集中させ、一句一句言葉を紡いでいく。

全身に亡霊達を取り纏るが、そんなのお構いなしに言葉を紡ぐ。

言葉を紡ぎきった直後、周囲が青白く光り始める。床、壁、天井の継ぎ目に光が奔り始める。

神々しく逆らうことを許さない光が、周囲を明るく照らし——

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ツ!?

ミイラや亡霊達が目を背け、内側から光り出しながら苦しみ始める。

縋り付く亡霊達も、アナスタシアから離れ、激しく苦しみ始め——

「——死ね」

冷酷に、冷めた声ではつきりとミイラと亡霊達に命じる。

キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ツ!?

亡霊達は消滅していき『無』に帰していき……

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア……

ブシュツ!グシャツ!バシャツ!

アアアアアアアアアアアアアア……

ドシャツ!グシャアツ!

ミイラ達が内側から膨れ、破裂していく。

そして……訪れる静寂。

その場のミイラ達や亡霊達は残らず消滅し、辺りの呪われた瘴気が取り払われていた。

聖ジェルジオの槍の能力——所有者が指定した対象を問答無用に服従させる能力。

……悪魔を除くが。

「さつさと、この場を脱出しないとね……教授も、なんとか連れ戻さないと……」

今でも『サーシャ』の姿に戻れてはいないが、だからといってセリカを見捨てることはできない。そもそも、自力で脱出できるかどうかすら怪しいのである。

その時の対応は道中で考えるとして……と、アナスタシアは思いながら、前へ進むのであった。

П я ц ь д з я с я т Д в а (第五十二話)

そして、アナスタシアは慎重に通路の奥へと歩を進めていった。

ここがどこなのかわからないが、通路を進み、部屋らしき空間を通り抜け、迷路のように複雑に入り組んだ通路をいくつも抜けていき、やがて現れた階段をとりあえず降りる……その繰り返し。

「……しかし、ここはどこなのかしら？」

あてもなく下に降りながら、アナスタシアは歩を進める。

今、アナスタシアがいるこの構造物は、どうやら無数の円形階層が上下に積み重なった……まるでコインを積み上げて作ったような『塔』のような建造物らしいのだが……アナスタシアが、ちょうど階層の外周部分にさしかかり、テラスから外の様子を拝むと。

ひゅごお、ひゅごお、とテラスを吹き抜ける冷たい風。

いつの間にか、日は落ちたらしい——眼前に広がる果てしなき夜空。

見上げれば、髑髏のように大きく真つ白な月。

「いや、本当にどこなの、ここ……？」

遙か下方の地上は遠すぎて、深淵に沈んで見えない。

どうも、自分ほとんどでもない場所に飛ばされてしまったらしい。

「そもそも、この『塔』は一体、どういう施設なの……？」

疑問はそれだけではない。

この『塔』は、訪れる者を拒むかのように、まるで迷宮のように複雑に入り組んだ構造になっているが……同時に住居のような部屋や区画も多々ある。少なくとも、かつてここに人が暮らしていたであろうことは……様々な痕跡から間違いないだろう。

迷路であり、町でもある——相変わらず古代人の考えていることはよくわからない。

そして——

「……本当に意味がわからない……」

相も変わらず、部屋や通路のそこかしこに、ミイラ化した魔術師の死体が折り重なっている。どれも外的原因で激しく損壊しているのは同じだ。

そして、それらミイラがたまに動き出して、それに連動して亡霊も湧きだし、アナスタシアを襲うものだからたまったものではない。

だが——

「汝に命じる——」

ミイラ達が襲い掛かってくるたびに、アナスタシアは槍を突き立てていく。

アナスタシアが呟くと、ミイラ達の周囲に青い光が線状に拡がり、ミイラ達は苦しみ、消滅していく。破裂していく。

数に任せたミイラや亡霊の行進も、これにはひとたまりもない。

死してなお現世に縋る彼等は、彼女の手によつて片端からあの世に送られていった。そして、アナスタシアは先に進んでいく。

どれぐらい歩いただろうか。どれだけ階層を下に降つただろうか。

時間の感覚があやふやになるくらいに歩いた頃。

「にしても……あのミイラ達、誰を恨んでいるのかしら？」

アナスタシアは、歩きながら怨念マシマシだったミイラ達のことについて考える。

あのミイラ達は、全員揃いも揃つて誰かを憎んでいた。実際に呪詛を吐きまくっていた。正確に言うなら、ある女を憎んでいた。

あの正気も失いかねない呪詛を聞くあたり、ミイラ達はその女に殺されたのは明らかだった。

ただ、その女が誰なのかがわからない。もうすでにこの世にいないのかもしれない。
いや、もしかしたら……

「……まさか、ね」

アナスタシアは、ミイラ達の損傷具合を思い出し、ある女性が頭の中に浮かんでいた。
セリカⅡアルフォネア。

第七階梯で大陸最強の魔術師で現・アルザーノ帝国魔術学院教授。そして、グレンの師にあたり、育ての親でもあり……歳を取らない永遠者。イモータルリスト

グレン曰く、セリカは超威力の破壊呪文を大得意としているらしいから、今回のミイラ達の激しい損傷具合も、セリカが殺ったというのはあり得なくもない。

「……………」

他にも考えるべきことが多い。

ここはどこなのか？

そもそも、タウムの天文神殿とここが、どうして繋がっている？

あの天象儀装置の正体とは、一体——？

あそこで出現した謎の『扉』とは？

なぜ、セリカはついてきた？

いや。

そもそも——セリカつて、なんなんだ？

「……考えても埒が明かないよね……とりあえず、ここを出ないと」

ひとまず、疑問は頭の隅に追いやつて歩を進めようとした、その時。

不意に、とてつもない殺気を感じ取つた。

「！」

殺気を感じ取つたアナスタシアは、咄嗟に周囲を見渡すが誰もいない。

再び前方を見ると、その奥にはアーチ型の出入り口が、無限の闇色を湛えている。

そして、そこから殺気が溢れているような感じがした。

「……な、なんなのよ。この殺気は……」

人間が放つ殺気ではない。もっとこう……上位の存在が放つような殺気。

行くべきではない。この先を進んではいけない。本能がアナスタシアに警鐘を鳴らす。

「……ここで、戻つても意味ないわ。行きたくないけど、行かないと……」

脂汗が噴き出す中、アナスタシアは歩を進め、奥のアーチ型をくぐりぬけると——

「な——ッ!?!」

アナスタシアの眼下に広がったのは、まるで闘技場のような大広場であつた。

アナスタシアから向かつてフィールドの遙か向こう側には、黒光りする石で封じられ

た巨大な門が、高くそびえ立っている。

そして、その門の前には――

(教授ッ!? それと先輩とルミア達まで……ッ?! いや、それよりも……)

セリカとグレンとルミア、システイーナ、リエルと――殺意を放っているであろう誰かがそこにいた。

セリカは様子がおかしく、グレン達はその『誰』かが放つ圧倒的な存在感に吞まれている。

「……ッ!」

『誰』かが放つその圧倒的な存在感は、遠くにいるアナスタシアですらも感じ取れた。そして、その『誰』かを見る。

緋色のローブで全身を包んでいる。そのローブは丈長で、フードの奥は無限の深淵を湛え、その表情は窺えない。眼光一つ差さない。

その全身から立ち上る。闇色の霊気。

まるで、闇そのものがローブを纏い、人を形作った――そう思わせる人間……いや、魔人ともいべき存在がそこにいた。

(や……やばい……ッ!?)

魔人を認識した瞬間、アナスタシアはグレン達も同じように感じたであろう己が心臓

が悲鳴を上げるのを感じた。

あのリエルですら警戒心剥き出しで深く低く構え……その剣先を震わせていた。

(やばいやばいやばい……ツッ! あいつは——ヤバい!)

見るだけで、肌を感じられる。

自分達とその魔人は、根本的な存在としての規格が違いすぎる。

例えるならば、魔術を全く知らない一般市民が、強大な力を持つ魔術師に悪意を向けられているような……そんな状況にも似た絶望感を、あの魔人に感じる。

アナスタシアの現役の魔導士としての……国家保安委員会に潜り込み、ここまで培った直感が告げる。

あの魔人を前に、自分達の振るう魔術など……それはセリカすら含めて……きつと兎戯なのだろうと。

恐らく、自分たちとあの魔人では——前提としてあるルールが違うのだ。

だが、ただ一人、セリカだけは違った。

自分達の前に現れた魔人がいかに難物か、よくわからないようだ。

(教授があんなに冷静さを欠いているなんて……どうしたのよ……?)

そもそも、なぜグレン達がここにいるのか、魔人に狙われているのかもまるで皆目見当がつかない。そもそもあの門はなんだ?

そうこう考えている内に、両手に魔刀を手に持っていた魔人は明確なる敵意と殺気を、グレン達に向けていた。

洪水のように迫るその圧倒的な存在感に吞まれてしまったのか、システイーナは怯えきつて、グレンにしがみつき、気丈なルミアも顔を真っ青に青ざめさせ、肩を震わせて呆然と立ち尽くす。

あの常に能面のリィエルすら顔色を失い、過呼吸気味にも見える。

距離が遠いせいいか、殺意などは感じるが、会話の内容が聞こえないが……確実に言えるのは、魔人はグレン達を殺す気だ。そして、自分も。

(じよ、冗談じゃないわ、つきあつてられないわ!?)

援護だ。アナスタシアは即断した。

今の姿だと後が面倒だが、今は切り抜けないといけない。

周囲に氷剣と氷影を複数召喚しようとした、その時だ。

「聞けよ……人の話をなッ!」

セリカが据わった目で魔人へと突進していた。

「な——ッ!?なにやつて——ッ!」

セリカのあまりにも予想外な行動に、アナスタシアは魔術の行使を中断してしまふ。

一方で、セリカはグレンの制止も聞かず、声高に呪文を叫ぶ。

「《くたばれ》ッ！」

起動される黒魔「プロミネンス・ピラー」。

真紅に輝く超高熱の紅炎が、天を灼く火柱となつて瞬時に魔人を呑みこみ——

魔人がゆるりと振るつた左手の魔刀が、セリカの魔術を切り裂き——かき消した。

(嘘——ッ!?今、何をしたの、あの魔人!?)

その様子に、アナスタシアが目を剥いた。

現象だけ見れば、セリカの攻性呪文を打ち消した……それだけだ。

だが、様々な外道魔術師、政敵を抹殺してきたアナスタシアの勘が、あの現象をそれだけで片付けるなど叫んでいる。

(違う、あれは打ち消したんじゃない……ッ!そもそも、打ち消せない……ッ!)

そう。黒魔「プロミネンス・ピラー」はB級軍用魔術。

近代の軍用魔術においては、B級は打ち消しが出来ない——防ぐしかない——とある一定の威力規格を超えた攻性呪文は、打ち消し不可能なのだ。

ならば——

(あれは対抗呪文じゃない!もつと異質で別の——)

だが、原因はわからないが、頭に血が昇り、冷静な判断ができないセリカはそんな発想には至らず——

セリカは真銀の剣を振りかざし、魔人の懐へと、一気に飛び込んでいた。すでに「ロード・エクスペリエンス」によって、かつて《剣の姫》と謳われた英雄の剣技を自身に降ろし、無双の剣士と化している。

今の彼女に近接戦闘で敵う者など、この世にいるわけが——ない。

ないのだが……

キイイイイイイインツッ！

甲高い音と共に、セリカの剣と魔人の刀が喰らい合い、両者がすれ違う——

途端、セリカが狼狽えているように見えた。

狼狽えながら、セリカが振り返り、魔人に剣を構えるが。先ほどまで構えとは違い、最

強剣士の風格がまったく感じられなかった。

咄嗟に跳び下がるセリカが魔人へ左手を向け、黒魔「プラズマ・カノン」を唱えるが

魔人が左手の魔刀を振ると、魔人に迫る集束雷撃が虚しく霧散し——

その刹那、ぶん、と残像する魔人の姿。

瞬時にセリカの背後へ回り込んだ魔人が、右手の魔刀を稲妻の如く打ち下ろす。

間一髪。辛うじて反応したセリカが、跳び転がって、その斬撃を避けるが——

魔人の刀は、セリカの背中に微かな掠り傷を刻んでいた。

そう。掠り傷だけなのだから、普通ならセリカには大した傷にはならないのだが。転がる勢いのまま、体勢を立て直すこともなく、そのまま四肢を投げ出すように、無様に倒れ伏してしまった。

(え……？教授？)

なんで倒れ伏してしまったのか、アナスタシアは訝しんだが、すぐに魔人の霊気の異変を察知した。

力を失ってしまったかのように無防備に倒れるセリカとは対照的に、魔人が纏う闇色の霊気は先ほどと比べて明かに勢いを増しており、見るからに力が漲っていた。

そんな魔人は、セリカの首筋に右手の魔刀を当てていた。止めを刺すつもりだ。

「ちよつと、ちよつと、ちよつと……ッ！」

このままでは不味い。止めなければセリカは死ぬ。そして、グレン達も皆殺しにされ、自分も見つかったら殺される。

なんとかして、止めなければ。だが、どうやって？

(いや、今は悩んでいる暇は……ない……ッ！)

時間がないアナスタシアは、氷剣を召喚しようとするのだが……

その前に、別の呪文を呟くのであった。

П Я Ц Ъ Д З Я С Я Т Т Р Ы (第五十三話)

一方。

「……………ッ!？」

セリカは自分の首のすぐ側にある刀の刃を呆然と見る。

この魔人がそつと刀を引くだけで、セリカの首はころりと綺麗に落ちるのだろう。

……………終わる。

長すぎる生に疲れ、あれだけ待ち望んだ終焉が眼前に迫っている。

だが。

死を前にして、セリカの脳裏に浮かぶのは——グレンと過ごした、このほんの十数年間の、他愛もない出来事ばかりだ。

「……………あ」

こんなこと、今までの四百年の中で一度たりとも思ったことはなかった。その逆のことは散々思ったのに、事ここに至り、どうしてそんなことを思ってしまうのか。

すなわち——

「……死にたく……ない……」

はつきりと自覚した瞬間、セリカの目から涙が、ぼろぼろと零れ落ちる。

「……いい、嫌だ……まだ……私は……」

こんな所で、こんなことで、死んでしまうなら。

私は、一体、何のために——

『いと卑し』

そんな無様なセリカの眩きを一蹴し、魔人が刃を引き始め——

(……助け、て……グレン……ツ！)

思わず、そんな事を思ったセリカが固く目を瞑り——

その冷たい刃が彼女の首筋に触れかけた——

まさに、その瞬間。

「つぎっけんな、クソがあああああああああああああああああ——ツ！」

咆哮する六連の銃声と共に、空間を過ぎる六閃の火線。

グレンの拳銃早撃ちからの連続掃射だ。

『ぬ——ッ!?!』

不意討ちが功を奏し、最初の一発の弾丸が魔人の心臓部を射貫き——

その刹那、神速旋回する双刀、躍る五条の剣線。

それはまさに超反応、電光石火の絶技。魔人は飛来する残り五発の弾丸を、瞬時に全て弾き返し——天井高く跳躍して、グレンから大きく跳び下がった。

「大丈夫か、セリカツ！」

その隙に、グレンが倒れ伏せるセリカツを背後に庇うように、魔人と相對する。

セリカツからは返事がない。どうやら氣絶してしまったようだ。

『なんだ、その妙な武器は……？』

そして、魔人がグレンを警戒し、注意深く刀を構える。

『爆裂の魔術で鉛玉を飛ばす魔導器か？猪口才な……二度はないと思え……』

魔人は健在だった。なんのダメージもなかったような雰囲気だ。

「畜生、なんで倒れねえんだよ!?心臓をブチ抜いてやったのにッ！」

身を焦がす焦燥に急かされるように、グレンは弾切れの拳銃のバレルウエッジを引き

抜き、グリップとバレルを分離、空のシリンダーを落とし、予備シリンダーを——

だが、グレンの弾倉交換を大人しく待つてくれる筈もなく。

『よかろう！愚者の牙で何処まで抗えるか、存分に試すがいい！』

真空すら引き裂く速度、ただの一点で魔人はグレンとの間合いを消し飛ばす——

(やべえ……ッ!?)

拳銃の再装填は余裕で間に合わない。

すでに魔人は、グレンを二振りの魔刀の間合いへ捉えている。

無残にも、グレンが幾つかの肉塊に解体されようとしていた——
その瞬間。

「凍てつく矢よ」——ツ！《アシーン撃て》、《トゥッザ撃て》——ツ！

背後から何者かがや継ぎ早に呪文を叫んでいた。

グレン達が背後を振り返ると、そこには——

「サーシヤツ!?!」

そこには、サーシヤが左手を魔人に構えていた。

だが、それはグレン、システイーナ、リエルから見ればの話し。

ルミアから見れば——

(ナーシヤ……ッ!?!でも、先生達は……)

そう、ルミアから見たらその場にいたのはサーシヤではなく、アナスタシアが立っていた。

だが、グレン達はアナスタシアのことをサーシヤと言っていた。

一体、どうなっているのか？ルミアが少し混乱している中、サーシヤ——アナスタシアの黒魔「シユトレラ2」が、グレンへ肉薄する魔人を迎え撃った。

アナスタシアから放たれた複数の氷閃は、敵を確実に殺すといわんばかりに魔人に迫

る。

が——

『……兇戯』

氷閃が、魔人が振るう左手の刀に触れた瞬間、霧散してしまう。

「ルミアッ！システイーナにアシストを！」

「……ッ！システイー！」

「《集え暴風・戦槌となりて・打ち据えよ》——ッ！」

アナスタシア（システイーナから見たらサーシャ）の意図を察したルミアがシステイーナに寄り添い、左手に手を添える。

そして、システイーナが矢継ぎ早に呪文を叫ぶ。

システイーナの黒魔「ブラスト・ブロウ」が魔人を迎え撃つ。

ルミアの『感応増幅能力』を載せた風の戦槌の威力は、もう壮絶で、破滅的な衝撃波を周囲にまき散らしながら、風の戦槌が猛然と魔人に迫る——

だが、これも——

『……兇戯』

それすらも、魔人の左手の刀に触れた瞬間、霧散してしまう——魔人のローブをバサバサとはためかせたのは、ただの強めのそよ風だ。

「嘘!? ルミアの力を載せても駄目なの!？」

システイーナが絶望的な悲鳴を上げるが――

「問題ない――いいいいいやああああああああああ――ッ！」

その隙に、烈風のごとく魔人へ襲いかかったリイエル渾身の斬撃が、魔人に肉薄する。だが、魔人の反応は、天翔ける雷光よりも速い。

魔人はその斬撃を左の魔刀で受け、返す右の魔刀でリイエルを切り伏せようとして――

『ぬ――ッ!？』

リイエルの剣が、急にボロボロと崩れて宙を舞い、一瞬、魔人の視界を遮った。

リイエルの大剣は、錬金術によって遺跡の外の岩くれから錬成したものだ。

魔人の持つ左手の刀が、触れた魔術を無効化する――

なんとなくそれを察したリイエルは、直感的にそれを利用したのだ。

宙を舞う岩くれで魔人の視界が塞がったのは――ほんの一瞬、されど一瞬。

リイエルの本命の一手は――

「やああああああああああ――ッ！」

駆け抜けざま、倒れ伏すセリカの傍から拾い上げた、真銀の剣だ。

それを逆手に持ち、その小さな身体の発条を全霊で振り絞り――斬り上げる。

自身も竜巻の如く回転する勢いで、魔人を右腰から左肩にかけて——バツサリと。
『ぬぐ——ッ!』

リエルの会心の一撃が深く魔人の身体に入り——魔人の身体が大きく吹き飛ぶ。
……普通なら終わりだ。

あんな猛烈な斬撃をモロに食らって、生きていらるわけがない。即死だ。

だが——案の定——

『——見事なり』

ふわり、と。

グレン達から遠く離れた場所に、余裕の動作で降り立つその魔人。

『真逆、愚者の民草らに、二つ持って行かれるとは……未だ我も未熟、か……』

魔人は再び双刀を油断無く構えながら、一步一步、グレン達の下へ……

その挙措には、やはり何の影響もない。負傷がまったく見えない。

「お前、ちよつと働き過ぎじゃね……?もう休んどけよ……」

ようやく再装填を終えた拳銃を構えながら、グレンが虚勢の軽口を叩く。

(まったくよ、もう……)

冷や汗を全身滝のように流すグレンに同調しながら、アナスタシアは脳内で魔人の情報をもとめ上げる。

魔人の左手の魔刀は、自分とシステイーナ、リエルの攻撃の無効化を考えるに、触れただけであらゆる魔術を問答無用で無効化するらしい。それだけに、魔術的な手段では、まったく対策できない。

魔人の右手の魔刀は、セリカの状態を見るに、微かに傷つけられただけでも戦闘不能に追い込まれるようだ。恐らく、魂とか内面的な要素に干渉する魔刀だろう。単純なだけに強力無比、厄介極まりない。

そして、いくら致命傷を負っても死なない不死性と、魔人本人の圧倒的な武が、その二振りの刀の特性を最大限に引き出している。

(要するに……こいつは究極の魔術師殺し……先輩の遥か上位互換に位置している、真正銘の化け物ってことね)

強過ぎる。攻守にまったく隙がない。

正当、邪道に関わらず、魔術師にとっては相性最悪だし、剣士にしても敵う者はいないかもしれない。

『……行くぞ、愚者の子らよ。我が攻勢を捌いて見せよ……』
 <<■■■■>>……』

さらに……それは、如何なる術式なのか。

魔人が聞き慣れない言葉を呟き始めると、頭上に、まるで太陽の如く燃え輝く球体が形成されていき、その場をまるで昼間のように明るく、眩く照らす――

馬鹿げた熱量があつた球体に封じられているのがわかる。それはまるで灼熱の太陽。セリカのお得意の火力呪文、黒魔「インフェルノ・フレア」程度の比ではない——

「う、嘘だろ……お前、どつかからそんな魔力をひねり出した……ッ!?」

啞然とするグレン。確かに魔人は強敵だが、それでもその術は度が過ぎていた。

(あいつ自身も魔術が使える……それも得体の知れない魔術を——反則でしょ!?)

アナスタシアは、グレンの方を見ると、グレンは愚者のアルカナを取り出しかけていたが——迷っているような感じだった。

魔人のあの術は、まだ魔力を操作している段階……恐らく起動前だ。

だが、封殺した後は? その後はどう戦う?

残る戦力は、グレンの拳闘と銃、リエルの剣技、それだけだ。

グレン達は、魔術を失い、その瞬間、ルミアの能力も意味も失う。

この一瞬はしのげるが、こちらの戦力もガタ落ち——どの道、詰む。

それが、グレンの「愚者の世界」の行使をほんの一瞬、躊躇わせ——

『<<■■■■>>……逝ね』

そのほんの一瞬で、魔人の謎の魔術が完成してしまった。

「しまっ——」

「ちっ——ッ! 余が汝に——」

舌打ちしたアナスタシアが、もうなりふり構わないと慌てて槍を構えて能力を行使しようとするが、時すでに遅し。

カツ！魔人の頭上で一際強く輝き始める太陽。

灼熱の極光が、グレン達の視界を灼き、全てを呑み込み、焼き尽くそうと――
 ……………。

「…………え？」

焼き尽くそうとした、その時。

…………いつの間にか、世界が音と色を失い、モノクロ調に染まっていた。

魔人も、その頭上の太陽さえも…………停止している。

全てが灰色になった無音の世界で、音と色を失わずにいるのは、グレン達だけだ。

「な、なんだこれ…………？」

「先生……………、これは……………？一体、何が起きて……………」

あまりにも不可解な現象に、グレン達が戸惑っている。

「…………誰ツ!？」

背後から気配を察知したサーシャ（アナスタシア）が振り返ると、息を呑んだ。

『…………貴方達。…………ちよ。早く来なさい』

不意に背後から響いてきた声に、グレン達も一斉に振り返る。

そして、一同はサーシャと同様に息を呑んだ。

「な——」

『この状態はそう長くは保たないわ。急いでこの場を離れるわよ』

そこにいたのは——少女だった。

燃え尽きた灰のように真っ白な髪。暗く淀んだ赤珊瑚色の瞳。身に纏う極薄の衣。

そして、その背中に生えている——この世に属するモノとは思えない、異形の翼。

『何をぼうつとしてしているの、早く。あいつはこの聖域に足を踏み入れた患者の民を許さ

ない。地獄の果てまで追ってくるわ。だから——』

「お、お前は——ッ!？」

グレンはその少女に見覚えがあった。

「第一祭儀場の、天空の双生児像にいた——幻覚じゃなかったのか!？」

『……ふん。人間って本当に蒙昧ね。辻褃の合わないことは、すぐ自分で自分を騙して

流す、現実を現実のまま捉えようとしな……愚かなことだわ』

蔑むような昏い目でグレンを睥睨し、鼻を鳴らす少女。

(な……なんなの……?この女……ッ!?)

サーシャ——アナスタシアが震えながら、少女を見る。

「どうい……?ことなの……?貴女、どうして……そんな姿を……ッ!？」

システイーナが震えながら、少女に問う。その問いは、システイーナに限った話ではない。

その場の誰もが等しく抱いた問いだった。

(この女……どうして、ルミアと同じ顔なのよッ!?)

「貴女……どうして……? どうして、ルミアと同じ顔なのよ……ッ!?!」

震えるシステイーナが指摘するとおり。

その異形の少女の顔は——ルミアとうり二つであった。